

---

# おっさん異世界ファンタジー

邪気眼喫茶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おっさん異世界ファンタジー

### 【Nコード】

N6791L

### 【作者名】

邪気眼喫茶

### 【あらすじ】

銀髪オッドアイの美形主人公に……憧れるおっさんの話です

## プロローグ

男の名前はテツ。

最終学歴中卒。

現在の仕事交通誘導。

33歳……これがどーゆ意味を示しているかわかるだろうか？ テツの人生は詰んでいる、学歴もなければ資格もなし、まだまだ学歴社会の日本では絶望的、否！！ 絶望すら生ぬるい生き地獄な毎日をテツは生きている。

「俺が女だったら俺みたいなの絶対選ばないよなあ」

照りつける太陽に工事現場特有のアスファルトから煙が上がる現場でテツはぼやく、毎日トラックやカラーコーンと過ごすすっかり交通誘導のバイトではベテラン組に入ってしまった。

新しいバイトに仕事を教え現場では誘導の指揮をとる、聞こえはいが1日の給料6800円……33歳が稼ぐにしては笑えない金額である、それでも働くしかない、これぐらいしか出来ないのだから。

毎日毎日毎日ひたすら誘導、排気ガスにまみれて現場監督から怒鳴られドライバーに缶コーヒーをぶつけられても文句は言えない、交通誘導員は現場では一番低い位置なのだから。

「俺はまだ若いからこれからやり直します……！」

ある昼休みに若者がそうテツに言う、結構使える24歳の新人隊員だ、人柄もよく現場でも上手く人間関係を構築してる中々見所があり会社でも早めに交通誘導の資格をとらせどんどん仕事を回したいと言われている。

「悪い事は言わない、資格だけはとるなよ」

「なんすか先輩、ベテランの先輩が言う事じゃないっすよお」

「資格とつても1日300円しか上がらないんだぞ、しかもキツイ現場いかされるし割にあつてないんだよ」

昼休み木陰で弁当を広げながら新人と二人で世間話をする、テツはこの時間が好きだ、若者の話は聞いてるだけで自分が若くなつたと思えてしまうからだ、それが幻想だとわかっていても辛い現実を忘れられる時間だからだ。

新人は彼女が作った弁当、テツはコンビニで買ってきたパン……納得はしていた、こんなになるまで人生を放置していた自分のせいだと思う、悔しさを噛み締めるようにテツは立ち上がり大きく背伸びをしヘルメットをかぶる。

「さて午後からは俺は交通量の少ないとこな、お前と配置交代ね」

「え〜折角メールしてたのにい〜それにあそこ現場監督がうるさいんですよあ、テツさん勘弁してくださいよ」

「ハハツ新人鍛えるのも仕事なんでね、それに俺も携帯いじりたいし、最近いいゲーム見つけたんだわ」

二カツと笑い新人の背中を叩き現場に送り出す、仕事中に携帯を見るなんて先輩として見過ごせないがテツにはどうでもいい事だった、通行止めを7時間以上するんだ暇な時間なんていくらでもある、テツは主に暇な時間を妄想に費やす。

剣と魔法の世界で戦い勇者になり可愛いヒロインと……そうテツは厨二と呼ばれる属性を持っている、しかも厨二歴20年のこれもベテラン組だ、妄想はテツを美形で強い憧れの主人公に変えてくれる、この時間だけは何者にも邪魔されない……

「てめえ何回言ったらわかるんだ!!! 埋めるぞ!!!」

邪魔は雷のような叫び声で入る、急いで戻ると新人が現場監督に怒鳴られ小さくなっていた、即座にテツが監督に謝り倒し理由を聞く……歩行者が工事現場に入った事が監督の逆鱗に触れたらしい。誘導ミスなので新人二人と謝りその場をやりすげす。

「テツさんすいません、つついつい気が抜けてボーとしてました」

「うんまあ気にするな、何時間も気を張れるほど人間強くはない、配置変わってやるからお前あっちで休んどけ」

テツが変わりその日は終わりまで配置は変わらなつた、帰りの車の中は新人が少しばかり元気がないのがわかりテツは笑いながら励ます。

「なあゝにへこんでんだあゝ所詮はこんな仕事だ気にするな、俺は交通誘導に誇りも自信も持つちやいないなからなこんな事言えるが」

「テツさんってベテラン組とは思えない発言しますよね、先輩達の中には厳しい人もいるのに」

「フフツ馬鹿め、真面目にやっても給料に大差ないさバイトの限りな、たくっ交通誘導で少し位の高い資格とると偉そうにする奴いるんだよなゝたつた300円の差でだぞゝ笑っちまうなガツハハ」

駅に新人を送る頃にはテツの仕事を舐めている話がかいたのか新人は笑顔で手をふり帰っていった、おそらくは愛する彼女の元へ……顔もそこそこ整ってるし性格もいい、彼女もいるのも納得だと思いつつテツは自宅の扉を開く。

畳に茶色く汚れた壁、月35000円のボロアパートでテツは人生

を過ごしていた、帰宅後にまず何よりも優先するのはPCの電源を入れる事だ、気になるサイトを巡回しつつ掲示板に書き込む。

「ちょwww何その勇者！！ テラワロスw」

思わずネット用語を口にしモニターの前で手を叩く、ネットはテツにとつては無くてはならない存在だ、おそらく1日でも触れないと手が震えるだろう……帰宅しPCするかゲームがテツの生活スタイルだ。

ゲーム起動しながらPCで攻略サイトを見てニヤニヤする顔は誰にも見られたくないだろう、ボスの弱点を調べレベルをしっかりと上げて万全の状態で挑み完全勝利とゲームなのに現実的に進めていく。

「あああああ！！ さっきのボスこんな武器盗めるのかよ！！」

時刻は夜中の12時が回るとテツは欠伸をし寢床の準備をし風呂に入り携帯のアラームをかけて横になる、暗闇の中ふと人生を振り返ってしまつのは悪い癖とわかりつつ取るに足らない33年間を思い出してしまう。

夢の世界に旅立つ前にテツは目蓋を閉じて33年間の人生に一言だけ残してしまう、思いのこもったたった一言……

「ちくしょっ」





テツの朝は早い、朝5時に起きて今日の予定と隊員配置を考えて朝飯を作りといる支度していると1時間が経過し待ち合わせである駅に向かう、車は仕事で使うのだから安い軽乗車にし車内はお世辞にも綺麗とは言えない。

駅につき昨日の新人を待つ……30分経過してもこない、寝坊かと思いを込み上げてくる、テツも新人時代は朝は苦労していた記憶を思いだしてる間に1時間が経過していた。

さすがに現場に間に合わなくなると会社に電話し確認をとると上司から新しい新人が向かっているとと言われ安心　など出来るわけがない既に1時間遅れている。

「たくつまあいいか、遅刻しても俺のせいじゃねえし、でもあの監督うるさいんだよなあ〜誘導員にハイスペック求めすぎだっつーの、ん？」

テツの車をこれでもかと目を細め見つめてくる少女が一人いる、歳は10代だろうか中々の美人だ、ショートの黒髪が愛らしくテツがその可憐さに数秒目を奪われいると……くる、一直線に最短距離で車に近づき顔をガラスに押し付けてきた、慌てて車から出ると少女は無表情で首を傾げる。

「すみません、テツさんですか？」

「ええまあ……新人さん？」

「はいよろしく願いします」

交通誘導はまず女性のする仕事ではない、それもこんな可愛らしい少女がするのはありえない、テツは何かの宗教勧誘じゃないかと疑うが一応は車に乗せて現場に向かう、車内は沈黙という重力でテツは押し潰されそうになり何か話題がないかと探して気づく。

「あ俺テツってんだ、君は？」

「二ノ・クライシスです」

そう名乗った少女はどう見ても日本人だ、髪も瞳も黒い、ここは笑う所なのかと思うが二ノと名乗った少女の表情からして真剣なんだろう、細かい事は気にせず現場に向かうが会話がどうしても続かない、テツはお喋りは好きな方だが二ノの独自の空気が口を開かせてはくれない。

「とりあえずここに立ってて何かあったらトランシーバで教えて、基本的には車は通しちゃ駄目ね」

「了解しました、死守します」

「あ、うん頑張っつね」

通行止めの場所は田舎道で1時間に車が20台もこないテツとしては最高の現場だった、新人の二ノには丁度いいだろうと腕を組み頷き自分の配置で暇を持て余す、基本的にやる事などない、ただ立ってるだけひたすら暇という敵と戦うだけの仕事……そしてテツはいつもの妄想に入る。

今日は魔王を倒した勇者が戦いのなくなった世界から必要とされなくなり、勇者もまた魔王になってしまふというテツにしては偉く夢も希望もない妄想をしている。

「くっ何が勇者だ、平和になった途端に人を邪魔物扱いしやがって……ふざけるなよ、ん」

妄想に熱が入りつついつい口走っているとトランシーバーから音が漏れてきている、ザーザーと雑音の中に微かに声が聞こえ耳元に持っていくと声色ですぐ二ノとわかるが問題はその内容だった。

『ザー……果たしてこの世界に勇者となる逸材はいるのだろうかザー……金色の髪と緑色の瞳を持つザー……私はまだ諦めない、諦めたら滅んでしまふ』

遠目から二ノを見るとトランシーバーを口元に近づける姿が見える、可愛いじゃないかあんな可憐な少女も自分のように妄想するなんて…… テツは混乱する、いきなり現れた美少女、交通誘導なんて仕事場にはまず存在しない美少女が突然電波な発言をする、まるでどこかの出来の悪いゲームみたいだがテツはそーゆ設定は嫌いではない。

しかしゲームではなく現実で遭遇してみると不気味 炎天下の中でトランシーバーに一人でブツブツいう美少女、しかも内容を聞いたら更に不気味。

仕事には邪魔にならないだろうからほっておくと次々に厨二テイストな用語が連発されてテツの中で疼きだす、魔王、竜、魔剣……聞いているとわかってくる、これは二ノが作りだした物語なんだと。

「おい二ノ、そこはヒロインがかつたりいと言いなから登校するか、屋上で授業サボってた時に敵が学校襲ってきた方が展開的にはいいぞ」

我慢できずについつい口を出すと遠目から二ノが肩をビクツと震わせこちらを見ている、テツは軽い冗談のつもりで手を振るとジト〜と見られてるような気がし手を引っこめた、さすがに少しやりすぎた感があったのか気まづくなってしまった。

「テツさんと言いましたね、私の話信じてもらえますか」

トランシーバー越しに聞こえてくる二ノの声色は少し震えてように感じたがテツは気にせず会話する、どうせ暇なんだからこうして会話も悪くないと思い笑顔で言う。

「キャラ設定はいいが構成がまだ甘いな、ヒロインの登場がベタすぎるし何で主人公がいないんだ？」

「現在探しております、貴方のような少年の心を忘れない人は中々いません」

「ハハッそれやそうだ、俺の頭ん中は中学生から進化してないからなあ〜二ノはよくそーゆ話作ったりするのさ」

それからテツにとっては楽しい時間だった、自分が今まで妄想で作りだしていた物語を話すと二ノは真剣に受け答えしてくれて感想まで言ってくれる、逆に二ノの話を聞いてみると鳥肌が立つくらいに面白くテツの脳内ではすでにアニメ化され創作意欲を刺激されていく。

時間の経過が数倍早く感じて仕事が終わる頃にはテツは声が枯れていた、帰りの車の中でも枯れた声で喋り続け子供のようにテツはハシヤいでいた、駅につき二ノを笑顔で帰りテツはウキウキで帰宅する。

美少女が初仕事でこんなおっさんと意気投合し無表情だった瞳は

確かに輝いている、まるで安いドラマでも見ている気分だったけど、ツはそれだけでも嬉しい。

「さあ〜てどんな感じかな」

ネット掲示板に今日の出来事を書きこむと様々な意見がくる、嘘乙、妄想は楽しいよね、それが事実ならフラグだ！！ 三つめの意見に目が止まる、あんな可愛い子が……年甲斐もなく少し胸を締め付けてしまう。

「……………」

が、そこでテツは嫌でも現実に戻されてしまう、冷静に考えれば絶対にはありえない事……あんな子が33歳でバイトしてる男になんか興味持つわけがないとわかりきった事を口に出してテツは座る、その現実には奇跡なんか起きない、あるのは残酷な毎日だけなんだと思ってしまう。

## 金は神だ

人は金のために勉強し金のために受験し金のために学歴をとる。社会に出れば金のために人生の半分以上を費やし働く。まるで神を拝めるように文句も言わずただ金のために働く。

金は人間の大半を支配し人間の時間を奪っていく、神にも等しい存在である。

「神様よお〜」

そんな33歳にしては幼稚な考えなテツは自ら神と言う金に嫌われてるらしい。

雨の日の仕事は最悪だ、カップの中は蒸れるし工事は遅れて残業、ヘルメットから落ちる水滴の数を数えながら今日も元気よくやる気なくテツは金のために立っている……雨の日は憂鬱になり妄想なんて膨らみはしない。

「おいテツ、暇だぞ」

トランシーバーから二ノの愚痴が聞こえてくるが無視、新人である二ノの教育係に任命されたテツはこの数日でいろいろとかわった、顔は無表情だが意外にお喋り好きだが喋ってる時も無表情、しかし





「うわあ！！ ビックリしたじゃないか、どうしたテツも暇なのか」  
「てめえシャドーボクシングしてんのに最後は蹴りなんだよ！！  
せめて殴れよ……じゃなくて看板壊すな！！ 見つかる前に元に戻せ」

そんなこんなで仕事は終わり楽しい帰宅タイムだがテツは憂鬱だ、事務所には伝票を届けなといけない、事務所には仕事にうるさい先輩達が何人かいて顔を合わせてよかった事など一度もない一度もだ。事務所に入るとさっそく先輩の一人がいる、新人相手に仕事の何たるかをホワイトボードを使い細かく説明してるが新人達は見てわかるようにやる気がない、交通誘導員をやる気満々で面接にきた新人はテツは見た事がない、隠れて伝票だけ置いて帰ろうとすると。

「よおテツじゃないか、どうだい最近は？ ちゃんと車捌けてるか？ んん」

「まあボチボチ頑張ってますよ先輩、それより新人達をあんまりイジめると辞めちゃいますよ、帰してやんなよ」

テツの言葉に新人達の表情が明るくなる……そりゃそうだ、8時間以上も雨に打たれて事務所に帰ってきた途端に先輩の講座が始まるんだ、早く帰りたいに決まっているのに。

先輩はどこか不機嫌になり腕を組むとどうやらまだ帰す気はないらしい、そして更に不運が続いてしまう、テツの横にいる二ノを見て笑うと近付き腕を掴む。

「お前が噂の新人かあゝどれ俺が誘導のタメになる知識を」

「嫌だ！！ 触るな」

それはテツが初めて見る二ノの拒絶だった、腕を振りほどくとテツの後ろに隠れ顔だけ出しジッと先輩を睨む、まるで子供のような行動に事務所の誘導員も注目し先輩の怒りも上がっていく。

「テツうゝ新人の教育頼むぜ、俺は男女関係なく厳しく」

「馬鹿アホ！！」

先輩の言葉を途中でブツた斬るような暴言で事務所の空気は凍りつく、今は社員の人は外に出てて定年を迎えたおじいちゃん達が奥で茶を飲んでいる……つまり先輩が一番偉い立場、それに馬鹿アホと言った二ノは変わらずテツの後ろから顔だけ出す。

「あゝ先輩、この子扱いが難しくくてえゝあの聞いてます？」

「テツ俺はお前の事を評価してる、黙々と仕事をこなす姿勢はいいと思う……だがなあ、今の発言はなあ」

「自分が偉いとも思ってるのか!！」

二ノの言葉でテツの背筋に冷たい汗が流れる、先輩は仕事に誇りを持っている、その先輩に暴言だけではなく仕事上での立場をけなすとは……次の瞬間には先輩が二ノに腕を伸ばしていた、反射的にテツはその腕を弾いてしまおうと自分でも額を抑えなくなる。

「先輩暴力はいけませんよおゝ人の上に立つ人ならなおさらね？新人の言う事ですし」

「何が人の上に立つだ!! 300円しか給料が上がらない資格持っているからって偉そうに、30過ぎて誘導員なんて夢も希望も無いと言っていただろテツ」

大きく溜め息が出てしまう、まさか二ノに愚痴った事が本人に全て伝わるとはと目蓋を閉じる、これは痛みへの下準備だ、先輩の次の行動が嫌でも予測出来てテツは目蓋を閉じて……地面に転がった。

先輩の拳は見事にテツの頬に当たり鼻からは血が噴き出す、痛みで景色が歪んでいると二ノが心配そうな顔でゆすってくる、この時初めて二ノの無表情以外の顔を見たテツはそこで意識を失う。



テツは33歳で九九も出来ず漢字なんて自分の字以外ほとんど書けない、何も最初からこうではなかった……子供の頃父親に勉強を強制され涙を流しながら勉強した、小4の時に親は離婚し父親がいなくなる。と勉強から解放され一切勉強をしなくなってしまふ。

義務教育の中学までは勉強などしなくても学年は勝手に上がり卒業出来る、しかし高校からは別。小学生クラスの算数が出来ないテツが高校の授業など理解できるはずがない、元々レベルが低い高校だった。が即座に留年、しかし年が明けた頃に担任に呼び出され母親の前で「これ以上は本人がやる気がないので」と事実上の退学。

無職になり何か働かないと思いき居酒屋のバイトを始めると、仕事が覚えられない、やる気はあるのに同じミスを連発しだんだんと職場でもいづらくなり結局はクビ……次の寿司屋も同じ理由でクビ、この時からだろう。か働くのが怖いと思いはじめたのは。

ある日近所にあったボクシングジムが目につき隠れて中を覗くとそこはテツが知らない別世界だった、ただ見てるだけで強くなれる気がする、1週間が経過するとジムトレーナーらしき老人に声をかけられテツは照れながら話を聞いて家に帰ると母親に頼みこむ。

母親は仕事もすぐクビになって落ちこぼれていく息子が言いだした事を真剣に聞き金を出すと聞いた、翌日からテツはジムに通い練習に打ち込む、練習は苦にはならずむしろ楽しかった、生まれて何一つ上手くいかなかった自分がちゃんと出来てると実感し毎日ボクシングに打ち込んだ。

皮肉にも無職であるおかげで練習時間は人の何倍もあり1年半でプロ試験にまで腕を上げていく、試験はあまりにもあっけなく合格してしまいテツはプロデビュー戦が決まる。

「ハアハア……ハア」

初めてのプロのリングに観客の声援にテツは緊張で固くなり焦ってつつい出した大ぶりなフックにカウンターを合わせられ1R1分20秒のKO負け。それから何試合もしたがテツの成績は平凡、勝っては負けて大事な試合に限って派手に負けてしまう、気づけば25といい歳になりトレーナーから肩を叩かれ引退という言葉が宣言されてしまう。

ボクシング以外に取り柄などなくその唯一の取り柄すら才能がなかったらしく無くなる、何も無くなった頃に求人雑誌を立ち読みしていると交通誘導という文字が目がつく。

立っているだけで金になる、魅力的な仕事だと勘違いし即座に電話し2日後には現場に立っていた、しかしそこで思っているほど甘くない現実には直面してしまう、しかし学も無ければ取り柄もなしな自分にはこれくらいしか出来ないと思い人生で初めての我慢をした。

そうして気づけば30過ぎて……33年間一度も恋人も出来ず友達は県外に出ていき、同窓会に呼ばれたがテツはいけなかった、この落ちぶれた自分を皆の前に出すのが恥ずかしくてしかたない。

これが本当に意味のないテツの33年間の人生だ、どこで間違

えたんだろっ……いや何もしなかった責任だ、結局は全部自己責任、ちくしょう……ちくしょう

「……ん」

目を開けるとまず痛みで飛び起きる、唇が切れて鼻にはティッシュが詰め込まれ何とも間拔けな姿だった、見上げた天井で事務所とわかり見渡すと誰もいなく電気もついていない、痛みを堪えながらソファから腰を上げていつも隊員達が集まるテーブルに行くと寝ている二ノに毛布をかける男がいた。

「丸さん」

「おお気がついたかテツ！！ まったく凄い新人が入ったもんだなあ、まあ茶でも飲め」

暖かい茶を出す通称丸さん、先輩組の中でも一番年上で面倒見もよく仕事には厳しい一面を持つが理解もあり隊員からの人望も厚い、寝息をたてる二ノを肘を立てながら見て茶をすすり大きく息をつく。

「遠藤の奴やりすぎだな」あいつには俺からいっとくわ、まあさすがに同じ現場は回さないから安心しろ」

「すみません丸さん、教育係の俺の責任です」

「話はだいたい聞いたよ、このお嬢ちゃん可愛い外見に似合わずキツイ事いうねえ」

テーブルに置いてあつた菓子を口に放りこみ両手を頭の後ろに回し大きく後ろに傾く、椅子をギシギシ鳴らしながら丸さんは大きく溜め息を吐いて口を開く、テーブルの上だけ蛍光灯が照らしいつもと違う感じに見える事務所でテツは丸さんの言葉を聞く。

「まあ夢も希望もねえわなこの仕事、最初から誘導一本で食ってくつもりで仕事してる奴なんざ俺は見た事ねえわ」



「ハハツ会社一番の働き者で戦力の丸さんがそんな事言っているのか」

「テツよお綺麗事は無しにしようぜ、どうせ誰もいねんだ……お前もわかるだろ、何年立とうが給料は上がらずついには最低金額まで落ちて今いる隊員なんて俺やお前みたいなのか定年迎えて小遣い稼ぎの爺さん達だけ？」

交通誘導を20年以上している丸さんの言葉はテツの胸に深く突き刺さる、わかっていた事だが口に出されるとこも辛いとは思わなかった、テツは無言になり視線を落とすと肩を軽く叩かれ顔を上げると丸さんの憎めないいつもの笑顔がある。

「遠藤の奴は嫌わなくてくれ、あいつも根は悪い奴じゃねんだが……焦ってんだよあいつも、35で交通誘導してて目標もなく毎日を繰り返す事に、だからまあ……」

「わかってます、俺からそれとなく仲直りはしてみようつもりです」

「そうか！！ いやあ安心したあゝ事務所で嫌な空気出されるのだけは勘弁だしな、それよりテツ」

憎めない笑顔から悪戯をする子供のような笑顔になり丸さんは二ノ

の毛布をとりテツを近付ける。

「二ノの面倒頼んだぞ〜家知ってる奴いなくて困ってたんだ、なんならお前の家に泊めてやれ」

「ええええええ!! まま丸さん何言ってるんすか!!」

「何も手を出せとは言わねえよ〜ただ泊めてやれって言うってたんだ…  
…ちなみに明日は二人共休み入れといたからな」

「なんすかその休みは!! はあ一応は教育係ですしい〜下心は無いですよ!! そのイヤらしい目はやめてください」

結局家もわからない二ノを起こそうとしたが起きる気配はなく、仕方ないとテツは車まで抱えて乗せてエンジンをかけて出発……バツクミラー越しに丸さんがグツと親指を立てて眩しいくらい笑顔で「気合い入れるよ」と叫んでいるのがテツを更に焦らせた。

## 四

テツも男だ、下心ないなんて言えば嘘になる、車の中で二ノの寝顔に胸を膨らませよからぬ考えとひたすら戦っている自宅のボロアパートにつき素早く自分の部屋に運びとりあえず布団をしき二ノを寝かせて……寝かせてしまった。

「何やってんだああ俺はあああー！」

二ノの隣に体育座りそつと寝顔を覗く、可愛い　長い眉毛に少し目を隠す前髪に一定のリズムを刻む寝息がどことなく色気を感じさせテツの欲望が加速していく。

思えばこの先自分に恋人なんて出来るだろうか？　出会いがあったとしても仕事を聞かれ稼ぎを聞かれ胸を張って答えられるだろうか？　怖い……この先ずっと恋人もできず一人の人生がテツは怖かった、責任は全て自分なのもわかるが頭ではない心が恐怖で震えるんだ。

もしかしたらこれが最後のチャンスかも知れない、これを逃したら一生女を知らないまま生きていかなければ……

「……っ」

一度振り上げた拳を畳に叩きつけてテツは肩を震わす、もしここで

間違えをおかせば自分はいいが二ノはどうなる？　こんなおっさんに……度胸がないと笑われるかもしれない、でもテツには目の前の可憐な二ノには触れる事が出来なかった、もしも間違えをおかせば本当の意味でクズ人間になると思ったからだ。

高ぶる心臓を冷ますために洗面所にいき顔を洗う、鏡に映るのは二重だが妙に鋭い瞳に髭を剃って3日目になり少し生えかけている顔、髪型など黒髪を無造作に伸ばしボサボサだ、テツは我ながら思ってしまう酷い顔だと。

二ノに布団をかけてテツは畳に雑魚寝、さすがに今日ばかりは日課のPCやゲームをやる気になれない、まだ心のどこかで二ノを襲ってしまいそうな自分をが怖く目蓋を閉じて暗闇の身を任せる。

「ちくしょう」

何度目だろうか、この言葉を悔しさで無意識に口に出してしまうのは……テツは握り締めた拳から血を滲ませながら意識を眠りの中に手放した。

「おいテツおきろ、おいおおい」

テツが眠りにつき数時間後に体は揺れる、上下にユサユサとやがて揺れは激しくなり薄れていた意識がハッキリと蘇ってきたテツが目を擦りながら状態を起き上がろうとすると出来ない、まるで重力の鎖に繋がれたが如く一定以上には上にいけない。

暗闇に目が慣れてくると二ノがテツの上で揺れているのが見えた、馬に乗るが如く激しく上下に揺れている、そりゃもうどこぞの洋モノビデオばりに揺れまくっていた。

「ダッシヤアアアアアッアア!!」

「うわぁ!!」

二ノを横殴りに投げ飛ばしテツは勢いよく立つ、一瞬で全身から脂汗が噴き出して毛穴が全開に開いてしまう、寝起きの男は危険であり理性が吹き飛び事もある……テツはその最後の理性を守るべく二ノを全力で投げ飛ばしたのである。

「なにをするテツ!! まぁいい話を聞け」

「よくねえよ！！ 話す前になんで俺の上でギシギシやってんだよ！！」

「頼む聞いてくれテツ」

無表情だがどこか悲しげな瞳に吸い込まれそうになりテツは頭をガリガリかきながら押し黙る、丁度窓から満月の光が入ってきて二ノを照らすとテツは素直に思う、綺麗だと。

起きた時に着替えたのか白のワンピース姿になり二ノの美貌を際立たせる、月光を横顔に受けながら二ノは口に出す、その言葉がテツの運命を大きく左右すると知りながら告げる。

「こことは違う世界で世界は滅びかけてる、魔王が世界を殺し戦いの日々が常に続いているんだ、私はその世界を救う相棒を探しにここまできて……そしてテツお前に出会った」

テツは再び横になり眠りの世界に旅立つ　のを二ノが許さなかった、寝転がる背中を蹴り飛ばし壁に激突させるとテツが欠伸びながら立ちあがる。

「あのなあ二ノそーゆ話は仕事中に聞いてやるから今日は寝ようぜ、あ明日休みか」

「テツ真面目に聞け！！　これは真実なんだ」

「あのなあ〜どこの世界にそんな妄想厨二話信じる馬鹿がいるんだあ〜」

二ノの頬を膨らませ怒る姿を初めて見たテツは悪戯心を刺激されついつい口走ってしまっ、運命の言葉を

「ハハツわかったわかった、そこまで言うなら証明してみなよ、お前が言う魔王とか滅びかけてる世界をよ」

それを聞いた二ノは笑っ、後から思えばこれが契約じみた言葉だったのであるっ

「それ見る何も言えないじゃねえかあ、まあ俺は寝るぞ、今日はお前のおかげで疲れたからなあ」

嫌味を言いテツは眠る、二ノは満月に向かい顔を上げて拳を突き出す……意味はないのであろうが二ノなりのガッツポーズであろう

そして……おっさんは異世界のファンタジー溢れる世界に旅立った。



## 第一章

食欲を誘う匂いと眩しい光で意識が戻ってくる、少し眠りすぎたのかと思いいつも置いてある携帯を探し手を伸ばすがどこにもない、まだ寝起きで目蓋を閉じては開けての繰り返しで二度寝の誘惑に負けそうになる……丸さんから今日は休みという言葉を思い出し誘惑のままに再び眠りの中へ潜ろうすると。

「起きたかテツ待つてる今朝飯作ってるからな」

「んゝああ悪いな、台所汚いだろ」

「そんな事はない、広く風通しのいい場所だ、それよりいつまでも寝てないで体を起こせ」

背中をボリボリかきながらなんともおっさん臭い寝起きで立ちあがり大きく背伸びをする、首を傾げてポキポキと鳴らし最近買った肌触りのいいパジャマの着心地に満足し中々気分のいい目覚めにテツはつつい大欠伸をし両手を大きく左右に伸ばす。

しかし眩しい、昨日窓を閉め忘れたのかと思うがそんな事はどうでもいい、今日は休みなのだ……いつも朝早くに起きて一人寂しい朝飯を作るが今日は二ノが作ってくれてるのだ、世の男性なら一度は夢見る朝起きたら美少女が朝ごはんを作っているというシチュエーション。

神様は見捨ててはいなかった。3年間何一ついい事がなかったがようやく人並みの幸せがやってきたのだとテツはまだ目蓋を開かず、腕を組み頷いて二ノを視界に入れるために二度目の欠伸をしながら目蓋を開けた。

「ふあゝああ二ノお前家どこだ、なんだったら送って……………え」

どこまでも広がる空、雲一つなく見ている気持ちがいい。そして大地、前に写真で見たモンゴルの大平原がそのまま目の前にある、心地よい風が地面の草を揺らし頬を軽く撫でなんとも気持ちよく寝起きには最高の景色じゃないか。

一度テツは眉間に指を乗せて目蓋を閉じて再び開ける、しかし何も変わりはない。大平原がテツの登場に風で揺れる草の音で大歓迎してくれた。

「そろそろ朝飯が出来るぞ、ほら立ってないで座れ」

振り返り二ノをようやく視界に入れると……………今度は学生時代の教科書で見た縄文時代のような焚き火があった、枝を口から突き刺し体を貫通させ一匹そのまま火あぶりにしている、大きな耳からしておそらく野兎、二ノは火から枝をとりそのままかぶりつき力強く噛む。

頬を膨らませムシャムシャと美味しそうに食べながらテツにもう一本の枝を差し出す、その枝にも野兎が火あぶりにされ見るに堪えない。

い姿に変わっていた、テツはとりあえず受け取り座って二ノの真似をしてかぶりつく。

「お見た目の割には案外いけるな」

「フツツ私が狩ってきたからな、そこらのより上等な兎だ」

「そりやすげえ〜……二ノてめえやりやがったなああああああ  
あ!〜!」

まず焚き火を蹴り飛ばし怒り狂ったテツは立ち上がり青空に向かい力の限り叫ぶ。

「てめえ俺を売りやがったな!! しかも国内ではなく海外とは恐れ入ったぜ!! 俺のどこを売った? 肝臓か肺か腸か……まさかこれから売られるのか、ほら怒らないから言ってみる正直に言え、いやもう怒りを通りこし恐怖で奥歯ガタガタだから言ってくださいよお」

「落ち着けテツ、お前を売ったのならなぜ私がまだお前の目の前にいる? おかしいとは思わないか」

「あ確かになあ〜これや一本取られたあ〜ハハツ……あああああ

ああああ！！ おかしいのはこの状況だろうがああああ！！ こ  
こはどこだ！！」

兎を一匹全て食べ終わりゲップと同時に二ノは立ちあがる、テツは  
そこで二ノの服の変わりように気づく、全体は黒いが肩から腕にか  
けて白い線が入り黒と白のチェックのスカート……どこかの学生服  
かと思う、そして腰には長物が刺してある、どう見ても刀……いく  
らテツが刀に詳しくない素人だとしてもわかる。

「昨日言ったではないか証明しろと、ここは魔王が支配する世界だ」

「おいおい二ノお前凄いい奴だったんだなあ〜まさかドッキリでここ  
までするとは、参った！！ 今回ばかり驚いた、こんなドッキリを  
したお前を誉め称えるわハッハハハ」

「ぬテツ下がっている、私より前に出るなよ」

地平線の向こうから砂煙を上げて馬が走ってくる、乗り手は頭にバ  
ンダナを巻いた中年、手には斧を持っていて何かを叫びながらどん  
どん近付いてくる、テツは最初自分以上に痛い厨二病のお方かと思  
いニヤニヤしこれは二ノが用意してくれたサプライズと現実逃避し  
ていた。

しかし　これはドッキリではなく紛れもなく現実だと二ノが教え  
てくれた。

二ノも走り出し腰から刀を抜く、刀身を輝かせ宙に身を投げ飛ばしバンダナ男と同じ視線の高さまでいった瞬間に……首と胴体が別れてしまう、胴体からは噴水のように血が噴き出して馬から落ちる。

「……………あぁ……………」

言葉がまともに出ない、一人が目の前で首を斬り落とされ地面に転がっている光景にテツは指一つ動かさなくなる、もしも昨晩大好きなジュースや水を飲んでいたら確実に漏らしていただろう。

「盗賊め！！　しかし馬が手に入ったぞテツ、んテツどうした」

先ほどまで美少女に見えていた二ノがテツには悪魔に見えてしまう、刀の切っ先から血を垂らしながら近づく二ノに恐怖し地面を這いながらテツは逃げていく。

「ヒツくるなあー!!　くるんじゃねえええええ」

地面の土を拾い上げて二ノに投げる、土の攻撃なんて無意味なんて考えてる余裕はなくひたすら投げていく、こんなにも恐怖したのは人生の中で初めての体験でテツはもはや何を言ってるのかわからなくなる、とうとう目尻に涙を浮かべ口からは涎を垂らし最後には二ノに背中を向けて地面を這っていく。

目の前で人が殺されたのだ、しかも普通ではない　首を斬り落とすなんてゲームでしかテツは見た事がない、ゲームではなんとも思わなかったが現実で見たら体の自由を奪われるくらいの恐怖が支配した。

「テツ!!　どこに逃げる?　この大平原で私から逃げてもお前一人で生き残れるか」

「うつうつするせえ!!　くそなんなんだよ!!　くそくそくそくそ  
おおおお!!」

背後から二ノが近づきテツの行動を一瞬で止める、刀を伸ばしテツの頬に軽く撫でてやるとそれだけでテツは一回体をビクリと震わせ凍りついたように停止してしまふ。

「安心しろ殺す気はない、お前をこの世界に連れてきた責任ぐらいはとるつもりだ」

「わけわかんねえよ!!」

「いつまでも子供のように言う事を聞かないと腕の一本くらいは斬り落とし無理矢理連れていくぞ、腕を斬られ無理矢理ついてくるか大人しくついてくるか選べ」

選択の余地などない、二ノの言葉が胸に突き刺さりテツは従うように立ち上がるうとするが動かない、早く動かないと腕が危ないというのに微動だに動かず固まってしまふ、全力でやっと首だけ動かせ二ノに振り返り涙と鼻水でグシャグシャの顔で言う。

「二ノおゝてめえのせいで体動かなくなっちまった……ついてくから腕はやめるよおゝ」

「そうか!!よかったあ、いや私も素直なテツが大好きだぞ」

ほんの数分前なら可愛らしく笑う二ノに胸をときめかせのだが今の笑顔を見ると怖くてしかたない、固まるテツを担ぎ馬に乗せると手綱を握った二ノが大きく叩き馬は勢いよく走りだす、馬上は思ったほど揺れが激しく二ノに捕まり落ちないようにテツは必死だった。

「さっきはすまなかつたなテツ、ああでもしないと落ち着かなかつただろうから」

「今でも落ち着いてねえんだよ！！ 殺すなよ、言う事聞いてんだから殺すなよ二ノ！！」

「……なあテツさっきも見てわかったと思うが、この世界は本当に人間同士が殺し合ってるんだ、お前がいた世界とは違う、死がものすごく身近にあるという事をわかってほしい」

後ろからしがみついているテツが顔を上げると二ノの横顔が見え不覚にも可愛いと思ってしまう、先ほどあんな事をしたとは思えない少女の顔があり同時にそんな少女が首を斬り落としたと思うと恐ろしさもある。

見ている景色でここは日本じゃないとわかる、日本どころかアジアかさえも怪しい……一昨日やったRPGによく似た光景があった、おそらくはヨーロッパと思い周辺を見渡すと平原だけだった景色に小さな街が見えてくる。

だが近づくとつれ街とは言えなくなってくる、家はほとんどが鉄製というより鉄でそのまま立てたようなテツの知るとの建築にも当たらない、馬を下りて二ノに手を引っ張られる頃には多少は恐怖は静まってくれた。



「あまり目を合わせるな、お前の服装は目立ちすぎる」

確かにツルツルのナイロンの生地で黒いパジャマは浮いている、街中は作業着をきた屈強な男達だらけで工場にも似た建物が何個もあり通りすぎるたびにテツは睨まれていた、隣には学生服の二ノだから場違いにもほどがる。

人目を避けるように進んでいくと一軒の家に辿り着く、屋根に巨大なクレーンがあり壁はいろいろな鉄板を繋ぎ合わせた家というにはあまりにも無骨、二ノが扉らしき鉄を押すが開かない……何度押しても開かない、やがては額に血管を浮かばせ一回転し扉を蹴り開けてしまう。

「おいジジイ戻ったぞお〜ジジイ〜」

正直ここで逃げるべきかとテツは迷ったが行く場所も金も持ってない状態では無理、渋々家に入るとやはり逃げるべきかもう一度考えってしまう光景が広がる、壁にかけてある人の手足が不気味すぎる、よく見ると全て鉄で作られており中には武器らしき物も混ざっている。

二ノは部屋の奥にいつてしまいテツは近くにあった木製の椅子に座り大きく息を吐く、ようやく落ち着いたのか状況を生理してみる。

交通誘導で入ってきた新人に謎の場所に連れてこられる。  
新人が目の前で一人一人の首を斬り落とす。  
人の手足だらけの部屋に連れてこられてしまう。

「やっば逃げよ」

椅子を立ち上がり即座に出口に向かうと二ノが背後から腕を伸ばしガツシリと掴む、今度こそ終わったとテツは思い振り向くと笑顔でデコピンされた額に、痛い……半端なく痛くその場で座り込んでいとギシギシと床が軋む音がしうやく家の主が現れた。

「よう二ノお生きて帰ってこれたか、んでそいつか ……ただのおっさんじゃねえか!!」

テツは家の主に第一印象最悪だと思われた事だけはわかった。

「お前名前は？ 歳はいくつだ」

痛み切った白髪だらけの髪を肩まで伸ばし上半身肌の老人は体の汗を拭きながらテツの前に座る、眼光は鋭く映画で見たギャングのボスを思い出しテツは心底震えだす、片手には瓶が握られておりシワだらけの顔を歪め瓶を傾け中身を飲んでいと匂いでわかる、酒だと。

強面の老人が機嫌悪そうに酒を飲み、隣には人殺しの美少女……笑いも怖さも顔に出さずテツの表情は凍結する、もう怖すぎて表情の作り方すら忘れてしまう、テツが黙っていると老人は床に瓶を叩きつけてイライラを隠せない。

「テツです、 33歳」

「ヒヒッおいニノ、こんなおっさん捕まえにいかせるために俺は生涯最高の傑作を作ったんじゃないぞ」

「テツはいい奴だ、やればできる子だ、紹介するテツこのジジイはウィルと言っ」

まるで水中で息を我慢するかのよう<sup>に</sup>テツは黙る、息すら忘れ生き

場のない自分の立場を隠すように小さくなっているとウィルが体を触ってきて男に細かく触られると気持ち悪いがテツは従うしかない、ある程度触るとウィルが首を傾け不思議そうな顔で聞いてきた。

「お前の筋肉のつき方変だな……剣術でも槍術でもこんな筋肉はない、おいテツとかいったな得物は何を使うんだ」

「得物？ 交通誘導で使っていた黄旗ぐらいしかないっす」

「旗だあゝ俺が聞いてんのは武器だ、お前は何の武器が使えるんだよ……！」

テツは人生で使ってきた武器を思い出すが ……あるわけがない、ふざけて剣道部の竹刀を振り回した程度だ、だが素直にそれを言うとうィルは絶対に怒る間違いないと怒る、しかし武器など扱えないと追い込まれたテツは悪足掻きを試してみる、もうやけくそだ。

「あえて言うなら拳ですかね、こんなんでも元プロボクサーなんですってのは駄目ですか？」

「プロボクサー……なんだそれや、拳で戦うって馬鹿かてめえ！！素手で剣に勝てるかよ」

「テツやって見せてくプロボクサーを、私は見たいぞ」

もう開き直りテツは椅子から立ち上がり数回飛ぶ、その姿に二ノは子供のように瞳を輝かせウィルは2本目の瓶を片手に呆れた顔で見守っていると二人の顔が驚きに変わっていく。

体を小さく丸めまずは軽く足を交差させフットワークで体を慣らしやがては上半身が左右に振られていく、次の瞬間エンジンがかかったようにテツは狭い部屋を縦横無尽に跳ね回る、キョキョと足で音を鳴らし軽くワンツー次にフックやストレートを出しながら常に動き回る。

テツの動きを止めたのはウィルが飲みかけの瓶を地面に落した音だった、一応はトレーニングを続けていたとはいえ歳のせいか息が少し切れたテツが立ち止まるとウィルの驚愕している顔が見える、二ノは表情が固まったままピクリとも動かない。

「おいテツ……てめえ今なにやった」

「ボクシングの基本的な動きです、知らないですか？ 結構有名なスポーツなんです」

いきなり力強くテツの肩を掴んだウィルは顔を近づけて酒臭い息を吐き口を開く、おそらくテツの動きに感動し希望が見えたのか、これからしてもらおう事を完結に説明していく。

「いいかこの世界には武器が腐るほどある、だがな中に強力な武器があるんだ、その武器は普通じゃ使えない選ばれた者のみ使える…  
…ここまではいいか」

「はあ、わかりやすく大変助かります」

「しかし選ばれた者なんてもう国家に属しているか魔王の下についてる、だから俺は違う世界の人間を引っ張ってきたんだ、世界が違えばこの世界の理に縛られない、この理論は俺が過去に実証済みだ、ここまで言えばわかるよな」

いくら馬鹿なテツでも察しがついてしまっ、今まで二ノから聞いたキーワードは魔王、魔剣、と厨二テイストな言葉がいよいよ現実味を帯びてくる、嫌な汗が額から流れテツの脳内に昔買った古臭いゲームが思い浮かぶ。

「その強力な武器を使いテツお前が魔王を倒すんだ、ちなみに拒否権はないぞ、装置も世界を渡るなんて無茶してオシヤカだからな」

「ハハツ……ウィルさんよお、こんなおっさんに出来ると思うかい」

冗談半分でウィルを小馬鹿にしたように言うと更に顔が近づき鼻と鼻がくっつく、顔のシワが一本一本数えられるほどに接近しウィル

の迫力ある顔でまさに脅しのように言ってきた。

「てめえは俺達の協力無しじゃこの世界で生きていけねんだよ、まあすぐ戦えなんていわねえ、住む場所も立場も用意してやるからしばらくこの世界に慣れろいいな」

「はいいいいい、ととりあえず頑張ります」

「おおさすがテツだ頼もしいぞ、じゃ私と同じクラスがいいな」

ウィルから投げ渡された薄いパンフレットのような本を見ると爽やかな若者が天に向かい剣を向けている絵がある、ペラペラとページをめくっていくと若者達が木刀で訓練してる綺麗な絵や達筆な文章でこう書かれていた。

ベルカ騎士学園へようこそ。

ベルカ騎士学園。

王国ベルカが魔王に対抗するための騎士を育てるために作った学園は毎年多くの受験者をほぼ全て採用する、少しくらい能力が劣ろうとも学園に入れて鍛えるという方針だが、実の所は単純に人手不足わざわざ自分から戦場に出向き死に行くと考える若者は多くなく一般の仕事につく方を選ぶ。

いくら戦火が世界中に広がっていると云ってもベルカ国内は安全で市民達はそれほど危機感はない、国の上層部だけが焦りまだ学園生の生徒を戦場送り出す始末、一人でも多くの騎士を育てあげないと滅んでしまうのだ……今は各国様子見だがいつ全面戦争が起きるかもわからない。

最近では魔王に寝返る国も出てきて政治的にもベルカや各国が頭を悩ませてる中　一おっさんが学園の廊下で歳がいもなくドキドキしていた。

「ふう、落ち着けえ〜最初が肝心なんだ!!　元気よくいい人って印象でいいじ」

二ノに連れてこられ2週間立ちようやくウィルと二ノに慣れると学園の手続き、制服の注文と全ての準備が整いテツは学園に連れてこられる、中卒のテツは学園生活に憧れがあり妄想の中で幾度も繰り返した薔薇色の思いを込めて廊下で緊張と戦っている。



教室の中からは何人もの生徒達の声が聞こえてきて不安と希望がテツの胸を駆け巡る、正直この世界に連れてこられやけくそ気味に開き直ったテツは楽しむ事にした、それでもしないと精神が持ちそうにない。

「ああああ今日は転校生がきますう、皆さん仲良くお願いします」

なんとも頼りない女性の声があると生徒達が騒ぎ出す、そりゃそうだ転校生といえば学園イベントの華！！ テツは黒を主体にし肩と足のラインに白い縦線の入った制服を着直し何年ぶりかくらいに整えた髪型を触りキリツとした表情を作る。

「ででではテツ君入ってきてください！！」

背筋を伸ばしスツと静かに扉を開けて威風堂々と教室内に入り教壇の前に立つ、隣でビクビクしてるのは担任だろうか長いストレートの茶色の髪と肩を震わせ覗くように見ている、テツは生徒達を見渡すとこの時異世界に本当にきたんだと実感してしまう。

赤、金、緑、青と髪の色が派手、元の世界だったら間違いなく退学級の髪色の生徒達が見てくる、でもこれも楽しみの一つ……20年以上ゲームをしているテツはこれくらいじゃ驚かない、最初が肝心を思い出し声を張って第一声を教室に響かせた。

「名前はテツ歳は33だ、これからよろしくな」

短いテツなりに考えわかりやすくした挨拶だ、2時間くらい悩んだり練習したかいあって納得の出来栄えに無意味な優越感に浸っていると教室の空気がおかしい、普通ならここでクラスに一人はいるギャグ担当の一人が質問してきたり誰かしら声をかけてと……と妄想に浸っていると一番後ろの席で座っていた二ノが手招きしてくる。

「ああ席は二ノさんの隣でお願いします。あ、気にらないですか……すみせんでも本当にお願ひします!!」

いきなり担任に勢いよく頭を下げられ渋々テツは二ノの隣の席に向かう、生徒達の机の間を歩いている時に不思議と誰も目を合わせようとしない、それどころか進んで視線を外してくる、笑顔で生徒の顔を見ながら進んでるテツが馬鹿みたいに見えてくる。

席につくと朝の連絡か担任が自信なさげにどこか不安そうに連絡事項を告げていた、テツには何の事かわからないのでとりあえず黙って待機、お楽しみはこれからだ。

先生が出ていくと一度大きく深呼吸しテツは待つ……質問を、同級生の何人かが必ずくるはずだ、これは転校生イベントの鉄則と言っても過言ではない、そうくるはずなんだ

「これからよろしくなテツ」

「ああよろしく二ノ、あれ」

誰かくる所か教室の空気が重い、数人の女子がテツを見て何やら小声で話したり男子に至っては誰も席を立とうとしない、さすがのテツも状況に違和感を覚えふと気付く、それは学園生活と言われ舞い上がって見落としてた大きく致命的な欠点だ。

若者で構成されてる学園にテツはきた、ここは定時制でもなければ夜間学校でもない、そこに33歳のおっさんがいきなり学生服を着て現れ転校生……もはやギャグレベルだ、普通なら先生という立場ならわかるがテツは生徒としてきたのだ。

「ああ〜二ノお今からでもいい、実は全てがドツキリで嘘でしたって言ってくれないか」

思い描いてた学園生活は初日で粉々に砕け散ってしまう。

#### 四

友達と馬鹿な話と少しエロイ話で盛り上がり、あの女子が可愛いだのあいづらが付き合ってるだの女子とも照れながら少しづつ話していく　我がままは言わない、テツは自ら手放した学園生活を再び取り戻したかったが。

全ては幻想になる、休み時間が苦痛で授業中になると逆にホッとするがこれからの事を考えると不安になってしまう、友達どころの話ではない女子は完全に怖がり、男子に至っては目すら合わせない絶望的な状況。

そりゃそうだ、もし学生時代に33のおっさんがいきなり転校してきたらと思うと理由は嫌でもわかる、怪し過ぎるしなによりも怖いだろう、そもそもなんて話かけていいかわかるはずはない。

「はあく現実つてのは世界が変わろうともへバリついてくるなあ〜ん」

頭にコツンと紙を丸めたゴミが当たる、とうとうイジメが始まったと思っただが紙を拾い上げ開くと何か書いてある『おっさん何者？俺はエリオってんだ』と救いの文字が書いてある、飛んできた方向を見ると振り返った男子生徒が笑いかけてくる。

薄い赤毛に眼鏡をかけた男子が笑いかけてくる、まだ救いの神は存

在していた、たぶんクラス1の変わり者だろう……こんなおっさんに迷いなく話かけてくるなんて普通じゃない、しかしその異常さが今のテツにとっては救いになる。

授業中は嬉しくて先生の話なんて聞いちゃいない、授業が終わるとエリオが教室が出ていく時に目でサインを送ってくる、テツももうなりふり構ってる場合じゃなくついていくと階段を上がりある場所に出た。

「いやあ驚いたぜ、あ俺敬語苦手だがいいかな？ 改めて俺はエリオでクラス1の変わり者だ」

雲と太陽が世界の半分になる場所 二人は屋上で向かい合う、運がよかったのか他の生徒はいなくテツはコンクリートの地面に座り込み空に顔を向けてとりあえず安堵の息を吐く、大切な第一歩を慎重にいかねばならない、エリオは活路になっていくはずだ、この学園生活でも大切な第一歩目の大切な友達に。

「ハハツそりやそうだろうな、こんな怪しいおっさんに話かけるなんて普通じゃないなお前」

「言ってくれるねえおっさん、まあ大抵あってるのが泣けてくるが……ここのエリート気質がどうも肌に合わなくてな、元々落ちこぼれな俺にはな」

「どーゆ事だ、エリートと落ちこぼれが同じクラスにいるっての  
よ」

エリオは懐から細い筒のような者を出し口に加え指先で触れると火  
がつく、これがテツが見た初めての魔法だった、口から煙出す姿か  
らして煙草の一種だろうが世界が違うので何かまではわからない、  
屋上の手すりに両腕を乗せて空を気楽な顔で眺めながらエリオは教  
えてくれる、今現在ベルカ騎士学園での生徒事情を。

「いいか騎士になると考える奴は筋金入りのエリートか、勉強も出  
来ず他の学校に入れず落ちこぼれた俺みたいなのしかないんだよ、  
勉強も出来ないって事は後は体で生きてくしかない……つまりは戦  
場で戦えってことだ」

「いやおかしいだろ、その理屈からするとお前のような歳で人生が  
決まっちゃうって事になるぞ、そんな理不尽な事が」

「おっさんささって言ってたよな？ そんな生きてきたのに今更何  
いってんだよ、ベルカどころか違う国でもこのシステムは変わらな  
いぞ」

ここでテツはこの世界の厳しさを予感する、元の世界で考えれば高  
校生で一般企業につくか戦場へ出て傭兵にも似た暮らしになるかと  
いう選択を迫られ学力の能力で強制的に分けられるということだ、  
理不尽どころの騒ぎではない、この世界では常識なんだろうがテツ

には到底理解できる範囲を越えている。

「問題は次の授業で外での実戦訓練だ、エリートってのは見下すのが好きらしくてなクラスにもいるんだよ、美形で剣の腕もいい名門の子供が……性格は歪んでる最低野郎が」

「はあつまり俺はこの縦社会のエリートと最下層が同時に集う面白すぎる学園に放り込まれたのかよ、おいエリオその胸糞悪い奴がどうしたって」

「次の授業になればわかるさ、テツって言ったよな？ これは推測だが33にもなって学園にきたって事は俺が想像する以上に落ちこぼれなんだよな」

耳が痛い……この世界ではどうか知らないが元の世界では考える限りの落ちこぼれの要素を欲しいままにしたテツだから否定は出来ない、エリオの問いに頷こうとすると鐘の音が鳴る、おそらくは授業開始の合図だろうと立ち上がりエリオと二人で屋上を出る。

そしてテツは縦社会の厳しさを身をもって知る事になる、その厳しさを知る場所は何の変哲もないグラウンドに似た広い砂地、生徒達が木製で剣の形を作った物を片手に持ち散らばっていく。

生徒同士が手に持つ木刀で打ち合う姿を見て授業内容を把握したがテツの回りには誰も近づこうともしない、まあ当然の結果だと苦笑いしていると一人が近づいてくる、悪意のある笑みで敵意丸出しで

「おいおっさん俺とやろうぜ、気になってたんだよなあ〜面白すぎるぜあんた」

金髪で整った顔、黙っていれば美形なんだが歪んだ笑みで大無しにしていく、屋上でエリオから聞いていたからすぐに察しがつき無言で木刀を構える、昔剣道部で見た真似ごとだが格好だけはつけてみる。

金髪はついに白い歯を見せるほどに笑い片手をダラリと垂らし近づいてくる、テツもいくら剣術の素人でも自分の間合いぐらいはわかるが……そこで重大な事に気づく、相手はエリートで自分は落ちに落ちてこんなわけのわからない世界にきた素人

「ガッ!!」

気づく前に口の中で鉄の味が広がり奥歯がミシミシと悲鳴を上げる音が耳に入る、頬をあの堅そうな木刀で横殴りにされてテツの顔は一瞬形を変えてしまふ、口の中を切ったらしく血が次々に溢れ出て何年ぶりの痛さに戸惑っていると次の一撃で地面にひれ伏してしまふ。

顔に足を乗せられ勝ち誇った金髪がツバを吐いてきた、最初何がされたのか理解できなかったテツだがさすがに気づき見上げると腹を抱えて笑う金髪がいた。



「ハハハハッ笑わせるなよおっさん」その歳で学園きたからどんだけ強いと思えば素人すぎんだろ」ハッハハハハハハ！　おい皆ビビル事はねえこいつ酷いぜ」

踏みつけられたまま顔を蹴られ転がりテツは大の字に空を仰いだ、夢見た学園生活なんてどこの世界にもなく現実という悪夢はいつまでも覚める事はなく……そんな考えをしていると自分の肩と拳が震えてる事に気づく。

なぜ震えているか？　単純だ、怒りという感情で全身が震えだし自然に立ちあがっていく、テツは数年だが自分の拳で飯を食べてきた誇りがあるが今その誇りを汚された、こんな成人にも達してない子供に。

「おい餓鬼」

怒りはテツをただの落ちこぼれではなくプロボクサーに姿を変えていく。

## 五

口の中の砂を吐いて呼吸を整える、脚は肩幅より少し広い位置に爪先は立て踵は少しだけ浮かせる、肩の力を抜き拳を上げてテツが数年間鏡で見てきた構えで拳を上げていく。

金髪はそんなテツを見て笑いをやめて眉間にシワを寄せる、木刀を捨てて拳を上げたテツの構えを見てなぜ戦うという意志を自分にぶつけてくるのかわからない。

「おいおっさん何のつもりだ、降参なら地べたに頭擦りつけるよ」

「続きだ餓鬼、構えろ」

本来素手と木刀なら基本的は木刀有利だがテツは学園に来る前に二人から聞いていた、この世界に素手で戦うという概念はなく武器を持った事を前提にした戦い方になる、これがどーゆ事か……テツはこの世界で唯一のボクシングを知る男なのだ。

いくらプロの世界で平凡な成績だったとはいえテツは元プロボクサーだ、毎日毎日サンドバックを叩き勝つために汗を流し積み重ねた技術がある、しかし相手も剣術を得意とするので油断など出来ない。

金髪は再び大笑いし体をくの字の曲げてしまう、もはや馬鹿というレベルではないと思えば腹がよじれるほど笑っている、つられてクラスの何人かも笑うがテツの顔は無表情のまま。

「ヒヤハハハハおっさん俺を笑いころす作戦か、勘弁してくれ」

「おい、もう始まつてるんだぞ」

大笑いしてる金髪に脚を使い全身をバネのように伸ばし間合いを詰めてのジャブ、鼻を軽く叩く程度だったが金髪は尻から地面に倒れ驚きの表情でテツを見上げると背中を向けて元にいた位置に戻っていく。

クラスメイトの笑い声が一斉に消えて静まりかえると金髪は額に血管を浮かび上がりせ立ちあがる、屈辱　そう屈辱を受けたのだ、名門に生まれ今まで敗北をしらなかった金髪が無様に鼻を叩かれ地面に転がった事実は屈辱でしかない。

「おお〜怒ってる怒ってる」

「おっさん今からためえの歯全部折ってやる、覚悟しろ」

「ハハッなんだその台詞、餓鬼お前は強いんじゃない、強いと勘違いしてるだけだ」

金髪は剣術の腕はいいだろうがやはり子供、テツの安い挑発に乗り

自ら先手をとり木刀で殴りかかるが……当たらない、怒りに任せて振ってるわけでもないのかすりもしない。

テツは体を動かし避ける避け続ける、モーションが大きく避けるだけなら簡単だが問題は攻撃、金髪もだんだんテツの動きに慣れてきたのか振り小さくし隙を無くしてくる、リーチで負けてる分懐は遠く攻め手にかけるが好機がきた。

当たらない展開に痺れを切らした金髪が自分から近づいてきた、近ければ当たるだろうとまさに子供の発想……まずは爪先で地面を蹴り腰に力を伝え腕を加速させ

「オツ  
…グウ」

脇腹に突きさすように拳を入れると金髪が目が見開き口が閉じれなくなる、嗚咽を漏らし涎が口元から垂れて地面につく頃にはヨロヨロと後退していた、そしてここから残酷なショーが始まる、素手で顔を切り裂くように殴りつけ脇腹も徹底的に叩く。

こんな子供にテツはツバを吐かれ脚で顔を踏まれたのだ、金髪の襟を掴み何度も腹に拳を叩きこむ、何度も何度も……最後は掴んでいた襟が破れ気づけば口から泡を吹いた金髪が首を力なく地面につけていた。

「なななな何やってるんですかテツ君!!」

茶色のストレートを揺らし朝見た担任の女性が駆け寄る頃には金髪は意識は消えており数人の体格のいい教師がテツを囲んでしまう、おそらく素手なら負けない自信があったテツだがここで我に返り両手を上げる。

テツはやりすぎた、生徒一人をタンカに乗せ運ばせるまで痛めつけてしまったのだ、首根っこを掴まれ連行されいき残った生徒達は目の前で起きた残酷な光景に顔から血の気が引いている。

「テツは凄いな、あんなの初めて見たぞ」

二ノが腕を組みサラツと言つと隣にいたエリオが声を震わせ言葉を出してくる。

「ななななんだありや！！ テツが素手でエリート野郎をボコボコに……てか生きてるのかよ、おいテツは何者なんだ」

「交通誘導員だ」

「ハッ？」

## 六

1時間みっちり説教されたが納得はしていない、金髪から仕掛けてきて倒したただけなのにまるでテツが悪者扱いだ、確かにやりすぎたが誇りの問題の戦いに手加減できるほどテツは優しくはない。

説教後はある部屋に連れてこられる部屋の札には「学園長室」さすがにこの時ばかりはテツは焦る、停学か下手をすれば退学がありうる、学園のトップが直々に呼び出したのだ、早くも夢見た学園生活が終わりを告げるのではないかと肩を落としながら部屋に入ると。

「ようお前か、噂通りおっさんだなククッ」

歳は40代だろうか、白髪というより真っ白な短髪でギラギラした瞳に服の上からでもわかる筋肉 第一印象は肉食動物のような男が椅子ではなく机の上で胡座をかいていた、一応は茶色のスーツを着込んでいるが学園長室で机に座る時点で態度は最悪と思った時に室内には男しかいないと気づく。

「話を聞いて久々に胸が躍ったぞ、糞生意気なエリートを素手で倒したそうだな」

「はあ、あの失礼ですが学園長でいらっしやいますか」

「堅苦しい敬語はよしてくれ、まあ学園長は俺だが……おいどうやって素手で勝ったんだ詳しく教える」

机から飛ぶとソファーに腰をかけてテツも反対側に座る、学園長は子供がおとぎ話を聞くように瞳を輝かせ見つめてくるのでテツは仕方なく細かく説明してみせた、数年間ボクシングを習いその技術で剣術を圧倒し完膚無きまで叩き伏せた事を。

最初は好奇心旺盛な態度で学園長が聞いていたのだがだんだんと表情が曇り首が傾いていく、テツの話には知らない事が多すぎる、そもそもボクシングなど40年以上生きてきたが聞いた事も見た事もない。

「ウィルからの紹介で学園に入れたが、テツお前どこからきた」

「信じてもらえないでしょうが、こことは違う世界です」

「つまり違う世界の技術なんだなボクシングってやつは」

テツの話で火がついたのか学園長は部屋に置いてあった木刀を持ち笑いながら構える、両手で握り半身になり腕を垂らし軽く飛んで体をほぐす、テツはすぐに気づき頭を抱えてしまう。

「面白いそのボクシング俺にも見せてくれ」

「一応学園長してる方がこんな喧嘩まがいな事していいんですか」

「最初に言っておくぞ、俺は戦う事が大好きなんだ何よりも……歳がいないと笑う者もいたが関係ねえ、テツお前は面白そうだな別世界の技術見せてくれよ」

席を立ちテツも構え試してみたいと思う、リング以外でボクシングを使ったのは先程の金髪が初めてでありまだ勝利の余韻と優越感の感触が手に残っている、学園にきて初日で二回目の喧嘩 昔読んだ不良漫画を思い出し笑ってしまう、学園長の期待に応えるべくステップを刻む。

「……」

しかし対峙してみると先程まで炎のように燃えていた学園長の殺気は消えてしまう、静かだ静かすぎる、ただ立っているだけなのに隙が見当たらないので試しにフェイントを入れても微動だにしない。

金髪なんて比較にならない程の使い手だった、少しでも隙を見せたら噛み付いてくる獣のように学園長はジリジリと距離を詰めてくる、後半歩……とテツは学園長の足元を見る、後たつた半歩で踏み込めると考えていると。



「シッ！！」

テツの拳がギリギリ届かない間合いから木刀は放たれた、金髪とは速度が比べ物にならなく見る前に上半身を後ろに逃がし避けるが前髪が数本目の前で落ちる光景は嫌な汗が出てしまう、一度攻めに転じた学園長は次々に鋭い斬撃で空気を切り裂いてくるがテツは逃げる、脚を使い円を描くように学園長の周辺を回り続ける。

小回りと手数ならテツに分がある、救いなのは部屋が広くリングと同じ感覚で戦えた事だ、常に左から回り込み学園長を動かし続け揺さぶっていき牽制で出したジャブが顔を捕られる、ダメージはないがこれを機にテツの拳は次々に叩かき込まれていく。

「このちょこまかとっ！！」

嘲笑うかのように脚を使い勝負に出る、今まで左回りだったが逆に右回りにスイッチしたその瞬間こそが勝負の時、慣れてない動きに加え逆方向からの奇襲とテツは渾身のストレートを放つ、体重を上手く乗せて少し大振りだが問題はないはずだが……

「ハッようやく慣れてきたぜ、中々面白い曲芸だな」

拳は空を切り空しく何もない空間で停止してしまう、横から木刀が迫ってくる音が聞こえテツは誤算に気づく、相手の力量はテツの想像に遙か上をいっており、なおかつボクサーとしての動きを見せず

ぎた事　勝負をかけるなら速い段階で仕掛けるべきだったと。

鈍い音が聞こえると視界は暗くなりブラックアウトにも似た現象でテツは意識を失ってから倒れた。

## 七

心地よい揺れでテツは微かに目蓋を開けるとうなじが見え少し汗臭い匂いが嗅覚を刺激する、最後に見た光景は学園長の無邪気な笑顔、学園にきて初めての敗北は強烈な頭痛と共に脳裏に刻み込まれていく。

周辺から雑音が聞こえ見渡すと通行人がこちらを見ている、露店が並ぶ賑やかな場所とわかり自分がおんぶされてる事をようやく自覚する。

「お、起きたかテツ」

「ああ、痛!!」

声で二ノとわかったが振り返った瞬間に鼻先に後頭部が当たり涙が出てしまう、露店が並ぶ大通りを男女がおんぶする姿は目立つがテツに気にしてる余裕などない、頭がズキズキと痛み今は二ノに体を任せる他ない。

しかし二ノはせいぜい160ぐらいの背丈だ170少しのテツを抱えるのは大変だろうと思うが表情はいつもの無表情のまま軽々とテツを運ぶ、それどころか露店によりテツを抱えたまま肉を買い器用に食べてしまう。

「しかし驚いたぞテツ、お前が学園長に挑むとはな」

「あつちが挑んできたんだよ！！　たくっあのおっさんともねえよ」

「まああの人はあーゆ人だ、さてそろそろ着くぞ」

大通りを抜けるて路地裏を少し歩くと何も無い道に出る、左右には草木が生え一本道が続いて先には一件の屋敷が見え近づくると二ノが鉄格子を開け進み更に扉を開けて中に入るとテーブルと台所がある部屋につく。

テツを下ろすと二ノは椅子に座りテーブルの上に買ってきた肉を袋から出しかぶりつく、テツは疑問が浮かぶ、不法侵入？　ウィルの家に帰るんじゃないのか？　と考えていると骨つきの肉を二ノが差し出してきた。

「二ノこの屋敷はなんだ」

「私達の家だ」

「私………達？」

「ああ私達は今日からここで暮らすんだ」

「オヴェエエエエエエー！！」

南米に生息する珍しい鳥のような鳴き声を出しテツは座っていた椅子を蹴飛ばし立ちあがる、二ノは耳を抑え目を細めながらうるさい

と一言言つが今のテツには関係ない、それ所ではないのだ。

「おまおまおまおま！！ 何考えてんだ、男女が一つ屋根の下でつて……」

「何がだ、むしろ別々で暮らした方が面倒だろ？」

「お前は自分が女つて自覚がないのか！！ それとも俺を男と認識してないだけか……！」

制服の上着を脱ぎシャツ一枚になった二ノが背中を見せ横顔でテツを見て微かに微笑む、どこか悪戯をするような子供の顔になりフフンと鼻を鳴らし指を一本立ててからかうように言う。

「まさか私に手を出すのか？ 安心しろテツを男としては見てるぞ、だが恋愛対象外」

「お前みたいな子供に手を出すわけがねえだろ！！ バーカ！！」

「テツはいい反応するな、ついついからかってしまう……さて風呂に入ってくるから、あゝえゝと覗くなよ？ だっけかなお決まりの台詞は」

二ノが出ていきしばらくするとシャワーの音が聞こえテツは椅子に座りテーブルに肘をつき頭を抑える、まるでベタすぎる展開、もうベタすぎて話のネタにすらならない展開に　しかし美少女との同棲生活は胸ときめくはずなのにテツは震えてしまう。

もう慣れたはずなのに二ノが怖い、あのシーンが蘇り震えてしまう、手を出せるわけがないだろうと呟いてテツは部屋を移るとベッドだけあるシンプルな部屋に入り寝転がる。

未だに首が宙に浮き胴体から噴水のように吹き出す血潮がたまに夢に出て目覚めると寝汗でビツシヨリになる事がある、普段は平気だがたまに二ノの表情がたまらなく怖い。

「丸さん……先輩、元気にしてるかなあ」

たった2週間前なのにもう何か月も会っていない気がした、今思えば元の世界の生活がいかに幸せだったか実感する、こっちの世界は常に死と隣合わせのような気分になり恐怖と戦い気が狂いそうになっ  
てしまう。

扉を開けっぱなしにしていたのか二ノが風呂上がりの石鹸の匂いと一緒に顔だけ出す、口元には白髭が生えおそらくは牛乳を飲んだのかテツが笑う。

「私はもう寝るぞ、テツもあまり夜更かしするなよ」

「母ちゃんみたいな事言っなよ、俺も今日は疲れたし寝るわ」

二ノがいなくなると少し汚れた天井を見てゆっくりと目蓋を閉じて眠気に身を任せる、学園初日でいろいろあり疲れが一気に意識を奪いにかかりテツは1分もしない内に眠りにつく。

こうして33歳、元交通誘導員の学園生活は始まった。

## 第二章

「遅刻だぁあああああ」

別に遅刻といほどの時間ではないがテツは元氣よく鉄格子を開けて走り出す、朝飯に二ノが用意してくれた食パンを口に加え少し乱れた制服を揺らし走る、太陽の光を受けて気持ちのいい朝を駆け抜けていく……こんな事をテツは一度はしてみたかった、漫画とかでよく見た光景だが一度もやってる奴を見た事がない。

ならばせつかくの機会だと自分で実行したのだ、二ノはまだシャツと下は下着とテツには刺激が強すぎる姿で大欠伸をしながら何事かと思うが一応は送り出す。

「やべえ 転校初日に遅刻なんて、こいつはやべえ」

転校初日は昨日だったがテツの中で設定が決められ台本を読むかのようになりながら喋る、次のベタな展開は曲がり角で後に同じクラスになる女子生徒とぶつかるはずだが、何回曲がろうともぶつからない、もう同じ場所を5周はしたと思うがぶつかるはずがない。

いい加減走るのが疲れトボトボと歩きだす、誰かとぶつかるなんて神の仕業に違いないと思う、しかも奇跡でぶつかったとしても制服を着る謎のおっさんだ。

まあこーゆのは本人が楽しんだ勝ちだが時間が立つにつれ空しさが



込み上げてきて歩く速さも落ちる、気づくと校門前で黙って教室に向かう。

「おはよ〜すっ」

教室に入ると誰も目を合わせずに数人の女子と男子が道を開ける、予想はしていた事だが実際やられるとキツイもんだ、後ろの窓際という絶好の席につきボツ〜と空を眺めてしまっ、行動だけ見たら学園物の主人公そのものだがテツには到底似合わない。

鐘の音が鳴りそろそろあの怖がりな担任かと思っていると校門前で教師が門を閉めようとしていると現れる。

食パンを加え。

少し寝癖でハネた髪で。

「遅刻だああ」と今にも言いだしそうな表情ではなく無表情で。

二ノは全力疾走で門を飛び抜けた。

「おおおはようございます」

教室に担任が入ってきて今日の出席をとると50音順に読み上げられていく、テツが元気よく返事をする。担任は肩をビクツと一度震え苦笑いで返してきた、生徒どころか教師にまで怖がられる始末にテツの溜め息が増える一方だ。

「おはよう!! 先生おはよう」

「ニニニノさん!! わかりましたから顔をいきなり近付けないでください」

変わり者 ニノは間違いなく変わり者だった、何を考えているのかわからず行動すら読めない、しかし人を殺したはずのニノが今日はいつにも増してテツには可愛くみえた。

ある一定以上に進化した科学は神話に出てくるような魔法とは大差がない、武器には必ず一つの魔法が備わりその役目は星の数ほどあ

る、魔王との戦争の中で武器は更に進化し人が踏み込んでならぬ領域まで行こうとしている……炎や水はもちろん中には光や風まで操る最新機種の武器まで出てくるようになってる。

全ては科学技術で構成されているが、魔法と変わらない事からいつしか科学は魔法と呼ばれ人の手に大きな力を宿していた。

「え、これ凄くね」

授業中についつい呟く、武器に魔法？ それは剣に炎属性がついてるといふ事か？ まるでゲームだ……改めてとんでもない世界に踏み込んでしまったと好奇心と恐怖を同時にテツが感じていると気になる存在がいる。

隣で寝息を立てる二ノではなく前の席だ、色鮮やかなクラスメイト達の髪色の中でも目立つ銀髪だが髪色だけなら特に気にはしないんだが、最初の授業からときたま振り返り目が合うと素早く前を向くという行動を繰り返す。

「ん」

まただ一瞬目が合うと前を向いてしまふ、銀髪が眩しい少し小さめの女の子、顔は後ろからだとはよく見えないが可愛らしいと勝手に妄想中のテツ、声をかけづらいので言葉ではなく行動でテツは対話を望んでみる。

昔流行ったヴジュアル系のポーズ。

「……」  
女子高生がプリクラを撮る時のポーズ。

「……」  
上着を脱いでみる。

「……」  
全て空振り、とゆうかこんな怪しいおっさんが気味の悪いポーズしてるのに女の子はこりもせず何回も見てくる、ますますわけがわからんと思っているとゴミが飛んできた。

こんな事をするのは一人しかいない、テツの初めての友達であり学園の救世主とも思えた薄い赤毛に眼鏡男エリオ、紙には「もうクラスの女の子に目をつけたかテツうゝでもそいつはやめとけ」

なんかやめると言われると反抗したくなるテツは授業終わり寸前で振り返ってきた銀髪少女に頬を膨らませ指を指して……

「ドゥーン」  
「……」

昔友達にした一発芸をかますが空振り、自信があつた分滑った時の恥ずかしさは生き地獄になる。

カンカンと乾いた木製の音と汗が飛び散る、ほぼ初めて握った木刀は思ったよりも重くどう使っているかわからない、相手の動きを真似るが慣れない事なのか足元がフラつき無駄な体力ばかり消費していく。

「彼女はフェル・ランカスター、この名前でわかるだろ？ 確かに可愛いがあればやめとけ」

「ハアハア、わからん！！ まあフェルって名前は覚えてたが」

「ランカスターの方だよ！！ あのな彼女はお嬢様なんてレベルじゃないんだよ、名門中の名門！！ 俺らとは住んでる世界が違うわけ」

大量の汗は服に染み込み重くし喉を焼いていく、せつかくこの世界にきたんだと午後からの実戦授業でエリオ相手に木刀で剣術を体験してみるが……攻撃を防ぐので精一杯だ、攻撃なんて選択肢にも入らない、本当に落ちぶれかと思うくらいにエリオの剣術は冴えわたっている。

「なんでそんな天上人さんが俺達と肩を並べてる……わけっつ」

「俺が知るかよ本人にでも聞け！！ 隙だらけだぞ」

ボクシングで鍛えた足回りで何とか逃げてきたが普段持ち歩かない木刀のせいで速さは半減されエリオの木刀に捕まる、横腹に鈍い音で叩きつけられ膝をついてしまふ、顔を下げると茶色の地面に自分の汗と口から垂れる涎が見え酷く吐き気が襲いかかってくる。

口を抑え瞳を閉じて我慢していると背中をさすられ多少は楽になる、振り返ると呆れた顔でエリオが竹の筒を差し出してきた、礼を言う前に喉の渇きが優先され一気に中身を喉に流し込む。

中身は水だが今のテツには御馳走になる、中身を全て飲み干すと大きく息を吐きエリオに礼をいい返す。

「素手だと強いのに武器持つと弱くなる、普通逆じゃね？」

「うるせえ俺はそっちの方がいいんだよ、ん」

少し離れた木陰で二ノが体育座りしている、いつも通りの無表情でどこか退屈そうでたまに欠伸をしながらボーっと授業中の生徒達を眺めていた。

「ああ二ノか、あいつも違った意味で特別だ」

「どこかのお嬢様なのか？」

「単純な理由さ、強すぎるんだよ……クラスメイトどころか学園最強とまで噂され二ノの相手するのが皆怖くてあーやって放置されてんだ」

確かに人の首をたった一振りで切断するような二ノだ、いくらエリートが集まっている学園とはいえ二ノ以上の輩はそうそういるわけがないと考えているとテツの頭上に影が重なり顔を上げる。

木刀を両手に抱えて小鹿のように震えている担任の女性がいた、茶色の髪まで揺らしいきなりテツに指を指してきた。

「ががが学園長からの命令で……貴方と立ち合います!!」

「あゝ先生名前教えてもらえませんか」

「マリアといい……じゃなくて構えなさい!! あ、いや構えてください」

無邪気な子供のように笑う学園長が簡単に想像できる、実力を測るのはいいが生徒に教師をぶつけるあたりの豪快さが学園のトップらしいといえはらしいが、いくらテツが剣術に腕に自信がないとはい

え震えている女性に向かい襲いかかるのは気が引ける。

マリアが一度大きく深呼吸し両手で木刀を握り何の迷いもなく踏み込んだ。結論から言うとテツはマリアを舐めている、教師の立場なのにもテツを脅えた目で見ていた、しかしその結論は否定されていく。

「ああごめんない！！ 痛くありませんでしか！！」

痛いとんでもなく痛い、手首に痛みが走り木刀は地面に転がりテツの顔が固まる、痛さではなくマリアの攻撃が見えなかった事が痛さを忘れてしまう、動物的本能で自然と拳が上がり一気に汗が額に浮かび上がる。

たった一撃で手首が両断される映像が脳裏のよぎり防衛本能で拳を出してしまう、狙うは顔面と相手が女性でもテツにはもう気にして余裕はない。

「ひいひいひい！！ ごめんなさい！！」

マリアは謝りながら鼻先に拳をかすらせ見事に避けて見せた、この行動にテツは驚き距離をとる、マリアの避け方は最低限の動きで上半身だけ動かしボクシングを知らない素人とは思えない、身を丸め腕を畳みを絞らせないように動く動き続ける。



「ハアハア」

体力の消費の疲れではなくマリアの不気味な殺気に首を絞められるような感覚に脅えテツは逃げ回る、後ろに回るうとも攻撃する気にはなれず常にマリアを中心に回り続け時間だけが経過していく、恐怖は体を浸食し筋肉を固くし動きを少しづつ鈍らせていく。

死神の鎌が常に喉先に触れられているような気分だ、どこかの剣豪小説じゃあるまいと自分に言い聞かせるが体は正直でテツの自由には動いてくれなくなっていく。

ガードを固めた隙間から一瞬だけ恐怖で目蓋を閉じて開けてしまうと……長いストレートの髪が視界に入り痛みと共に固めていたガードはこじ開けられた、2本の腕は左右に弾き飛ばされテツの汗まみれな顔が出る。

「うううごめんなさい！！ 命令だから、うう恨みとかじゃないんです……」

長年ボクサーをしていると殴られる瞬間まで目蓋を閉じず見てしまうというジムの先輩がいた、テツは先輩の言葉を思い出すと全てがスローな動きになり木刀が迫ってくる。

当然避けたいが自分の動きまで遅くなりそもそも避けられる距離ではなく見つめる、その木刀は正確無比に振り抜かれ見とれてしまう

ほどに美しく空気を切り裂き……テツの顎先を軽く撫でた。

「ああやりすぎました！！ 誰かタンカを！！」

謝りながら焦るマリアをテツは薄れゆく意識の中で見て体が崩れていくのがわかる、糸が切れた操り人形のようにテツは倒れ痛みではなく快樂のような感覚で意識を奪われていく、まるで綺麗なカウンターパンチをもらったかのように。

学園2度目の敗北、それも美人でスラリとスタイルのいいマリアという女性に……女に負けた悔しさよりも驚きが先にでる、謝りながら迫ってくる無駄のない足さばきと大蛇のように伸びてくる腕、最後に見た光景を思い出すと見事なまでの体捌きがテツの心を刺激する。

あの技を覚えたい盗みたい強くなりたいと思う、奪われた意識が少しづつ蘇り勢いよく起き上がると真っ白な壁が見えて隣からシャリシャリと皮を剥く音が聞こえてきた、隣では二ノがリンゴを剥いていて目を細め苦労している。

「起きたかテツ、まったくお前はどれだけ戦いが好きなんだか」

「今回もいきなり挑まれたんだ、貸せ」

二ノからリンゴとナイフを奪い皮を剥きながら部屋を見渡すと元の世界の保健室のような所だった、清潔感がある部屋に花瓶と誰でも見てわかる室内でテツはある疑問を二ノに聞いてみた。

「学園長もマリア先生もスーツ着てたな」

「ん？ ああそうだな、あれは先生達の制服みたいなもんだからな」

「あれは俺がいた元の世界にもあつたんだよ、なんで異世界であるここに存在している」

剥き終わったリンゴを渡すと二ノは一口で食べてしまいおかわりの要求の手を出してくるがテツが軽く叩いて断ると少しだけ眉を吊り上げて不満なように見える、大抵無表情だから見分けるのはテツにはまだ難しい。

「さあな難しい話はわからん、しかし違う世界で同じ物が発明されても不思議ではないだろ……それよりもテツ」

「なな、なんだよ」

顔を近づけ鼻先に指を当てられジーと見られるのは気分は悪くはない、二ノの整った顔に胸の鼓動を早めつついついだらしのないニヤニヤした顔を出すと鼻先をデコピンで弾かれてしまう、その衝撃は指先とは思えない痛さで涙を浮かべながら鼻を抑えてしまう。

「お前剣術ぐらいまともに来ないとこれから生き残れないぞ」

「あのな今まで誘導員で旗振るしか能がなかった俺に剣術の心得なんてあるわけねえだろ」

「まあ確かにな、ならば私が稽古をつけてやるから感謝しろ」

最初は笑顔を作っていたテツはそのままベッドから起き上がり走り出す、二ノに稽古？ そう考えるとまず最初に殺されると思い廊下に出て全力疾走……しかし振り返ると無表情で追ってくる二ノが怖すぎる、ひたすら走り逃げまくる、しかしどんなに走ろうが二ノの追跡は振り切れず結局は自分の教室に戻ってしまう。

教室に入った瞬間に皆の視線がテツに集まるが一瞬で目を反らされてしまう、だんだん慣れてきたテツは肩を上下させ荒くなった息も整えず自分の席につくと二ノも戻ってくる。

そこで自分の愚かさを呪う、二ノは隣の席で座るとジトと目を細め無言で見ってくる、無言なあたりがとても怖い。

「ああテツ君体はもう平気ですか？ さっきはやりすぎましたねえ  
すいません」

黒板の前に立っていたマリアが頬に手を当てながら笑う、それはテツに脅える顔ではなくどこか優越感に浸っているような勝ち誇った笑顔……頬は赤くなり身をクネクネと捻り潤んだ瞳でテツを見つめてくる。

「まあこれからよろしくね”私より弱いテツ君”」

クラスに小さな笑い声が響きマリアはニヤニヤとテツを見下していた、普段温厚なテツもこの時ばかりは白い歯を剥きだしにして怒りが顔に出てしまう、握った拳は震え単純に悔しさが全身を駆けまわる。

隣で腹を抱えて誰よりも笑っていた二ノに苦渋の選択をする、もう二ノが怖いとかではなく目の前で勝利に酔いしれたあの女に勝つために言葉を出す。

「おい二ノ、あの20代後半で結婚出来ないビッチババアに勝てるようにしてくれるのか!!」

「はあくいそこのビッチババアに負けたテツ君聞こえてますよあく負け犬の遠吠えは悲しいですねえ切ないですねえ」

「もちろんだテツ、あのような結婚出来ないババアなんぞに」「二二二二ノさん!!」

こうしてテツは強くならなきゃいけない理由が出来た、こんなに明確に馬鹿にされたのは初めてでテツの腹の虫は完膚なきまでにマリアを叩き伏せないと思まらなくなる、しかしテツは知らないその道がどれだけ険しいか。

そして銀髪を揺らしてチラチラと見るフェルという存在が後にテツ

と世界を巻き込む大事件に発展することも。

鋭い 同じ木刀なのに鍛冶職人が研いだような業物のような鋭さが確かに宿っていた、ギリギリ避けるが避けるたびに自分の顔半分が削ぎ落とされたような幻覚が見えテツは油汗を全身の毛穴から出す。

防戦一方では勝てるはずもなく勇気を振り絞り前に出る、当然相手も反撃の一振りをしてくるが、この一週間嫌といほど受けてきたおかげでいい加減目が慣れ受け止まる事に成功した、テツ自身も初めてで喜びで飛び跳ねそうになるが今はそんな場合ではない。

体格では勝ってる分力で押していく、体をぶつけるように肩からぶちかますと……目の前から二ノは消えていた、正確には体を沈め手首を返し木刀を引き力を溜めてテツの胸を斬って落とす。

「おおぐうつうつうつー!!」

どこかの時代劇で剣豪同士が斬り合い最後に見せるように腹を斬られた光景をテツは思い出す、残念な事にテツは斬られる方で腹を抑え悶絶しながら地面に沈んだ、倒れるテツに二ノはしゃがみこみ木刀で顔をつつく。

「テツは回避が上手い、しかし攻撃になると酷いなあ」



「おおぐう……うるせえ！お前は両方上手すぎなんだよ！！」

二ノの剣術だけ他の奴らとは違う、他はこの世界の伝統の形だが二ノだけが違いくらテツが剣術の素人でもわかる、二ノの剣術は日本武道……それも実戦派に改良されたおぞましい殺人剣、一週間戦つてみてよくわかった、人を殺すためだけに特化した技術。

この世界の技術ではない事になると結論は一つしかない。

「二ノお前も元は日本からきたんだな」

「いや違つぞ」

「その黒髪と瞳で何を言うか！！ しかも相当の剣術で有名どころだろう、いや待てよ」

これだけの使い手が現代にいるだろうか？ そもそも現代の剣術ではない、こんな恐ろしい剣術教える道場なんて聞いた事もない……ならば過去？ それも戦国時代級に戦乱の時代から二ノはこの世界にきた事を考えるとテツは不思議と納得してしまう。

と考えていると毎日見てるが慣れない笑顔が視界にくる、その笑顔は美しく男なら誰だって目を奪われるだろう、本当に嬉しそうで高揚感に満ちた笑顔でマリアは笑っていた。

「あらあゝ毎日ご苦労さん〜テツ君貴方が天才を越える大天才だったらたった一週間で私にい〜」

「うるせえババア！！ 知ってるんだぞ27歳で結婚出来なくて『私に合う男性がないだけよ』と愚痴つてた事を！！ 馬鹿じゃねえの おぶう！！！！」

真上から腹に垂直に木刀を落としてテツを黙らさせた後に言葉すら出ないテツの頬を軽く撫でながら笑顔を近付けて無言、何も言わず目だけで威嚇し高笑いと共に去っていく、悔しいが今のテツじゃなにをどうしようとも勝てない、結局は努力するしかなく気合いで立ち上がり再び二ノに挑む。

「あがあ あああああ！！！！」

武器は魔法で……機械で動いているため魔法を使いすぎるとオーバーヒートし壊れてしまう、魔法の力は強力でそもそもオーバーヒートする頃には武器自体の耐久力がもたなく壊れてしまう、今現在の技術ではこれが限界のために相性がいい武器を選ぶように。

そして科学ではなく本物の魔法を宿した武器がありその武器を扱うには武器そのものと契約をする必要がある、これは自分が選ぶのではなく武器が人間側を選ぶとい特殊な現象のために願わくば諸君の中から【契約者】が現れると先生は嬉しいな。

「痛い、お腹が痛い」

午後の授業で痛みと戦いテツは内容を聞く、授業内容はテツの心を躍らせ聞いててまったくあきない、特殊な武器に契約者……テツにとっては夢が広がる話でワクワクしながら聞いていると、いつもの銀髪が揺れる、さすがに回数は減ってきたが授業中に一回は必ず振り向いてくる。

最初は無視しつづけたがやはり気になり小声で悪戯じみた事をする。

「フェル」

「……っ！！」

名前を呼ばれ肩が飛び跳ねるかのようにビクッと震えるとゆっくり振り向いてきて目が合つと高速で振り返る、新しい遊びをみつけ暇つぶしになるかと思っていると。

「これから諸君に武器を選んでもらう」

「え」

いつものまに授業は進み他の生徒は教室を出ていく、テツも走るように教室を出ていきとうとう武器選びかと思うと自然と走る速さが早くなっていく。

#### 四

店内に並ぶ剣槍斧、見るだけで飽きずに魔法つきの武器を初めて手にする生徒達は興奮を隠せない、テツは生徒の中でも特に興奮し店内を走り回っていくと赤い剣や青い槍……子供の頃夢見た世界が目の前に広がり次々に武器を手にとっていく。

しかしウィルの言葉を思い出し念入りに調べる、握りやすさや自分の体格に合っているかと素振りをしたいがさすがに店内では無理だがついてきたマリアが奥の扉を開けると生徒達が走り出す。

店の奥は外と繋がり広場になっていて生徒達が自由に選んだ武器を試している、剣が爆発したり弓矢がありえない角度で飛んでいったりとまさに魔法の世界だと改めて実感する。

「テツにはこれがいいだろ、ほれ」

「ん、なんだこれゃ」

二ノに渡されたのはどこにでもありそうな西洋の剣バスターソードとも言われてる、少し小さめに作られてあり握った感触は悪くなく振ってもそこまで振り回されず中々の使い勝手に声を上げて驚く。

「それは言ってみれば初心者用武器みたいなもんだ、腕が上がるまでそれで我慢しろ」

「なんか初心者って聞くと悔しいが仕方ないな、しかしこれで俺も魔法使えるのか!!」

「柄に指をかける所があるだろ、そこを強く押し込んでみる」

言われた通りにすると機械音が響き刀身が水に包まれていく、次第に水は回転し刀身を青く染めていき鋭い牙となりテツの度肝を抜いた、水の音とは思えなく何をかを切り裂いてるような鋭い音が常に響く。

「おおおおお!! なんじゃこれ、水か水系の攻撃魔法か!!」

「ウォーターカッターという鋼鉄でも両断してしまう強力な武器だ、強力な分持続時間が少ないから使う場面は慎重に選べよ」

興奮してスイッチを押しっぱなしにしていると武器から鈍い音が聞こえ慌てて離す、持続時間はせいぜい40秒……一度武器を休めると水は消えて機械音も無くなりただの剣に戻る、この武器の最大の利点は高熱でオーバーヒートしそうになる武器を魔法である水が冷やし時間をおけば何度でも使えると二ノに教えてもらいテツのテンションは更に上がっていく。

しばらく回りを見ていると武器が腕ごと掴む斧や一本の矢が放つと

ショットガンのように散乱していく矢などテツの想像より科学的な魔法だったが気にはしない、交通誘導の時に妄想していた武器が現実に自分の手の中にあるのだ、今夜はおそらく眠れない夜になるだろう。

「よぉ〜テツう〜俺の武器見てくれよぉ〜!!」

こーゆイベントが大好きそうなエリオが槍を見せびらかしてくる、無骨で何の装飾もない槍だが先端の切っ先だけは常に微弱な電気が流れていた……確か授業で習った事がある、人を倒すには電気が効率がいいと、しかもリーチに優れた槍と合わさると中々強力だと考え少し欲しくなるが生憎テツは槍なんて扱えない。

「エリオお前わかってないなあ〜お前見た目派手だから槍選んだなあ」

「なんだよわかってないのはお前だろ、見た目も重要!!」

二人はお互いの武器を見せびらかしあーでもないこーでもないとしげに会話していく、一方二ノは何の武器も持たず欠伸をかきながら座り首をポキポキ鳴らし少し離れた場所にいた一人の少女　フエルを見る。

片手にはテツと同じくバスターソードが握られているがテツの剣に比べ大きい、フェルにはどう見ても大き過ぎるが体を回転させ力で

はなく遠心力で振るうと剣は踊るように宙を駆けていく。

フェルが一回転する度に速さは上がり時には鋭い突きも繰り出す、まるで踊り子のようにフェルは踊り続け二ノの視線を掴んで離さない。

「さすがランカスターは違うねえ、あ俺エリオよろしく」

「テツと仲良くなりその勢いで私とも近づきにきたエリオ君よろしく」

「うるせえよ、いいだる別に！！ てかお前武器選ばないの」

腰に刺してある刀を鞘から抜くと目の前に刀身を持っていき自分の顔を見ながら二ノは答える。

「使い慣れた物が一番だしな、それに魔法にはかり頼ると腕が鈍りそうだな」

「変わった形の武器だな、古い機種か？」

「フッフそれはな……あテツ何をしてるんだ」



巨大な弓に剣をかけて全力で引いている、子供のような発想でテツは剣を撃ち出すとあらぬ方向に飛んでいきエリオが爆笑した、しかし飛んでいった方向にはフェルの背中があり気づいた時は遅い。

回転しながら風切り音を鳴らし真っ直ぐに向かう、もう間に合う距離ではないが二ノが走り出しエリオもテツも慌てた瞬間に剣は回転しながら砕け散った、刀身から柄までが一瞬で砕け散り欠片しか残らない。

何も無い空間で剣が爆発するように弾けるとフェルが微かに剣を動かしかし鉄と鉄が噛みあうような音が鳴り二ノの動きを止める、背中のまま剣も見ずに叩き落とした神業に二ノの好奇心が震えだす。

「テツ君貴方何をしているの」

「あババアこれには海より深い理由が」

「ババア言わないで！！ こっちきなさい！！」

生徒達が自分にあつた武器を選ぶと店に戻っていくがテツだけはマリアに広場の端っこの方に連れていかれ説教が長く続いた。

## 五

ある日、テツは大口を開けて二ノと並び毎日の訓練のおかげで使い慣れた剣を鞘に収め登校していく、もういい加減登校中の視線にはなれ教室に向かい一番窓際の席で肘をつき空を眺める。

異世界にきて一か月が経過してPCが無い生活にもなれ魔法も使いこなしつつありテツはこの生活を満喫していた、相変わらずチラチラ見てくるフェルを少しいじり遊ぶが未だに言葉を交わした事は無い謎の少女、最初に厳しさを教えてくれた二ノ、憎めないエリオ…  
…テツに友達と呼べる者はほとんどいなく溜め息まじりの毎日だが。

「失礼します」

マリアの授業中に他の先生が入ってきて耳打ちすると教室を出ていく、残された生徒達はザワつきながら待っていると一人の髭が立派な老人が入ってきて生徒達を教室に出して誘導する、この時既にいつもの空気とは違つとテツは感じた。

重く押し掛かるような喉が締め付けられるような空気で嫌な予感がある、いつも訓練している砂地の広場に集められてる全生徒達ざっと見て500はいる、いつも表情豊かなマリアも引き締めた顔になりどこか緊張感が広場を支配し生徒達は黙る。

「悪いな集まってもらって」

短髪の白髪の大男……学園長が台に乗り声を張り上げる、声はよく通り後ろの生徒まで聞こえたが次の言葉で生徒達に混乱を隠せなくなってしまうた。

「現在魔王軍がこのベルカに向かい進行中だ、諸君らには後方で拠点防衛に回ってもらう」

魔王軍？ 拠点防衛？ テツの頭に二つの文字が浮かび上がり雷が落ちたかのように衝撃が走りある答えが導き出された 戦闘だ、殺し合いが始まると気づきテツは自分の口を手で抑え震えてしまう。

ただ言われただけなのにここまで恐怖する自分に脅え今から攻めてくる敵に脅えてしまう、ウィルから話は聞いていたが覚悟が足りなかった、実戦を経験してないのに覚悟なんてあるわけがない。

「安心しろ、ベルカ騎士が街の外で戦い敵を消耗させ諸君にはその消耗しきった敵が街に入ってきた時に戦ってもらう、しかしあくまで防衛戦だ極力戦闘は避ける」

生徒達の中で小さな声を上げる者もいてテツももう何を聞いているのかすらわからなくなっていく、鞆に乗せている手は震えカタカタと音を鳴らし息がだんだん激しくなる、一瞬が永遠のように感じ永遠が一瞬のように感じ時間すらも恐怖で忘れかけていく。

気づけば何組かにわかれテツはエリオと並んでいた、後ろには小さな門がありベルカ城の警護を任され最後にマリアが任務の内容を確認する。

「いいですか敵がきたら迷わず殺してください、こんな所までこないと思いますが一応覚悟はしといてください」

「あ……のババじゃなくてマリアさん、なぜ突然魔王軍が」

「細かい説明は出来ませんがベルカと魔王は敵対関係にあります、攻めてくる理由なんていくらでもあります」

最後に軽く肩を叩かれるとテツは顔落とし瞳を閉じて奥歯を噛み締めて脅えてしまう、そんなテツを察したのかマリアは耳元で囁く、脅える新兵に向かい励ましではなく希望の言葉でもなく恐怖を加速させるような魔法の言葉を。

「殺さなきゃ殺されますよ」

「確かに怖いけどまあやるしかねえなテツよお」

隣から肩を組んできたエリオの腕も震えていたが空元気で誤魔化すように拳を振り上げる、この時ばかりはいつもの笑顔は消えており

強がるのが精一杯だった、マリアは二人に背中を向けて片手をヒラヒラさせ去っていく姿はあまりにも非情な姿に見えた。

テツの考えは甘かった、学園で何のために訓練し何のために戦術を学んだ？ 全ては人間を殺すためだ、この一カ月で平和な時間を過ごしていたテツには突然の魔王軍の奇襲は体を地面に突き刺されたように動かなくしてしまう。

「……………おいテツ始まったぞ」

遠くの方から大量の雄たけびと悲鳴が同時に響いてきた、それは殺し合いの始まりの合図だとテツは嫌でもわかってしまう。

## 六

人の叫びや断末魔で地面が揺れ大気が震える　テツには初めて体験だった、街の外からなのにすぐそばで勝利に酔しれる声や死へと向かう恐怖の声が聞こえてくるようだった。

学園にきて生意気な金髪を倒し学園長とも互角に渡りあいどこかで強くなつてた気がしていた事に気づく、まだ戦場にすら立ってないのに膝が臆病なテツを笑うように震える。

照りつける太陽の下でテツは額から汗を流しながら軽く目を閉じて考える事は「死にたくねえ」33年間何一つ成し遂げていなくわけのわからない世界にきて死ぬ……ふざけるなと拳を握り下唇を噛む。

「気負うなテツ、敵が来る前からそんなだと実戦の頃には疲れちまうぜ」

エリオも怖くないはずがないが軽々しい態度でテツの背中を軽く叩いてくれる、今のテツにとってはそれすらも救いになり雲に隠れた太陽を眺め大きく息を吐く、気負うななど到底無理だろうがせめて今だけは落ち着こうと努力はしてみる。

「エリオお前なんでこんな学園に入ったんだ、ここがどーゆとこかわかってたよな」

「学もねえ平民、何かに特化した能力もねえとなると命をかけて生きるしかないってこの前言ったろ？ 確かに好きでこんな所きたわけじゃないが生きるためだ」

生きるために他人を殺す、そんな考えテツには理解どころか正気の沙汰とは思えないがこの一月でまがいなりに学んだ事だ、平和の世界を勝ち取るためには殺して殺しまくって勝たなきゃいけない  
太陽が少しづつ雲から顔を出してきて光に目を細めながら理解に苦しむ、そんな殺しまくった世界は平和なんだろうかと。

日差しが強く目の上に手の傘を作りようやく視線を下界に戻すと奥の草が揺れる、膝まで成長した植物をかき分けるような音が聞こえてきてテツは視線に神経を集中させると。

「グツ……なんだお前ら」

被っていた兜は半分破壊され血を垂らした顔を覗かせ使い物にならないのか肩腕は垂れてもう片方の手で刀身に亀裂がはいった剣を持つ戦士、鎧も亀裂だらけで血が隙間から垂れてる。

殺気でわかる、敵だと……テツは身構え鞘から剣を抜き構える、恐怖より前に体に染み込んだ動きが優先されるが恐怖は消えない、隣にいたエリオも槍を前に突きだすが矛先が震えていた。

「ベルカの兵か、ならば殺すまでだ」

男は多くを語らず痛々しく肩腕を上げて剣を構え走りだす、まるで転ぶかのように体を投げ出しテツにぶちかます、銀の破片が空中に散乱していく光景はテツにはやけにスローに見えていく。

力ではテツの方が圧倒的だったが何か違う物が働きジリジリと剣同士が擦れあい押されていく、血で滲んだ瞳で睨まれテツは震えがる、この男は今まさに命をぶつけてきてるんだと思わせられ膝が崩れそうになる。

「テツ魔法を使え!!」

エリオが腰を抜かしようやく立ち上がって出来た唯一の行動が叫ぶ事だった、柄にある小さなスイッチを押しこむと刀身は水に包まれやがては男の剣を砕きその勢いは止まらず、いやテツには止められずそのまま男の肩までいき……胴体をまるでバターのようになり裂いた。



## 七

肉を削ぎ落とす感触、骨を砕く音、目の前の男の顔が戦う表情から苦痛で泣き叫ぶ顔に変わる瞬間……テツは一度振った剣を止められなかった、魔法の勢いもあつたが何より怖く加減を忘れ全力で振り抜いてしまう。

肩から腹にかけて鎖骨、肋骨を砕かれ男は自分の腹から出てくる臓器や血潮を両手で受け止め膝から崩れた、口は閉じれずに泡を吹き出し体が痙攣していく、やがて眼球が上を向き白眼になり男はようやく苦痛から解放された。

「ああ……エリオ俺……ああ」

気づけば両手は鮮血に染まり顔も返り血で半分は赤い、偶然だった。たまたまの勝利、魔法を使い恐怖で剣を振り抜いただけだったのにテツは人を殺してしまう、まるで敗者のようにテツも膝を崩し自らの手で葬った男の前で声にならない声を漏らしていく。

「ウツッ！！ オツ……エエ」

強烈な吐き気が込み上がりそのまま顔を地面に向けて胃袋の中身を吐き出す、吐いている最中は最悪の気分になる、口の中は気持ちの悪い味が広がり喉を液体が通り感触に寒気すらした。

全て出して口の中に残った液を吐き目頭に浮かぶ涙を溢さない目蓋を力強く閉じて落ち着く、しかし人を殺した罪悪感の重りのようにテツを鎖で繋いで離さなく立ち上がれない。

「テツ！！ 立て！！」

汗と涙で酷くなった顔を上げてエリオを見ると戦っていた、槍のりしちをいかした一突きで敵の胴体を貫き電流を流している、敵は一人ではない何人もがベルカの壁を突破してきた……そう気づいた時にテツの顔は跳ね上げられた。

最初は何をされたかわからなかったが顎の痛みと微かに見えた男が蹴り抜いた脚を上げるのでわかる、鼻から血を噴き出しテツは大の字に倒れ蹴られた顎の痛みと衝撃で景色が歪んで見える。

「俺とそう変わらない奴が何で学生服なんてきてる」

汗と泥まみれのシャツに血だらけのズボンを履いた中年男が手に持つ短剣を向け近づいてくる、口の中は鉄の味で中年男の姿はグニャグニャと形を崩し平衡感覚すら失っているテツが起き上がる。

膝に手をつきなんとか立ち上がると剣の魔法を発動……と同時に顔を殴られ体ごと宙に投げ出された、もう言葉すら出なくなり地面を転がり壁にぶつかりようやくやく止まる、聞こえるのはエリオの焦りの声。

「おいテツ！！　くそ、囲まれてるぞ！！　なんでこんなに突破されてんだよ！！」

次々に援軍がきて10人にまで膨れ上がる、ボロボロにされたテツと恐怖で矛先を震わすエリオ、もはや戦闘とは呼べなくなっていく、これから行われるのは一方的な虐殺　テツは壁の石段を掴み立ち上がる、今にも漏らしそうなエリオに向かい歩を進めるがすぐ転んでしまう。

それでも何度でも立ち上がり無様に転ぶ様は他の傭兵の笑いを誘う、最後は這いながらようやくエリオの足首を掴んだその時に。

大蛇が地を這う、雑草や植物を切り裂き傭兵達の足元を這い回り不気味な音を鳴らし……獲物を食らう、エリオとテツの目の前にいた傭兵の片足が千切れ絶叫で幕は上がる、すぐ近くにいた傭兵の体は大蛇は巻き付き言葉を言わせないまま喉を切り裂く。

突然の奇襲　傭兵達は辺りを見渡すと木の上から影が舞い降りる、腰まである銀髪を泳がせ二人の前に降り立つ、手には剣を持つが形が異様だった。

刀身はなくワイヤーが伸びている、ワイヤーの先を辿ると傭兵達の足元に続き刃が備わりそれこそが大蛇の正体だと気づいた時には傭兵がまた一人体の一部を切り裂かれ赤ん坊のように泣き散らす。

「困んで一斉にいくぞ!!」

その策は間違っていた、一人に対し困んで一斉に攻撃を仕掛けるのは必勝の策だが少女……フェル・ランカスターの手に持つ武器は特別、地に撒いた刃つきのワイヤーを手繰り寄せるように振り抜くと剣の結界が出来る。

一度全ての刃を空中に浮かせると数秒時間が停止したように傭兵達の目が上に向く、フェルが体ごと地面に剣を振り抜くと雨が降る、剣の雨と変わった攻撃は容赦なく傭兵の体を貫き大蛇が人間を食らうように喰い殺した。

「フェル・ランカ、ウェツ!!!」

人間の死臭と手足が散乱する光景にエリオもテツと同じく吐いてしまふ、眉一つ動かさず人形のように整った大きな瞳と小さな唇を動かさずフェルは剣を元の形に戻す、ワイヤーが剣に戻っていき鉄と刃が噛み合い刀身の形になりバスターソードに戻る。

倒れているテツに駆けよると鼻と口から血を流し意識が朦朧としていてフェルが首を持ち上げ呼吸を何とか整えようとした時に現れる。

「蛇腹剣か、剣を鞭のように伸ばし中距離遠距離の攻撃を得意とする」と聞いたか事はあるが実物は初めて見たな」

全身を鎧で包み重装甲の敵、おそらく魔王軍の隊長クラスである敵が現れる、背中から抜く大剣は男の身の丈と同じ2メートルはあり大男が扱うに相応しい。

小さな溜め息を漏らしフェルは蛇腹剣を軽く振り鞭のような一撃を男にぶつけるが金属音と共に火花を散らし弾かれてしまふ。

「面白い武器だが装甲を貫くには攻撃力に乏しいな、まだ若いから見逃そうと遠くから見ているら……悪魔のような子供だな、魔王様の部下として見逃せない」

重装甲に似合わず男の動きは速く真つ直ぐフェルに弾丸のように飛び出していく、巨大な鉄の塊の剣を有無言わず振り抜くと風切り音が耳に響き目の前の空間が弾けるようだった。

手ごたえは無く舌打ちを鳴らし男は再び腰の位置に大剣を構え、テツの襟を掴み後方に離脱したフェルを睨む、兜の下から目が合った瞬間に全身の毛が逆立ち男は油断を消しさる、子供と思うな化け物と思えと。

「……」

睨み殺すように視線を投げつけてくる男に対してフェルは涼しげな顔で無言、男の言う通り蛇腹剣ではあの装甲は貫けず探す、鎧の隅々まで見てフェルは探し当てる装甲が届いてない個所を。

後は待つだけ、男が自分の装甲を信じ無防備に突っ込んでくるのを……そしてフェルの思惑通りに男は走り出す、一回目と同じく体の前に出し大剣を横から薙ぎ払う形だ、フェルは蛇腹剣の刀身を伸ばし地を這わせる。

「所詮子供だな、何度同じ事を　グッ!!」

強烈な痛みと共に大剣を落としてしまう、握力には自信がある男はありえないと思いきや手元を見ると両手の親指が根元から綺麗に無くなっている、両手を顔の目の前で見たわずか数秒で男の運命が決まってしまう。

槍のように鋭く矢のように速くフェルは懐に潜り込み針の穴程度の隙間に滑り込ませた、刀身を戻し兜と首の隙間に突き入れ一突きにて勝負を決めた、刀身を勢いよく抜くと切っ先から血が垂れ男は倒れる。

「すげえフェル……おいテツ見たかよ今の神技!!　おいテツ、おい起きろ!!」

何度も頭を揺ら頬を叩くが光を失った目で開けたままの口から涎を垂らしテツは返事をしない　テツの初の実戦は散々な物になり、いかに自分が今まで甘い世界で生きてきたのかと痛感する結果となった。

## 外伝第一章

青年の名はユウヤ。

年齢20歳。

職業掃除屋、またの名前は殺し屋。

ユウヤは一仕事終えて雨に中を帰っていくはずだった、体を包むような黒いロングコートが仕事先でのトラブルで赤く染まっているが雨で流され丁度いい、路地裏を曲がり更に暗い路地へと進み追手を振り切る。

今回の仕事の相手はまずかった、いつもの数倍の報酬に目が眩み装備も防弾チョッキに使い慣れた銃と腰に刃渡り40センチのナイフにしては大き過ぎる得物を腰に備え準備万端だったはず……ある倉庫で取引がありそこに組織の頭がくる。

簡単な内容だった、倉庫に潜り込む依頼主が用意したライフルを回収して狙撃 この世界でもう5年以上飯を食べてるユウヤには失敗する要素はない、しかし狙撃するには倉庫内と近過ぎるのが難点だが報酬を目の前に頷くしかなかった。

「……ッ」

鉄骨の上に寝そべり腕のブレを極力無くし狙撃体制に入り息を殺す、



黒髪に黒い瞳と日本人特有の外見は闇に溶け込み存在すらも消しさら、遠距離ではなく中距離を想定されたライフルは連発式になり一撃で決めなくていいが今回ばかりは一撃で決めないと命に関わる。やがて倉庫前に一台の車が止まり見るだけで柄の悪さが滲みでるような連中が下りてきた、最後に出てきた老人が杖をつきながら部下に支えられ近づいてくる。

「ふっ……ッ」

呼吸を止めて神経をスコープの中の世界と指先に集めていく、胸の鼓動を消すように全身の体温を落とし感情すらも消し去りユウヤは一本の指を動かす、第二関節を曲げて絞りこむように引き金に力を入れると。

「ニャ〜」

猫の泣き声……神の悪戯かいつものまにかユウヤの後ろにきていた猫がなつくように脚に体を擦りつけて鳴いた、この時ばかりは表情が少ないユウヤも背中の中の寒気で顔を崩してしまふ、気づくと下からは無数の弾丸が駆けあがってきて鉄骨から火花が出ていく。

「クソッ!」

弾丸の雨の中鉄骨を走り抜け2階の窓からガラスを突き破り雨が降る中のコンクリートに体を落とす、受け身に成功するが全身が悲鳴を上げている、気にしてる余裕はないと振り返りライフルを連射しながら逃げる。

倉庫外の遮蔽物に身を隠しながらライフルで一人づつ確実に殺していくが相手の数に対してユウヤは一人と少しづつ囲まれていく、銃器を持ったチンピラ風の男やスーツにマシンガンの男がジリジリ囲んでくる、最悪な事にライフルの残弾もつき懐から一丁の銃を取り出す。

「ヤバイ、くそどうする!!」

相棒であるベレッタM92Fの標準を合わせまた一人、隙間を見つけては走り抜け路地裏に迷い込む、そこで脚から血が垂れているのに気付き舌打ちを鳴らし脚をかばいながら走っていく、そして曲がり角を通り抜けた瞬間に……ユウヤの額から血が貰いた。

鉄パイプで見事に脳を揺らせ意識が遠のいていく、相棒の銃は地面に転がり殴りかかってきた敵が勢いよく蹴り飛ばし闇の中へ 遠のく意識の中で最後に見た光景は老人が杖をつきながらやってきて。

「殺せ」

目の前で銃口から火が吹く光景がハッキリと見えユウヤは報酬に目が眩んだ過去の自分を恨んだ。

銃弾が眉間を突き破り骨を砕き脳を貫通し後頭部から抜けていく。全ての感触や痛みが伝わり体の温度が下がっていくのがわかる、もう意識も無くなりかけ痛みで悲鳴を上げたいのに声すら出せない、薄暗い路地裏で地面に頬をつけてユウヤの人生は泥とゴミに塗れた場所で……

「ッ!!」

勢いよく起き上がると額から垂れる汗で目が染みだし擦る、眉間に手を重ねるが傷らしき傷もなく安心してしまう、体を両手で何回も触り確かめるが服装は変わらず黒のロングコートに黒のズボンと腰にはナイフと確認し後に周辺を見渡してユウヤは啞然としてしまう。まるでジャングルのような森にユウヤは樹木を背に倒れていた、数

分前まで路地裏で頭から血を流しながら倒れていたはずなのに考えるが……どうしてもわからない。

身売りにでもされたならばこんなジャングルに捨てるはずもなく、そもそも殺し屋を捕まえ売るなんて馬鹿げている、普通なら拷問、そもそも頭を撃ち抜かれたじゃないか……ユウヤはますます混乱する。

「ここはどこだ」

地面の雑草は膝まで伸び見た事のない植物が視界いっぱい広がる、止まっても仕方ないので移動するがひたすらに樹木や植物が邪魔をし腰から抜いたナイフで切りながら進んでいく。

やがて暑さで喉が渴き生唾を飲むが気休めにもなりはしない、ユウヤが殺し屋として学んだ生きる術はここでは何の役に立ってはくれない。

「ハアハアここは天国……いや地獄か」

暑さで苛立ちが重なり目の前の枝を思いっきり切り進むと突然植物もない雑草もない場所に出る、そこには二人の男が馬に荷物を縛りつけていてユウヤに気づくと腰に刺してあつた剣を抜く。

ようやく人に出会ったと思えば薄汚い布のシャツに一人はバンダナまで巻いている、一目見てまともに話ができる人種じゃないと気づ

きユウヤも身構えた。

「一応言っとく、あんたらと揉める気はない」

「兄ちゃん持つてる物全部置いてけば見逃してやる」

一人が喋ってる間にもう一人が気配を消して横からの奇襲、連携はとれているがユウヤに襲いかかった瞬間に剣を振り上げた隙をつかれ懐に潜られ腹を貫かれた、男はユウヤの肩を掴みながら口を何回か開け白眼を向いて倒れてしまう。

腹から抜いたナイフを残った男に見せつけるよに突きだすと男は震えだし剣を落とし両手を上げる、慎重に近づき落ちた剣を蹴り雑草の中へやると一息つく。

「質問がある、答えてもらおう」

「わわわかったから首からナイフどけてくれ!!」

男の両手を頭の後ろに回し膝をつかせようやくユウヤはまともな会話が出来ると思いナイフを下ろす。

「ここは日本のどこだ」

「にほ……なんだって？」

「日本だ！！ 近くに街はあるか、携帯を出せ少し借りるぞ」

男の体をまさぐるが携帯どころか金さえも出てこない、皮袋の中身は金色の金貨が詰まっているがユウヤが欲しいのは連絡手段が出来る携帯電話……どこを探してもない、舌打ちを鳴らし男の髪を掴み上げ顔を近付ける。

「おい何で電話もないんだ、それにこの金貨はなんだ」

「いててて！！ でんわってなんだよ、それにその金貨は金だよ金！！ 見てわかんねえのか」

溜息を一つ漏らし男を蹴り飛ばして皮袋だけもらっていく、馬にまたがると男を一度見下ろし手綱を握り走りだす、後ろからわめき声が聞こえたが気にも止めず走り抜ける、道は人が通れるほどには整備されており障害物はなく風のように疾走していく。

走っていくと街らしき物が見えてきてユウヤようやく安心できた、街に行けば電話の一つや二つ と考え近づいていくとユウヤが知っている街の風景ではなかった。

そもそも移動手段が馬である事の時点で気付くべきだった、そこは街と呼べる場所ではなく村……家は木造とレンガで作られ水車が回っているほどだ、そして何より人種の違い、茶色から始まり青金紫とまずここが日本でない事がわかる。

馬を下りて村に入るとユウヤは目立つ、全身黒の服装は昼間の田舎町では場違いで何よりもユウヤ意外に黒髪はいなく村人の視線が背中に突き刺さるが気にしている場合じゃない。

「電話、せめて日本に繋げる電話さえあれば」

「止まれ」

街に入り数分で呼び止められ振り返ると全身鎧で武装した男がいて先程の野盗とは違い強いとすぐわかる、村の警備だと気づくが警備員にしては装備も武器も強力な物を揃えている、片手には巨大な槍を持ち矛先が歪曲に曲がりユウヤは初めてみる武器だった。

「お前が乗ってきた馬に村から奪われた食糧があった、どーゆ意味かわかるな」

今日は本当に運がないとつい額を抑え空を仰いでしまう、もはやい

い訳できる状況じゃないとわかり素直に謝った所で許す気配がない、村人は慣れたように家に入り気づけばユウヤと鎧の男だけになり微かな風が通り抜け空気でわかる。

鎧の男は間違いなくユウヤを許す所か殺す気だとわかり渋々腰からナイフを抜く、こうなってしまうばいい訳を自分から捨てるのと同じでユウヤは覚悟を決めた。

「盗賊め、覚悟しろ!!」

一歩目を大きく飛ぶように踏む込む大地を脚でしっかり掴み溜めた力を解放　槍は空気を突き破り鎧の男が授けてくれた加速と力で獲物に喰らいついていく、対するユウヤには回避以外の選択肢はない、刃渡り40程度のナイフで受け止めたら間違いなく折られ胴体を貫かれてしまう。

しかし避けたとて槍の間合いは縮まらず二発目で仕留められる、ならばいくしかない、身を低くし槍に真っ向から顔突き出して1秒にも満たない瞬間ユウヤは槍を見切る。

類の皮一枚持つていかれ血を流すがその代償は大きく間合いは零となる、まずは鎧男の片腕を背中に回しナイフを兜の隙間に入れて喉元に冷たい刃を当てて声を低くし脅すように語りかけた。

「あの馬はこの近くの盗賊から奪ってきた物だ、俺はこの村に初めてくる」



「グツ嘘をつくな!!」

「そもそも俺が盗んだならなぜ戻ってくる、そんな馬鹿がこうしてお前の後ろをとれると思うか」

理屈を並べるが鎧男は断固として拒否し無理矢理拘束を解こうとしユウヤは仕方ないと腕を捻り上げて容赦なく腕を折ろうとした時に

「待て!! その男の話を聞いてやれ」

男口調だが透き通るような声に見とれてしまうほどの銀髪は褐色の肌によく似合い真っ赤な瞳がユウヤを捕えていた、鉄の胸当てをした女が後ろに数人の部下を引き連れユウヤの前に現れる。

ユウヤはより一層警戒し喉元に突きつけたナイフを更に深く当て血が滲みでてくる、褐色の女は武器を捨てて近づいてくるが警戒は解かずにジリジリと距離を詰めていく。

「お前がただの盗賊でない事は動きでわかった、とりあえず部下を離してくれ」

「……………」

勢いよく鎧男を突き飛ばすとナイフを前に突き出したユウヤを見て褐色の女は笑ってしまっ、これほどまでに臆病な男は初めて見たと言い握手をするつもりで手を出してきた。

「私はイリアだ、どうだこの先にある料理が美味しい店で話しを聞かせてくれないか」

ムスツとしたユウヤに対しイリアは綺麗に整った笑顔で近づいていき、ようやくユウヤはナイフを腰に収め深い溜息をついて腰に手を当てた、今の現状を知るには現地の人間に話を聞くのが近道だと自分を納得させる。

1000年前……人類は科学を極め他の星までその勢力を伸ばしていた、人の欲は深く宇宙では飽き足らず踏み込んではない領域までに手を出してしまつた。

タ次元世界への干渉、未来過去ではなく他の世界への扉を作り狂つた科学者達は歓喜していたが、扉を開いてみるとそこは地獄だった、神話や絵本でしか見た事がない竜やドワーフやエルフ　扉を開けた瞬間に襲いかかつてこられ次々に喰われていく。

人類と竜が率いた軍勢との戦いが始まり各国は次々に竜の炎に燃やされていく、人類の兵器は空を自在に駆ける竜に当たるが防壁で阻まれ科学を極めたはずの人類は自らの欲が招いた結果で半数が死滅する、エルフやドワーフには勝てても竜だけには勝てない。

竜は自分達の世界に干渉した者を滅ぼし役目を終えると眠りにつく、再び人類が他世界への扉を作る時に竜は怒りと共に現れるだろう……

「こんな所だユウヤ」

テーブルには食欲を誘う匂いと肉汁が皿いっぱい広がる肉が盛り  
れ野菜までもが大量、イリアは喉を鳴らし話終わると勢いよくかぶ  
りつき肉汁を正面にいたユウヤに飛ばすが本人は気にもせず顔を落  
とし眉間にシワを寄せる。

信じるというのが無理な話、どこかの出来の悪い三流映画の脚本だと  
思い溜息を漏らす、自分の事情を説明するよイリアは子供のように  
目を輝かせ美しい外見の割に幼さがまだ残っていた。

「つまり他世界から無理矢理こちらに引っ張ってこられたわけかユ  
ウヤは、ふがっ」

「らしいな、おい少しは上品に喰えないのか」

奥歯で肉を噛み勢いよく引っ張り肉汁を出して肉を喰らい尽くす、  
下品だがイリアの美貌がおかげで見ている気持のいい食べっぷりに  
見えるが今のユウヤには飛んでくる肉汁すら気にしてる余裕もない。

今の話が本当ならば元の世界に帰る手段は見つかりそうにない、こ  
ちらにきたきっかけが死だったからには死ぬしかないがリスクが大  
き過ぎる…… 答えのでない議論を頭の中でしているとイリアは全て

を食べ終えてゲップを出しコップを持ち水を胃に流し込む。

「どうだユウヤ私達に協力しないか？ そうすれば当分の世話をし  
てやる」

「お前ら自警団の集まりにか、正義の味方にもなるつもりか」

「今ベルカという国家が世界を支配している、竜がいなくなって残  
った人類は争い今に至るといわけだ」

咳払いを一つ鳴らし胸に片手を乗せて自慢げに語る、どこかの教育  
者になったつもりなのかイリアは瞳を閉じて堂々と口を開く。

「ベルカの後ろには教団という宗教組織がありそいつらが民を苦し  
めているんだ、最近では奴隷商売とかふざけた商法までやっている  
んだぞ、許せるか!!」

「つまりその教団とかいう連中を倒すために俺の力を利用か、クク  
ッ笑ってしまう」

元の世界でも殺したが他の世界にまできても殺し屋家業を続ける自  
分に笑ってしまう、ユウヤは古武術の家に生まれ幼い頃から殺人と  
も言える技術を叩き込まれた、両親が死ぬと道場にはユウヤ一人し

が残らず門下生なぞくるわけがなく土地も道場も売り払いユウヤは社会に出た。

しかし生まれて武術にしか時間を使ってないユウヤには社会はあまりにも遠かった、安いボロアパートで一人暮らし毎日を空しく過ごしていたある日……路地裏で喧嘩を売られ相手は3人、人生の全てを武術を費やしたユウヤは素人3人を瞬く間な倒すと男と出会う。

男は言った「その力存分に使いたくはないか」と、そこからは砂時計の中の砂が落ちるようにユウヤは裏社会に染まっていく、学んだ殺人術は絶大な威力を発揮しユウヤは殺しに酔いしれた。

「おい何ニヤニヤしてるんだ気持ちの悪い奴め」

「うつろさい!」

「まあいい出るぞ、入団試験だ」

外に出てしばらく歩くと森の中までいく、鎧を脱いで汗を拭う男達が何人か座り喋っているがユウヤを見て表情を硬くし身構える、イリアが前に出て男達を止めると声を高らかに言う。

「おいこいつに勝てる奴いるか? こいつがお前達なんて子供の遊びと言ったぞ」



#### 四

一人の男がイリアの声に反応し立ち上がると無言でユウヤの前に立つ、推定190はあるう大男は青いジャケットに黒のダボツとしたズボンで動きやすい姿で地面に転がっていた木刀二本を拾い上げユウヤに差し出す。

受け取ったユウヤは距離をとり構える、両手で木刀を握り力を抜き垂らし構えと呼べる物なのかは異世界の住民達にはわからない、ユウヤが幼い頃から叩きこまれた剣術……剣道とは遠く離れており真剣を持つ事が想定される構え。

「こいつはハンク、まあ見たままの力任せの奴だが強いぞ」

少し離れた所で腕組みをしているイリアに言われずともわかる、短めに剃りあげた短髪を後ろに流し顔の筋肉で目が小さくなっている無骨な顔、服の上からでもわかる強大な筋力　これだけ揃っている弱いわけがない、片手で持った木刀が小さく見えてくるほどに。

無造作に振り上げた木刀を振り上げユウヤに向かい叩きつけると地面が一瞬盛り上がり弾け飛ぶ、予備動作が大きく軽々避けたがこの光景を見てしまえば脅えてしまうがユウヤは思い出す。

素手の勝負なら体格差は大きいが武器を持った状態なら体格差など無いに等しい、祖父の教えであり背丈が170少ししか成長しなかったユウヤには心強い言葉だった。



「ほう小僧まだやるか」

「もう勝った気でいるのかおっさん、俺はまだどこも怪我してないぞ」

力任せに振り回す木刀を祖父から習った体捌きで避け続けていき見る、ハンクの癖や仕草を観察して勝負の時を待つ、左から叩き落として返しの切り上げ……最後に大振りの横の薙ぎ払いが終わるとコウヤは動く。

今まで垂らしていた木刀に力を込めて地面を這うようにハンクの懐に潜り込む、圧倒的リーチの差は隙をつき無くし剣速の速さなら比べるまでもない、木刀は下段から流れるように這い上がり獲物に喰らいついたのは一瞬。

ハンクの胴を抜くようにコウヤは腹を叩きつけるのではなく斬るイメージで切り落としハンクの巨体を通過し互いに背中合わせになる。

「ぬっ　ぐあ」

どんなに筋肉で武装したところで鍛えられない個所があり、そこをつかれたハンクは口から唾が混じった液体を垂らし地面に倒れる、イリアの指示で部下にハンクを運ばせた後に二人だけになると乾いた拍手の音が響く。

ユウヤは地面に腰を下ろし緊張が途切れたのか深い溜息をつく、イリアはまだ拍手を続け短めに切り揃えられた銀髪を揺らして喜んでいる。

「凄いぞユウヤー！　なんだ今の技は、私にも出来るか？」

「俺が元いた世界の剣術だ、イリアお前には出来たとしても時間がかかる」

「ぬ、そうか……まあ入団おめでとう、ハンクなら丈夫だから明日にはケロツとしてるだろう」

いい加減暑いのでロングコートを脱ぐとイリアが興味を持ち開いたり伸ばしたりと遊んでいる、こうしても見る子供、何人もの屈強な部下を率いて戦場に向くのかと疑問に思えてしまう。

イリアが突然ピタリと止まると顔を近付け鼻先に指を指してきた。

「言い忘れていた、私達の部隊の名前は【アベンジ】意味は逆襲！　どうだカッコいいだろ」

「はあ何でもいいから腕のいい鍛冶屋とかないか？　銃は無理だと  
して揃えてもらいたい武器がある」

その日ようやくユウヤはこの世界にきて初めて眠りについた、もしかしたら次目覚めた時には元の世界に戻っているんじゃないかと淡い幻想を抱くが次に目覚めた時にその幻想に笑ってしまふ。

そもそも元の世界に何の未練もないが不思議と違う世界にきてしまえば元いた場所が愛しくなる、後にユウヤはこの世界を揺るがすほどの人物になるが今は安心しきつた赤ん坊のように眠りにつく。

### 第三章

恐怖と悔しさが同時にくる感覚は生まれて初めての体験だった、人殺しという烙印を押され初めて殺した相手が夢に出てきて何度も夜中に悲鳴と共に目を覚ます。

そして悔しさ……初の実戦でなにも出来ず殴られ殺されかけたという事実は恐怖とは別に涙が出るほどに悔しい、テツはどこかで勘違いしていた、二ノに選ばれ異世界にきてどこかで自分は勇者になつたような気分浸っていた。

自分は強くなつたんじゃない強くなつた気でいただけだ、それに気付きテツは自分の愚かさに腹が立ち駆けだしていく。

「シッ」

満月の夜に周辺には草しかない平原でテツはシャドーボクシングを繰り返す、情けない自分を震い立たせるように汗を流し無我夢中で拳を突き出す……途中で腕が止まってしまふ。

握っていた拳を開き顔を隠すように重ね膝をつき数秒経過すると何年ぶりだろうかテツがこんなにも熱く悲しい涙を流したのは。

「……………うう…ああ！！俺何やってんだよ、33にもなつて女一人とも手を繋いだ事すらないなんてな、ハハハッ……………ああ……………ぐうううっ」

誰もいないが声を押し殺すように泣く、あの時ああすればあの時…  
…とさえテツはようやく人生と初めて向き合った気がした。

死ぬのが怖かった。

逃げる自分が怖かった。

全部自分の事しか考えてない自分が怖かった

翌日テツは教室の扉を開けていつもの挨拶するが返事なしともはやいじめじゃないかと思う、席に着くとまずやる事がある、いつもチラチラこちらを見てくる銀髪少女への言葉だ。

「フェルありがとな、お前に命救われたわ」

返事はないが銀髪の隙間から見えた小さな耳が真っ赤に染まっている、こんな可愛い少女が表情一つ変えず何人も人間を殺すのだからここは本当にテツの知らない世界なんだろうと再確認すると。

「…………怪我平気でしたか」

思わず席を勢いよく立ち上がり周囲の注目を集めたがテツには気にも出来ない、喋った確かに今フェルの声が…………正確には聞いた事はないから本人かわからないが聞こえた、あの超絶無口美少女が口を開きテツに語りかけてきた状況に焦る。

「どう動く、ここは話題を伸ばして一発笑えるギャグをいい」

「あのまだどこが悪いんですか？」

確かに前方から聞こえフェル本人と確認すると飛び上がるほどに嬉

しくなりつついつい口走ってしまっ、中学生が女子に興味を持ってほしく馬鹿をやったりする黒歴史とも言われる事を。

「男はワイン女はグラス、この意味がわかるかい」

「……」

「男は女に愛を注ぐからさ!!」

フェルは無言に戻り捕えられかけたコミュニケーションはテツ自らが投げ出してしまっ、こーゆ事を言った場合無視が一番ダメージが大きく恥ずかしさで拳を震わせていると助け舟が隣からくる。

「おおなるほどワインとグラスをかけたのか男と女の関係もそこに」

「やめてくれ!! ポケを説明するのだけは勘弁してくれ二ノ!!」

睡眠と涙というのは便利で昨晚の悲しみや悔しさをたった数時間で和らいでくれた、いきなり異世界に連れ込まれ戦いに巻き込まれ殺し合いの中でテツはギリギリまだ理性を保っていられる、いつ心が折れるかわからないがテツはもう逃げたくはなかった。

33年とい時間現実から目を背けて生きてきたがそんな自分を消し

去りたい、今すぐには無理だろうが少しづつでいいからとテツは努力を試みる事に決める。



午後の実戦授業は偶然が続いた、エリオが意気揚々と二ノに勝負を挑みテツはこの前の金髪を倒したせいも誰か誰も寄りつかなく一人で素振りをする。

そしてもう一人……フェルも一人取り残され立っていると残された者同士のテツと目が合う、テツが苦し紛れの笑顔を作り片手を上げると勘違いされたらしく頭を下げられ木刀を構えてきた。

偶然だった、たまたま二人が近場において目が合っただけで対峙する事になりテツは頭をかきながら困る、いくらなんでも小さな女の子に木刀を叩きつけるのはいい気分はしない。

「いきます」

見た目の割にはハッキリと宣言し向かってくる、走るのではなく飛ぶ　空中を駆けるように勢いよく小さな体を躍らせ一回転させた後にくる攻撃はテツの目の前の空間が歪んで見えるほどに鋭い、ボクシングで鍛えた反射神経で避けるが鼻先の皮一枚から血が出て緊張で固まる。

「目がいいんですね、それに瞬発力もあり剣術には向いていますね」

「そりゃどうも、聞きたかったんだが何で授業中に俺の方に……だ

「ああー!!」

次は横からの薙ぎ払いを受け止めると腕が痺れフェルのどこにこんな怪力があるのかと疑っていると次がくる、上からの叩き落としをスウエーで最低限の動きで避けるとフェルの動きが止まり猫のように目を大きくし首を傾げてしまう。

反撃したいがもし自分から手を出そうものなら瞬く間に地面に転がり苦痛に悶えるとテツも素人ながらにわかる、しかし攻めない限り勝利はなく……いつのまにかフェルが小さな女の子ではなく強敵になっていく。

「貴方が得意とする拳で戦う戦法を見せてもらえませんか」

どうやらフェルはあまり無駄な事を喋るのが嫌いらしく淡々と必要な事だけ語る、確かに剣術では勝負にならなくテツは木刀を捨てると片腕を垂らしもう片方を顔の横に持つていく、リーチの差はやはりフェルに分があるがスピードで攪乱していき軽快なステップで動き回る。

「先に言っとくが手加減なしで全力でいくぞ、お前に手を抜いてたら危ないからな」

大人げないとは思わない、この世界で生きていく以上覚悟を決めないと殺されてしまうという事を初の実戦で学びテツは握った拳をフ

エルに放りこむ……見事の直撃、反応すら出来なかったフェルは鼻から血を垂らし痛みより驚きの表情で鼻血を袖で拭う。

牽制の軽いジャブのつもりが体格差のせいか思った以上にダメージを与えテツは驚くが油断はしない、距離をとるとフェルの構えは変わり顔の横に木刀を持っていき半身に構える。

明らかにテツの動きの合わせ動くつもりだとわかるとスピードのギアを一段階上げていく、フェルの回りを脚を使い前後ろ左右と回り続けるがフェルは微動だにしない。

「……ッ……！」

フェルが焦り目でテツの動きを追ってくる時こそ狙いだった、目で追えなくなれば必ず首を動かし顔が動く、しかも木刀を持っている以上体も動いてしまい必ず出来る隙にテツは容赦なく左で刺していく。

二発目の攻撃はフェルの額に叩き込まれ顔が後ろに傾く、脳を揺らした感触が手に感じ一気に叩みかける、体を左右に振り体重と加速を拳に乗せてのボディ！！フェルの体は一瞬地面を離れ後方に飛んでいく。

「もらった！！」

勝利を確信し利き手の右を大きく振り被り前に出る、しかし勝利を

確信した時に逆転……よくある漫画とかにある状況だがテツはまさに漫画の世界のような体験をした。

横の軌道を描いたフックはフェルの顔に当たる直前で弾き飛ばされた、木刀の柄の底で高速で飛来してくる拳を叩き上げそのまま木刀を半回転し　用いたのは突き、切っ先をテツの腹に突き刺すように突く。

テツが痛みを感じた頃には既に体は宙に放り出され自分の出す胃液が青空に散乱していた、地面に倒れ薄れゆく意識の中で聞きたい事を口に出す。

「ゲツ……あんだけ喰らって反撃するか普通ッ！！」

「私も後一発で倒れてたでしょう、いい勉強になりました」

ペコリと頭を下げる少女に避ける事すら困難なボクサーの拳を叩き落とす天才としか言いようがない才覚を感じテツは意識を手放し苦痛から解放されていく。

最後に頭に浮かんだのは　楽しかったな。

壁にはよくわからない模様があり、一か所壁の大きさそのままの鏡がある、天井にはシャンデリアが数個吊るされ目に入る家具はどれも見た事もない、全体的に薄茶色に染められた部屋……ではなくどこかの王室かと思うような場所でテツは目覚める。

寝かされていたベッドも部屋同様に広くゲームで出てきそうなキングサイズだった、起き上がろうとすると腹の強烈な痛みで動きが止まり痛みの先を見ると白い布が被せてあり冷たい。

丁度シッ普を張られた時の感触と似ていて心地いい、起き上がろうとした体をベッドに戻し女神が空を駆けている絵が描かれている天井を見て一息つく。

「気づきましたか」

横に小さく座っているフェルを発見するとテツの思考は一瞬止まる、おでこには白い布が貼ってありなんだが普段とのギャップに笑ってしまつが注目すべき場所はそこではない。

銀髪美少女は何を思ったのか自分の鼻の穴にティッシュを詰め込み真顔でテツを心配するように頬を赤く染めていた。

「ブハッ！！ ギャハハハハハ！！ フェルなんだその顔あゝ」

「うっうっうるさいです!! 鼻血が止まらないから仕方なくですよ!!」

この時初めてフェルの人間らしい顔を見た気がしテツは更に爆笑してしまう、鼻からティッシュを垂らした美少女が真剣に照れたり怒ったりする姿は想像を遙かに越える面白さだった、確かにティッシュは赤くなりまだ鼻血が止まらない様子に気づきフェルに後ろを向かせる。

「ほれ顔を上に向けろ……叩くぞ」

「え!!… なにを……首を、ヒヤっ!!… ふがっ!!」

首を軽く叩くとフェルは焦り全身に力が入ってしまったのだろうか、鼻に詰めていたティッシュが勢いよく飛び出し豪華に作られた壁に当たりテツは一瞬止まった後に腹を抱えて爆笑してしまう。

「ウハッ!! 腹痛え!! ギヤハハッ腹痛い、笑うと腹が オオオオオ!!」

「あの話をしているんですか? 結構真面目な話です」

「ギャハハハハ！！ その鼻血を垂らした顔で真面目な顔しないでくれ、オオオ腹痛い！！」

我慢の限界だったか笑い狂うテツの顎に拳を全力で叩きこむとベツドから吹き飛び家具に激突し殴った本人が一番驚いている。

「凄い貴方の真似をしてみたんですが、これは強力な武器になりませんね」

「ガツ……いやお前の怪力が凄いんだよ！！ もういいから話はなんだ」

殴った拳を隠すように後ろに回し少し照れた様子の後に真剣な顔になり一世一代の覚悟を決めてフェルは大きく深呼吸した後に言う、  
テツも真剣な顔になり無駄に緊張していく。

「あのお友達になってください！！」

「……」

「私の家です、じゃなくて！！」





「友達つてのは頼んでなるもんじゃないだろ？」

「うっ確かに……」

椅子に座り肩を落とすフェルの鼻の穴に強引にティッシュ詰め込み頭を数回叩くと視線を落とし落ち込んでいる、深い溜息をつきテツはなんだが自分が悪者になったような気分になり疑問を聞いてみる。

「はあくなんで俺なんだよ？ お前美人だし友達なんかいっぱい出来るだろ」

「……死んだ父の面影が重なるんです、こんな理由じゃ駄目ですか？」

「あのなあ、これから友達になる相手にそんな理由ないだろ」

上半身裸のままベッドから起き上がり痛む体で背伸びすると窓といつには大きすぎるガラス張りの扉を開けてテラスにいくと夕方の黄金色の光がテツを包む。

そこでフェルの家は豪邸どころか城だという事に気づく、庭は広く

サッカーの試合も出来そう。で城の門は重圧的で兵士が数人配置されている、とんでもない人物に気に入られたと思われ腰に手を当てて空を眺めていく。

「名門のお嬢様だから皆遠巻きに見て内気な性格もありクラスではいつも一人ぼっち、そこに俺がきて興味を持ったところか」

振り返ると夕暮れの光に反射した銀髪を揺らし人形のように整った顔で不安そうに見つめられるとどうも調子が狂ってしまふ、テツはガリガリと頭をかきながら眉を吊り上げて諦めたように言う、その言葉は親もいなくなり兄妹もない少女に希望の光を与える。

「わくたよ!! こんなおっさんがいいなんて言う物好きに付き合っ  
つてやらあ」

「本当ですか!! 本当に本当!! 今更嘘とか言うつと泣きますよ」

「だあああ!! ひつつくな!! おっさんがお前みたいな女の子とくつつくと世間に勘違いされんだよ」

フェルが両手を叩くと絵に描いたようなメイドが次々に部屋に入ってきてテーブルの上に御馳走が並べられていく、肉が綺麗に切り整えられた皿に食欲をそそる匂いが漂うスープ、バナナやブドウとフルーツもあり昼から何も食べてないテツは喉を鳴らし席に座り肉に

かぶりつく。

フェルはナイフとフォークを使い器用に肉を小さく切り口に運ぶという育ちのよさがでるが……テツはそんなものお構いなしに肉汁を飛ばし食ベスूपは何も使わず皿ごと持ち上げ飲む、ブドウに至っては皮も剥かずそのまま口に放り込み見ていたメイドが開いた口を閉じれなくしている。

「それでテツさん折角友達になれたので相談なんです、明日ピクニックに行きませんか？」

「明日学校だろうが、俺の外見みてピクニックって顔してるか？」

「ああ平気です二人分の休みは入れておきました、学園長はいい人ですね」

たまの休みもいいかと欠伸をしながら食後に爪楊枝変わりに細い肉についてた骨で歯の隙間を掃除する、フェルはよほど嬉しいのか両手を頬に乗せてニコニコしながらを見てくると最初に見たフェルの印象はもうテツの中から消えていた。

メイドさんに礼を言い立ち上がり帰りの支度をすると予想はしてたがまさかくるとは思わなかった展開にテツは動きを止めて振り返る、フェルの言葉にメイドは出口を塞ぎ不気味に笑う。

「今日は私の家に泊まってもらいます」

「なん……だと」

日は落ち深い闇に包まれていく。

## 四

元の世界の自分の部屋より大きい風呂に入り湯上りにデザートも食べ一人では大きすぎるベッドで寝た、これ以上ない贅沢をしテツは満足しここが戦いに溢れる戦乱の世界だという事すら忘れ熟睡する。

朝はメイドに起こされ見た事もない食べ物テーブルに並び一口食べれば口の中がとろけるように甘く、その日は朝から夢の続きを見ているような気分だった……昼までは。

「さあテツさんピクニックですよ」

「ああ、楽しいピクニックだよな」

連れてこられたのはスラム街、汚らしい服を着て物乞いする老人やナイフを舐めながらこちらを見てくる危ない人達の溜まり場。たまにフェルの美貌に近づいてくる輩がいるが昨日テツの真似ことが気にいったのか殴り飛ばし解決。

二人は学生服で目立ち路地裏を一本抜けるたびに柄の悪い連中のレベルも上がり、テツは恐怖してしまう、普通の悪人ならまだしも根子から悪人のような顔や目がどこかヘトリップしてるような連中になってきている。

「あの可愛いフェルちゃん、ピクニックって何するの」

「やだ誉めても何も出ませんよ」盗賊退治です」

「……え」

大通りに出ると薄紫の光とスモークが焚かれ怪しい雰囲気のスラム街中心に出た、先ほどよりも小奇麗な住民が歩いているがどう見ても一般人とは一線を引いている、腰には武器が携帯されどれも凶悪的な武器だ、ナイフから始まり剣……はては巨大な斧を背負う物もいる。

フェルは迷わず酒場の扉を開けるとつけられていた鈴の音が鳴り来店と同時に屈強な男達の視線が集まる、フェルを見て口笛を鳴らしながらニヤニヤする連中や舌打ちを鳴らす娼婦、席に着くと両手を組んでフェルの顔から余裕がなくなる。

「テツさん貴方に試験を与えます」

「え、はい、穩便なのでお願いします」

「学園長からの命令でもあるんですが私からもお願いします」

カウンターに指を立てて何かの注文するとマスターのやつれた中年

男が苦笑いしながら持つてきたのは牛乳……酒場で牛乳という組み合わせに他の客が吹き出すがフェルは気にも留めずに飲む、人生の道から外れたならず者達に囲まれた状況でテツはフェルの落ち着きが羨ましくなっていく。

「テツさん貴方に人を殺す事に慣れてもらいます」

「もう一度いいか、今なんつつた？」

「未だに初めて人を殺した事が頭から抜けず脅えていると聞きましたのでいい解決策を提案します……殺しまくってください、気にもならないくらいに殺してください」

目の前の美少女は鼻の下に牛乳をつけ愛らしい笑顔でとんでもない事を言い出す、フェルの提案は確かに言われてみればそうだが正気の沙汰とは思えずテツの顔が固まる、それはテツが人としてどこか壊れなければ出来ない事　大量殺人を意味していく。

今は魔王と戦争中であり道徳がどーのこーの言ってる場合ではないのはわかるが体が震えてしまっ、いくら覚悟を決めても体は恐怖に正直で指先が痙攣し嫌な汗が出てくる。

「やはりまだ無理みたいですね、私がきっかけを作りましょう……運がいい事にこの街の連中は魔王軍に媚を売る最低人種です、何人殺した所で問題はありません」

昨日まで見せていた年相応の可愛らしい表情はフェルにはもうなく腰に備えていた剣の刀身が伸びている、蛇腹剣はいつのまにか酒場の床に蛇のように伸ばされフェルが立ち上がり腕を上げると地面を張っていた蛇が獲物に喰らいついていく。

テーブルや椅子はもちろん客の大半は一瞬で餌食になり酒場は地獄絵図になっていく　この瞬間にフェルが言う楽しいピクニックが始まる。



## 五

片腕を切り落とされ泡を吹いて倒れる者や脚を切られ泣き叫ぶ者……酒場はフェルのたった一振りで大混乱になり回りが敵だらけになる、テツの座るテーブルに人の足が勢いよく飛んでくると動けない、両手をテーブルに握り拳のままにし動けなく凍りつくような無表情で蛇腹剣を再び振るフェルを見る。

一振りごとに犠牲者は増え続け出口に向かい逃げようとする者すら容赦なく背中から斬りつける、先ほど牛乳を運んできたマスターは壁にもたれ腹から赤い絵の具のような血を垂らしていた。

テツはテーブルから微動だにせずフェルを見上げ二ノ同様の匂いを感じる、殺人を気にもしなく呼吸するように殺すフェルに寒気を感じ……覚悟が足りなかった事に気づく。

「ッー！」

この世界で強くなる事は即ち殺す、それも何人何百何千という屍を積み上げた上に成り立つ強さなんだとフェルが教えてくれるようだった、普段テツは家でRPGをして敵を殺しまくりに経験値を稼ぐ作業をしている……ただそれをやればいいのだが簡単に割り切れるはずがない。

ふと牛乳が注がれた空っぱのグラスを見ると後ろから武器を持って襲いかかってくる敵が映る、このままだと確実に背中から斬られ殺されてしまう。

テツは心の中で願う　くるな、こなければ争う事もないんだと甘い幻想を願いながら一度目蓋を閉じて下唇を噛み腰にある剣に手をかけた。

「ちくしょうがあああああああああ！」

椅子を回転させた勢いで両手で振り上げた敵の腹を切り裂きテツは人生で二人目の命を奪う、不思議な事に一人目の時のように吐き気もショックも受けない自分が怖かった。

「テツさんまだまだ敵はいますよ！！　さあレッスン1です、迷わず殺してください」

テツに返事を返す余裕はなく次に襲いかかってきた敵の攻撃を避けて胴体を貫く、幸か不幸かテツは回避能力に長けている、元々体格とパワーに恵まれずアウトボクサーでカウンターパンチを得意とするテツのスタイルは剣を持たせると見事にハマリフェルの予想以上に成果を上げていく。

何も考えずにただ敵の攻撃だけを見てテツは動く、余計な事を考えていたら迷いが出て動きが鈍り隙がでる、頭を真っ白にしもつとも怖がっていた殺人に没頭している。

「これは凄いかもしれません」

フェルが初めて見る構えだった、剣を地面に垂らし軽やかにステツプで攻撃を避け有無を言わず相手の隙に剣を叩きこむ、時には相手と同時に動くがハンドスピードに圧倒的な差があり先の先を制しテツは殺しまくる。

酒場のジャズにも似たBGMに乗り踊るように殺す、次第に剣が腕の一部のように感じ始めたテツはジャブを出すように手首にスナツプを効かせ剣が鞭のような機動を描く。

防御を捨てた完全攻撃姿勢の構えは機動力を武器にし気づけば7人を血の海に沈めようやくテツは自分のした事に気づく。

「初めて見る構えですが見事です、さ次いきますよ」

「おい……ウオ オエ」

強烈な死臭で思い出したかのように吐く、酒場は赤いペンキをぶちまけたかのように全てが人の血……自分がやった事を思い出し吐き気が加速していく。

肩をすくめたフェルがテツの首根ツコを掴み上げて酒場を出て入り口の扉を固く閉める、酒場前は変わらず人が行ききし扉さえ開けられなければ何も問題無しとフェルとテツは歩きだす、口を拭いながらまだ肩が震えているテツに笑顔でフェルが言う。

「この街に盗賊の一味がいます、奴隷商売を生業としている奴らな  
んで退治します」

「ハアハア……糞！！ 最低なレッスンだな！！」

「レッスン2です、少し強い敵を倒しましょう」

死臭を全身に漂わせながらフェルの言うレッスンで更に街の奥に進  
んでいく。

## 六

細い路地裏を進んでいくと暗闇の中でもうつすらと見えてくる人影、壁にもたれるように倒れ苦痛の声や中には既に息をしてない者がいる、フェルは邪魔ともなれば蹴り飛ばし進んでいく。

腕を組んだ男達がジロジロ見てニヤつきフェルを見るが剥きだしの剣を見ると目を反らす、後ろからついていくテツさえも脅えてしまふ、殺気がなく隙だらけのように見えるが背筋を凍りつかせる気配……フェルは氷のようだった。

「つきました」

暗闇の路地裏を抜けると錆びれた倉庫につく、所々外壁が剥かれ内部から光と下品な笑い声が漏れてきている、入口に暇そうに座りながら喋る男を二人確認するとフェルは真っ直ぐ進んでいく。

さすがにテツが止めようとした瞬間には二人の首は刎ねられ残酷な光景に体が固まってしまふ、自分の半分くらいの年齢の女の子がなぜにここまで躊躇せずに殺せるのか……テツは考える事すら馬鹿らしく思えてきた。

「すみません少し待っていてもらえますか、すぐ終わるので」

テツを残し倉庫内に入っていくと怒鳴り声上がるが 金属の擦

れる音、おそらくフェルが刀身を切り離し鋼鉄の鞭を振るう音だろ  
う、床や壁を切り裂く音が何度も聞こえると怒鳴り声はなくなり苦  
痛の音が聞こえてくる。

倉庫内から逃げ出す一人の男が出てきた瞬間にワイヤーつきの剣が  
喉に絡まり目を反らしてしまうほどに無残な死に方をしてしまう。

最後には全身切り傷だらけの男がゾンビのようにヨロヨロと歩き倉  
庫を出た瞬間に倒れテツに手を伸ばす、ただ一言「助けて」と。

「終わりましたテツさん、入ってきてください」

倉庫内は先程の酒場の惨劇が可愛くみえるほどに無残で残酷な世界  
になっていた、顔手脚……それぞれ切り落とされ死へのカウントダ  
ウンで泣きだす声や倉庫の天井まで飛ばされ鉄骨に体を預ける者が  
散乱しテツは再び吐いてしまう。

フェルは美しい銀髪を返り血で鮮血に染め残った一人の男に剣の切  
っ先を向ける、上半身裸で手にはロングソードを構えているが全身  
に汗を浮かべ震えている。

「テツさんこいつが盗賊の頭です、殺してください」

「ウエ……お前…オエ、ふざけるなよ」

「いいから殺してください」

表情一つ変えず血だらけの髪を払い床に鮮血を落としながら言う、盗賊の頭は覚悟決めたように構えテツも前に出て腰から剣を抜く、言葉は必要なく互いに呼吸を整え緊張を全身に走らせる。

「もしこの人を倒せたら見逃してあげましょう」

その言葉を聞くと盗賊の頭は笑い大きく剣を上に掲げ振り下ろす、互いに武器が届く間合いではないとテツが首を傾げると火炎が剣から出現する、火炎は玉となり真っ直ぐ向かってくるが間一髪テツが避けると舌打ちを鳴らしながら盗賊の頭は笑う。

髪を数本焦がし後ろを見ると入口にあった分厚い扉は溶けていき直撃をもらった時の姿が想像出来る。

「テツさん相手は炎系の武器ですよ」

「言われんでも見ればわかるわ!!」

「剣での戦いは見せてもらいました、魔法ではどうしますか」

近づくしかない、あんな炎の玉を何発も撃たれたら回避できる自信

ないとなると必然的に接近戦になる、次弾を装填中なのか相手の剣から奇妙な機械音が聞こえテツが一気に間合いを詰めていく。

ふいに盗賊の頭は剣を地面に突き刺す、テツは不思議に思うが遠距離のままでは勝負にならないと構わず走り抜けるが魔法の恐ろしさをここで初めて教えてもらおう事になる。

「おっさん！！ 悪いがここで死んでもらうぞ！！」

地面から火柱が立ち上がりテツを一瞬包む、炎の中でもがき苦しみ一瞬だったが肌や髪を燃やされ地面に転がり体についた炎をかきけす、盗賊の頭はここぞとばかりに転がっているテツに剣を振り下ろすが運悪く一撃を外してしまう。

難を逃れたテツは立ち上がり息を吐くと黒く数か所火傷をし焦げ付いた学生服を脱ぐ、痛みより怒りの方が勝り大技を使いすぎてオーバヒートした剣を持つ盗賊の頭に斬りかかる。

「ぐううううう！！ おっさんがああああ」

よく見れば盗賊の頭はまだ若く表情を険しく怒りに変えていく、剣と剣をぶつけ金属の破片を落としていくがこの時に勝負はついていた……親指をスイッチにかけ押し込むと刀身は水に包まれダイヤモンドすら両断する水流の剣に姿を変え全てを斬り払った。

盗賊の頭が持つ剣はもちろん、その後ろにあつた体をも両断し肩か



ら胸にかけて大きく斬り裂き勝負を決めた。

「お見事！！ さすがテツさん私の見込み通りです」

この街にきて初めて見たフェルの笑顔は可愛らしく眩しいがテツには返事を返す余裕はなく膝を地面に落とす、最後はフェルに担がれテツは倉庫を後にする。

たった数時間で盗賊を皆殺しにしフェルの言う楽しいピクニックは幕を閉じた。

## 第四章

前日はフェルの家に泊まりそのまま登校していく、昨晚テツは約10人も人間を殺し目覚めは最悪の気分です登校中は一言も話さず隣のフェルはどこか照れたように後ろからついてきていた。

学園につき廊下を歩き教室の扉に手をかけた時なぜか扉が重く感じテツは止まる、この扉を開けたら再び殺し合いの螺旋に巻き込まれるんじゃないかと考えた時に自分のお気楽さに気づき勢いよく扉を開ける。

巻き込まれるなんてもんじゃない……もう殺さなきゃ殺される世界に片足どころか全身たつぷり浸かっているんだと。

「おはよ〜ガッ!」

教室に入った瞬間に両手で顔を掴まれ醜い顔に変えられてしまう、目の前には無表情だがどこか怒りの気配を漂わせてる二ノの顔が鼻がつく距離まである、後ろではエリオが腕を組み机に足まで乗せ不機嫌さをアピールしていた。

「テツ昨日帰りもしないでどこに遊びにいつていた」

「フェルとデートしてました」

「ほうデートとな、時に後ろのチビ助それは本当か」

フェルはえへへと表情を崩し笑いながらテツの背中を人差し指で円を描きながらクネクネと……男性から見たら可愛いが同性の二ノから見ると神経を逆撫でされるようだった、まるで親猫が子猫を連れるようにフェルの首を掴み二ノはそのままどこかへ行ってしまう。

顔を抑えながら席に座るとエリオが睨んでくる、組んだ指を何回も叩き首を傾けポキポキと鳴らし睨んでくる、テツはやれやれと肩をすくめた後に大きく肺に空気を入れて少し大きめな声でエリオに向かい言った。

「俺一人だけ女の子とデートしたから悔しいのかエリオ〜こんなおっさんに先を越されて悔しいのか〜……ああそうか!! お前フェルに気があるのか〜そりゃ悪い事しちゃったなあ〜」

「なっ!! ちげーよ馬鹿!! ちげーからな!!」

表情から怒りは消えて焦りの色に変えてエリオが近づいてくる、テツはあまりにも期待通りのリアクションをしてくれたエリオに両手を広げ出迎えるとエリオは容赦なく素手で殴りかかってきた。

テツの真似をしたんだろぅが素人のエリオの拳が当たるわけもなく空振りを繰り返す……その時近くにいた女子が小さく笑ったのをテツは見逃さなかった。

今まで恐怖の目でしか見られなかったが、あの笑いはクラスの男子の馬鹿を笑う優しい笑顔だと思った瞬間にエリオの拳が顔面に入る。

「お前あんま適当な事言うな！！ 誰があんな冷徹女なんか好きになるかよー！！」

「こつちにきて初めて殴られたわ、エリオお前は凶星を言われて焦って否定する思春期真っ盛りの反応だなあ〜」

テツは普段通りに接しているが内心では大きく変わっていた、人を殺してから見える景色も大分変わり手には何人も殺した感触と血の匂いが染みついている、いくら覚悟を決めたとはいえ大量殺人をしてしまった翌日は理性を保つのが限界に近い。

これから何人殺そうが気にもしなくなる自分が予想出来て嫌になる、それでも戦うしかない……逃げ場などなく殺すしか生きる道はないのだから 元いた世界での常識は少しづつテツの体から剥ぎ取られていくようだった。

## 【王国パロ奪還作戦】

数年前武器の輸入や開発で栄えていた王国は魔王の手に落ち今は魔王軍の支配下になり大量の武器や技術が奪われてしまっている、王国の王はパロを奪われた瞬間に殺され王妃やその親族も容赦なく殺された、民はその事実を反逆の声を上げたが烏合の衆にすぎない彼らでは戦いにもならなかった。

何よりまずいのがパロの優れた武器や魔法が魔王の手に渡る事、最先端の魔法がこの泥沼化した戦いを終わらせるといっても言い過ぎではない。

各国はベルカを中心に互いに手を組み奪還作戦を開始する、中には反対意見が出たがもはや議論するレベルではなく普段は睨み合っている国同士でも納得するしかない。

「落ちないようにつかり捕まるんだぞ」

そしてその話は学園まで伸びてきて優秀な生徒と教師が派遣させる事になった、数十の生徒の中には二ノが含まれもう一人は運悪く任命されてしまう……先日の楽しいピクニックの結果がよほど気に入ったのかテツは学園長に笑顔で背中を押しだされ馬を力強く乗りこなす二ノの背中にしがみつく。

「まったく馬にも乗れないのかテツは」

「だああうるせえうるせえ！！ 俺がいた世界では馬なんて上流階級の乗り物だったんだよ」

見渡す限り全てが騎馬兵……鎧の擦れる音と地面を踏みつける音が地響きのようにテツの心臓に届いてくる、何千という兵が馬を操りパ口に一直線に向かう光景は圧巻で心が震えてしまう、何も無い草地在どこかの芸術家が描いた美しく力強い絵画に変わっていく。

そして地平線のむこうに微かに見えてくる城壁、自分で喉を鳴らす音が聞こえテツは一度大きく息を吐き吸うと何かが光り出す。

「テツ掴まれ！！」

急に二ノが馬を大きく左に寄せるとついさっきまで隣にいた兵士が光の中に消えていく、その光は地平線の向こうから放たれベルカが作り上げた連合軍の出鼻を焼き尽くした。

大群の中心に巨大な槍が突き刺さるように謎の光は撃ち込まれ多くの兵士が一瞬で蒸発してしまう、人の肉が焼ける匂いでテツは何をされたのか見当がつく、ゲームばかりやっていたテツに思い浮かんだ物は超長距離射撃用の光学兵器……まさに漫画のような武器である。

「二ノさん集団から抜け出してください」

誘導するように前の一騎の馬が動き出すと長い茶髪の髪で誰か特定できテツは普段とあまりにも違う姿に目を疑ってしまう。

白銀の甲冑に身を包み馬までもが頭に銀の装飾をつけて雄々しい姿で二ノの前に現れる、兜だけ取っていたおかげで誰かわかり二ノが笑う。

「マリアー!!」

「あのお出来れば先生と……じゃなくて今は集団は危険です、ついできてください」

マリアの馬についていくと地平線から光り出し破壊の光が連合軍に突き刺さっていく、その攻撃はテツがゲームや漫画で見た物より遙かに強力で生々しく一瞬で大勢の命を焼き尽くしていく。

血すらも蒸発させ光が通過した後は地面が綺麗にエグられた後しか残らず全てが消えていく、マリアが大きく大群から離れ腰から剣を抜くと頭を低くし風のように草地を駆け抜けていく。

二人乗りの二ノがギリギリついて行くと城壁が大きくなっていき近づいていく、パ口から放たれた光は2発目以降はなく犠牲は大きかったが連合軍も城壁前につく。

「二ノさん懐に潜り込みますよ!!」

「了解した、テツ振り落とされるなよ!!」

空が矢で埋まっていく……進化した光学兵器の次は原始的な武器だが効果は絶大、切っ先を鋭く削り大きく上に向けて撃ち重力の力が加わり甲冑を簡単に貫いてしまう、魔王軍は攻めはなく城の中で立て籠もり守りの戦いを挑んできた。

城門は固く閉ざされ上からは矢の雨が降ってくる形は連合軍の足を止めてしまう、魔法を使い突破したい所だが所詮は対人戦を想定した魔法は城攻略戦には向いてない上に使うと陣が崩れ指揮系統も失いかけない。

「だああああ!! おいマリアという名のババアどうすんだよ」

「テツ君黙らないとその舌斬り落としますよ」

なんとか懐に潜り込み固く閉ざされて城門前でテツはこれから向かってくる連合軍が矢の犠牲になっていく所を見ていた。



固く閉じられ人の5倍はあるつか鉄の塊である城門の前にマリアは軽く拳で叩く、何箇所か叩き音を確かめると左右から一枚づつで閉じられた城門の唯一の隙間の前に立つ……中央に扉同士が噛み合い隙間は1ミリも無いが確かに一本の細い線が城門には刻まれている。

「テツ君貴方の剣でこの辺を貫いてください」

「いやいやいや無理だろ、この城門見るよ〜他探そうぜ」

「いいからやってください」

魔法で水流の剣に変え隙間に差し込んでいくとガリガリと鉄が削れる音で耳を塞ぎたくなる、全体重を剣に乗せて後ろを脚を蹴りあげて刀身を全て城門に埋めると一息つきマリアに顔を向けると親指を下に落としていく。

サインの意味がわかり再びの重労働に溜息をつきテツは差し込んだ剣を下ろしていく、機械音が激しく響き活動限界が近い事を知らせ手にも力が入ると今まではとは違う何かを叩き斬った音が鳴る。

「テツ君マリアさん、私は先程パ口から撃ちだされた兵器を探して破壊します、二人は敵を引きつけてください」

鉄が擦れる音と錆びた鉄の悲鳴が同時に響き巨大な城門はゆっくりと開いていく、マリアは誰よりも前に出て片手にはバスターソード片手には同じくバスターソードと重剣を二刀流と女性にはありえない装備で今か今かと待つ。

城門が開ききる前に一人が通れる隙間が出来るとマリアは両手の剣を地面に引きづりながら扉の向こうに消えていく、テツと二ノも追おうとしたが城門の隙間から顔の半分を削られた男が飛び出してきた止まる。

「テツ出来るだけ守ってやるから何とかもちこたえるよ」

「まったくフェルの言う通りだな、今から殺しまくれば気にもならなくなるだろうな」

扉が完全に開くと数十の兵士達や傭兵達が武器を構えている、マリアが通過したと思われる場所は人の死体が転がりどれも無残な殺され方をしていた。

一人の兵士が槍を突き出し突進してくるとその槍は斬り落とされる……槍の切っ先を叩き落とした二ノはそのまま間合いを詰めての一閃。

腹を斬られ口から血液を吐き出し兵士が倒れるとそれが合図となり一斉に二人に傭兵や兵士が襲いかかってきた、軽く見ても40はい

る兵士の中に二ノは飛び込んでいく。

「うおおおおりゃあああああー!!」

恐怖を隠すように雄々しく叫ぶとテツは目の前の傭兵を斬り捨てるが中途半端に浅く痛みで地面で叫んでいるが気にしてる余裕はない、次々に襲いかかってくる敵の攻撃を避ける……避け続け距離感を体に叩きこむ。

腕は二本で武器での攻撃だから一回と考えテツはボクサーの最大の武器を出す、素人には到底追いつけない脚捌きと手の速さを引き出し殺す……殺しまくる。

これほどまでに上手くいくボクサーとしての戦い方にテツは一瞬酔うように歓喜していく、大きく振りかぶるモーションは止まって見え速さ重視の小さな振りもテツにはスロー再生に見えてしまう。

「ハハッ」

小さく笑う、まるで相手にならない敵を完膚なきまでに叩き潰す感触が手に残りテツは笑ってしまう、この時にはもう元いた世界でのテツの半分は狂気とこの狂った世界に支配されつつあった。

ボクシングが人の手により生まれてから約150年……【打たせずに打つ】という目標で人は技術を磨き上げ、ある者は強くなるために、ある者はその強くなった者に憧れ、そしてたまたま近所を通りかかった無職の男にもボクシングはその偉大な力を授けた。

打たせずに打つという行為は相手が手を出した瞬間にこちらの拳を叩きこむというカウンターもある、他には相手が手を出せない程に先手を奪い一方的に殴りまくる。

しかしそんなのは夢物語だと一度でもリングに立てばそれはわかる、それが天才でも何でもないただの凡人なら尚更だ。

「シッ！！」

しかしそれは相手がボクサーでの話で素人なら間違いなく拳は当たる 何振り目だろうか、剣を振るのがまるでジャブを出すような感覚になりフックを打つように剣を横殴りに走らせる、テツとて剣術を舐めているわけではなく警戒しながら脚を使い隙をつく。

何人かで囲んできても広い城門前には逃げ場などいくらでもある、敵のほとんどは力任せに武器を振るってきてテツから言わせれば剣術でもなんでもないただのチャンバラ。

仮にも命賭けの殺し合いをしてるはずなのに実力差がありすぎて恐怖は消え失せテツは血を浴びながら踊り、殺しまくっていく。

「テツ無事か!!」

声の先を見ると視線は目の前の敵を睨みつけての流れるような一閃……爪先から頭の先まで二ノはある事のために動いていた、人を斬るという行動に全ての動きを理に叶え地面の上を滑るように駆け抜けていく。

テツは目を奪われ美しいとさえ思ってしまう、敵の攻撃を紙一重で避け一太刀で葬るその姿が、困まれないように常に動き確実に数を減らし気づけば屍の山を作り刀を鞘に戻し一息つく。

「城門前は確保できたな、やれやれ随分と遅い到着だな」

連合軍が城門前に到着すると言葉を失う、成人にもなっていない女の子が屍の山の中で腰を下ろしている姿は何人かの騎士の脚を止めて隊長らしき男が二ノに近づき話をする。

城門を潜っても城下町があり城まではまだ道のりが遠いと確認するとテツは足元に転がっている死体に気づき自分の行った行為を再認識する。

罪悪感は薄れ何も感じない……これが慣れるという事なのだろうか、テツは学生服と剣についた血を払い腰を下ろしていると騎士から水筒を渡され喉を潤す。

「テツいくぞ、どうやら私達は単独で好きにしていいいそうだ」

「遊撃部隊って事か？」

「城下町に入れば後は数で押せるそうだから一気に制圧するらしい、  
マリアが上手く砲台を潰したらしい」

たった数秒でも腰を下ろし一息つくとも鉛がついたように重くなりテツは大きく息を吐き腰を上げていく、武器は戦闘中で冷えて再び魔法が使える事を軽快な機械音が知らせてきた。

二ノは走り出しテツが後を追うと迷う事なく一直線に向かっていく、街中に各国の騎士達が散らばり狩りが始まる、守りの戦い方を選んで城門を突破された時点でパロ軍に勝ち目はほぼ無くなっている。

「おい二ノどこ行くんだよ」

「城だ！！ おそらく魔王軍の幹部がいるはずだからな」

「いや待て二ノ、なんでわざわざそんな化け物と戦いたがるん……」

言葉を途中で切りテツはなんとなくだがわかる、二ノも同じ化け物

と言われるまでの戦闘力を持ち戦いが好きで仕方ないんだろうと。

道中で出てくる敵は容赦なく二ノに斬り殺され一気に城までいく、  
巨大な扉は既に開いてあり何の迷い無しに城内に飛び込んでいく。

#### 四

城内は外と変わらなかった、あるのは死体と死にきれない苦痛の音が響き味方も敵も全て床に倒れ二人を出迎える、玄関ホールは何本もの柱がありそこで大量に死体を生みだした者達が命を削り合っていた。

白い鎧の騎士はテツよりも少し大きいバスターソードを両手で持ち鈍器のように力任せに叩きつけていく。

黒い騎士は背丈も鎧も巨大だがそれ以上に戦斧が大きい、背丈以上の戦斧を振り被りこちらも力で圧す。

互いの武器が火花を散らすたびに地鳴りが鳴るようにホールを揺らし、テツはその光景から目を離せなくなる、今までの敵とは格が違うと知らしめる攻防。

「白騎士か」

「なんだそりゃ」

「ベルカが保有する騎士団だ、これはとんでもない奴が出てきたな」

二ノがとんでもないと認めた相手は白騎士ではなく相手……黒騎士が戦斧を一振りすれば白騎士は吹き飛ばされ力の差がはっきりとわかる、白騎士の鎧に亀裂が入り肩の装甲が吹き飛び中身の肩からえ



ぐれた肉が見える。

たった一振りで鎧を砕き中の肉まで切り裂いた黒騎士は頭上で戦斧を回し床に大きく叩きつけ威圧する、肩腕を庇いながら白騎士が立ち上がり片手には重すぎる剣を持ち上げてゆっくりと進む。

白騎士が弱くないのはテツにはすぐわかったがそれ以上に黒騎士の絶望的なまでの強さ、無言のまま白騎士が走り出すとテツはつい叫んでしまう、結末が見えてくるようだった。

「やめろ!!!」

テツが叫んだ時には……白銀の破片は散り手に持つ剣は真つ二つに折られ白騎士の体は上半身だけが宙を浮いた、まるで竜巻のように戦斧を振り回し黒騎士は勝利の余韻に浸るように残った下半身を薙ぎ払い二ノに戦斧を向ける。

「久しぶりだなハンク、まさかアベンジが出てくるとはな」

「裏切り者か、確かに久しいがこれでお前の顔も見るのも最後だろ  
う」

声は太く重圧的で黒騎士によく似合っていたがテツは二人の関係に気づき一瞬止まってしまふ、その一瞬で二ノは黒騎士……ハンクと呼ばれる男に牙を向く。

戦斧が再び竜巻のように回り始め二ノを巻き込むように振り下ろされると空振り、学園の制服を破りながら二ノは避けて大振りの後のハンクの懐に潜り鞘から刀は抜き放つ。

狙いは腹と決め腰を落とし流れるようにその一太刀で勝負に出るが刃は届きはしない、気づけば空中に二ノは放り出され壁に激突した、ハンクは単純に手で押すというだけで二ノを吹き飛ばす。

「相変わらずの遅い剣だ、そんな事ではお前に技を授けた者たちが泣くぞ」

「だ　まれえ！！」

テツは初めて二ノが怒った顔を見た、眉間にシワを寄せ歯を獣のように剥きだしにし短髪黒髪が一瞬風もないのに浮かぶと壁にめり込んだ体を無理矢理引き剥がす。

今にも襲いかかりそうな二ノに駆けよりテツは肩を掴み顔を近付ける、二ノの瞳は目の前のテツではなくハンクを見ていたが気にして暇はない。

「一人じゃ無茶だ二ノ！！　　いいか俺が引きつけるから隙をつけ」

「テツお前は前に入るな、私が倒す」

力づくで前に出ようとする二ノを無理矢理抑えつけテツは踏ん張る、ここで一人でいかしては白騎士のようにバラバラにされてしまうと確信があつた。

「お前やフェルが認めてくれた回避能力で何とかあいつを引きつけるから!!」

「……」

「いいか攻撃は無理でしかも長くは回避できないだろう、情けないがこれが俺の精一杯だ」

二ノの返事を待たずにテツは黒騎士の前に立つ、目の前にしてその圧力や迫力で膝が震えだすがなぜかテツは口元を緩め笑ってしまう、理由はわからないが恐怖しすぎたせいがおかしくなったと思ひ両手を広げへラへラ笑い出す。

「よお二ノと知り合いかあんだ」

「それがどうした」

「いい歳して若い女の子いじめてんじゃねえよ、このロリコン野郎」

挑発　テツの数少ない武器でハンクを罵ると見事に乗っってくれる、言葉を出す前に戦斧を出すが……ここでハンクは混乱していく、何回振り抜こうともテツにはかすりもしなくフラフラとハンクを小馬鹿にしたように回り続けていく。

縦に振り落とせば軽々避けられ横に薙ぎ払えば素早く後退し嘲笑うように華麗に離脱していく、実際テツは笑いながら風のように踊る。

「ハアハア……っ」

表情とは反面テツは心の底では神経をすり減らし冷たい汗を全身の毛穴から吹き出していた、一瞬でも遅れれば間違いなく殺される状況で恐怖を抑え込み動きを鈍らせなくする事は体力の消耗が激しい、一振り避けるごとに心臓を素手で掴まれる感触が生きた心地がない。

## 五

二対一という有利な状況なのに余裕はまったくなくテツはひたすら逃げ回る、二ノが隙をつき飛び込もうとするが巨大な戦斧を扱うだけあって懐が遠く攻め手にかけテツの体力の残量が減っていつてしまふ。

額から流れる汗を拭う行動する出来ない程にハングの起こす竜巻じみた攻撃は回避に神経を使う、テツの考える事はただ一つ……壁を背負わない事、敵を中心に回れば逃げ場は無限にあり空振りする敵は怒りを不安に変えていく。

何度攻撃しても当たらない現実には必ず不安は生まれ、次第に体を浸食し攻撃が雑になる瞬間を待てばいい。

「ハッハーどうしたあ！！ 大きいのは見た目だけで全然なつてねえなあ」

両手を広げタツプダンスを踊るように両足を交差させ挑発するとハングの動きが止まる、二ノは背中越しに今かと狙っているが隙が無いのか動けない。

「ふざけた態度の割には回避技術に秀でて体捌きは一流といってもいいだろう」

突然ハンクが喋り出すとテツは構えを解き体を休める、動きっぱなしの体に一秒でも休息を与え次の回避に備えていると肌寒さを感じ汗が引くのがわかる。

全身が汗だくなテツには丁度いいくらいに感じていると二ノが何かを叫び出す、その言葉を認識して足元を見ると青くビツシリと氷が張り付いていた。

「しかし攻撃する意志がないとわかり興が冷めたぞ、貴様のような逃げ回る虫には丁度いい魔法を持っているのでな」

氷は膝まで登ってきていてビクともしない、よく見ればハンクの戦斧が地面に下ろされ切っ先から地面は青く染まっていた。巨大な戦斧の存在で魔法をすっかり忘れていたテツは恐怖で全身の体毛が逆立つ。

「ここまで我が攻撃を回避したその技量に敬意を払い一撃で終わらせてやる」

二ノが後ろから刀を振り被り斬りかかるが圧倒的なリーチの差で先手を奪われ吹き飛ばされる、刀で直撃は防いだが小さな体は衝撃を防げずボールのように何回も地面を跳ねて飛ばされていく。

気づけばテツは一人脚を奪われハンクを目の前に震えていた、膝は凍りついたせいで震えないが上半身を肩まで震わせ今にも泣きそうな顔になる、目の前に迫っているのだ……死が。

「ちちちくしょうがあー!!」

魔法を発動させ水流の剣を作った瞬間にその水までもが凍りつく、大量の水が凍りつくと一気に重量は増し支えきれず剣を落としてしまふ。

脚という機動力を奪われ。

剣も奪われ……ハンクは最後に残ったテツの命を奪いにかかってくる。

戦斧を大きく振り振りテツの前に立つ、何とか抜け出そうともがくが脚の凍りは張り付いたまま 最後に腰を大きく捻ると氷に亀裂が入るのがわかり喜ぶが、無情にもハンクは振り抜いた。

「やめ、やめてく……助け てっ」

痛みはなく斬られた部分が熱かった、目の前が暗くなり何度も体が飛び跳ねる感触がし最後には扉を破壊しテツは玄関ホール横にあった部屋まで飛ばされようやく視界が戻ってくる。

視界は大きく揺れ二ノが遠くで叫んでいるが鼓膜が破れたようにエコーがかかり聞きとれない、首の横が酷く熱く手を重ねると何かにぶつかり見てみると言葉を失う。

鎖骨が肉を突き破り血が吹き出し目に入ってくる、鎖骨を砕いた傷

は胸から腹にかけて広がり臓器が剥きだしになるほどに切り開かれていた。

「おい、嘘だろ……ゴッ…プッ！」

口の中に血液が溜まっている事に気づき大きく吐き出す、その血液は赤くはなく黒く致死量の量ではない、立ち上がるうとしても脚は動かず回りを見れば武器だらけの部屋

寒い

肩に突き刺さった金属の破片が急激に体温を奪っていく

滴る血痕は命の残量と反比例し大きくなる

これが【死ぬ】ってやつか



## 六

何がいけなかった。

どこで間違えた。

高校中退か？ 勉強をしなかったからか？ ボクシングで落ちぶれたからか……

ああ何がいけないんじゃないじゃなくて俺は何もしなかったからか……

薄れゆく意識の中でテツは今までの人生が走馬灯のように蘇り過去の自分を見る、学生の頃は勉強も出来ず特に取り柄もなくクラスで馬鹿をやり皆の注目を浴びる事しかできない自分。

無職になると毎日やる事もなく近所を歩き母親に叱られる自分、ボクシングでがむしゃらに毎日サンドバックを叩きその努力がリングの上で散る自分 何一つ残せてない、自分がいたという功績さえも残せてない。

自分の血で出来た水溜まりに顔を沈めながら、情けなく惨めで空しい人生をテツは意識を手放すように幕を……

「ガッ      あああ、      ああああッ！！」

体の半分はもう動かさず片手だけで床に爪を立てて這いまわる、もう視界も暗くなり見えてる景色に黒いカーテンがかかるが足掻く、手の先に何か当たるとそれを掴み全力で引き込むと背中に衝撃が走る。武器庫に並べてあった槍の束を崩し槍の中に埋まってしまう。テツは動く事すら叶わなくなり手を伸ばす、最後の力を振り絞りただ手を伸ばし何かを掴む。

「離しなさい下等な人間」

「じにだく……ねえ……助け」

指先から声が聞こえてくるがテツは神にでも祈るように拝み、手で掴んだ物を離さない、肌触りで金属とわかるがそれ以外は一切不明。それでもテツにとっては最後の希望でしかなく、すぎるように助けを求めた。

「ん？ 人間あんた珍しい匂いだねえ、この数百年で初めての匂い」

「ガハッ！！ だずけて……ぐださい」

「なら契約する？ こんな埃作い部屋に何十年も閉じ込められ狂ってしまふ所だったから丁度いいわ」

妖艶な大人の女性の声だ、男を惑わす色香の混じった声色で囁かれテツは答えるように力の限り握り締めそれを最後に意識は無くなつた、掴んでいた手は力を失いこぼれるように床に落ちてテツは人間としての機能を完全に停止する。

「起きなさい人間、これからお前は私の奴隷となりその生涯を戦いに使ってもらおうわ」

「……っ!」

失ったはずの感覚が戻り勢いよく槍の束から体を出す、自分の両手を見て脚を見て思考が停止してしまう、傷は塞がり痛みもなく異和感だけが体にある。

体の中に何かを流し込まれたとわかり顔や足を触るがわからない、ただ燃えるように体は火照り汗が一気に毛穴から吹き出してきた。

「おめでとう人間、お前は見事に契約者に選ばれたのよ」

手で掴みそこねた物を見ると鞆……銀色の金属で作られ中央に牙を剥き出した狼が掘られた銀色の鞆が喋っていた、喋るたびに左右に動き最初は何かの手品かと思いいテツは当たりを見回す。

「血が足りなかったから代わりに魔力を流してみたら成功ね、さて人間お前は誰にやられた？ 肩慣らしにそいつを殺しにいくよ」

「あ……なんだお前」

「私はパンドラ、今この時からお前の主人になる優雅にし最強の武器！ わかった？」

口調からして自分は頭がいいと思っている馬鹿だというのがパンドラの第一印象だった、テツは膝をつきパンドラを見上げ本当に主人と奴隷のような形で出会う 息を整えパンドラの取っ手部分を掴み持ち上げて全体を見ていく。

鞆というより大きなアタツシケースのように見えとても武器には思えない、軽く拳で叩いてみると勢いよくパンドラは跳ね上がりテツの顔面にその鋭い角をぶつけてきた。

「さて人間お前の望む武器を言いなさい」

「グッ何言ってるんだお前、鞆から何か出す気かよ……糞！！ これがウィルの言っていた武器かよ」

「私はあらゆる多重世界から武器と繋がっている大魔法の結晶、つ

まりはわかる？ 最強なのよ！！」

最強という言葉を強調するあたりに馬鹿さを感じテツは安堵の溜息を漏らす、理由はどうあれ絶望的な状況から生還し命を繋げた事に神に感謝したい気分だが、テツを助けたパンドラは神ではなく悪魔のような存在だと後に思い知らされる事になっていく。

## 七

最初に思い浮かんだ武器は重火器だが一般人だったテツが扱えるわけなく断念していると今置かれてる状況を思い出し武器庫の壊れた扉から飛び出す。

玄関ホールはの床は何箇所もえぐられ石の欠片が散乱している、その大き過ぎる戦斧を振り回しハンクが縦横無尽に駆けていた、二ノは柱を盾になんとかやり過ごしているが力の差は大きく刀の間合いさえ入らせてもらえない。

数回に一回は直撃を食らいその度にホールの隅まで飛ばされ立ち上がるごとに弱っていくのが見てわかる、テツは信じられない、あの圧倒的な力を誇っていた二ノがまるで子供扱い。

「二ノお前は確かに才があるが経験不足だ」

また直撃……刀の刀身に手を当て完全防御態勢になっても飛ぶ、体格差もあるがあまりにも武器の質量が違いすぎる、ならば速さで勝負するしかないが立ち上がる二ノにその力は残されていなかった。

「へえ中々美味しそうな獲物じゃない、人間何が欲しい？ 剣か斧か槍か？」

「拳を武装する武器はあるか」

「お前この世界の住民じゃないわね、まあいいわとびっきりのを上げるー！」

パンドラが緑色の光に包まれ解体されていく、中身は巨大な動力源のようなコアがあり周辺を見た事のないような機械が回っていく、その機械は両腕に巻きつき肘から爪の先までおおっていく。

わずか数秒で完成したのは紫色の禍々しい手甲、肘からは刺が突き出し腕の部分は細く爪先は尖り神話で見るとような悪魔の腕に変化した。

「うおおおおお！！　なんだこりゃ！！　おいパンドラ俺の腕に何しやがった」

「【ナイトメア】神に対抗しようと悪魔達はその命を捧げて作った武器よ、扱いは難しいけど威力はそこらの武器とは比べ物にならない」

数回拳を握ると手甲が肌に食い込むように浸食しているのがわかる、シャドーのように素早く拳を突き出すと感触の違いに驚く、何も殴ってはいないのに自分のパンチがとんでもなく重くなってるのがわかる。

「よう」

力強く拳を握り締め走り出す、接近するテツにハンクが気づくと驚きを隠せないが戦斧を横一閃に振り抜いてくる、テツは最初から避けるつもりはなく片手を戦斧の切っ先を添えるように重ねた。

テツの背後の床と柱は衝撃で破壊されるが衝撃を一番もらうはずの本人は平然と立っていた、戦斧は振り抜けず片手で止められハンクは凍りついたかのように静止してしまう。

その際こそテツは逃せなく大きく軸足を前に出し体重を後ろから前にシフトし昔ジムで叩いてたサンドバックを思い出しハンクの腹めがけナイトメアを振り抜く。

「驚いたな人間、お前の戦い方は初めてみる」

推定2メートルのハンクは自分の半分にも満たない体重のテツに殴られ飛ぶ　空中に放り出され一度も地面に落ちる事なく玄関ホール中央にある階段に激突する、拳を振り抜いたままの姿で止まっているテツは開いた口を閉じる事が出来なくなっていた。

これほどまでの威力があるくせには拳への反動は無く何よりも拳速が振り抜いた本人さえも見えないほどに速かった、しばらくするとナイトメアの数か所から煙が出て紫に怪しく光り出す。

「……おいパンドラお前こんな武器何個もあんのかよ」



「何個？ 舐めないでほしい、個数なんて数えたらお前の一生が終わるでしょうね」

階段が崩れ瓦礫の山の中で一本の腕だけが天に向かい伸びている、その光景に勝利を確信し倒れている二ノに向かい背中を向けると床が氷に包まれ周辺を見渡すと床だけではなく壁までもが凍っていく。やがてはホール全体が凍り当たり一面は氷の世界になり吐く息が白くなる、瓦礫の山からゆっくりと体を出しハンクは震える脚を抑えながら立ち上がり戦斧を持ち上げる。

「少々効いたぞ、まさか契約者だったとな……面白い」

「人間あいつも契約してる、さてどうする？」

「俺が聞きてえよ！！」

二ノはうずくまり声を出せる状態ではなく目の前には氷の世界を作り出すほどの魔法を使うハンク、嫌になる状況に腕を畳みテツは小刻みに体を上下させ左右に揺らしながら向かう。

ハンクは今までと違い振るのではなく突く構えに変え待つ、テツが間合いに入ってくるのを待ち先手を奪い突き殺す事だけを考えテツ

はそれをわかった上で近づいていく。

## 八

ハンクは自分を百戦錬磨と誇っていたが勘違いと思い唇を噛む、目の前のテツより二ノを大きく見た結果鎧を砕かれるほどの一撃を受け立っているのが精一杯だ、腹部の装甲を根こそぎ持っていかれ鎧ではなく生身だったら確実に拳は背中まで貫通していたであろう。

狙うは一撃……それも大きいのではなく戦斧さえ触れれば腕だろうが脚だろうが氷づけに出来る魔法を持っている、追い詰められてるはずなのに口元が緩んでしまう、傭兵稼業はこれだからやめられないと思いきや大きく構える。

「ぬううん!!」

予備動作は小さく最短で最速の突きを出すとテツも無駄なく避けていく、ハンクにはリーチという武器があり突き続けている限りテツは近付けず離れ睨む続けていた。

持久戦になればハンクに分がある、テツは的を絞らせないため動き続けているがハンクは動かさず集中できるため体力が無くなるまで待てばいい、これが見た事のない拳術に対して出来る唯一の方法と考えるつく。

「ハアハア……ッ」

現役の頃だったならばこんな運動で息切れしなかったが現役引退して数年のテツには厳しい、点で突いてくる突きを避ける事に神経を擦り減らせ常に動き続ける運動は容赦なく体力を奪う、体力が無くなれば反応は鈍くなり隙を突かれ殺される。

しかも戦斧が霞めた前髪が凍りつき触れた物を全て凍結させてしまう事実をしりテツは焦る、あの巨大な得物に触れる事なく懐に潜り込む……一度深呼吸し構えを解く。

「フンツ!!!」

畳んだ腕を伸ばし大きく振り振りテツが走り出し何の工夫もなくハンクの間合いに入ると容赦なく突きが飛んでくる、持久戦でも駄目で近付けさえもしない……ならば狙うは一つ、それは自殺にも似た戦法。

「そおおおおりゃあああ!!」

戦斧の切っ先は正確にテツの眉間に飛んでいったが途中障害物が現れる　拳だ、全体重を乗せ振り抜いた拳は戦斧と激突しホールに金属音が響くと同時に片腕は凍りついた。

肩まで凍った腕をダラリと垂らすとハンクが戦斧の異変に気づく、切っ先から光が漏れだし数秒後には爆破し形を歪めテツの狙いがわかる。

「武器破壊とはな、しかし片腕で何が出来る」

「片腕で十分さ、武器を失ったお前を倒すにはな」

破壊され魔法機能を失った戦斧と片腕を氷づけにされた元ボクサー、互いに出来る事は多くなくハンクが火花を散らす戦斧を上げテツが片手を構える、二人は呼吸を合わせたように動き出した。

「そこまで!!」

氷の世界になったはずのホールに亀裂が入る、亀裂は広がりやがては粉碎……天井の氷は砕かれテツとハンクの間に舞い降りてくる、二人に剣を突きつけ動きを止めて立ち上がるのは一人の女性。

「もはやパロは落ちました、傭兵である貴方はまだ戦いますか？」

マリアが膝をつき剣を向けるとハンクは黙り戦斧を下ろす。

「正論だな、報酬分の仕事はしたつもりだ……お前名前をなんとい  
う」

「テツだ」

「ふむ、また会おう」

先程まで獣のような殺気を放っていたハンクは背中を見せ軽く手を振り去っていく、姿が見えなくなるとテツが倒れ込み片腕の激痛に声を上げるとマリアが軽々担ぎ上げ出口に向かう。

途中二ノも拾い上げ城を出ると歓声が街中に地鳴りのように響いていた、テツはこの時痛みで目蓋すら開けられなかったが連合軍の声で勝利したとわかり安堵の息を吐く。

二ノはようやく自分の力で立ち上がり勝利の声に包まれる街を見下ろし思い出すかのように一言だけ言葉を漏らす。

「ユウヤ」

## 外伝第二章

鍛冶屋は真つ赤に燃えている鉄に魂を込めるようにハンマーを振り下ろす、長年繰り返し返してきた作業だが不思議と今回依頼されてきた武器を作るのは楽しさを覚え初めて鉄を鍛え上げた時のように好奇心で笑ってしまう。

一か月前店に突然黒づくめの男が現れると薄い皮に炭で書いた設計図を出して細かく説明してきた、素材の混ぜ方や火の温度までと、まるで本職かと思う知識を鍛冶屋に見せびらかした後に金貨だけ置いてさつていく。

「なんだこりゃ」

報酬を貰ったからには仕事をこなすと意気こんで設計図を眺めるとそこには見た事もない武器がある、切っ先から柄の底までが初めて見る形で何より細い、設計図だけではわからないと早速作業に入り数日。

失敗……失敗と何十の失敗を重ね気づけば睡眠を忘れていた、失敗続きなのに鍛冶屋は楽しい、少しづつではあるが完成に近づき作り出す武器の美しさに酔っていた。

「こいつはたまんねえなあ」

今まで作ってきた剣よりも細く鋭い刀身に小さな柄……この武器は【斬る】という一点だけに集約された究極ともいえる特化した剣であると気づく、ハンマーの一振りで折れる事も何回もあるが長年の経験で一回の失敗から数倍の成果を上げていく。

やがて床の半分が折れた刃で埋まる頃に鍛冶屋は一本の剣を目の前に座る、まだ完成に至っていないが一ヶ月間で紛れもなく最高傑作……赤子を抱くように繊細に鉄を砕くように力強くと使い分け徐々に鉄は形を変えていき鍛冶屋の心を震わせていく。

「ふう」

夜通しで鍛えに鍛え上げた鉄は火で溶かされ後に水で冷やされと繰り返し形を整えていく、窓から朝日が入り込み刀身に反射すると鍛冶屋は腕を組み子供のように飛び回り拳を振り上げて喜ぶ、こんなにも充実した時間は何十年ぶりだろうかと思いきや大きく息を吐いて座る。

「綺麗なもんだ」

刀身を柄と合わせ鏢と呼ばれる部位をつけると設計図の中身は実体化した、今まで作りあげてきた武器は鈍器のように重く太かったがこれは逆 叩きつけるのではなく斬るという行為だけに考えられた剣。



「おいウィル出来たかい」

丁度いい所に扉は開けられ今回の依頼主がきた時と同じく真っ黒な服装で顔を出すと、ウィルは自慢気な顔で人生で最高傑作とも呼べる剣……のちに刀と飛ばれる武器を差し出した。

「確かユウヤとか言ったな坊主、ハハツどんなもんだい！！ てめえの依頼通りの物作ったぜ」

## 【魔法殺し】

城の城壁に使われる技術、炎だろうが風だろうが氷だろうが魔法である以上絶対的に相殺してしまうという技術は開発されたばかりで一部の国にしか使われていない。

魔法を殺すという能力ゆえに魔法は使えないが防御にこれほど向いた技術はなく、情報を聞いた各国は我先にと開発者に駆け寄り金貨を積んでいく、そんな各国を開発者は顎を傾け鼻で笑い売り値を吊り上げていく商売人だ。

開発者は各国に少しづつ値を上げていき互いに競りをやらせ大儲けの絵図を描き每晚祝杯ともいえる酒を食らい笑いが止まらない……その開発者でありながら商売人の男が。

「ヒヒツどうだい、気に入ったかい」

「俺のいた世界とは科学の進歩が桁外れだな、感謝するウィル」

「そいつには俺が魔法殺しを仕込んだからな、魔法使ってくる奴には絶大な威力だぜ」

ユウヤは懐から革袋を出しテーブルに置くと重量がある音を鳴らし

中身が少しこぼれてしまっ、完成の祝杯をあげ酒を飲んでいたウィルの顔が酔っ払いから素の顔に戻っていく。

「追加報酬だ、魔法殺しなんて代物と何よりこいつは紛れもなく業物……イリアの紹介通りいい腕だぜあんた」

「金なんていらねえよ、とっとしまいな」

ユウヤは啞然とし革袋から離そうとした手が止まってしまっ、目の前の鍛冶屋は報酬はいらなと言っている、金は命と同等までと言える存在なのにとユウヤは考えウィルの行動がますますわからない。

「金なんてこれからいくらでも国からガメられるからな、それよりお前そいつを何に使うんだい」

「こんな戦い溢れる世界にきたんだ、どうせなら楽しまないとなあ、人殺しの道具に使わせてもらっ」

「ヒヒッてめえは根っからの殺人者の目してやがる、イリアから聞いたゼベルカに喧嘩売るんだってな」

黒の鞆に収め椅子から立ち上がりウィルに背中を向けた、ウィルにはその姿が純粹に遊びを楽しむ子供のように見えてくる……ユウヤ

には殺すという事に一切の迷いもなく時には楽しむという異常さがあり、それゆえ才だけでなく努力を惜しまず確かな腕まで鍛え上げてしまう。

扉を開けると眩しい日光とオイルの匂いが鼻につき作業着を着た男達が行ききする工場地帯のような街に出る、大きく背伸びし首を傾けると隣から大きな影が現れた。

「待たせたなハンク、傷の具合はどうだ？」

太い腕を組み大きな顎の上から覗かせる瞳でユウヤを睨むと額をかきながら少し言いづらそうに口を開く。

「問題ない、しかし遅れをとったのも事実……ユウヤまた俺と遊んでもらおう」

「嫌だね！！ お前と遊ぶと本気になって危ないんだよ、この前だってイリアに止められなかったら」

「時にユウヤ、お前イリアの事どう思っている」

太い声色で冷静に聞いてくるがその顔は少し視線をずらしユウヤから顔を背けてしまう、ここまでわかりやすい奴だと思つと腹を抱えて笑い転げそうになるがグツと堪えてハンクの肩を軽く叩く。

「どうもこうもねえよ、まだ会って一カ月だしなあ〜ハンクよお傭兵稼業なんてしてんだ、お互いいつ死ぬかわかんないよなあ〜」

「む、何が言いたい」

「こんな大きな凶体してビビッてんじゃねえよ、今度イリアを食事にもでも誘ってみるよ〜勿論二人つきりでな」

腕を組み何回か頷くと斜め上を見てハンクは数秒停止してしまう、ユウヤの言葉で何かを納得したのか一人で歩いていってしまいユウヤが追いかける形になる。

「ユウヤお前の言う通りだ、待つのは性に合わんから今から誘ってみるとしよう」

「おい待て！！ 今はイリア遠征中で戻ってきてないぞ」

「ならば遠征先までいって食事に誘つとするまで」

腕つぶしはユウヤが認めるほど強くこの一カ月の戦場で何度も命を救われたが、色恋沙汰になるとまるで中学生のようなハンクの肩を

掴み抑えるが圧倒的な体格差でユウヤは引きづられながら街を出ていった。

何も無い砂地で見渡す限り枯れ果てた植物や動物の腐った死体や骨しかない、幾多の戦いがこの無名の地で繰り広げられ次第に人は離れていき植物や動物までも死滅させていった。

そして今日この時も変わらず戦いは続いている、真っ白の鎧に身を包んだ騎士達と装備はバラバラの野盗集団……騎士達は連携や陣を使い野党集団を圧倒するはずだったが誤算が生まれる。

寄せ集めのはずの野盗集団の連携は騎士達にも匹敵し統率が取れている、数で勝っている騎士達だったが野党集団の団結力に押されていく。

「射抜け!!」

今まで真正面から戦っていた野盗集団が急に左右に展開すると奥から弓兵 本来近距離で弓は使う武器ではないが野盗集団は逆手にとり騎士達を一瞬驚かせその一瞬こそが狙い目だった。

一人が3本の矢を持ち当てることではなく数を飛ばす事を想定している、弓兵は役50人で一人3本……それは近距離でショットガンを食らうようだった、騎士達の鎧は貫かれ中で悲鳴を上げて倒れていく。

この一回の攻撃で流れは傾き完全に野盗集団が勢いに乗る、騎士の一人が脅えれば隣の騎士も脅えと恐怖は浸食していき隊全体にまで

広がってしまう。

「野盗を率いている者どこだ」

隊を任された騎士団団長ヘクター……40歳、数々の戦場を渡り歩きベルカの中では英雄と言う者も少なくない猛者が最前線に立つ、背中を向けて逃げる部下を一括するように野党数人を愛剣であるカスタマイズしたバスターソードで沈めていく。

「引くな！！ 引けば死しか待ってないぞ！！」

切っ先に三つの穴があり柄にはトリガーがつけられた変わったバスターソードだった、次々に向かってくる野党を切り裂いていくと次第に流れは止まり野盗集団が二つに分かれていく。

砂煙の中を一人の影が現れヘクターは目を凝らし見ると 大きい、影は巨大な何かを片手に握り肩に乗せている、野盗達が周辺を開けると砂煙が吹き飛び影の正体が現れた。

「ぬ、少しは出来そうだなお前」

褐色の肌に冴える銀髪に高い鼻に切れ長の瞳……一目見て美人とわかる、しかしそんな美人などどうでもよくなる物が片手に握られている。



人間の2倍はあるとか大剣というには大きすぎる剣、太さは通常の剣とは比較にならなく馬鹿げた大きさ、とにかく巨大で太い剣を片手で支えてる女にヘクターは顎に手を乗せ焦りを隠す。

「私はイリアだ、お前は？　一応名ぐらい聞いておこう」

「白騎士団団長が一人ヘクターだ、お前がこの集団を纏めているのか」

「まあ見た目はこんなだが話せばわかる奴らだぞ」

ヘクターはどの顔を見ても話せばわかる奴ではない事に気づく、ならば野盗らしくイリアは力で彼らを従え組織した事になる、実力もそうだがイリアに生まれついてのカリスマ性を感じ大きく息を吐く。

この女は生かしておけばいずれ大群を率いてベルカを脅かす存在になると予感し剣を構える、半身になり顔の横に柄を持っていくベルカ独特の構えでイリアを迎えうつ。

「ぬ、やる気満々だな！！　ではヘクター遊んでくれ」

最初の一撃でわかってしまう……剣で受けしつかりと防御したはずなのに体は地面を離れ重力に引つ張られるように加速し飛んでいく、装着している鎧の重量と自分の体重を合わせれば70キロはあるはず。

それを片手で振り抜いた剣で軽々飛ばすほどの怪力、人間の域を出ている、つまりは

「契約者か」

砂まみれになった鎧を持ち上げヘクターは膝を立てる、膝しか立たなく体が休息を求めているが剣を地面に刺して無理にでも立ち上がり構えるとイリアは笑う。

「ぬ、気づくの早いな」

「そりゃ馬鹿げた怪力見せつけられれば嫌でも気づくわ」

長年の経験ですぐに気付き相手の魔法を見抜く能力にヘクターは長けていた、炎や水とある程度の魔法に対処する訓練も詰み魔法無しでありながら今まで生き抜いてきた自信もあるが……今回ばかりはと焦りが顔に出た。

今まで使ってこられた魔法よりもイリアは遙かに達が悪い、炎風水とその手の魔法なら弱点などいくらでもあるがイリアは違う。

純粹に力、つまりは腕力　魔法で肉体を強化し剣術で挑んでくる、これには弱点など無く真正面から打ち負かすしかない。

「ベルカにも骨のある奴がいるのだな」

小手先の魔法ではなく肉体強化をしてきた相手は何人か相手にした経験があるがイリアは桁違い……契約者なのだ、人間が作り出した魔法ではなく本物の魔法、そんな化け物が力を手に入れてヘクターの前に立つ。

「どつしたヘクター威勢が消え焦りで汗が増えてきてるぞ」

喉が渴き体温が上昇していくのがわかる、イリアの剣術の腕はわからないがリーチの差が圧倒的にあり懐に入れる気がしない、一回の攻撃を空振りさせれば勝機が出るがその一回が死と自分の命を天秤に賭けなければいけない。

「……まいったね」

本来この手の相手には絶対に一人では挑まず数で囲むのだが回りの

騎士は勢いに乗った野党に次々に殺され断末魔がヘクターの背中を  
押すようだった、時間もかけていられず勝機も見込みなくと絶望的  
状況で一步を踏み出す。

行くしかない……死の一振りを避けてイリアを倒さねば騎士団は全  
滅を免れない、目の前の悪魔じみたイリアに対しヘクターは走り出  
し構えは無し。

地面に剣をつけ砂ほこりを立てながら一気に間合いに入っていく、  
何も考えず回避を数十年共に戦ってきた己の体に授けてみる事にし  
た。

「ッ」  
「……ッ」

二人の影は重なる。

#### 四

ヘクターの行動を見てイリアは即座に構えを変え下からの斬り上げを選択し地面を削る、地面の破片がヘクターの顔に飛んでいくが気にしてる暇などない、目の前に鉄の塊が迫りくる中腰を落とし地面に鼻がつくように張って間合いを詰めていく。

1秒にも満たない時間の中でほんの少しだけ体を左右に振りヘクターはイリアの死の一振りを避ける事に成功した、頬を切られ血潮が吹き出すが無償の勝利の笑みを浮かべて懐に手に持つ剣を叩き込む。

「ぬ、やるではないか!!」

両手を上げて空振り状態のイリアに一撃入れる事など容易で地面に落としていた顔を上げると視界が急に暗くなる、何が起こったか理解したのは地面に転がり痛みで叫びそうになった時である。

先程まで目の前にいたイリアは片足を上げて驚きの表情で自分の膝を見ている、自分の鼻が曲がっている事に気づきヘクターは立ち上がろうとすると景色が歪む。

「おお……ハハッ凄いな、ユウヤに教わった技はどれも驚きだな」

長年戦ってきたが膝を顔面に叩きこまれた事自体が初めてなヘクター

「は足元を震わせながら立ち上がるが倒れてしまっ、脚で戦うなど発想すらしなかったが実際やられるところも厄介な物だと感心し鼻から血まみれの液を勢いよく出す。

「脳震盪という状態らしいぞヘクター、私も初めて食らった時には驚いた」

景色がグニャグニャと曲がり吐き気が込み上げてきて最悪の気分になる、歪んだ景色の中で銀色が近づいてくると死の羽音のように巨大な剣が地面を削る音が耳に響き心底脅えてしまっ、立つ事すら出来ない。

「ぬ、ヘクター意外に容易周到だな」

地平線の向こうから煙を上げて騎馬隊が突撃してきている、長い槍を構えイリアは数を数える前に部下達に撤退命令を出すとヘクターに背中を向けて勝ち誇った台詞だけ吐き捨てる。

「中々に面白かったぞベルカの騎士よ、次はそのような醜態を晒さないように修行でもしてるよハハッ」

馬に乗るとイリアは風のように駆けていく、部下達も勝利の余韻に浸り歓声を上げてイリアの背中に引っ張られるように走る、王国ベルカの騎士団を蹴散らした事実は野党……傭兵集団アベンジの士気

を上げイリアの実現不可能と思われた幻想が現実を帯びてくる。

ベル力を潰す、王国が出来て以来何千と反乱を起こした人々はいたが全てが壊滅させられた、しかし反乱分子に欠けていたパーツがイリアという指導者を得て今再び反旗を翻そうとしていく。

「ぬははは！！ 痛快じゃないか、吐き溜めのような我らが王国を破り天下をこの手にするなんて」

イリアは20も歳も迎えておらず策士としての才もないがカリスマがある、人を集める魅力を持ち指導者として最も必要な部分に秀でている、統率の欠片もなかった傭兵集団を力でねじ伏せるといふ方は強さを求める傭兵達もその力に魅了され次第にアベンジの数は増えていく。

「おおおおおい！！ イリアアアアアア！！」

本来ならここにいるはずがないハンクが手を振りながら走ってくる  
とイリアは馬を下りて首を傾げる、ユウヤと鍛冶屋に行ったはずの  
ハンクがなぜここに。

「イリア食事に行かないか二人で」

「ぬ、ハンク気でも触れたか」





## 第五章

リズムよく吐き出される息と鼻には草木の心地よい匂いが重なりテツの脚は動き出す、まだ気温が暑い中何枚も重ね着し汗を溜めるようにテツは走る。

呼吸は短く一定のリズムで走り続ける……早朝5キロのランニングをテツは1カ月続けてきた、33歳とロートルな体に鞭を入れてボクサー時代のトレーニングを基礎から始める、各種筋トレからシャドーとジムで習った事を思い出し積み重ねていく。

「だあああああつと!!」

ランニングが終わりニノと二人にしては大き過ぎる屋敷に帰ってくると庭に向かう、庭には大きな木が一つだけあり太い枝に手作りのサンドバックが吊るされていた、皮袋に砂をつめただけが十分に役割を果たしている。

脚を使い回りながら鋭いパンチを突き刺すように出す、一発当てると動く癖を体に染み込ませ後はひたすら繰り返し制度を練り上げていく。

「シッ!!」

パンドラはあらゆる武器を出してくれるが使い手のテツは武器など

使いきれはるはずはない、ならば出来る事を伸ばして行こうと決断しテツはこの戦いに溢れる世界で拳で生き抜く事に決め毎日努力を重ねる。

敵を倒すために。

敵を殴り倒すために。

敵を撲殺するために。

どんなに綺麗事を言ってもテツは殺人の練習をしている、迷いが無いわけではない……しかし殺さなければ殺されてしまう世界ではやるしかない、人間の慣れとは恐ろしいものでテツも慣れてきていた。

「おおいテツご飯だぞ」

エプロン姿でフライパンを上げて呼んでくる二ノを見ると新婚さんのような風景だと何もしらない人は思うだろう、可愛らしい瞳をクリクリさせている二ノはとんでもない殺人者でテツはその同居人と元いた世界では考えられない状況になっていた。

「まずは風呂に入れ汗臭い」

「あーいよ」

脱衣所で服を脱ぎ鏡の前に立つとテツは自分の顔に変わりように気づく、目も鼻も口も形は変化していないがどこかが違うと思ひ鏡の

中の自分の顔に手を重ねているとなんとなくわかった、これが人を殺した奴の顔なんだと。

「おいテツ聞いているのか」

風呂に入り二ノの手作り朝ご飯を食べた後の登校中にはテツはどこかぼんやりしている、元いた世界では生きてるといふ実感がしなかった、毎日交通誘導と家の往復の繰り返しで亡霊のように人生をフラフラと生きていたのだから。

しかし今は嫌でも実感してしまう、人を殺し生き残っているのだから……

「テツお前は環境の変化に対応したつもりで少しシリアスぶってるんだな、自分が不幸ですよって顔に書いてあるぞ」

「うつつうるせえよ!! 無理矢理連れてきたお前が言うな!!」

「そーやって小馬鹿にされて怒る方が似合ってるぞ、お前にシリアスは似合わない」

図星を突かれぐうの音も出なくなりテツは顔を背けてささっと学園の門を潜る、廊下を歩くと何人かの生徒がテツを見てヒソヒソと話出すがいい加減慣れてきてしまう、いちいち気にしても疲れるだけ

なので無視し教室の扉に手をかけて開けてると。

「ういゝす」

いつもの挨拶で当然返事は帰ってこない、もう学園に通い数カ月立つのにクラスメイトさえも返事をくれないとイジメのような状況だった、唯一の友達のエリオは窓際に立ち何やらチラチラと横を見ている。

不思議と思い視線の先を追ってみると人形のように姿勢を固め座っているフェルがいた、あまりにも滑稽な姿にニヤニヤしながら腕を組んだテツがエリオに近づく。

「いよお恋する少年！！ 声くらいかけろよ」

「はっ！！ 誰が誰が好きだって！！ 冗談はよしてくれよテツう、いいか俺はな」

わかりやすすぎるエリオをほっとき席につくと固まっていたフェルの首が少しだけ動き横顔だけ見えてくる。

「おはようございます」

透き通るような声色を聞きテツはフェルの頭を掴みクシャクシャつとし無理矢理顔を自分の方に向かせていく、驚いた表情で振り向いたフェルは目を猫のように見開き微動だにしない。

「朝から相変わらずだなフェル、もう少し明るくしてれば友達も出来るぞ〜なあエリオ」

「ヘッ！！ あ……ああ確かになあハハッ」

片手をわざとらしく後頭部に持っていき引きつった笑顔でテツの強烈なパスを受け取り何とか合わせてみるがどうにも調子が狂ってしまふ。

「おお私だけではなくフェルにもテツというパイプを使い仲良くなるうというのかエリオ、いや天晴れ」

「黙れ二ノ！！ いいじゃねえかよ！！ 友達の友達と仲良くなるなんてよくある事で別に今のパターンも決してやましい事は微塵も何一つないと言っても」

「ほうほう、やましくなければ近づき交友関係を作れば問題ないと、いやはやさすが私達と同じでクラスから変人扱いされてるだけあるな」

テツは自分が巻いた種でエリオと二ノが言い争いしてるが頭を掴んだままで猫のような大きな瞳を揺らしているフェルの顔を覗きこみジーと見ている。

「笑え」

「はいわかりました」

感情の無い笑顔は怖いとフェルに教えてもう事になった、目は見開き口だけ歪むと昔見た日本のホラー映画のようだった、4人で馬鹿な事をやっている教室にマリアが入ってきて学園の一日が始まっていく。

その日の昼休みにテツは何気なくフェルを見る、休み時間というのに黙って座って黙々とパンを口に運んでいる姿はどこか愛らしく後ろから見ていて飽きない。

しかしフェルの後頭部に丸めた紙が勢いよく当たり床に転がりテツは何事かと思ひ飛んできた方向を見るとクラスの半分の女子生徒がフェルを見て笑っている、最初は理解できなかったがなんとなく察した。

「おいフェルいいのかよ」

「気にしてません、まあ友達も作らず一人でいればこうなりますね」

クラスどころか学園でも有名な変人四人組……その中でもおとなしく小さなフェルを狙われるのは必然なのかもしれないとテツは考え、額に血管が浮かぶ、いくら世界が違ってても子供のやる事は大差ない、後日フェルを問いただし話を聞くとテツと知り合う前から続いていたらしい。

テツはなぜ反撃しないと捲し立てたがフェルは何を言ってるといった顔で首を傾げる。

「別に私に被害はありません、それにこんな事で腹を立てては器が

「しれますよテツさん」

理解出来ないテツ眉間に指を乗せて考える、確かにフェルは器が大きいかもしれないとしたかが紙をぶつけられてるだけだ、テツは男子で女子社会の事は知らないし元いた世界でも高校は1年で退学になっっているのでフェル本人がいいと言えば

「おいエリオちょっとこい」

エリオをいつもの屋上に連れていくと柵に背中を預けて両手を乗せてジッと見つめる。

「お前さフェルの頭に紙クズがぶつけられてるの見てきたわけだよな？」

「なんだよいきなり」

「あのさお前フェルの事が好きだよな？」

エリオは臆した、テツの気迫に押し潰されるそうになってしまっ、冷たい声色だがそれだけに只ならぬ空気を出し目を細めて見つめられるとすくんでしまっ。



「あれは女子の間での事だろ、男子の俺がとやかく」

「ああわかるぞ」エリオ、お前は女子のトラブルに首を突っ込むと自分は嫌われるんじゃないかと脅えているわけだよなあ」

柵から背中を離し両手を広げまるで演説でもしてるかのようにテツは歩きだしエリオの回りをグルグルと嫌味たっぷりな言葉で歩を勧めていく。

「まあ気持はわかる、俺だって少しは学生時代は経験してきた……だがな、お前は好きな女の頭に紙クズぶつけられてる姿見てヘラヘラ笑って俺と喋ってた事になるよなあ」

立ち止まりエリオの肩に腕を回し耳元で囁くように言葉を入れていくと肩が震えだす、さすがにここまで言われたらいつものヘラヘラした笑顔は出さず下を向いて拳を握りしめる。

「フェルがよおこんな事で怒ってたら器が小さいって言うんだよ、どうやら俺の器は小さいらしいわ……俺がくるまでずっと一人であいつはクラスの女子にいじめられてきたんだぞ」

「どうぞするってんだよテツ!! 男子の俺らがとやかく言うところじれるぞ!!」

「ハツハお前はそんな事言ってるから今まで見て見ぬふりしてたんだろうが!!」

エリオを残し屋上を出て階段を下りていく時に脳裏に蘇ってくる光景……中学二年の時に友人がいじめられてる時に何もできなかった自分、テツは怖かった、もし助けたら自分がいじめの対象となると思うと足が震え一歩が踏み出せない。

今思い返せば何て事のない理由だが当時のテツにとっては恐怖だった。結局はいじめが悪化し友人は転校と思いだすたびに拳を握ってしまつ、そんな情けないテツを友人は笑顔で手を振り「気にするな、また遊ぼうな」と去って行く姿を肩を震わせ見送り、その夜は声を殺し歯を噛み締め涙に溺れてしまつた。

「何を今更」

罪滅ぼしの気分を抱いてる自分に腹を立てて教室の扉を開けるとフエルにぶつかる紙が増えてる、何の迷いもなく投げてる女子に近づき話を切り出す。

テツだって女性相手だから穏便に済ませたいと思いやめてくれと頼むと。

「おっさんには関係ないでしょ、あの子が文句言わなきゃいいじゃん」

折角整った顔してる女子が歪んだ笑顔になる、回りの女子も拍車がかかったように笑いテツは一瞬だけ鬼の形相になるが……頭を下げて頼んだ、三十三歳の男が二十歳も越えてない女に頭を下げて頼む「フェルはほつといてやってくれ」と。

「おっさん調子乗ってるでしょ、いつとくけどフェルだって人形見たいでそんな強くも　ッ」

テツも意識してなかっただろう、無意識に目の前の女子を殴っていた、それも加減なしの全力で腕を振り抜き体ごと飛ばし形が変わった鼻に驚いてる女子の頭を掴む、出来るだけ顔を近付けて今度こそ鬼の形相で睨む。

「おい餓鬼もう一度言ってみろ、フェルが弱いだあ？　てめえあいつが戦ってる所見た事あんのかよ」

「ああ鼻が……私の……」

自分の事はいい、三十三歳でここまで落ちぶれたんだ馬鹿にされようと慣れてる、しかしフェルは強いのにクラスのいじめを器が小さいと言いき慢しているんだ、年頃の女の子が気にしないわけがない……テツは感情移入を人より何倍もしてしまいフェルを馬鹿にされた事だけは許せない。

後ろから金属音が聞こえ振り向くと女子たちが自分の得物を構えている、それも訓練用ではなく真剣だ、前々からテツの存在が気に入らない連中がいたんだろう、皆殺気だつてるがテツは笑ってしまふ。

「お嬢さん方そいつで俺を殺すかい？」

「鼻があ……グウウウ！！ おっさん殺すぞ！！」

鼻を抑えながら立ち上がる女子の顔面に蹴りを入れたのが合図となり一斉に剣を持った女子が二人襲いかかってくるが間合いを殺しボディに一発つつ入れて悶絶させる、ボクサーのパンチを体を少し鍛えた女子が耐えられるわけではない。

一瞬で二人沈めたテツを前にし圧倒的に数で有利な女子たちが臆する、教室の空気は張り詰めて男子達は何事かと思ひ見るが床にうつくまる女子を見て固まり、戦いに参加してない女子たちは震え中には涙を浮かべてる者もいた。

最初に鼻を潰され顔まで蹴られた女子が立ち上がり椅子を片手にテツの頭を殴る事に成功する、背後からの奇襲もあり見事に直撃でテツは頭から血を流す。

「何してんのよ！！ こんな落ちぶれ一人に！！ 私達は騎士になるのよ」

多勢の前で膝をついてしまうテツを見下し女子達が笑って武器を出してくる、まずは肩を槍で刺され苦痛の声が出てくると女子達の笑い声でテツは包まれていく。

次第に視界が暗くなり血が足りないのか意識が遠のいていくと。

「考えてみれば俺もクラスで変人扱いで落ちぶれ組だもんなあ〜テツ加勢にきたぜ!!!」

エリオが木刀を持ち一人の女子をブン殴っていた、飛びかかっていた意識に気合いを入れられるようにテツは起き上がり笑う、薄い赤毛で眼鏡の少年が好きな女のためになりふり構わず戦ってる姿は美しいとさえ見えてしまう。

しかし狭い教室で多勢に無勢は不利で二人は囲まれ切っ先の先に立たされてしまう、もはや教室の喧嘩なんてレベルではなく命のやりとりになっていく。

「おっさんと落ちぶれエリオがあ!!!」

鼻の形も変わり醜い顔となった女子が剣を振り被るが武器に囲まれた二人に逃げ場はなく、回りで見ていた誰もが目を背けてしまったその時に ……蛇は走った。

振り被った剣だけではなく囲んでいた全ての武器を絡めとり地面に叩きつける蛇、正確にはワイヤーつきの剣だが女子達には本物の大蛇に見えただろう。

「やめてください」

座ったままテツ達に背中を向けフェルは口を開く。

まだ日が高いというのに教室の気温が一気に下がったように感じテツとエリオを囲んでいた女子達の顔が青冷めていく、今まで馬鹿にしていたフェルの背中が恐ろしく見え足の震えが止まらなくなる。

「やめてください」

繰り返すように言う……別に自分がどう思われようとよかったはずなのにテツが傷つけられる所を見たら自然と武器に手が伸びていた、テツが馬鹿にされ傷つく姿を見ると腹が立ち奥歯を噛め締めていた。

「なな何してるんですかかかか!!」

タイミングよくマリアが教室に入ってくると血を流すテツに膝をつくエリオ、傷だらけの女子達を見て腰を抜かす、マリアはいい先生であろうと今まで努力を惜しまなかったが崩壊されたような気分になる。

おそらく……間違いなくトラブルの元はテツと考え肩の傷口を抑えるテツの肩に足を乗せ見下しながら先生とは思えない顔を見せてしまっ。

「何をしたんですかウジ虫、私の可愛い生徒に何をしたか答えなさ



い

「あだだだだ！　てめえババアふざけんな！！」

「私は何をしたか聞いてるんですよ、命乞いなら後で聞いてあげます」

見かねたエリオが立ち上がると事の事情を説明する、女子達はすっかり小さくなり全てを聞いたマリアは腰に手を当てて大きく溜息をついてしまう、教室に遅れてきた理由もあり仕方なくテツに手を貸す。

わざわざ肩を掴み起こす辺りは容赦なくテツに皮肉たっぷり笑顔をプレゼントしながら。

「学園長が呼びです、ここは私に任せて行きなさい」

「ありがとう　とよ三十路手前！！」

「パンドラも持っていきなさい、それから女性は歳ではなく外見が美しければ……待ちなさい！！」

パンドラ片手に廊下に飛び出すと角がぶつかってくる、契約者にな

つたせいか武器の言いたい事はなんとなくわかってしまい、これから言われる事に嫌気がさす。

「人間、お前は私の奴隷なの？ わかる、お前が負けるといふ事は最強である私が」

「失礼します」

パンドラの小言を聞かないように足速くに学園長の部屋の前で声を上げて扉を上げると黒いソファーに座りテーブルに足を乗せ変わらずにいた、対面に座ると学園長は拍手をし笑いテツは不快な思いをする。

「ククツまさかお前が本当に契約者になるとはな、ハハツちよつと見せてみるよ」

テツが渋々渡すと新しい玩具を手に入れた子供のように楽しげにパンドラを眺める、テツからパンドラの魔法を聞くと更に笑い遂には腹を抱えて笑い転げてしまう。

パンドラは一応は無言を通してるが契約者であるテツは怒りを感じ嫌になり視線を落とす、今日についてない……その一言に尽きる。

「お前この国の王様に呼び出されたぞ」

「ん？　こんなおっさんに何の用だよ王様は、よほど暇なのか」

「アホか！　紛いなりにもお前は契約者になったんだ、つまりは強力な戦力になるんだよ！！　まあお前の報告をしたら興味を持ったのもあるが」

知るかと言いたかと思いい傷口を抑えると痛みがなくなってる事に気づき、傷口周辺を触ると塞がってる事実には驚愕してしまう、驚異的な回復力にテツは嬉しさはなく自分が本当に化け物になった気分になり冷や汗が出てしまう。

「俺は人間だ」と心の中で言い聞かせ学園長に向き直るとパンドラを返してきた。

「二ノはもう向かっているからお前は後を追え、馬車を用意してやる」

「二ノの野郎朝から見当たらないと思ってたら」

「一応言っとくがベルカの王様に気に入られれば金なんていくらでも貰えるぞ、契約者ってのはそれだけ貴重なんだ」

パンドラの取っ手を勢いよく持ち上げ背中に預けると学園長室を出る、我ながら失敗したと反省が時間立つにつれ込み上がってきた、女子数人を殴り鼻まで潰したんだ……クラスでの立場は絶望的な立場で間違いなし。

反省はするがフェルを思い出すと後悔はまったく感じずテツは用意された馬車に足を運ぶ、この強大な王国の頂点にいるベルカ王に会いに行く。

## 四

扉を一枚開けると別世界に繋がっていた、床は大理石で王室に踏み込んだテツを映しだしガラスの柱が赤い絨毯になぞり一定の間隔で置かれ言葉も足も出ずに息だけを飲んでしまう。

ここまでくるまでに豪華な通路や部屋を見て驚いたが、それすらも霞んで見える、案内人のメイドが一例し去っていくと王室の奥から声が聞こえてくきた、声色は高く少年にも聞こえテツは耳を疑う。

「いやあ待ってましたよ、会えるのを楽しみにしてました」

真っ赤な背もたれの玉座に座るのは金髪の優男……それがテツの第一印象だった、子供のように手を叩き喜び立ち上がるとテツまで近づき肩を押し王室中央にくる。

玉座の後ろには巨大なステンドグラスがあり何人もの聖人が描かれ日光と混じり輝いている、これが本当の金持ちかとテツは思い王室にきて数分で圧巻されてしまう。

「んで王様さんよ、こんなおっさん呼び出して何の用だ」

テツの言葉を聞くと一瞬固まったような顔になり笑い転げてしまう、体をくの字に曲げ口を開けて笑いまくり近くにいた家臣達が咳き込みする。

「ハハハッ！　これや失礼、皆さん聞きました？　私にこんな口聞いた人は生まれて初めてですよ」

「ハッハッ俺もこんな子供のような王様は初めてですよ」

皮肉を口に出すと即座に玉座の横に配備された槍兵の切っ先が喉元の皮一枚を突いた、速さタイミング申し分なく気を抜いていたテツは見事に動きを封じられると、王がその槍を自ら掴み下ろす。

「私はルーファス、よろしくテツ君」

「ああよろしくルーファス君」

「さて本題に入りましょう、まずは貴方の力を見せてもらいたい」

一人の男が現れると部下達は道を譲りテツの前に立つ、髪は薄茶色の顎髭男……額から目蓋を通り頬まである縦傷が印象的で片目を閉じている、茶色のシャツとズボンと王室には少し汚れたように見えた。

「彼はヘクター我がベルカ騎士団一の騎士、つまり一番強い男です、彼と戦ってください」

「勝った褒美は何かな？ 金は当たり前としてプレゼントがあるんだよな？」

おそらくテツ以外は誰もが口を開けて呆れただろう、王に対し失礼な言葉を言いベルカでは英雄とまで言われてるヘクターと戦える荣誉に褒美までよこせと言うその態度に。

手に持つ木刀を震わせヘクターはここまでの侮辱に耐えられず切っ先をテツに突きつける。

「ルーファス様、いくら契約者でも礼儀を知らない輩は私は気に入りません」

「礼儀を知らないのはどっちだ？ 人を呼び出していきなり戦えだあ？ 王様よお人の上に立つ立ち場ならもう少し考えようぜ」

表情が凍りついてたルーファスは人生で初めてこんなにも傍若無人な男と出会い興奮を抑えられないでいた、見てみたい……こんなにも強気に出られる理由を、強さと思う。

「勝てば1年は遊んでくらせるだけの金貨を用意しましょう、負けても失う物はないテツ君にはいい話だと思いませんか？」

言われてみれば確かにと納得したテツが頷くとルーファスが一応のルールを説明する。

勝負はヘクターは木刀、テツは拳と契約者としての力を使わず倒さなければならぬ、不利に思えるがテツはベル力最強の男と戦ってみたい欲求に勝てず要求を飲み……ヘクターとテツは戦う。



## 五

何年ぶりだろうか、こんなに胸が躍るのは…… テツは座り薄い縄を手に持ちヘクターは数回素振りをし木刀を体のに染み込ませていく、ベルカの英雄とどこぞの馬の骨とわからないおっさん。

ルーファスは見ているだけで口元が緩みテツに期待してしまう、部下達は呆れた様子で見守っている、誰もが馬鹿らしいと思いき勝負の結果なんて見るまでもないと。

「おゝテツがきたな」

口元に肉汁をつけ骨つきの油たつぷりの肉にかぶりつきながら二ノが現れるとルーファスは楽しげだった顔を冷ましてしまう、突然訪問してきて食事をさせると言い女性一人では到底食べきれない量を食い荒らしたからだ。

「二ノ、食糧代は高くつきますよ」

「そんなケチ臭い事いつてるからいつまでも魔王に好き勝手されてるんだぞ、それよりどうだテツは」

「まだ見てないから何とも……まあでも誓ってもいい、テツ君は負けるでしょう」

二ノから得た情報は拳で戦う戦法、確かにこの世界ではない戦い方だがそんな小手先の技術ではヘクターに勝てるなどルーファスは微塵も思わない、別にテツを小さく見てるわけではない。

王国ベルカで英雄とまで言れるまで登りつめたヘクターが負ける姿は想像すらできない、そんな自身満々のルーファスの顔を見るなり二ノは鼻息を荒くし得意気に一言だけ言う。

「テツはハンクとやりあって生き残ったんだぞ」

「……あのハンクとですか」

薄い縄を両拳に巻く作業をしていると隣に置いていたパンドラがカタカタと震え勝手に左右に飛び回る、言いたい事はわかりテツは無視しているが自分を最強と名乗る少し頭の弱いパンドラは言いたい事を口に出す。

「人間、私の力を使うならまだしも何で素手の勝負に持ち込んだ、前々から馬鹿だと思っていたが救いようのない馬鹿だな」

「うつつうるせえな！！ お前に馬鹿と言われると無性に腹が立つんだよ！！」

「策はあるのか？ お前とあいつとじゃ力の差が開きすぎている、お前は私の力が無ければちっぽけな羽虫同然なのを忘れないでちょうだい」

テツだって男の子である、ここまで言われたらやってやろうと思いき勢いよく立ち上がり縄で武装した拳を合わせヘクターに近づいていく、一歩近づくにつれなぜヘクターが英雄と呼ばれているのかわかる。

視線を受けるだけで足がすくみ膝が笑ってしまいそうになる、野生の虎が目の前で獲物を前に涎を垂らしてるかのように見え恐怖を抑えテツは構えていく。

「準備はいいのか？　なら始めても構わないな」

「どっ　ぞー！　うおおっ」

テツが答えると同時に突進していき上からの一振りが繰り出されるが何とか回避、床の大理石は砕け散りまともに食らったら骨の一本は覚悟しないと思いい汗が冷たくなる。

大振りの攻撃を前髪をかすらせるように避けたテツの行動に驚きヘクターが目でテツを追った瞬間に顔が左右に跳ね上がる、何をされたのかわからないが木刀を横殴りに振り抜き距離を離す。

「目がいいんだなあんだ、片目でよく追えるよ」

顔が焼けるように熱くたった二発もらっただけで腫れてる事に気づき驚く、二ノから聞いていたとはいえ実際戦うまで馬鹿にした所があつたが、いざ戦うと姿すら追えないとは。

距離を離し軽く飛びながら様子を見てくるテツに対し再びの突進、大きく上に振り上げ一撃の元に粉碎するヘクターが最強たる構えの一つ。

「遅い！ー！」

木刀を振り下ろす頃には目の前にいたテツは消えて数秒後には腹部に激痛が走る、木刀には近すぎる間合いに入り込まれヘクターはサンドバツクのように何発も打ち抜かれていく。

苦し紛れの一振りをするとう度テツは距離を離し表情一つ変えずに軽快にステップを刻んでいく。

「まいったね」

有利に戦いを進められてるテツは心の中で焦っていた、ヘクターはテツより頭二つに抜けて大きい、しかもテツには一撃で倒せるほどのパンチはなく一発づつ刻んでいくタイプだ。

体格差に自身のパンチの軽さ……しかも相手はベルカーの使い手ともなると長期戦になれば勝機は薄れていく、こちらの動きに目が慣れていく前に勝負をつけないと痛い目を見てしまう。

【相手の弱点を攻めるのは卑怯じゃない】ふとジムのトレーナーの言葉を思い出す。

「グウ、中々面白い曲芸だな」

「そつだろ？ ならもっと曲芸を楽しませてやるつ」

テツはヘクターの塞がってる片目の方向に飛んでいく、当然ヘクターは目で追うが視界半分塞がっている状態では限界がある……初めでこんな戦法をとる男と出会い苛立ちが増していくと。

見えない片目の暗闇から衝撃が伝わり気づけば後退していた、見ていた部下達からもドツと驚きの声上がり座っていたルーファスを思わず立ち上がってしまう。

「テツよもつと自信を持って、お前はベルカの英雄の顔を好き勝手殴り後退させたんだぞ」

腕を組み二ノが誇らしげに呟くとそれが背中を押すようにテツは体を左右に振りながら一気にいく、的を絞らさせずに容赦なく英雄の顔を殴りまくる光景を一番驚いていたのはヘクター自身だった。

## 六

圧倒的に有利に進めているのにテツには余裕どころか恐怖が芽生えてしまう。何発も殴り顔が腫れ上がっているのにヘクターは臆する事なく虎視眈々と一撃を狙ってくる姿勢がテツは怖い。

「シッ！！」

更に先程まで直撃していたパンチが防がれてきている。相手の見えない角度から打っているはずなのにヘクターは木刀を盾変わりに使い直撃を防いで反撃の一振りまで出してきた。

大振りな一撃など当たるテツではないが深刻な問題が体に負担をかける。戦いが始まって十数分テツは動きっぱなしで息が切れ汗が吹き出て呼吸が乱れてスピード落ちていく……これ以上は危険と判断しテツは踏む込む。

「おっしゃ！！」

セオリー通りにヘクターの塞がった片目側から一気に間合いを詰めて大きく拳を振り被る。いくら軽いパンチとはいえヘクターはもらいすぎているために足にきていている事は見てわかり、勝負の右ストレートで狙い打つ。

「ようやくきたな」

腫れ上がった顔を歪ませ笑うと木刀をテツの脇の下に突き刺す、そのまま振り下ろされた拳の手首に木刀を絡ませると……テツの右腕がガツチリと固まり動かなくなった。ギチギチとしなり骨が悲鳴を上げた瞬間にテツが見る世界は反転した。

気づくと背中を強打し視界がグニヤリと曲がっていく。頭を強く打った証拠だ。瞬時に何をされたか考えると答えは一つしかない、木刀を腕に絡ませ投げられたのである。

「んなアホな……うごお!!」

素手での戦いの概念がないこの世界では投げ技などないと考えていたテツは驚く、投げ技は何も素手だけではなく武器を利用した技も存在するのだと……そう考え身を起こそうとした瞬間に脇腹に衝撃が伝わり肋骨の悲鳴を聞く。

木刀で打ち抜かれた衝撃を利用し勢いよく転がり間合いを離し起き上がる事に成功するがベルカの英雄は見逃さない。木刀が届き拳が絶対に届かない間合いを維持し剣術を叩きこむ。

「筋はいいがまだまだ、出直してこい!!」

肩から始まり脇足と全身を打ち抜かれテツが倒れそうになっても下





「医師に診せましょう、二ノ中々面白い男を連れてきましたね」

「欲を言えば勝ってほしかったが……さすがベルカの英雄は違うな」

「気にしないでください、それよりも問題はその武器だ」

転がっていたパンドラに近づくと腕を組み首を傾げてしまう。到底武器とも思えない外見に疑問を抱くが爪先で軽く蹴ると妖艶な女性の声が箱の中から出てくる。

「私を足下にした事を後悔させてやる、あの人間に私を持たせて再戦させてちょうだい。肉片一つ残さないわ」

「やれやれ参りましたね、この気丈なお嬢さんも運んでください」

テツは微かに残った意識の中で考える。何度目の敗北だろうか？ 戦いもそうだが……学業で負け社会にも負け人生にも負けてきた。

いつしか悔しいとも思わなくなり最後には自分にすら負けていた…  
…ヘクターに明確な敗北を味わい、今まで三十三年間の自分が走馬  
灯のように蘇り奥歯を噛む

情けない。

## 七

足が重く一歩進むたびに視線は下を向き溜息ばかりが増えていく。道路の歩道をトボトボと歩きテツは仕事帰り……別に仕事で疲れていいるから落ち込んでいいるわけじゃない、これから帰宅して一番に顔を合わせる親になんて言えばいいか考えると頭が痛くなる。

「君さ仕事覚える気ある？　これで何度目の失敗？」

上司にそう言われ有無を言わずクビ、仕事は覚えないう同じ失敗を繰り返すわとクビになる理由なら山ほどあり仕方ないと思う。

学校の学年には数人いる何でも出来る奴、学業はもちろん運動も出来るかと完璧に近い存在……テツはその逆の人間だった。小学校で学業をサボり中学になれば授業についていけず運動も人並み。気づけば十六歳で高校退学になりバイトを始めるが、簡単な計算どころか九九も出来ない。

何度もクビにもなり最後に頑張ろうと決めたバイト先でもいつも通りの結果。もう悔しさや悲しさもなく『ああまたか』と思うだけ、負け犬根性が染みついたテツは年季を感じさせる階段を登り帰宅する。

「ああおかえりテツ。仕事お疲れ、今ご飯出来るからね」

母親はテツが仕事決まって以来機嫌はよく毎日笑顔で送り出してくれる。夕ご飯を鼻歌交じりで作る母親の背中を見るだけでテツは息が詰まりそうになっていく。

「母ちゃんあのさ……俺、またバイトクビになっちまった」

八畳一間で台所つき風呂はなし、父親はとうの昔に去っていき女で一人で育て上げた息子が何度目かのクビ報告。母親は包丁の手を止めて振り向きもせずに一瞬止めた手を動かし声色を少しだけ上げた。

「もうご飯出来るから座ってて、またクビになるなんてどうしようもないね」

「あ、うん、わりい俺馬鹿だからさハハッ」

畳みの上に座り丸い木製のテーブルに手を置き、待っているとリズムよく包丁の音だけ響く。何度経験しても慣れないクビ直後の重い空気……肩を落としていると包丁の音に混じり母親の声が聞こえてくる。

「ごめんね、子育て失敗したよぉ～あんたは悪くない！！ 気にせず次頑張んな」

「……ッ！！ 母ちゃんちよい外出てくるわ、すぐ帰ってくるからさ」

「こらー！！ 人が作ったご飯食べてからにしないで！！ テツ」

逃げるように家を出たのは重い空気に耐えられないわけではない。テツは見られなくなかった。丸いテーブルの上に涙を落としグシャグシャになった顔を見られるのが嫌で飛び出した。

全力疾走で近所を走り回り腕で瞳を隠す……近所で噂になるだろうが知った事ではない。テツはある小さな公園にいき声を殺し静かに泣いてしまう。

「違うんだ母ちゃん！！ 俺が、俺がクズでどうしようもない奴だから……ぐうぐうっ！！」

燃えるような赤い夕焼けを浴びてテツは肩を震わせ泣いていく。

違っんだ母ちゃん、俺がよ俺がよ……俺こそごめんよ、こんな子供で

「おいテツ!! 起きろ!!」

「いでえええええ!!」

頬に痛みを感じ起き上がると少しの揺れを感じ小さな窓から景色を見ると馬車内とわかり、まだ痛む頭や体に顔を歪め隣で頬を膨らます二ノに気づく。

「まったくベルカ最強の騎士に勝てると思込んだ私が恥をかいたではないか!!」

「うるせえな！！ あんな化け物みたいな親父に勝てるかよ！！」

「人間まずは最強たる私に言う事はないのか」

隣に置かれたパンドラがやたらと最強を強調してテツに角をぶつけてくると毎度の事ながら嫌々答える。

「ああ最強たるパンドラさえいれば勝てたでしょうねえ〜ああ最強のパンドラ様さえいればあ〜悔しいです」

「キイイイイイ！！ 人間貴様最強たる私を愚弄したな！！」

肘をつき流れる景色を見ながら帰りの馬車内でテツは先程見た夢を思い出し、昔情けない自分に涙を流していた事が懐かしい。

母親は今どうしてるだろうか？

ちやんとご飯を食べるだろうか？

生活は出来てるだろうか？

およそ今心配しても遅い考えが浮かぶが、こうして離れてみて母親の偉大さがわかり情けない自分に笑えてくる。テツはもう母親に合わせる顔なんて持っていないのだから……たとえ元の世界に戻れたとしても人殺しの罪は消えない。



「キイイイ人間！！ 話を聞け」

「キイイイ！！ ハハツハこの箱面白いなテツ、少し貸してくれ」

「小娘触るな！！ 数多の最強伝説を作りあげた私に……やめて！！」

背もたれに背中を預け痛みを忘れるようにテツは瞳を閉じて再び睡魔の誘惑に身を預ける。意識を手放す前に一言だけ漏らす。昔の夢を見たせいか感傷的になってしまう。

「母ちゃん」

## 第六章

教室の扉を開けて軽く挨拶し返事はなし。いつもの事と慣れたように席につくと隣で二ノも座り大欠伸をし、つられてテツも大きく背伸びをし欠伸をかく。

前の席では少しだけ首を動かし横目でチラチラとこちらを見て「おはようございます」の一言にテツは無理矢理首を掴み体ごと振り向かせ「おう！！ おはよう」といつも通りの朝。

タイミングよくエリオが頭をボリボリかき、わざとらしく欠伸をかきながら「おおはよーすテツ、二ノ……フェル」とまだ慣れてない挨拶をフェルにすると、ちょこんと頭を下げられたエリオは少しだけ赤くなる。

「不思議なもんだな」

両手を頭の後ろに回し椅子を傾けグラグラとバランスを取りながら後ろの席から教室を見渡すと、元いた世界と大差ない風景……しかし学んでるのは殺人術、いかに効率よく敵を殺せるかというテツからすれば狂っている。

しかしテツ自身も狂っていると自覚していた。だんだん人を殺す事に迷いがなくなってきたいて恐怖すら薄れてきている。この世界は「弱肉強食」とい言葉がそのまま具現化したような世界だ。

「ういゝすお前ら今日は俺が直々に見てやるから外出ろ」

教室に入ってきたのはマリアではなく学園長。年齢とは反比例した筋肉と健康的な肌を輝かせ手を叩き生徒達を外に誘導していく。

外に出ると曇空で少し肌寒い。生徒達は慣れたように他の生徒と組んで戦い乾いた木製の音を響かせ練習用の武器で訓練を初めていく。学園長はドツシリと地面に胡座をかき顎をさすりながら一人一人の動きを見ていた。

「がが学園長！！ 教室にいったら誰もいなくて授業ボイコットされたと思いましたよ！！ てか勝手に」

「おおマリアか、まあたまには直接生徒達をの訓練を見るのもいいじゃねえか……やはり飛びぬけてるな二ノは」

今日は珍しく二ノに何人かの男子が挑んでいた。怖い物みたさか自分が強くなったと勘違いしたのか意気揚々と挑むが結果は地面に転がる事になり、もう数人が二ノの足元に転がり短い黒髪を揺らし表情一つ変えず首を傾けポキッと音を鳴らす。

「よつ二ノ！！ 今度は俺と遊んでくれよ！！」

「む、エリオか、懲りない奴だな」

実はエリオが一番二ノに挑み続けていた。同じクラスになって以来ひたすら挑みひたすらに負けてきたという歴史を持つ。手には木製で作りあげた自作の槍を持ち腰を落とし構える。

腰に手を当てわざとらしく溜息を吐く二ノに対し隙をつくような一突きを繰り出すと上半身だけのけぞらせ避けられる。いつもなら体ごと後ろに飛ばすはずとエリオが驚くと二ノは笑う。

「フツフツ驚いただろう、テツの動きを真似してみたんだ」

「真似ただけでそう簡単に上手くいくかっての!! 今度こそ勝つ!」

槍の特性は徹底した間合いの広さ、特に剣相手なら自分だけ安全な所から一方的に攻撃出来るという最大の利点があるはずなのだが…  
…二ノ相手だとそれが嘘のように思えてくる。何回突こうが避けられ防御に徹してるかと思えば、いきなり仕掛けてくるその速さに。

槍使いは絶対に懐に入られてはいけない。長物だけあって懐に入れば振り回せずに後手に回るしかない、だからエリオは必至に突きの弾幕を張り二ノの動きを制限するが、嘲笑うかのように弾幕の隙間をすり抜けてくる。

「こいつがテツから盗んだ足さばきだ!」

「んな見ただけで盗めるか……っぎあ!!」

確かに一瞬テツの動きと重なり突きを紙一重で避けられ、気づけば地面に両膝をつき口の中から酸っぱい液を垂らしていた。

呼吸が止まり口から垂れる涎がやたらと遅く見えてしまう……おそらく腹。エリオの一撃を避けて懐に入ると同時に腹を打ち抜かれたのだろう。数秒止まっていた呼吸が戻ると目眩と吐き気が同時に襲いかかりエリオは自身のダメージを再認識した。

「ハア　　ハ……ハツ！」

騎士学園に入る一年前にエリオは急に父親から呼び出され槍の稽古が始まった。父は槍の心得が多少はありエリオのような素人に教えるのは十分、エリオもどんどん強くなるのを実感し稽古が楽しくなり腕を上げていく。

そして卒業と共に学園騎士の入学願書を渡された時になぜ父が稽古をつけてくれたのかを初めて理解する。寮の手続きまで終えて後はエリオが家を出ていくだけ……勉強も最低ラインで他の取り柄なしの子供を親は戦いへの道へ導いた。

今まで勉強をサボってきた利子を払うようにエリオは家を出て一人騎士の道へと足を踏み入れると、同期で入った連中には負けなかった。この時ばかりは自分を捨てた父に感謝したが、二ノと出会う。

「む、まだ立つか。もうよせ顔色悪いぞ」

「へへッまだまだ」

速く重く鋭い。およそ剣の使い手が必要とする技術を二ノはどれも持っていた。初めて闘った時は今でも忘れられない、今まで同級生を何人も倒してきた必殺の突きを簡単に避けらると同時に意識が飛ぶ……何をされたかさえわからなかった初の敗北。

それから何度も挑み何度も倒され一度の勝利も貰えず、今日この瞬間もエリオは挑んでいる。

戦い以外で生きる術がなく、戦いを奪われたら一般人以下になるのが怖くエリオは鍛錬を積み上げて　突く！！

「む」

エリオの突きを避けるのではなく受け止めた二ノは不思議な現象に目を細めた。勢いが増している、先程これ以上ないくらいの手ごたえで腹を打ち抜いたはずなのに突きの速さが上がっていく。

「今度こそ勝つぞ！！」

「エリオお前のその執念は凄いな」

突きの動作を小さくし絞りを最小限の動きでエリオは畏を張る。

当たってもダメージにすらならない突きだが、こつも連続で好き勝手突かれると二ノは苛立つはず、何回も戦ってきたエリオには二ノの性格がわかる。

我慢できずに二ノが防御を無視し突っ込んできた時こそ最大にして唯一の勝機。残り少ない体力を注ぎこんでのカウンターを狙う。

「ええい鬱陶しいわ!!」

軽い突きを無視するように大きく木刀を振り上げてきた二ノを見た瞬間に心の中で笑う。大きく体重を後ろに溜めて脚を地面に突き刺すように力を溜めていく、一秒に満たない一瞬を力を溜める時間に使い大きく息を吸う。

対する二ノは突然動きを変えたエリオに驚き畏にかかった事を悟るが後退はしない。もう後ろに下がれる間合いではなく前に行かなければ負ける自分の姿が簡単に想像できた。

「もらったぁ!!」

「ハッハ!! 楽しいなエリオ」

突きと上からの振り落としの軌道は混じり合つと……エリオは確かに見た。突きに対し二ノは勢いを利用し横に一回転し突きの軌道から逃げていく姿が。ありえない 走ってる最中に横に避けるなら



わかるが、回転し勢いを殺さずそのまま攻撃に移るなんて。

そう思った直後にエリオの肩に稲妻のような一振りが叩き落とされ地面に崩れ落ちた。全身が麻痺したように痺れて、痛みで顔を歪めたいが表情すら動かせない。

「肝を冷やしたぞエリオ。また遊ぼう、お前とは楽しいからな」

「ガッ！！　クソつたれ！！　次こそは……」

誰も見てない片隅でのエリオと二ノの戦いを眺めていた学園長だけは歡喜の口笛を鳴らし満足する。隣で見えていたマリアも驚く、二ノの圧倒的強さではなくエリオの秘められた力に。

「マリアあの小僧なんていう奴だ。中々面白い奴だな！！」

「エリオです。確かに見どころはありますが、あれでは戦場では生き残れないでしょう」

「かぁー厳しい事言うなやあ〜エリオが駄目なら他の生徒も大抵駄目だろうが」

面白い物が見れて満足だったが学園長の一番のお楽しみは……契約

者になりベルカ最強の騎士に一矢報いた男テツである。目を凝らし探すと大きな木の下の木陰で少女と向き合っていた。

「相手はフェルか、マリアどっちが勝つか賭けようぜ」

「当然フェルですね。あの子は二ノと同等かそれ以上ですから」

「ああ嫌だねえ、歳をとると守りに入り確立高い方に賭けるその姿勢が」

「じじじじゃあ学園長はテツ君に賭けるんですね！！ いいんですね！！ お昼ご飯一カ月分ですよ」

巨大な樹木の下でテツは息を整える。剣術に関しては素人なテツだがフェルの桁外れの才能に気づき、流れる汗が冷たくなっていく。

腹に二発……テツが最大のスピードと攪乱で拳を放り込みフェルの頬を霞める瞬間に木刀は二振りされた。脇腹とヘソに喰らい動きが鈍るが即座に離脱し距離を離す。

テツの拳は見切られ始めていた。数回見せただけでフェルはスポンジが水を吸収するように学習し、即座に実行と才能としか言いようのない事をやってのけてきた。

「人間。お前は本当に私がないと駄目ね」

「……うるせえ」

木陰に置いてあるパンドラの軽口にも気を回す余裕がない。才能もそうだが更に最悪が積み重なる。フェルの小柄から考えられないほどの怪力、打ちこまれた瞬間に骨の悲鳴が聞こえ体そのものが宙に流された。

「いきます」

木刀をダラリと地面に向かい垂らし一気に駆けてくる。その無防備な姿勢に木刀を持つ逆側に移動し刺すような左を繰り出すと、見事に顔面を捕えるが次の瞬間に死神の鎌のような横殴りの一閃が走る。モーションが少ない左ジャブのおかげで攻撃後の隙は少なく避けるがテツは精神的に追い詰められていく。

「攻撃後の隙を狙いましたが、なるほど牽制でしたか」

「足を使うボクサーを止める上等手段だな。まあ対策は出来てるんでね」

軽く飛んでまだまだ行けるぞとアピールするが強がりではない。最初の二発で体が宙に浮く打ちこむを喰らってる時点でテツの体力はごっそり奪われていた。鼻血を垂らすフェルの顔はどこか可愛らしいと思つがテツは戦闘開始数分で追い詰められる。

戦闘技術なぞ比べるまでもなく、唯一の有利と思われた体格差は圧倒的な怪力でフェルに分がある。

やれやれと溜息を漏らし肩をすくめると樹木から数枚の葉っぱが落ちてくる。フェルから目を離さないようにしていたが一枚の木の葉が視界をさえぎってしまう。

「だあああああ！　ちくしょうが！　！」

一瞬木の葉に隠れたフェルの姿は次に見る時には目前に迫り横から木刀が空気を切り裂く音が聞こえてくる。スウェーで避けると目の前の空間が歪むように見えるほどの鋭さで震え上がってしまう。

空振りしたフェルめが右の大砲をフルスイングで振り下ろすと、フェルは空振りした勢いを止めず逃走に利用すると見事に避け、残ったのは大きく拳を振り抜いたテツ。

「糞が！！　ちょこまかと！！」

「テツさんには言われたくありません」

互いに次の攻撃の動作に移りテツは体の軸を回しフックに、フェルは振る軌道ではなく突く体制に入り

「いけえテツ！！」

「フェルさん私のお昼ご飯一カ月分を奪いとってください！！」

観戦者二人の願いは

片方だけ叶えられた。

「だらつしゃああああ!!」

テツは拳を振り抜くよりもある事に優先した。それはボクシングで反則と言われる行為、相手の足を踏みつける事……いきなり足を踏まれ攻撃を態勢を崩したフェルが戸惑った一瞬に叩きこむ。

狙うのは顔面ではなく顎。鋭く振り抜いた拳は綺麗に顎に直撃しフェルの脳は左右に激しく揺らされ意識は闇の中に沈んだ。勝利を確信すると力が抜け座り込むと一気に汗が吹き出す。

「ああああああああ!! 立ってフェルさん!!」

女性とは思えない雄たけびを上げて地面を何回も叩く光景に学園長は高笑いし勝利の拳を上げる。テツは腰が抜けたのかそのまま大字になり木陰に流れる冷たい風の感触で息を大きく吐いた。

「人間、実戦なら負けてたね」

「おっしゃる通り、こいつ本当に人間かよお」

たった数分の戦闘で力を使い果たしたのかテツは目蓋を閉じる前に横たわるフェルを見て満足げに眠りに……

「おらぁ雄豚がああぁ!! 授業中に居眠りですかぁ!!」

「ババア!! どこから現れた あぶうは!!」

汗ばむ気温の中で風が通り抜けると少しだけ汗が引いてくれてありがたい……そんな事を思いテツは目の前の不機嫌な少女に溜息を漏らしてしまふ。

授業の後は昼休みになり学園で恐怖と変わり者の名を欲しいままにした四人は屋上にくる。フェルの一件以来クラスの半分の女子は大人しくなったがどうも空気が重いと感じエリオが言いだした事だ。

地面に何もみかずそのまま座ると二ノは自家製の弁当を広げ食事に集中し無言になる。エリオは苦笑いを浮かべながらどうにか会話を盛り上げたいが空回り、それも全て不機嫌なフェルから出てるオーラである。

「なあフェルよお、機嫌直せよ」ああするしかお前に勝てなかったんだよ」

「かりにも騎士を目指す方が相手の足を踏むんですか？ 確かに勝ちに徹するのはいいでしょう……しかしあまりにも幼稚すぎて言葉も出ません」

「ハハツテツが勝ったのにまるで負けたような態度だな」

エリオの軽口は完全に無視されフェルとテツの言葉が弁当の上を飛



び交う。最初はテツだつて必死に謝っていたがフェルのあまりにも頑固な態度にだんだんと苛立ちが溜まってきてしまう。

テツだつてもう三十三歳だ、子供が少し拗ねたくらい可愛いと思うが目すら合わせないフェルに対し口元が引きつってきて「テツさんの戦法は子供です」この一言で笑顔が消えてしまった。

「おい聞いたかエリオ？ 俺の戦法が幼稚だつてよくならそれに負けたフェルは赤ん坊か？」

「おおいテツ。どうしたよ、ほらフェルもそんな怖い顔していると折角の整った顔が」

怒りながら食べていたパンを止めて急に立ち上がると食べかけのパンをテツに向ける。

「勘違いしないでください！！ 負けたのではなく私が油断した結果です」

「ん？ 何を言ってるんだ。油断した結果負けたんだろ？フェルよおどんな形であれ負けは負けだろ？ 認めたくはないのはわかる。よおしくわかるぞ」

ここぞと言わんばかりに捲し立てると今まで見せた事がないように

顔を真っ赤にし持っていたパンを握り潰してしまふ。どうやら口喧嘩では自分に分があると思ひテツがニヤニヤしているとフェルは下を向き肩を震わせる。

「~~~~ツ!!」

声にならない声を出すとフェルはズカズカと立ち去り残されたテツは勝利の余韻に浸っていると頭を抱えてしまふ。大人げないにも程があると今気づきフェルを追おうとするが、既に屋上の扉が勢いよく締められた反動でフラフラと動いていた。

「テツお前の弁当もくれ、どうせ私が作ったのだからいいだろ」

「今更喋り出してそれか!! ついでに言つと嫌だ!! 腹空いてんだよ!!」

「しかしフェルがあんな感情的になつたのは初めてみたぞ。テツお前は人を怒らす天才らしいな」

雲一つない青空に向かい大きな溜息を出し空腹を満たすために食事を再開……フェルの喧嘩の後の食事は喉を上手く通つてはくれなかった。

「そんな落ち込むな。どうせ明日にはケロツとしてるさ、なあエリオ。ん、エリオ」

追う。

初恋の相手を必死になり追ってしまふ。考える前に体が動き気づけば全力で走っていた。しかしフェル足が速くついていくだけで体力が消費しもう限界が近い。

ようやく止まったと思うとグラウンドにある大きな樹木の下でフェルは大きく息をつき背中を預ける。小柄な美少女が少し息を荒くし悔しそうに唇を噛む姿は見ていて胸が高鳴る。

「よよよう、フェルお前はそんな顔見せるなんて珍しいな」

「うるさいです!! 私はテツさんのあの幼稚な態度に我慢できません!!」

まだ怒りが収まらない様子のフェルの横でエリオは腰を下ろすとポケットの中に入れていた飴玉に気づきフェルに無言で差し出す。受け取ると口の中に放りこむコロコロと転がし甘い味を楽しむ。

「ところで何でわざわざ追ってきたんですか」

「え!! いやそりゃ〜ほっておけるわきゃないだろ。そそれに俺がフェルを追ってきて悪いかよ」

「いえ……ただ物好きですね」

どうも会話が続かなく焦り出すとフェルが助け舟のように口を開いてくれた。その内容は空気を更に重くしてまうがエリオは乗っかるしかない。

「エリオ。貴方は何のために戦います?」

「……俺はこれしか生きる術がないからな。頭悪くて不器用だし、女子が言うように落ちこぼれさ」

「珍しいですね。この学園は騎士になり富と名声ばかり欲する人達ばかりと聞いてますが」

苦笑いで肩をすくめフェルを見上げるともう怒りに表情は消えて空を悲しげに眺めていた。

「そりや確かに富と名声は魅力的だが、凡人たる俺は生きる事で精一杯なんだよ。フェルは富も名声もあるんだろ？　なんでこんな学園にきたんだ？」

「復讐です。必ず殺すと決めた相手のために強くなろうとし学園にきました」

空から視線を下ろしたフェルの顔はいつもの無表情に戻っていた。復讐のたった一言に体を縛りつけられたようになったエリオはフェルが立ちさるまで動けない。

復讐をするというからどれだけ怒りを込めて言うのかと思えばいつもと変わらない。つまり日常から思い常に頭の中で考えてると予想すると鳥肌が止まらない。

「おいおい……初恋にしては重過ぎんだろ相手が」

#### 四

翌日目が覚めて起き上がると最初にフェルの顔が思い浮かび自然と溜息が洩れてしまう。子供の頃に学校をズル休みしたい感覚を思い出し足取りが重くなるが日課は忘れない。

制服ではなく軽めの革ズボンと布地のシャツを着てまだ暗い外に出て走り出す。呼吸を一定のリズムで刻みフォームを崩さないように意識しひたすら走っていく、家から少し走ると市場に入り魚屋が欠伸をしながら開店準備していたがテツを見かけると肩を叩き挨拶を交わす。

「毎朝御苦労さんだねえ、奥さんとは上手くいってるかい」

「おっちゃんよ、どう見たら夫婦に見えるんだよ俺と二ノが！」

「ハハツハ！！ 市場じゃ目立つからなお前さん達は、ほれリンゴ持ってきたな」

リンゴを一つ受け取りかじると果汁が口の中で溢れ出し、朝食前には丁度よく一気に食べてしまう。

「てか魚屋なんだから魚くれよ」

「馬鹿言つんじやねえうちの魚は高級なんだよ。テツお前には買えねえよ」

「よく言つぜ、夕方には叩き売りしてるくせによおくんじやまたなおっちゃん」

毎朝ランニングしてる内に開店準備してる店の主人と仲良くなり今では冗談を言い合える仲になった。たとえ世界が違えど気のいいおっさんはどこにでもいて、その奥さんもまた優しいのはお決まりらしい。

全身に汗を溜めて軽くジャブを出しながら走り、時折スウエーヤダツキングとボクシングの動きを取り入れるランニングは三十三歳にはこたえるが弱音を吐いてはられない。トレーニングをサボった分だけ自分の寿命が縮まると思い一切手を抜かない。

「だはあ〜っ!〜!」

ようやく止まると両膝に手をつき地面に自分の汗を垂らしていると光が差し込んできて顔を上げると日の出が体を照らしテツはゆっくりと上がる太陽を見つめながら物思いにふけてしまう。

「三十三年間ろくでもない人生だったが、こうして異世界にきて初めてあの時間が幸せだったと気づくもんだな……帰りにえよ。戦い



「たくねえよ」

つい本音が出てしまう。いくらこの世界に馴染んできたとしても元の世界で平和に暮らしてたテツには辛すぎた。元いた世界とは違い絶望的なほどの死に近いこの世界だとテツは脅える事しか出来ない。

「…………弱音はいかん!!」

自分を騙すように奮い立たせ最後の坂を上がっていくと、日課のラニンングは終わり庭に吊るしてある手作りサンドバックを叩く。

「ふぁ、おいテツもう少し音を小さくしろ」

「無茶言つな、おはよう二ノ」

ピンクの可愛らしい寝間着をきた二ノが大欠伸で庭に腰を下ろす姿は一瞬だけ日本に戻った気分なる。欠伸をかきながら愚痴を言う二ノを背中に何度もサンドバックを叩き動きを体に叩きこんでいく。

「そろそろ準備するぞテツ。風呂に入れ酷く汗臭い、後いい加減髭を剃れ」

ヒゲを指摘され顎を一撫ですると確かにと思い風呂に向かう。浴室にお湯を入れそのまま入ると生ぬるいが仕方ない、湯を沸かす時間など朝にあるわけがなく汗を流し上がると鏡の前に立つ。

「はあ……俺こんな顔だったっけ」

鏡に映ったのはシワが深くなり無精髭がもみあげから顎髭まで繋がってる完全な中年の顔だった。精神年齢は幼いテツは自分の顔を見て落胆を隠せない、こっちの世界にきてからまともに鏡を見てない気がしたが改めて見ると老け具合が酷い。

「おおお落ち込むな!! なぁに髭を剃れば若返るぞ」

カミソリなんて便利な物はなく手にしたのは果物ナイフ。慎重に顎のラインを剃り上げてと器用に髭を剃り鏡を見るが特に変わらない平凡顔に肩を落とす。

「くおおおらテツ!! さっさと行くぞ!!」

「あいよ、そんな怒るなよ遅刻するとだな思わな出会いがあるかも」

「フェルの件で足が重いのはわかるが行くぞ」

図星をつかれぐうの音も出なくなりテツはトボトボと二ノを後ろ歩いていく。第一声は何て話そう？ もしかしたら完全無視？ 考えれば考えるほどに後ろ向きになり最終的に開き直ってしまう。

「ここは大人な俺が折れてやろうじゃないか！！ 軽く挨拶して」

「大人なテツよ着いたぞ。ほれささっと教室にいったら軽く挨拶しようじゃないか」

「ままま待て！！ 心の準備が、それにまだ校門……ん」

校門で威風堂々と腕を組み仁王立ちしてる男が一人。白い歯を覗かせ笑って真っ直ぐとテツを見てきている、腕は太く見るからに腕力ありそうで背も高い筋肉の要塞のような男。

学園長だ



## 五

関わりたくない。

一目学園長の笑みを見て確信する。ろくな事じゃないと、顔を伏せ忍び足で横を通り過ぎた瞬間にテツの腕は剛力に締め上げられ完全に動きを止められた。

「おい二ノおじさん達で用事あるから先行っててくれ」

「ぬ、テツお前はよほど学園長に好かれてるな」

「いや……おい!! 待てよ二ノ」

万力のような握力で掴まれた腕は悲鳴を上げ引きづられていく。学園から少し離れた平地に出ると馬車が止まっていてマリアが扉を開けて招き入れる。

馬車内は広く天井にはランプが照らさせ、木製で作られた背もたれに強引に座らせテツはようやく腕の痛みから解放され一息つく。

「お前らアベンジと戦ったらしいな」

「痛え。アベンジ？ しらねえよ」

「お前が強烈にドツいた黒騎士の事だ！！」

思い出すだけで寒気と鳥肌が蘇り身を丸くしてしまう。あんな化け物の事など記憶の片隅に閉まっておきたいのに言葉に出され恐怖が一気にテツを支配する。そんなテツを見て学園長は落胆の溜息を漏らし顔を近づけていく。

「アベンジはどうやら魔王側についたらしい。傭兵集団だから金次第なんだろう、それでこれから奇襲をかけに行く」

「……ハハ冗談だろう。たった3人で戦うのかよ」

「奇襲だからな。安心しろ相手もそこまで多くねえ、今回は少しについて連中の様子を見る」

ベルカ王国の騎士学園のトップとその教員と　テツ。わけがわからない、いくらテツが頭悪くても今回の行動は自殺しにくくようなものだと思づく。仮にも学園一つ任せられてる男の行動とは思えない。

「テツ君貴方のテストもかねてます」

馬の手綱を引き走らせるマリアが背中ごしに語りかけてくる。いつもならゴミを捨てるような厳しい口調だが言葉の温度は冷たく淡々していた。

「契約者である貴方を戦力として考えるなら、今回戦う程度の敵に負けてるようじゃ話になりません」

「っわけだテツ。こうしてパンドラも持ってきたし安心しろ」

いつの間にか学園長の手にはパンドラが握られテツに押しつけてきた。馬車内では重い空気が流れテツは言葉を失う……今まで数カ月続けてきたトレーニングの成果を出す時がきたのだ、殺人によって

虚勢でもいいから強がろうとするが喉から言葉が出てくれない。相手は今まで戦ってきたような奴らとは違う。あのハンクとかいう騎士を思い出せばわかる。

「人間。何を怖がっている、私がいる限りお前に無限の殺戮を約束をしよう」

いらぬ約束をもらいテツは頭を抱えた。初めての实战というわけでもないのに震えてしまう。これから自分が死ぬかもしれない戦いの前は慣れずいつも恐怖で押しつぶされそうになってしまう。

一度大きく息を吐き深呼吸し窓の外を眺めると一度頭の中を真っ白にし高まる鼓動を落ち着かせる。

「学園長もつすぐです」

馬車内の窓から見える景色は変わりどころかの遺跡のような場所に着く。



## 六

世界は違うが曇り空は変わらず太陽の光は遮断され空気が湿っている。昔こーゆ天気の日に通誘導するといつ雨が降るかかわらずカツパの着替えが面倒だったなと思いだしてテツは馬車から降りて遺跡の地を踏む。

何本もの柱が立っているがどれも崩れ地面の石段も穴だらけと王国の滅んだ後のように見えた。岩陰に隠れ進むと嗅覚が刺激され鼻を摘む、最初は鉄の匂いかと思ったが腐ったような匂いで血だとわかる。

「テツ君一応援護はしますが基本的には一人で乗り切ってください」

「学園長は離れた場所から高見の見物決め込みやがって……パンドラ」

「今日はどれにする人間、お勧めは……チッお前一つしか使えない奴だったな」

両手が緑色の光に包まれると禍々しい悪魔の腕が現れマリアが本能的に下がってしまう。紫の装甲は肩まで浸食し指の先から腕の形体を変えテツの両腕に悪魔の力を送り込む。

「人間、一応忠告だ。迷うな億すな、どちらかが欠ければお前は死ぬ」

「悪いなパンドラ、今の俺は迷ってるし億してるわ。だが死ぬ気はねえ！！」

岩の陰から顔を覗かせると数人の盗賊が倒れた柱に座り楽しげに喋っている。足元には女子供の死体がまだ血が渴きつてない状態で無残に転がっていたのを見ると鳥肌が立つ。

テツは別に正義の味方を気取るつもりはないがその光景に迷いが消えた。人間としてやってはならない事をしたと薄汚い盗賊共を睨みつけて目の前の岩を飛び越えた。

「テツ君！！ 私の援護を」

学園長の言う通りだと確信した。こんな奴らに負けてるようじゃこの先命がいくつあっても足りない、ここは一人だと真っ直ぐ走り出す。

盗賊達はテツに気づくと飲んでた瓶を地面に叩きつけて武器に持ち変える。一般的に復旧してるバスターソードと手斧と様々あるがたいした問題ではない。一人目が大きく振り被り上から叩き下ろす一撃を軽く避けて容赦のない拳が顔面を捕えた瞬間。

「なっ……っ！！」

人間の頭が弾ける光景をテツはまるでスローモーションのように遅く見えていた。頭蓋骨が砕かれ脳を飛び出し眼球が潰れていく様を一度も目蓋を閉じずにテツは見た。

ハンクの自慢の鎧を砕いた攻撃を人間にぶつけた結果それは必然だった。人間の頭がバッドで叩き割られたスイカのように宙で真っ赤なカーテンを降ろしていく。

「人間！！ 次だ」

考えるよりも先に体が動き横からの一突きを避けて返しの左フックで顔も見ないままの敵の腹を打つ……打つというより体そのものを爆発させ、飛ばされた敵の体は空中で分解され地面につく頃には原型を失っていた。

「ヒッなんだてめえ！！」

テツのあまりの残虐な殺し方に残った敵は戦意喪失し一人が逃げ出すと連鎖するように残りの敵も逃げていく。テツは追いはしなくその場で立ち尽くし未だ肉を貫き骨を砕いた感触が残る拳を見つめる。

もうボクシングとは呼べる物じゃない。こんな物をボクシングとは呼んではいけない……今まで汗を積み重ね会得した技術を初めて呪

つてしまう。

「これがパンドラの力なの」

援護をと飛びだそうとしたがテツの戦いぶりに足が止まってしまったマリアがようやく近づいてくる。人間がこつても簡単に破壊される光景は見た事はなく本当に学園で笑っているテツかと疑ってしまう。

「人間、数人逃がしたな……覚悟を決めろ、私を使う限りこの先何万とその感触が手に残るぞ」

「　　っ！！　　ああ……わかってるよ」

殺されると思い恐怖する事は今まで何回もあつたが人を殴るのが怖いと思つたのは初めてだった。慣れるしかないと自分に言い聞かせても腕の震えは止まってはくれない。

「まあ〜ギリギリ合格かな」

敵の逃げた方向から学園長が歩いてくると手には生首が何個も持たれている。近づいてくると生首を放り投げ未だ真っ赤に染まった両手を見つめるテツの前に立つ。

「困ったもんだぜ。戦闘力は見ての通り化け物だが心が弱すぎる。マリアどう思う」

「まあ慣れるしかありませんね。今回は正直私も驚きました、しかし単純な戦力としては申し分ありません」

与えられた試験を一分もしない内に終わらせたテツの評価は上がったが不安はまだ残ると学園長は白髪だらけの短髪をガリガリとかき腰を下ろす。マリアは腰に手を当て一息つくとき空から落ちてくる雨に気づき髪を一回靡かせ帰るために振り返ると。

「む、また会ったなテツ。それに懐かしい顔もいるようだ」

雨が世界に縦の線を作り地面を濡らし始めた時に戦斧が現れた。

## 七

日光が届いてないはずなのに漆黒の鎧は黒く輝き、背中に背負った戦斧が歩を進めるたびに重量感を感じさせる音を鳴らしテツの心臓を締め付けてくる。

脳裏に蘇るのは命を取り合ったあの死闘　恐怖は確かにあったが今までの訓練のおかげで体が先に動き構えると学園長が前に出ていく。相変わらずのスーツ姿だが、巨大な布で包まれた何かを肩に担いでテツの視界を塞ぐ。

「アベンジの幹部の一人ハンク様じゃねえか」

「貴様は今や学園長か。やれやれ落ちたな」

互いに軽口は叩くが油断はなくジリジリと間合いを狭めていく。テツはその光景を見てみると昔どこかの剣豪小説の中に出てきた侍同士の斬り合いを思い出す。

互いに抜き身の刀を構え一分で少しづつ距離を縮め必殺の瞬間を待つ……ハンクと学園長はまさにそれだが、肩に担ぐ巨大な布の中身を出さない。

「ぬ、私も忘れる出ない馬鹿者」

ハンクの巨体の陰から一人の女性が出てくると学園長は動きを止めて焦りが顔に出てしまう。

装備は胸当てとすね当てだけで軽装のハンクと同じ黒。

褐色の肌に冴える銀髪は美しく、妖艶な切れ長の瞳……そしてハンクの戦斧にも負けず劣らない馬鹿げた大きさの剣。

その女性は女で一つでアベンジを纏め上げ今では魔王軍一の軍の育て上げた才覚も持つ。

「おおマリアも大きくなったなあ〜ハハツ懐かしいなあ」

「イリア。アベンジの頭がこんな前線に出てきていいのかよ」

「ぬ、まあ今回はどうしてもハンクが私と出掛けたいと言ってたな、一人身で辛かろうと私が同情してやったんだ」

今まで威圧するように距離を縮めてた学園長は背中を向けて一気にテツとマリアまで後退していく。普段は強気だが今回ばかりは恥も受け入れ敵に背中を向けた。

「マリア、俺と組んでイリアをやるぞ。テツはハンクとやれ……なるべく時間を稼げ」

「おい！！　なんで俺が一人でハンクと」

「黙ってる」

今までのふざけた顔はどこにも無く危機迫る表情で睨まれるとテツは喉まで出かけた言葉を閉まってしまう。マリアは無言で頷くと両手に持つバスターソードを構えイリアを見据える。

腕を組んでニヤニヤしながらこちらを見てくるイリアは見ていて腹が立つが今は感情で動くべきじゃない、もしマリアが今感情で動いたら確実な死が待ってるはずだ。

「テツ悪いな、今回の試験軽めにしたつもりだが見ての通りだ」

学園長はテツの額に自分の額をくっつき目を閉じながら語りかける。その行為だけでテツはイリアという女がどれだけ危険な存在か感じてしまう。

「いいかイリアは二人で片づける。お前はハンクと戦いなるべく時間を稼げ、今のお前じゃそれが限界だ」

「……おいおい学園長、逆だよ。あんたが時間を稼げ、その間に俺が片づけてやるよ」



「驚いたな。虚勢でもそれだけ言えれば上等だ。いいか相手は魔王軍の中でも最強と言われる奴らだ、気合い入れろ」

その言葉を最後に学園長はテツと離れイリアの前に立つと横にマリアが構える。待ちくたびれたイリアは推定二メートル以上の巨大な剣を寒気がする素振り音と共に抜く。

「我が魔剣レイブンで遊んでやるわ」

肩の布を勢いよくとると剣が出てくる。学園長の両手に握られた剣は魔剣とほぼ同等の大きさを見てイリアの瞳が大きく見開く。長年戦ってきたが相棒の魔剣と同じ大きさの剣を初めて見て驚く。

「ぬ、お前いつ契約者になった」

「何を言っているイリア。俺は契約者じゃない、こいつは特注品でな、格好いいだろ」

「なるほど……そんな偽物叩きわってくれるわ!!」

イリアが大きく振り下ろし、学園長は横からの振り回しで激突。マリアもそれを合図のように飛び上がり滅んだ王国の跡地で戦いは始

まじっくまじっく。

鋼鉄の塊同士がぶつかり使い手の腕や骨に反動を伝え、イリアと学園長を中心に雨粒が外側に弾け飛ぶ。挨拶といわんばかりの小手先無しの単純な力で両者が交わる。

豪音を響かせると互いに再び振り被り二度目の激突で学園長の手は痺れから感覚が無くなっていく。人生を戦いに費やしてきたつもりだが……甘かった。相手は天才な上に契約者、やはり判断は間違っていたと笑うとマリアが上から振ってくる。

「ぬ、私と互角で打ち合えるとはな。それにその武器、相変わらずだなお前は」

「喋るなんて余裕ですね！！」

「余裕だ小娘。少しばかり腕が立つとはいえ」

二本の剣から繰り出される斬撃を魔剣で捌きつつ大振りだが当たれば致命的な一撃を繰り出すと、学園長が飛び出し受け止め潜り込んだマリアが下から腹を狙い一突きする。

正確無比な一撃だったがイリアは膝で剣を蹴り上げ回避する。学園長の返しの一撃も華麗なステップで回避し距離をとると学園長とマリアの動きが止まってしまふ。

「見ましたか学園長」

「ああ認めたくねえが……ありやテツの動きじゃねえか」

膝での剣を蹴り上げる行為に何よりも距離をとる時の無駄のない足捌き、一度目にしたら忘れられない動きだ。あんな真似できるのはテツ以外見た事なくマリアが二本の剣を構えながら焦りを切っ先を震わせながら出していく。

「フハ八驚いたか、ある男に教わって使ってみたが……中々便利なもんだ」

「はあ〜テツに感謝だなマリア。見といてよかった」

「そうですね。いくら回避運動に優れても対策などいくらでもあります!」

一本を地面につけ一本を肩に担ぎ駆け抜けていく。雨で泥まみれになった地面を削るように下からの斬り上げと上からの叩き落としの同時攻撃。無論イリアが間合いに入る前に魔剣の横からの一閃で応戦するが学園長がしっかり受け止める。

二人のコンビネーションに見事と褒めたい所だが目の前にマリアが二本を上下から獣が獲物を噛み砕くように遅いかかってくる。魔剣では大振りすぎて間に合わなく、学園長がその隙を見逃すわけがない。

「貴女の敗因は己の力を過信しすぎた事です。終わりです!!」

上下の連携を叩き込むタイミングと速度も申し分ないが……イリアがそこで奇妙な動きに出る。唯一の武器である魔剣を手放し横に逃げていく。確かにあの超重量の魔剣を離せば身軽なり回避は出来るであろう、しかしマリアには理解できない。

攻撃の手段をわざわざ手放すか？ それは負けたも同じと考え見事に空振りしたマリアが視線でイリアを追うと。

「……ッ!! ゲハッ!!」

脇腹に痛みが走り拳が深く突き刺さると肋骨の悲鳴が聞こえた。イリアが笑顔でマリアの首を掴み戦慄の膝で腹を突き刺すと口から泡を吹きながらマリアは地面に転がり苦痛の声でのたうち回る。

そこにとどめを刺すようにボールを蹴るように再び腹を蹴り上げると人一人が宙に上がり飛んでいく。それを見ていた学園長は動けない。

イリアは今テツのような異世界の技術を使った。それもテツのよう

な単純に殴るわけではなく、首を掴んで膝を打ちこむ……雨がより  
一層激しくなる中はイリアは平然と魔剣を拾い笑う。

「これもある男から教わった技だ。どうだ中々の物だろう？ さて  
一人になってしまったな」

## 九

雨の雫に視界が奪われ一回額を大きく拭くと雨ではなく緊張の汗だった。長年戦い続けた自負はもっているつもりだったが、まだまだ甘いと噛み締めてしまう。

イリアとは出会った時から才能を感じていたが正直ここまでとは思わなかった。マリアは腹を抑え痙攣し戦える状態じゃない……魔王軍最強の部隊アベンジ。イリアがまさにその通りの強さだ。

「さて、私と離れていた時間何をして強くなったか教えてもらおうぞ  
！！」

イリアが走り出すとそれだけで雨粒が弾け地面が凹む。横から振られるのは魔剣。二人の距離は遠いが巨大な剣を持つ故に射程には入っている。

攻撃を避けるという選択肢は学園長にはない。イリアと違い生身の人間には巨大な鉄の塊を持ち軽快に動くなんて到底無理な話であり、腰を落とし刀身を片手で支え完全に防御の形を整えるが。

「グウツツ！！ イリアアアア！！」

イリアの一撃を受け止めただけで手首の骨に亀裂が入る音が聞こえた。骨一本で済んだなら安い物と攻撃後の隙をつく、魔剣を縦に受

け止めそのまま倒すと握つてたイリアも体の軸がずれてしまう。

ただの一撃では駄目。一撃で胴体を切り裂くぐらいの攻撃ではなくてはならない。学園長は魔剣を地面に叩きつけると巨大な剣と共に回る……腰を捻り背中を向けて遠心力という加速をつけて一回転する。

「剣術の腕はまだまだ錆びてないようだな」

「カツ!! う……うお……」

イリアの耳に刀身が触れるまでは成功したが渾身の一撃は止められしてしまう。爪先ごと腹に蹴りが入れられ今まで経験した事のないような痛みと苦しみを味わい口を大きく開ける。

腹を抱え白目を向いている学園長の胸倉を掴み大きく仰け反り……頭突き。鼻を砕くように頭を突き刺すと学園長の目から涙が溢れ出し見るも無残な姿で倒れた。

「接近戦では時に剣よりも拳や蹴りの方が速いらしいぞ。剣術では互角だったのに惜しかったな」

「う……」のっ!! イリ ……」



涙と涎に塗れた顔で立ち上がるうとする。学園長の顔は蹴り上げられ鮮血に染まる。意識はまるで死神の鎌に刈り取られるように消えていき、完全なる敗北。

「ぬ、やはり齒ごたえがあるな。さて……ハンクの奴は」

金属がぶつかり合う音と泥が跳ねる音。イリアの視線の先には二匹の獣が食い合うように戦斧と拳を交えていた。

十

肉を引き裂き、骨を一片の欠片の残さず砕き

殺す

雨で重くなり邪魔になった制服を脱ぎ上半身を裸にし、垂れてきた前髪をかきあげオールバックにし視界にハंक以外何も入れないようにする。

考える事はどう効率よく敵を倒せるかではなく殺す事。異世界にきてまだ半年も立たないというのにテツは自分の変わりように気づく。だんだんと殺人に慣れ異常なほどの力に酔っている部分があった。

「む、少し顔立ちが変わったな」

「お前みたいな奴と戦えば嫌でも変わるぞ、一応確認だ。黙って去ってはくれないか」

「この前の借りもあるからな。テツ存分にやり合っぞ」

頭上で戦斧を回転させると地面の雨水が浮き上がり水流の竜巻のようにハंकを包む。テツはその光景を見ると手が出せなくなっ

まっ、例えるなら常に刀の切っ先を突きつけられてるようで動けない。

「もうわかってると思うがこちらの魔法は水分や温度を自由に操れる物だ」

「自分から魔法の種を明かすなんざ余裕だね」

「テツお前の戦法は知っている。今回はこちらの戦い方に付き合ってもらおうぞ」

ハンクの周辺で浮いてた雨粒が形を変えやがては氷の鋭い刃に変わる。その数は雨粒一つ一つ数えるのと同じで無限にも見える……避けられる数ではない。

「人間！！ 地面を全力で殴りなさい！！」

氷の刃が飛んでくると同時に地面を殴ると目の前が紫に染まる。何事かと思い目を凝らすと 炎。裸体を晒した上半身に伝わる温度も半端ではなく火傷してるかと思う。

時間にして数秒紫の炎の壁が現れ消えるとハンクが兜の上からでもわかるほどに動揺していた。

「ナイトメア。悪魔達が地獄の業火で作りだした魔小手……あんな大きいだけの玩具に負けるわけないでしょ」

「パンドラお前本当に何でもありだな」

「人間、お前が私を使いこなせば……って、さああの木偶に誰を敵に回してるか教えてあげなさい」

まだ微かに両拳は深紫の炎を出し続け、落ちてくる雨を蒸発させている。ハンクは戦斧を止めて片手を振り上げると地面の水分は空中に巻き上げられ氷の壁を作りだす。

好機……ハンクはテツを目の前にし初めて守りに入ったのだ。元々頭が悪いテツには作戦はなく単純。ただ近づいて殴るだけという行為は敵であるハンクを脅えさせた。

「シッ!」

氷の壁を殴り砕こうとした瞬間に壁は自ら破裂していく。破片はテツの体に突き刺さり、激痛が伝わりと砕かれた壁の奥から大きく戦斧を振り被ったハンクが漆黒の兜の下で笑っていた。

「人間防ぎなさい!」

距離は到底拳が届く範囲ではなく、逃げるにしても中途半端とまさにハンクが支配する距離になっていた。腕をクロスさせ近づいてくる戦斧の禍々しいほどに巨大で鋭い切っ先を見つめ奥歯を噛む。

「ッ!」

消し飛ぶ。その言葉通りにテツは体ごとその場から消え、地面に水平に飛ぶというありえない軌道で倒れていた柱に激突し全身の骨を打ちつけていく。

決して油断したはけではなく、警戒していたはずなのに……ハンクとの差は強力な武器を持った所で埋められる差ではなかった。

「……ふう」

ハンクはテツが吹き飛んだ先を見ると体の上半分は瓦礫に埋まり、出ている足はピクリとも動かないのを確認すると一息つく。謎の腕を武装する武器に紫の炎　知り得る限りでは見た事も噂すら聞いた事がない。

瓦礫に埋もれたテツに近づき軽く足をつついてみると反応がない。全力で振り抜いた一振りを防御したとはいえ食らったのだ両腕は無事では済まないだろうと確認のために顔を近付けた瞬間。

「む　っ!!」

瓦礫の中から腕が伸びてきて兜を掴まれた。ミシミシと亀裂が入る音が響き崩壊へ近づいている。人間が単純な握力で兜を潰す……ありえない、そう思った瞬間に亀裂から悪魔のような指が食い込んでくるのが見える。

「腕は……動く、足は平気だが、体中の骨が悲鳴をあげてる」

「感謝しなさい人間。あの一撃から両腕を守って上げたんだから」

「む、ぬうううううう」

瓦礫から這い出てくる体は氷の刃と瓦礫の破片で血だらけだが腕だけは悪魔に浸食され兜を今にも握り潰しそうだ。咄嗟に握り潰そうとしている腕を掴んだがハンクにはそこから先の技術は無い。

戦斧を振り上げた瞬間に体がくの字に曲がり何をされたかと気づくのは兜が砕かれ視界が開けた時だった。眉間にしわを寄せ白い歯を剥き出しのテツの表情が見えた時に二発目が巨体に突き刺さる。

「~~~~ ツー！」

苦痛の声すら出ない衝撃を受け何とか倒れないのは契約者としての強靱な体と鎧のおかげだと思いが鎧もボロボロこぼれ落ちるように砕かれていく。

「ハンク、俺とお前の戦いは距離だ。正直今でも倒れてしまいそうに体中が痛いが……ここだけは逃せない」

腕を畳み拳を顎の下に持つていく。ピーカブスタイルで体を左右に揺らし体重を拳に乗せていく。ハンクの苦し紛れの戦斧での突きは勢いも無くあつさり避けられ懐に潜り込まれ 右のフックは脇腹に入り二メートル近くあるハンクを宙に浮かせ数秒後に地面に沈めた。

「ゲハアアア！！」

口から異物を出しながら顔ごと地面に倒れるとハンクの嗚咽が咳のように漏れて動く事すら叶わない。テツは勝利の余韻に浸るまでもなく大の字に倒れ空から落ちてくる雨を浴びていく。

「へ……へ、勝ったぜ〜見たかよ〜」

「もう少しエレガントに勝てないものか人間よ」

勝ったと確信すると体中の痛みが何倍にもなってテツを苦しめた。氷の刃は骨には達してないが皮膚を深く突き破り、骨はどこが痛いのかすらわからない。

時間にしてどれくらいだろうか、テツがようやく起き上がるだけの力を取り戻した時には雨はやんで雲の隙間から日光が差し込んでくる。

「うむ、見事なり」

拍手の音がし顔を向けると少し顔に泥のついた銀髪の女が歓喜に震え手を叩いていた。瓦礫だらけのこの地に一人の美女が子供のようにな无邪気な笑顔で拍手する姿はどこか滑稽だと思いテツは笑う。



「途中から見させてもらったが、お前のその戦い方はなんだ？ 見た事がない」

「学園長とマリアはどうした」

「ぬ、あつちだ」

指さす方向には意識を失った学園長にハンクと同じく腹を抑え地面にうつくまっっているマリアがいた。

脳がフラフラのように回り吐き気が込み上げ立っただけで骨が軋む。学園長とマリアを倒した怪物を目の前にしテツは不思議と恐怖は無い。いい加減命のやりとりにも慣れたのだから、女が持つ巨大な剣……魔剣と大層に自慢してた武器を見て考える。

どう懐に入るか、どう誘導して空振りさせるか、どう殴り殺すか。ハンクとの戦いに勝利してテツは元の世界にいた自分の面影を無くした代償に迷いが無くなっていった。

「パンドラ後どれくらい動けるんだ」

「さあ〜もうブツ倒れてもおかしくないし限界など軽く越えてるぞ」

イリアが手に持つ魔剣を離し地面に落とすと無警戒で歩いてくる。構えもなにもなし歩いてくるイリアを見るとテツは迷う。明らかに畏だと考え隠してある武器を探すが、イリアはそんなものないと言わんばかりに拳を大きく振り上げて体ごとぶつけてくる。

「のわ!!」

あまりにも真正面すぎる攻撃にテツの反応が遅れるが寸前で避けると空振り音に寒気がした。巨大な丸太を振り回すような音……およ

その小さな拳が出す音ではない。

「ぬ、起用に避けるものだな。丁度いい機会だお前で試すか」

「何をだ!！」

それからイリアは何度も拳をテツに向かい振り回すが一発たりとも当たりはしない。威力は桁違いだが素人以下の殴り方だとテツは気づく、反撃に転じる。

左のジャブを顔面を刺すと顔が跳ね上がるだけで破裂どころか少し痣が出来るだけである。ハンク以上に頑丈とわかると舌打ちを一つ鳴らし高速のジャブでイリアの顔面を串刺しにしていく。

「ぬ、ぐ……この!！」

焦って更に大振りなつた所へのカウンターが入り後退するとイリアの片目を大きく張れ片目が完全に塞がっていた。

「……凄いなお前、正直ここまで一方的とは思わなかったぞ」

「一つ聞かせる。どうしてこの世界の人間であるお前が素手で戦う」

「ぬ、フッフッさてな」

イリアは拳を下ろし大きく足を開き重心を落とす構えをとるとテツを威圧する。打撃系の構えではなく組み合いをするつもりだと瞬時に理解すると一方的な攻めは止まってしまふ。

「片目を犠牲にしてわかった。お前とは殴り合いでは天地の差があるとな」

「ならどうする？ 立ちでは勝てないから寝かせるか？ お前を倒した後に聞かせてもらうぞ、その発想を教えたのは誰かとな」

「ユウヤには感謝しないとな。こんなにも美味しそうな相手と遊べるなんて……ゆくぞー!!」

タツクルで突進してくるがテツは付き合うわけがなく横に避けて、今までジャブだけだったが右を大きく振り被り打ち下ろしの形で顔面へ叩きつける。いくら頑丈とはいえ体重が一番乗る打ち下ろしはイリアを仕留めるには十分なはずだった。

「え」

拳を振り下ろしたはずなのに視界が揺れて天地が逆転する。高速に回転する世界で微かに見えたのはイリアが長い足を回している姿……気づいた頃には最悪の事態が目の前に広がっていく。

「身を低くしつつの高速足払いだ。中々上手いもんだろ？」

腰の横に膝を突かれ全体重を感じる。馬乗り……マウントを取られてしまっていた。背丈は頭一つテツの方が大きく何とか力任せに起き上がるが　顔面がバスケットボールのように跳ねた。

「暴れるな馬鹿者が、この状態は抜け出すとは不可能らしいぞ。さて」

殴られると後頭部が地面にえぐり込み、テツは悲鳴を命ごいもする暇もなく拳を叩きつけられた。頭など一発目で破裂してもおかしくない威力だったが契約者としての体が許してくれない。

「ガッ  
……オ」

一発一発が重く何とか防ごうと両腕を上げるが腕ごと殴り壊されていく。まるで子供の喧嘩のような光景だがテツには馬乗りを返す術もない。やがては腕から力が抜けていき表情も固まっていく。

「どうした！！ ハンクを倒した猛者ならもう少し気骨を見せてみる！！」

それでもイリアは拳を止めてはくれなかった。

「 ……ハアツー!!」

鎧も砕かれ骨も何本か折られたハンクはようやく立ち上がる力を取り戻す頃には雨も上がり太陽が照りつけていた。起き上がる動作だけで腹が痛むが戦斧を杖変わりに何とか歩き出すとイリアが頬に肘をつきながらニヤニヤと柱に座っていた。

「ぬ、もういいのかハンク」

「む、平気……ぐうおおおお」

イリアに軽く爪先で脇腹を蹴られると地面に転がり回り痛みを全身で表現すると蹴ったイリア腹を抱えて笑う。

「やせ我慢するなハンク。お前の痛みも私もわかるぞ。いい攻撃だったな」

「む、テツはどうしたー!!」

「あそこだ」

小さなクレーターのように地面は円形に弾けるようにエグれ、その中心でテツは両手を広げ倒れていた。鼻は潰れ耳から血を流し死んでいると言われても信じてしまふ姿に変わり果てていた。

「イリア殺したのか」

「安心しろ生きてる……たぶんな」

座っていた柱から勢いよく飛び起きると腕を組みテツを見てニヤニヤと笑いが止まらなくなる。その強さを認めたハンクを倒し何よりも最強とまで自称する自分をここまで追い詰めたテツに興味湧いてくる。

「普通ここまでやられればもう二度と戦うなんて思いもしないだろうな」

「お前が戦いの場で情けをかけ相手を殺さないとは気でも触れたか」

「だがも敗北が立ち上がるならば、それはそれは倒しがいのある最高の奴に育つだろうな」



肩を震わせ下唇を舐めるイリアの行動にハンクは溜息を漏らしながら呆れる。戦いに関してイリアは一切の妥協を許さない、だがごくまれに自分が気に行つた獲物を泳がせ強くなるまで待つという悪い癖もある。

「ぬ、そーいえばハンクも最初は私の敵だったな。お前は強くなつたな。そろそろ私とやるか？」

「今は再び力をつけたベルカや各国の戦いに忙しい。それに俺ももう若くはない、無駄な戦いなど」

「ほほう、私と戦い死にかけ命からがら契約者になつた台詞とは思えないなあ。悔しくないのか？」

首筋に血管を浮かばせ歯を噛み締め全力で悔しさをアピールするとイリアはワクワクしたように顔を近付けてくる。かかつてこいと言わんばかりだがハンクが大きく息を吐くとイリアも顔を離す。

「ところで確かこいつニノの友人だったな。ハンク、ニノは元気にしてたか？」

「む、まあ元気いっぱいだったぞ。お前を殺しそうな勢いだったな」

「フッフツハハハ！　結構じゃないか……さて次の戦場に向かうとするか」

子供がピクニックにいくような足取りでイリアが歩き出すと頭をボリボリとかきながらイリアの補佐役を命じられた苦勞人ハンクが後に続く。

「ハンクお前もユウヤから技を学べ、お前は適当な蹴りしか覚えてないだろ」

「フッフツッ！！　お前の不細工な殴り方よりはマシだ！！」

「ハハ何とでも言え、テツを倒したのは私なのだからな」

子供の口喧嘩のようなやりとりにハンクが我を失いそうになったが踏みとどまり最後にテツに振り返る。酷い怪我だが契約者としての体がすぐに回復してくれるだろう……気づいているのか、契約者はもう人間ではない。化け物と変わらないという事実。

最後に一言だけ言い残しハンクはイリアと共に次の戦いに向かう。

「次は負けないからな」

「おお〜悔しがってる悔しがってる〜ハハ悔しいか〜」

「黙れ!〜!」

### 外伝第三章

傭兵王ルドルフ。

どの世界にも天才が存在するように荒くれ者の集まりの傭兵界にも一人の天才がいた。強さはもちろんのことだが人望もありカリスマ性もある、初めは小さな集まりから始まったルドルフの軍団は次々に他の傭兵を取り込み気づけば世界一とまで言われていた。

傭兵の仕事を受け部下へ送るというシステムもルドルフが最初に作り今では傭兵達の親会社のような存在になっていた。部下の数は正確にはわからないが、イリア率いるアベンジなどでは比較にならないという事はわかる。

「む、聞いているのかイリア」

「ぬ、つまりそのルドルフって奴を倒せばいいんだな」

「ハンクやはり今からでもこの戦闘単細胞を帰そう。絶対に話がこじれる」

ハンク、イリア、ユウヤの三人はルドルフの居場所の情報を買い、きてみると村だった。ただ普通の村ではなく子供が訓練用の木刀ではなく、刃剥き出しの剣で打ち合ったり、縄で囲まれたリングで殺

し合っている二人を囲んで大人たちが酒を飲みながら騒いでいる。家は木造ではなく全てレンガで立てられ武器が必ず備え付けてあった。ユウヤはこの村を見て作った人物は頭がおかしいだろうと思いきや嫌な予感がした。

「む、あそこか」

村の中でも一際大きい門を見つけて近付くと門番らしき男二人が座りながら酒を飲んでいた。我先にとイリアが近づくと立ち上がり長い槍を突きつけ止めてくる。

「なんだお前……ヒック」

「ヒヤハハ八姉ちゃん綺麗だ　ふびい!!」

手癖が悪いもここまできると癖じゃないなと思うような鮮やかなパUNCHで門番二人を倒すと固く閉ざされた門を掴み力を入れていく。鋼鉄の門はギギツと悲鳴を上げるとイリアの腕に血管浮かび見事にへし曲げられていく。

「おいハンク。お前本当にこんな女がいいのか」

「む、それは……可愛いじゃないか」

「フハハハ！！ さあ傭兵の王とやらの顔を拝みに行くか！！」

庭に入ると豪邸の全貌が見えユウヤは溜息が洩れる。城までとはいかないが、どこかの貴族の家のように大きく気品が漂って何より庭が家の何倍もある。ユウヤが元いた世界では殺しを生業にしている者でここまでの財を築き上げた者を知らない。

そして当然のように侵入者に対し豪邸から血の気が多い傭兵達が怒りの表情で走ってくる。ここでユウヤの話し合いという計画は全て無くした張本人のイリアが魔剣を抜き構え一振りする。ハンクが止める間もなく目の前に迫っていた五人の傭兵達は肉片に変わり果てた。

「おおおおおい！！ よく聞け筋肉女あ！！ 俺達はこれから話し合いに行くんだよ！！」

「許せユウヤよ。私はこれが話し合いだ」

「何カツコつけてスカした顔してんだよ！！」

イリアに文句を怒鳴っているとハンクが豪華な金色の装飾が散りばめられた扉を戦斧でバラバラに粉碎していた。イリアもハンクも今回

は鎧はつけてなく、あくまで話合いの意思を伝えようとしたユウヤの計画は碎かれていった。

「む、確かに第一印象は大切だ。舐められないようにしないとな」

「フハハハ！ わかってるじゃないかハンク」

「……もういい。俺は確かに戦闘が好きだ。相手を殺すのも好きだが……お前らほど単純な奴らが羨ましいわ」

家の中は玄関ホールになってあり巨大な階段が二回へ続くシンプルな作りになっていた。壁には何枚かの高級間漂う絵と床は綺麗に清掃されユウヤはどこかの高級ホテルのロビーを思い出す。

階段からは次々に傭兵達は下りてくると問答無用で襲いかかってくるがユウヤが前に出て鞘から刀を抜く。

軽く息を吐き流れるように体を躍らせ、七振りすると数人の傭兵は手を抑え痛みに悲鳴を上げ残った傭兵達は魔法でも見たように固まってしまう。

「こんな事してなんだが、ルドルフに会いにきた。こちらに争う気はない」

「ぬ、よく言う奴だ。聞いて呆れるわ」

「む、確かに。武器だけ狙って攻撃など更に悪質な奴だなユウヤは」

「てめえらは黙っている！！ お前らが元凶なんじゃねえか！！」

当然ユウヤの意見が通るわけもなく次々に傭兵達が集まってくると村にまでいた奴らもきて囲まれる。仲間を殺された傭兵達は殺気だつて今にも襲いかかってくる気であると、イリアもハンクも武器を構えユウヤは眉間を指で抑える。

「くあくなんだお前らは」

階段から下りてくる一人の男は下着一枚だけしかつけおらず両脇には美女を抱え現れる。男が現れるとその場にいた傭兵全ては身を引き進路を開ける。

中肉で筋肉の上に脂肪をつけたような体系的な男は大欠伸を連発しながら三人に近づく。

「俺がルドルフだ。んで何の用事だ」

髪はオールバックにし青い瞳と茶色の髪で死んだ魚のように暗い目つきの男はルドルフと名乗り、ユウヤは誰より先にルドルフの前にいき刀を収め今度こそ話合いをしようとした。





ルドルフは階段に腰を下ろしユウヤの話に耳を貸すと次第に笑いが込み上げてきて最後は大笑いし、ようやく落ち着くと涙を吹きながら大きく息を吐き落ち着く。

「はあゝ笑ったわ……つまりお前らアベンジは何百年と世界のトップに君臨しているベルカに真っ向から喧嘩売ろってのかよゝ何が面白いつてそんな馬鹿な事を真面目にやるうってんだから笑っちゃまう」

「見た所ルドルフあんた三十代か。若くして傭兵としての富と名誉も手に入れ毎日優雅な暮らしを満喫しているから、わざわざ俺達アベンジの無謀で馬鹿しかやらない計画に手を貸す必要ないって顔だな」

挑発のような台詞を聞くとルドルフは立ち上がり近づくと頭一つ下のユウヤを腕を組み見下ろす、真っ黒なコートに先程少しだけだが見せた謎の剣術が気になり腰に手を近付ける。

意外にユウヤはすんなり刀を渡し鞘から抜くと曲線を描き他の剣とは違い細い。一度軽く振ってみるが今まで使った武器の感触とは違いルドルフはますます興味をそそられた。

「ぬ、ベルカは民を食い物にし自国だけの利益しか考えてないんだ

！！ 奴らが奴隷制度とかふざけた事を抜かしているのだぞ」

「そのどこが悪い」

刀に顔を近づけ刀身の波紋を真剣に見ているルドルフの一言にイリアは額に血管を浮かべ獣のような唸り声を出したが、飛びかかる寸前でハンクに止められてしまう。

「いいかいお譲ちゃん、世の中つてのはそーふ風に出来てんだよ。どんないい奴だって権力と金を手に入れて上に立てば変わるもんさ、いちいち正義の味方してたら傭兵なんて出来やしねえよ」

「その通り、腹を割って話そうルドルフ。俺は何百年も我が者顔でのさばってるベルカを叩き潰したいだけなんだ……痛快とは思わないか？ 歴史と伝統の国ベルカを荒くれ者の傭兵軍団が落とすなんて」

「お前の意見には個人的には賛成だが、こちら俺一人で決断できるほど部下は少くない。後先考えず突撃できる者は失う物が少ない奴だけだ……だが！！」

勢いよく刀を鞘に収めユウヤに返すと皮のズボンを履き、鎖帷子を着込み部下から一本の剣を受け取ると玄関ホール破壊された扉に近づいていく。

「傭兵世界ではシンプルな掟がある。【強い奴が一番偉い】どうだ  
いユウヤとやら、もし俺を倒せたら全ての部下はお前にくれてやる。  
毎日優雅な生活もいいが飽きちまってね〜遊んでくかい」

「こんな大所帯の長がそんな気楽に俺みたいな奴と殺し合いして部  
下達は納得するのか？」

「細かい事気にする奴だな。俺がここの長になった時も前の奴をぶ  
つ殺してなっただから気にする奴なんざいないさ」

ルドルフにつられて外に出ると眩しい太陽に目を細め困んでいた傭  
兵達を見ると一本だけ道が開かれ、その先には縄でしか困んでない  
砂地のリングがあり大勢の傭兵達が罵声を飛ばしていた。

ルドルフがリングに入ると歓声が豪音のように響きユウヤの肌を震  
わせていく。

「待てユウヤ！！ 私にいかせてくれ、あんな男一振りだ」

「俺をご指名らしいしな。それに傭兵界の大スターとやれる機会を  
逃す手はない、まあ見てな」

「む、油断するな。契約者ではないが相当の使い手だ」

ユウヤがリングに入るとブーイングや罵声……：…：…しまいには物まで投げられる始末だが、そのパフォーマンスが闘争本能を刺激して心地よかった。

「一応ルール確認だルーキー、片方が参ったと言うか戦闘不能になるまでやる。後は何でもありだ」

人が死ぬかもしれないスリルに傭兵達は酔いしれ異常なまでの熱気に包まれたルドルフとユウヤは武器を構えていく。

柄を腰の位置で持ち体の中心に刀身を重ねユウヤはまず様子見を選  
択した。幼き頃祖父から最初に教えてもらったのは身を守る術、相  
手の動きを逃さないように目を見開き静かに待つ。

ルドルフの武器は片手剣と通常より若干短く、腕を垂らしながら近  
づいてくる。仮にも傭兵の中でトップをとった男の行動には無  
褒美するぎると感じるがユウヤは徹底的に待った。

「なんだい随分大人しいな、遠慮なく行かせてもらぞ」

構えもなにもなく大きく振り被り真っ直ぐくる。リーチでは刀のユ  
ウヤに分がありルドルフが間合いに入った瞬間に斬撃を走らせた。

武器のリーチ差を最大に生かした突きで胴体を狙う。走ってくる相  
手には防ぐのはもっとも困難で点でしか見えない攻撃……しかしル  
ドルフはその困難な試練を真っ向から受けた。

「思った以上に伸びる武器だな。だが反応出来ないほどではない」

振り上げた片手剣を垂直に下ろし向かってきた刀の切っ先に滑らす  
ように重ね軌道を反らしていく。全体重を乗せて放った突きの軌道  
を変えられたユウヤは前のめりに数歩歩いてしまう。

隙の塊となったユウヤにルドルフは邪悪な笑みを浮かべ太もを一突きしエグる。二人の対決で最初に悲鳴を上げたのはユウヤだった。

「ハア……ガツ！！　なぜ太ももなんて甘い個所を狙った！！」

「久々の挑戦者だ。じっくり楽しみたいんでね」

ユウヤの出血で傭兵達は盛り上がり歓声を上げる中、機動力の元となる足に傷を負ったユウヤはルドルフを分析する。おそらく動体視力が並ではなく天から授かったのであるう……そんな相手にまともに行くのは危険と判断する。

幼き頃から叩きこまれた剣術に自信があるが今やってるのは殺し合い。しかも相手は野生動物のような五感を持ち狡猾。ユウヤの頭の中で戦術は組み上がった。

「……………」

構えを解き刀を地面に垂らすとルドルフが一瞬表情を曇らせたが先程と同じように突撃してくる。大きく振り被り隙だらけだが持ち前の動体視力を武器に圧力をかけてくる。

ユウヤは再び待つ、今度こそ好機を逃さぬように全身の力を抜き足の痛みも意識の外に追い出し、野生の虎のようなルドルフを受け止めるように。

「降参しないと頭割つちま …ッ」

片手剣を頭めがけ振り下ろした瞬間に自分の腹から胸にかけて一筋の光が登ってきているのが見えた。数秒すれば血が吹き出し斬られたと気づき痛みを感じる頃には目の前にいたユウヤが消えていた。

「いくら目に自信があっても攻撃の瞬間はどうしようもない。加えて剣速なら絶対の自信があるんでな」

地面から斬り上げた刀をルドルフの胴体を裂きそのまま体を走らせ横をとる。自分の出血に気づき目で追う頃にはユウヤが上段で大きく構えの……一閃！！ここで終わるはずだったが片手剣を振り上げ防ぐ事が出来たのは持ち前の才能でもあっただろう。

片手でユウヤの振り下ろしを防げたのは二人の体格差や筋力の差もある。そう考え反撃に出ようとした瞬間ルドルフは妙な感触に気づく。甘暖かいと思うと手首が握られていた。

「グッ！！今更握手でもするのかよ」

「へへ〜捕まえたあ〜」



ルドルフの天地がひっくり返った。まるで何かの力に引つ張られるように空中に放り出され痛みで意識が飛びかける。口の中の砂の味で自分が倒れていると気づき顔を上げると目の前の景色が歪んでいく。

「一応確認だ、降参しろ。勝ち目はなくなった」

「……おい……何をした」

地面に手と膝をつきようやく起き上がろうとするが体が言う事を聞いてくれない。ユウヤの体はグニヤグニヤに歪み空が下にある景色力任せに起き上がるが再び顔は地面につく、ルドルフは魔法攻撃だと思いが視界や感覚を攻撃する魔法なんて見た事も聞いた事もない。

「あんたには今まで通り部隊の頭をやってもらう。俺が欲しいのはあんたの指揮だ」

首に暖かい感触が巻きつけられ腕だと気づく。後頭部にも手がいきルドルフは暴れ出す力がまるで入らない。

「ルドルフ。あんたの戦闘力があればベル力を落とすのも夢じゃない……これからよろしく」

【裸締め】一度決まれば抜け出すのは不可能。ユウヤはその技でルドルフの首を締め上げ酸素を奪い、最後には意識を刈り取り大勢の傭兵達の前でルドルフを落とした。

ルドルフを締め落とした瞬間に傭兵達は言葉を失い誰もが現実から目を背けていた。長年無敗と言われその強さを見せつけてきた長が見た事もない戦い方で意識を失い倒れていく。

集中力を使い果たしたユウヤはその場に座り込んだが武器は離さず警戒した。ルドルフが何といおうが世界一とまで言われた傭兵部隊の長を倒したからには部下達が黙っているわけがない、そんな当たり前の事を考えていると一人の傭兵が手を叩く。

一人の拍手は次第に広がりその場にいた傭兵達が拍手や口笛を鳴らし勝利を飾っていく。人殺しで食っている連中だが筋を通す気のいい奴ら そんな単純ではないが、そんな気がしユウヤは「ああ、疲れた」と大の字に寝た。

「傷の具合はどうだ。治ったか」

傭兵の村から少し離れた平原でユウヤは星空を眺めていた。元いた世界では見る事の出来ない息を飲むような眩しい星空に魅了されていると上下青のアベンジの服のイリアが少し顔を赤くしながら肩を叩いてくる。

「俺は生身の人間だから治るまで時間かかんだよ。酒が入ってるな  
イリア」

「ぬ、ルドルフと飲み比べをしてな。あそこまで完全に負けると  
逆に爽快だと笑っていたぞ」

「あのおっさん腹と胸斬られたのに酒なんて飲んでのか!!」

なんとなくユウヤの隣に座るとイリアはニヘラと子供のように笑い、  
よほど今日のユウヤが気に入ったのか両手をバタバタさせて質問攻  
めをすると子供をなだめるようにユウヤは答えていく。

しばらく口を動かさなければなしのイリアが一息つくと懐から出された  
ピンをユウヤから受け取り喉を潤す。イリアは生まれてから他人に  
興味を持つなど強さ以外なかったがユウヤは違う。

知らない技しか使わなく自分達が詰めあげた技術を一切使わずして  
強い。そしてそんなに強いのに傲慢にはならずいつもアベンジの頭

である自分の一歩後ろに下がるユウヤにおかしな感情が芽生え始めていた事にイリアは気づく。

「私はベルカの奴隷の出身でな、私以外の家族は死んだ」

「おいおい俺にそんな事話してどうすんだあ？ 俺は大量殺人してきたろくでなしだぞ」

「それを言うなら私だって負けてないぞ！！ お前の何倍も屍に変えてきたぞ！！」

ユウヤは殺しは数ではなく質だと言い、イリアはそんなの負け犬の遠吠えといい子供のような口喧嘩が始まり最後には熱くなったユウヤが傷口の痛みの声で中断された。

「フフ馬鹿め私の勝ちだな！！」

「この~~~~っ！！ はあ………何してんだが俺は、生まれて武術を学んだがいいが社会に出てみるとそんな物に価値はなく落ちこぼれ、気づけば裏稼業で生計を立てて、今では異世界にまで来て怪力女と口喧嘩………はあ」

「誰が怪力女だ！！ 私も女なんだぞ、その………女らしく扱え」

「ハハハ無理だ……わあああああ……！」

首根っこを掴まれ体ごと持ち上げられイリアが上目使いで照れた表情しながら文句を言うが行動が可愛くなく、ユウヤはじたばたするが怪力の前では無力でイリアの気のすむまで地面から離れていく。

「つまり何が言いたいかっていうとだな！！ お前には私の復讐を手伝わせる事になってだな……そのユウヤお前はそれでいいのか」

「うえ〜ガハッ！！ ささつと言えっただよ！！ いいかイリア俺は好きで戦ってたんだ、お前の復讐とかそんなもんはどうでもいいんだよ！！ まあ乗りかけた船だ、お前一人くらい守ってやらんでもない」

「そそそうか！！ まままあお前がそこまで言うならば守らせてたろうじゃないハハハッ」

やけにモジモジと照れるイリアに嫌な予感がしユウヤは思い切っただけに聞いてみる。恋愛経験はそこまで多い方でもなく聞きにくいが戦友のために確認しとかなないといけない事実を。

「あのよ勘違いだったらスゲエ恥ずかしいんだが……そのお〜お

前さ俺に気があんのか？」

「ぬ、……………ばばば馬鹿者が！！　ななな何を言うか！！　私は男の好みはうるさいんだぞ！！　お前のような貧弱で不細工でわけのわからん奴など……………」

「そそそつか！！　そうだよな！！　お前にはもつと巨漢で包容力があるナイスガイが似合うしな！！　でかい武器使う奴とかな」

どうも互いに調子が狂いついつい視線から外してしまうと妙な空気が流れる。ユウヤがとても苦手な空気で息苦しさを覚え始めた頃に助け舟がくる。笑顔で振り向くと無表情の大男ハンクがダボツとしたズボンとジャケットで腕組みしながら二人を見下ろしていた。

「ユウヤ。ウィルから呼び出しがあったぞ、明日にでもきてほしい  
そうだ」

「お、おおうわかった。じゃイリア早めに寝るんだぞ」

「ぬ、うむ。お前もな」

#### 四

翌日朝からどうもハンクとは気まづい空気で顔合わせ逃げるようにウイルの家まで来た。相変わらずの鉄とオイルの匂いで壁には鉄製の手足がぶら下がり不気味な室内である。壁も床も全て鉄製とウイルの住む街もそうだが工場の中にもきた気分になる。

椅子に座ると昨晚の出来事が頭をよぎる。イリアは確かに自分の事を嫌いと言ったがあそこまで頬を赤くされると信じろという方が無理があり、ユウヤは肩を落としまだ二十歳だというのに疲れ切ったサラリーマンのように大きく溜息を吐く。

「ニヒヒどうしたいシケた顔して」

上半身裸のウイルが現れると相変わらず片手に瓶を持ち酒を飲んでいる。イリアからの紹介で知り合ったが、腕は申し分ないのだが酒癖が悪くアルコール中毒なのが唯一の欠点。ユウヤは頭を下げたままヒラヒラと片手を上げて「ほっといてくれ」と示す。

「まあいい、本題だ。ある遺跡からな武器が見つかって俺の所に流れてきてよくどうやら誰にも扱いきれずに闇市場に流れる直前で俺が買いつつたわけだ」

「誰にも使えない武器を買い取るあんたがアホだろ。骨董品にでもして飾る気かい」



「俺にそんな趣味はねえ……これも運命か偶然か、俺あ武器を見た時鳥肌がたつたんだ」

ウィルが奥から出した布に包まれた長物を出してくると先程までうなだれてたユウヤの顔が一変していく。長さは九十センチ以上、刀に比べ遙かに刀身が長く柄も太い。布から出てきたのは刀身を鞘で隠した野太刀だった。

本来世界が違いここにあるはずがない武器が現れユウヤは椅子から立ち上がり手に持つ。作りを見て本物とわかると鞘から抜き全体を確認していく。

「お前さんから依頼された武器と形状が似ててな、しかも大きさが違つときて気になってついつい衝動買いしちゃまってなあ」

「ウィル、この武器は俺がいた元の世界の物だ。どーなってるここは異世界じゃねえのかよ」

「ああん!! お前がいた世界の武器が俺らの世界にあるって……ありえないだろ」

飲んでいた酒を止めてウィルは考える。それは子供が考えそうな陳腐な発想だが今の情報だとそれしか判断が出来ずに顎を撫でながら

ユウヤに話していく。

「千年前一度世界は竜に焼かれ滅んでいるんだ、生き残った人間達が何とか今まで繁栄してきてな……その武器は千年前の遺物とする」と

「おいおい俺のいた世界は今の世界の過去だって事になるのかよ、ウィルよ。過去にタイムスリップは話でよくあるが逆はねえだろ」

「……うん、わからん。考えた所でわかるはずがない、気が向いたら過去に戻るマシンでも作ったら面白そうだなハハ」

ユウヤもその意見に賛成だった。仮に過去から自分がきたとしても問題は無い。元いた世界に未練はなく、逆に今は自分の詰め上げてきた技術で好き勝手暴れられるこの世界が気に入っていた。

この世界には法律もなく、うるさい警察もない。弱肉強食が唯一のルールとシンプルな世界がユウヤには丁度いい。武術を学んだ者なら一度は最強という幻想を抱くがこの世界では叶うかもしれないと笑いさえもする。

「ヒヒヒヒッ！！ ようやく旦那みたいな刃物を扱える色男と出会えましたわ」

突然野太刀から声が聞こえ反射的に落としてしまつとユウヤは一步下がる。ウィルも固まり部屋が恐怖という名の静寂に包まれ唯一口を開くのが謎の野太刀。

「ひでえ事しますねえ〜あつしは菊一文字、村正、虎徹と名前なんて時代によって変わりましたが、ただ相手をぶった斬るだけの殺人包丁ですわ」

「おおおいユウヤお前の世界の武器は喋るのか!！」

「おい特別な武器とやらはあんたの方が詳しいんだろ!! しかし……なんだこれ」

柄も鍔も黒く刀身だけが怪しく白光しまさに妖刀。手に持つとズッシリと重量を感じさせる重さに震え、刀身に顔を近付け波紋を覗く。刀の知識のある方だと思っていたが喋る刀など初めて見る。

「今まであつしを使う阿呆共はまるでなくて旦那みたいなお人を探しておりました」

「ん? ようするにお前を武器とし扱い野太刀として扱う奴らがいなかったと」

「察しがいい旦那で助かりますわ！！ どうですか？ あっしと組んで生涯を戦いに色飾るって洒落こみませんか」

我ながらユウヤは笑ってしまふ。脳天を拳銃で打ち抜かれたと思ったら異世界にきて今度は喋る野太刀と一緒に組まないかと誘ってくる。喋り方も時代劇に出てくるようなケチなチンピラともう笑うしかない。こんな人には真似できない人生をユウヤは面白いの一言で片づけ野太刀の柄を力強く握った。

「おいウィルこれもらっていくぞ。まさか金とらないよな」

「んじゃ出世払いでな」

「任せる。ベルカ落として大金かつぱらってきてやるぜ」

呆れて再び酒を飲んでいたがユウヤの言葉に吹き出して咳き込む。イリア達が何かを考えてる事はわかっていたがここまでの事をやるとは予想すら及ばなかった。

「ベルカには竜が入るんだぞ！！ いいかよく聞け！！ 千年前人間を絶滅寸前まで追いやった竜は歳老いて死んだんだ、だがな子供を残し人間達は竜を恐れ今では大切にベルカで保護してんだよ！！」

「ヒヒヒッ！！ 竜ときましましたかい、旦那こいつは面白くなつて  
きましたぜ」

「人間がなぜたった一匹の竜に恐れてるかわかる！！ 勝てないんだよ！！ 竜の鱗はどんな攻撃も通じず吐く炎は全てを灰に変えるんだ、なによりもベル力は竜との共存を選んだんだよ。あんな化け物と戦うより遙かにマシだからな！！」

捲し立てるウィルに背中を向けてユウヤは野太刀を担ぎ大きく背伸びする。考える事は命を粗末にしてるとしか考えられない事だった。

「丁度いい、こいつの試し斬りには申し分ない相手だ」

「旦那あつしは形ある物なら断てぬ物はありません。竜の鱗をひつぺ返してやりましょう」

「聞けつてんだよ！！ 仮に竜を倒しベル力を落とすとしても世界の力のバランスが崩れ馬鹿な人間共が自分の利益のために争いだすぞ！！」

背伸びを終えると首を捻りコキコキと鳴らすとウィルの家から出ていく。新しい玩具を手に入れて御機嫌なユウヤは一度だけ世話になったウィルに振り返り去っていく。

「人間つてのはどー転んでも争うもんだウィル。もしあんたが俺を  
気に入らないなら直接殺しにこい。世話になつたな、次に会う時俺  
が生きていたなら世界はどーなってるかねえ」

いざベルカへ。

退屈が避けて道を開けるような異世界をユウヤは我が者顔で歩き、  
ただ戦いたいという欲求を満たしにベルカへと歩を進めていく。

## 五

脚の傷が塞がり前髪が少し目に届くくらいまで伸びた頃にユウヤは青空の下で大きく深呼吸していた。こんなにも晴れやかな気分も珍しく空気を腹いっぱい吸い込み後ろ髪を纏める。肩まで伸びた後ろ髪を一くくりし野太刀を掴む。

通常の刀より遥かに長い野太刀の扱いには苦労したがなんとか形になりお喋りな相棒も御機嫌。江戸時代のような喋り方の野太刀は自ら斬れぬ物無しというだけあって、試す物全て両断する化け物刀であった。

「ぬ、この糞暑いのにお前は相変わらず黒ずくめだな」

胴体、下半身、腕と軽装の鎧をつけ現れたイリアは黒を馬鹿にしながらも自信の装備も黒ずくめだった。二人が並んでいるともう一人黒い大男が現れいつもの三人が揃う。

「む、ウィルに依頼して作ってもらったが黒いのはあいつの趣味か」

「あの爺さん黒はカッコいいと思ってんじゃねえか」

「ぬ、しかし本当に大きいな。それで動けるのか」

胴体もそうだが腕や腰回りの装甲も分厚く兜は円形の目元だけ空いてる単純な作りになっていた。ハンク以外扱えそうにない超重量装備にイリアが軽く叩くと音を吸収していき分厚い装甲に驚く。

「さあ〜てイリア、ハンク。ここまで連れてきたお前たちに感謝するぞ」

遠くに城が見える風景にユウヤは震え、これから始まる戦いに歓喜の鳥肌を浮かばせると三人の後ろから声が響く。振り向くとそこには見渡す限りの傭兵軍団が規則正しく整列していた。

「ああ〜お前ら、俺はユウヤに負けたが頭を続けるって命令されたわ。まあんな事どうでもいいか……準備はいいか糞野郎共」

ルドルフの言葉の後には総勢何人いるかわからないほどの傭兵達が武器で地面を叩き返事をする。地響きのように音が響くとイリアは耳を塞ぐがユウヤは心躍らせ遠足前の子供のように興奮していく。

「何百年という時間ベルカは世界を支配しつづけたが〜いい加減引退してもいいと思うわけよ。いいか負ければ歴史に大馬鹿者と刻まれるが、勝てば歴史を作るのは俺達になる」



装備も人種もバラバラだが傭兵達は一つの目標に向かい心を一つにし長であるルドルフの言葉に身を任せる。一度は負けたが長としてはルドルフの方がユウヤより数枚上手で丁度いい。自分は誰かの上に立つなど向いておらず好き勝手動くのがいいとユウヤは決めた。

「さて諸君。ここ数百年でこんな馬鹿をやつてのけるお前らに戦いという餌を与えよう……見る、餌が出てきたぞ」

遙か前方に砂煙が上がるとベルカの象徴でもある白銀の鎧の騎士達が出てくる。遠目からでもわかるがベルカの数も見限り数えるのもアホらしく思えた。

「作戦はねえ、頭が悪いお前らには丁度いいだろ。ただ敵を食らい尽くせ！！　いいか勝った方が支配者だ！！　負けたら犬の餌だ！！」

ルドルフが大きく剣を天に掲げると傭兵達の雄たけびが響き地震のように空気が揺れていく。演説が終わるとユウヤに近づき言葉を出す。

「ユウヤ俺を殺さなかった事を後悔させてやる。だから死ぬんじゃないぞ」

「俺はベルカ内部に行き竜とやらを殺してくる。ハンク、イリアを連れて存分に荒らしてくるから……あゝまあルドルフ悔しかった生き残って俺を殺しにこい」

「ふん腹の立つ野郎だが腕も立ち更に気に入らねえ奴だ。しかし感謝もしてる。こんな大馬鹿に誘ってくれた事を……さて行くか!!」

ベルカ軍の騎士達も動き出し突撃をしてくる光景に我先にとユウヤが走り出すとイリア、ハンクも引つ張られるように行く。その後ろで傭兵達が雄しい叫び声を上げて入る。作戦も何もなく単純な力押し。世界最強とまで言われたベルカに傭兵達が挑む。

引き分けなどありはしない。どちらが滅びるまで終わらない戦いは始まり、その中でユウヤは存分に自らの力で暴れ最強という幻想に追い付くように走っていく。

「フハハハハ!! 一番殺しは私だぁああああ!!」

「む、待て。さすがにこの装備だといついでにだけで」

「遅いぞハンク!! なあユウヤ……ああもう殺してるのか!!」

ベルカ手前五百メートルの平原はやがて色を変えていき、地面を鮮

血に染め上げていく。

## 六

横一閃の振り抜かれた一太刀は前方の騎士数人に腹を裂き装着していた鎧も斬られていた。振り抜いたユウヤは斬った感触がない、巨大な野太刀のはずだが小枝を振るように軽く水でも斬ってるように重みがない。

人間の体と鋼鉄の鎧を両断した感覚はなく驚いていると次の騎士が襲いかかってくるが、ユウヤは呼吸をするように野太刀を操り間合いに入った瞬間に斬って捨てていく。津波のように押し寄せる騎士達の勢いを一振りで止め恐怖を伝染させていく。

「ヒヒヒッヒッ！！ 旦那あゝさすがですわ！！ 刃物はやはりこう使わないといけねえ」

「化け物刀だな。お前の名は何にしようか悩むな」

薙ぎ払い、突き、振り下ろしとユウヤが振り抜くたびに騎士達は倒れていく。防御不可……重装甲の鎧もバターののように切られ簡単に貫通し中身の肉が切り裂かれる。騎士達が扱う剣と野太刀では間合いの広さが違い圧倒的に先手を奪える上に見た事のない武器に騎士達に迷いが生まれる。

「オオオオオオオオオ！！」

怒涛の叫びが響くと騎士数人が空中に放り出され周辺にいた騎士も吹き飛ぶ。技術より力で圧倒する黒騎士ハンクが戦斧で暴れ回りながらユウヤにようやく追いついてきた。

「城門はこの先だが、さすがに守りが堅いな」

「お前のその馬鹿でかい武器はこゝゆ時のためだろ。ん？ おいいリアどうした」

少しくらい離れていてもイリアの巨大な魔剣ですぐわかる。天高く上げられていた魔剣が見え叩き落とされると地面が揺れ騎士達の悲鳴と叫び声が響いていく。風が吹くように重装備の白銀騎士が飛び雨のように血が降ってくる。

「ハハツハツハ！！ どうした少しは骨のある奴はいないか！！  
私はアベンジの頭イリアだ、大将首が自ら出てきてやったぞ」

「イリア！！ 遊んでないで……おいイリア！！」

突然イリアの体が弾け飛ぶように空に上がり空中で何回も跳ね上げられていく。最後には見えないハンマーで叩き落とされたように地面に叩き落とされ隙を突くように騎士達が群がっていく。

「魔法か！！　おいハンクなんだありゃ！！」

「いちいちこちらがわかる魔法なんて使ってくるか……あそこか」

離れた丘の上で杖をかざしてる魔導師を見つけるとハンクは地面に手をつけて散らばっていた血液を集め出す。やがては血液は無数の刃になり丘の魔導師に襲いかかり一人の胸を貫く。

「おいイリアなに寝てんだよ！！」

群がる騎士達の剣がイリアの背中に突きたてられた瞬間に地面が爆発するように弾け、気分よく戦っていた所を邪魔されたイリアが起き上がり魔剣を存分に振り回す。人間の手足が飛び交い全てイリアが生み出した竜巻のような攻撃の中で騎士達が巻き込まれていく。

「遠くからとは情けない奴め。終わりだ」

血液の刃を操り開いていた手を握り潰すと最後の魔導師が悲鳴を上げて全身から血を吹き出し倒れていく。

「おいスゲーなハンク。相手の血も操れるのかよ」

「相手が長時間無能のように止まっていたらな。こちらも不可がかるから使いたくないものだ」

「恐ろしい魔法だな……おおおい！！ イリアああああ！！」

まだ怒りが冷めないイリアは不満そうだがようやくユウヤと合流すると、周辺の騎士はすり潰されてるか体の一部を失い泣き喚いてるかど地獄絵図になっている。情けかハンクが死に切れない騎士に止めを刺していた。

「城門までの道は開いたぞ。ハンクいけるな、イリア傷の具合はどうだ」

「あんなもの傷の内に入らん！！ ハンクいくぞ」

「うむ、ではベルカ落としと行くか」

三人が一気に城門まで走り出し近付くにつれ邪魔者が現れるが物の数に入らない。視界に入った瞬間にイリアが真っ先に叩き潰し痛み  
の悲鳴も上げる間もなく人間の形が壊されていく。

城門に着くと天を突くようにそびえ立ち鋼鉄の扉が出迎える。ユウヤが手を出す前にイリアとハンクが同時に武器で叩き割ろうとする

が跳ね返させれてしまう。

「ぬ、腕が痺れた」

「む、固いな」

「鉄に鉄をぶつけられれば大きな方が勝つんだよ……さて化け物刀。こいつは斬れるかい」

一振り目で城門に縦の線が入り二振り目で横の線。亀裂ではなくただの線が入り野太刀の凄まじい切れ味を表していた。踊るように何振りもしていくと城門が崩壊の悲鳴を上げていき一気に崩れてしまふ。

「ヒヒヒツ旦那あゝ形ある物ならなんでも斬れる。この言葉に嘘はありませんぜ」

「ぬ、ユウヤの武器は凄いな。今度貸してくれ」

「ああベルカ落としてからな。行くぞ!!」



## 七

何枚もの扉を壊し何人も騎士達を殺し三人は走り続けようやく城内に侵入すると一人の男が待ち構えていた。大理石の床の部屋は何本もの柱が立ち中央には大階段が螺旋状に上階へと続いている。

とうとうこの世界を支配しているベルカ本丸にきたと実感しユウヤが震えると階段に腰を下ろしていた男が立ち上がった。今までの騎士と同じ鎧がだが所々違い個人用にカスタマイズしている使用で胸には勲章が何個も輝いていた。

兜は装着せずに素顔を晒し一度無精髭だらけの顎と頬を撫でると背中から剣を抜く。イリアの魔剣とまではいかないが通常のバスターソードより大きい、眼光は鋭く覚悟を決めた瞳で三人を睨む。

「嫌な予感とは当たる物だな。久しぶりだなアベンジの女」

「ぬ、ヘクターか!!」

「我がベルカに汚らしい土足で踏み込んだ事を死をもって後悔しろ」

腰の横に構え中段の切り払いの構えになると答えるようにイリアが構えるが……そこにユウヤが割って入る。

「イリアこいつ強いんだよな？ 俺に譲ってくれないか」

「馬鹿者！！ 譲れるか！！ ヘクターとはな」

「ハンク」

今にも飛び出しそうなイリアをハンクが抑えつけるとユウヤが前に出て野太刀を前に向けて挑発をする。ヘクターは相手が変わっても表情を変えないまま無言で構えていく。立ち振る舞いや空気で強者の匂いを嗅ぎつけユウヤの心臓が太鼓のように鳴り響く。

「騎士団隊長の私がなぜ前線にいなかったと思う」

「言われてもみれば確かにな〜てか団長だったのか。そりゃ強いんだろっなあ」

「お前達のような化け物じみた奴を私の支配下におびき寄せせるためだ」

何本もの柱が音を立てて動きだし最初は引きずる音だったが、やがては柱は宙に浮き部屋にある全ての柱がヘクターの回りに集まった。その光景はまさに魔法 ……何も使わずして巨大な大理石の柱を操る姿は異世界ならではのユウヤが笑う。

「どうした恐怖で気が触れて笑えてきたか薄汚い傭兵」

「あんたの魔法……何でも空に飛ばせるとか？」

「そんな都合のいい魔法があるか、なに。ただ石を自由自在に操れるだけだ」

十分都合のいい魔法だと思った瞬間には一本の柱が回転しながら飛んでくる。身を翻し避けると次々に柱が矢のように襲いかかってきた。速度は反応出来ないほどに速くなく、ユウヤは一気に走り斬り込む野太刀を肩に乗せて振り下ろしの構えで間合いに入る。

当たりさせずれば斬れない物はない野太刀で勝利を確信した瞬間に視界に捕えていたヘクターが急に下に消えて天井が飛び込んできた。ヘクターの姿を目で追うと遙か下に見え足元から大理石が突き上がってる形が見え「やられた」と小さく呟く。

ユウヤが地面に落ちる前に柱が突撃し着地した瞬間にユウヤは柱に押しつぶさせるように埋もれていく。粉塵が立ちこめ砕けた柱の中を見てヘクターは微かに笑いイリアに目を向ける。

「石は柱だけではないぞ。この部屋全ては石で構成しており、ここでは私が支配者だ」

「ぬ、驚いたな。確かに厄介だが……お前も運がないな」

「む、確かにな。こちら側二人を相手にしたら厄介だったが、よりによってユウヤとはな」

仲間が一人押し殺されたというのにまるで自分を憐れむような態度にヘクターは苛立ちを覚え、魔法の元である剣を強く握ると視界の外から小石が当たる。次に音が聞こえ瓦礫の山となったユウヤの墓標を見ると一筋の光が走り瓦礫の山は真つ二つに割れた。

巨大な柱を両断する光景にヘクターが眉を吊り上げ驚いているとその隙を狙うかのようにユウヤが墓標から弾丸のように飛び出してくる。野太刀は肩にかけ全体重を攻撃に向けた構え、頭から血が出て片目の視界が奪われているが問題ない。

「貴様！！何をした！！」

炎や水、土や石などを操る魔法なら知っているが、それを両断する魔法を見たのを初めてである百戦錬磨のヘクターは焦り一本だけ警戒ように残っていた柱をユウヤめがけ飛ばすと背筋に嫌な汗が流れてしまう。

「ヒヒヒッ！！ 旦那あ体の方はどうですかい」

「骨数本にヒビが入ってるが問題ない。さてこちらの番だ」

柱は真ん中から真っ二つに両断され粉一つ出さずに空中で二つに分かれヘクターの思考が止まる。あの長いだけの細剣で何倍もの太さの柱を切り分ける現実に緊張の汗が全身が吹き出し気づくと、地面に野太刀を滑らせながらユウヤが懐に入ってくる。

狙いは下からの斬り上げの一振り、ヘクターは横に構えていた剣を初めて動かし軸足を前に大きく出し振り抜く。リーチの差は背丈で上回り互角にし剣と野太刀の軌道が混じり合う。

「浅いか!!」

剣が野太刀に触れた瞬間にヘクターは力勝負に出た。体格で勝る以上力負けはないと判断し技術も何もない力で押していったが……剣はヘクターの鋼鉄の意思を嘲笑うかように断ち切られていく。欠片一つ落とさず見事に斬られ、勝利した野太刀は餌に喰らいついた。

「旦那にしては珍しいですね。踏み込みが甘いはずせ」

「うるせえな!! 骨が軋んで痛てえんだよ!!」

視界が真っ赤に染まりそれが自分の血だと気づくと足元がフラつく。

致命傷は逃れたようだが手足の感覚は遠のく、ベルカへの忠誠心がヘクターを支え両断され使い物にならなくなった剣を振りかざすと……ヘクターの半分は失われていく。

「アツ……ガツギヤアアツッ!!」

片目から激痛が伝わり、抑えながら無様に地面を転がり回りながら叫び散らす。眼球はグチャグチャに形を変え白い汁まで出てヘクターの視界の半分はユウヤの手によって斬って捨てられた。

「おい行くぞハンク、イリア。ぐずぐずしてらんねえんだ」

「ぬ、確かにな。ユウヤあまり無茶をするな」

「む、次はいよいよ竜とやらの怪物か」

遠のく足音を聞きながらヘクターは絶叫混じりに怒りの咆哮を上げるが激痛で体が言う事を聞いてくれない。痛みと怒りで額に血管を浮かべながらのたうち回る姿は自分で考える以上に滑稽で、やがては血が足りなくなり意識が薄れていく……それがヘクターが初となる完全なる敗北だった。



階段を駆け上がり上階へと進むたびに騎士達は増え全てを蹴散らしようやく扉の前で三人は一息着く。イリアは胸に手を当てて大きく深呼吸し王冠の装飾が備わった金色の扉を開ける。

室内は暗闇で一人の老人が椅子に腰を下ろし手には剣が握られていた。金髪が肩まで伸び歳は六十代だろうか、頬から顎まで立派に伸びた髭も金色で威厳の塊のような男は大きく息をつき座ったまま口を開く。

「我がベルカの軍勢をここまで押しつけ、あまつさえ王である私の首元に噛み付きかけてるとはな……薄汚い野良犬共め」

「ようやく会えたなベルカ王ベルーザ。覚えているか私の顔を……いや奴隷の顔など覚えているわけないか。生まれつき鎖に繋がれ飢えをゴミの中の残飯でしのぎ、寒さを冷たい石の上で過ごす気持ちかわかるか」

「貴様らには到底理解できまい。世界とは弱者強者がハッキリする事で成り立つのだ。皆が同じ平等の扱いなど許されないのだ、それを知れ汚い傭兵共め」

ベルカ王ベルーザの言葉は到底一国を任せられる王の言葉とは思えずにイリアは長年溜めてた怒りを通りこし呆れてしまう。だが一瞬



の事ですぐ地獄の業炎のような怒りが蘇り魔剣を握りしめると王室に乾いた拍手の音が響く。

「ベルーザさんあなたの言う通りだ。世の中つてのはそーゆもんだ、ただ大人はその事実を隠し自分の都合のいいように動かす。それに比べあなたは堂々と言うとはなぐたいした奴だ」

「漆黒の男よ、貴様には理解できるといふのか。ならば今すぐ自害して己の無力さを恥じて死ね」

「理解はしてるが納得はしてないんだわ。悪いな王様よく世の中つてのは俺達みたいな大馬鹿する奴もまた必要だろ？」

ベルーザは座ったまま大きく剣を上げ勢いよく地面に突き刺すと王室に炎が現れる。壁に一定の距離で備わった炎は燃え盛り王室の全貌を照らしていく。

広い……人間が活動するとは思えない広さにユウヤが息を飲む。王室には玉座以外の物はなくただ広いだけ。物以外はないが一匹の獣が鼻息を荒くし牙を剥き出しにしていた。

「確かにお前達のような愚か者は必要だな。大衆に愚か者がどうなるか見せるためにな」

玉座の遙か後方で煉獄の炎を口から出し真紅の鱗に包まれた獣……  
ユウヤが絵本や伝説でしか聞いた事のなかった竜がそこにいた。人間の十倍はあるう巨大な体に翼を畳みつけられると脚が凍ったように地面に張り付く。

「竜王オルガよ。後は頼むぞ」

「いつも世話になってるからな。たまには働いてやる」

言葉を話す竜と会話した後にベルーザを奥の扉から出ていき残されたのは三人だけ。竜が前足で立ち上がると更に巨大に見えてユウヤは久しく忘れていた恐怖という感情で体を縛られてしまう。

その恐怖の鎖はイリアの怒りによる叫び声で千切れ気づけば走り出していた。戦術などなし、ただ斬るしかない。とうとう人外との戦い辿りついた殺し屋人生にユウヤは恐怖と喜びを同時に感じ走る。

「ぬううううううおおおおおお!!」

先人を切ったのはハンクだった。今まで黙って事を見ていた鬱憤を晴らすかのように戦斧を竜の腹に振り下ろす。まるで金属でも叩いたような音がし顔を上げると鱗が数枚こぼれ落ち出血が見え笑う。

「イリア、ユウヤいけるぞ!! こちらの攻撃は通る!!」

「何百年ぶりだろうか。我ら竜族に挑む大馬鹿者は……少しは強いんだろうな」

人の数倍あるう前足を振り振り被り正面にいるハンクめがけ振り下ろすと、竜は長らく忘れてた痛みを感じ牙を噛み締めていく。前足の中から一本の剣がはみ出し使い手の足元の地面が砕けている。

「無事かハンク!! まったく少しは回りを見る馬鹿者」

「む、お前に言われたくないわ!! さすがだなその怪力」

「速くそこをどけ!! さすがに長くは持たない……あいつめ」

ふんばっていると足元に大きな影が重なり見上げると、真っ黒なコートが空中に泳がせユウヤが竜の頭めがけ飛んでいた。コートが翼に見え顔は鬼の形相……悪魔と竜の対峙に一瞬イリアには見えた。

## 九

勢いをつけ飛び上がると常人の三倍はあろう飛距離を稼ぎ、重力に逆らい高度を稼ぐ。野太刀を両手で握り大きく振り振りながら竜の顔に迫っていく。

契約者になって身体能力も上がったのか自分の跳躍に驚きながら竜に迫る。ある程度まで上がると今度は重力に押されるようにに降下していき剥き出しの牙の隙間からマグマのような炎が見える。

空中では回避も出来ず落ちるしかない。竜が大きく口を開き喉奥から業火を吹き出す瞬間にユウヤの一太刀も振り抜かれていった。

「ユウヤ!!」

イリアの叫び声が届く頃にはユウヤの姿は業火に隠され黒い影すら残らない。吐かれた業火は周辺の壁や地面を一瞬で黒くし中には溶ける部分もあり見ていたハンクの顔から血の気が引いていく。

「グギヤアアアアア!!」

業火を吐いた竜が急に叫び出すと地面に大量の血液を垂らし悶え苦しむ。首を何回も振り前脚で顔を隠すような仕草を見るとイリアの動きが止まる。ハンクが何事かと思いい竜の周辺を見渡すと、竜の後ろに全身から煙を出し着ていたロングコートに焦がすユウヤが膝を

ついていた。

「ヒハハハ！！ さすが旦那あゝ片目は貰いましたぜ！！」

「ハンク、イリア！！ 胴体じゃない脚を狙え！！」

片目から血の涙を流しながら竜は四足で立ち怒涛の怒りの声を上げ威嚇してくる。声だけで石の壁にひびが入り空気が震えだす。目前で吠えられると心が根こそぎ折られそうになるがユウヤはそれ以上に喜びの鳥肌が浮かぶ。

戦いこそ人生

闘争こそ生きる価値

殺し合いこそ全て……。

「胴体は固くて攻撃が通りづらい、細い脚を叩き斬って無力させるぞ！！」

強い敵に出会うたびに自分が強くなったと思い込み、その快楽に酔いしれる人生だった。そんな根っからの殺人者の前に竜という最高の料理が出され後は食らいつくだけ……狙うは体重を支える後脚の細い足首。

ハンクが我先にと突っ込み戦斧を振り抜くと竜の動きが変わる。巨体とは思えない速さで背中を見せ何事かと思つた瞬間にハンクの体

は消えていた。

太く長い尻尾が振り抜かれハンクは壁まで飛ばされ、石段の壁を貫通し王室から強制的に除外された。

「やってくれたな人間！！ 骨一つ残さず灰にしてくれるわ！！」

「ユウヤどうする……あの竜め、懐に入れないつもりだぞ」

「さすがにこちらの狙いはわかるか。イリア俺が必ず隙を作る、その間に一撃を叩きこめ。お前の怪力なら一撃で十分だ」

深呼吸し前に踏み出すと恐怖が体に巻き付く。ユウヤは大きな賭けに出た。もし再び竜が業火を吐けば間違はなく塵も残らず消されるだろう……しかし竜は怒り冷静さを失っている。片目を奪われ怒りに震えている今なら。

前脚を大きく振り振り被り圧倒的なりーチをいかし力任せに殴りかかってきた。狙い通りと思いユウヤは真正面かた野太刀を突きたてていく。

鱗を切り裂き中身の肉を切り裂いていくが刃は途中で止まる……人間と竜では質量の桁が違い、斬れる物無しと言わしめた野太刀は竜の剛力の前に敗北した。

「……ガッ！！」

トラックにでも引かれたような衝撃が真正面から受けユウヤは吹き飛び、ひびが入っていた肋骨の骨が砕ける痛みと音が聞こえ表情を苦痛に歪めるが、竜にも負けないくらい巨大な魔剣を持ち力強く走るイリアの背中を見て笑う。

「人間風情があ！！」

前脚を切り裂かれ一瞬であるが隙を見せた竜の懐に飛び込んだイリアは体を投げ出す勢いで魔剣を竜の顔に叩きつけていく……鼓膜を破るような金属音が響くと竜の眉間に魔剣は叩きこまれ両者が静止した。

「ハアハア……見たか竜よ人間を」

「ガアアアアア！！ 人間ガアアアアア！！」

眉間に魔剣を叩きこまれ血を雨のように降らしても竜は顔を上げて牙を向きイリアに喰らいつく。もう逃げれる距離でもなく、そもそも全身が痛むイリアには回避運動は出来ずに膝をつき視線を落とすていく。

「……………くそ……………ユウヤ、ハंक。すまぬ」

噛み砕かれる瞬間に魔剣を下顎に滑り込ませ凌いだが、契約者になり貰った怪力でも竜の噛む力とでは勝負にならない。支えてる魔剣を両腕が悲鳴を上げていき二の腕が血が吹き出し視界が暗くなつていく。

「噛み潰して灰にしてくれるわ!!」

「悪いな竜よ。その女には手だしは許さん、俺の獲物だ」

野太い声が聞こえると空気を切り裂く音と共に竜の残った片目に戦斧が突き刺さる。視界を完全に奪われた竜は混乱しもがき始めると解放されたイリアが大きく魔剣を竜の顔に突きたてて……………眉間に突き刺しえぐる。

何度も何度も突き刺し最後には魔剣が竜の頭を貫通し動かなくなる。と、イリアは自らの拳で殴り始める。拳を痛めようとも関係なく殴り続け最後にはユウヤに抑えられた。

「おいやめろ!! もう死んでるぞ!!」

「ガアアアア!! こいつが!! この竜が!!」



「む!! イリアいい加減にしろ!!」

ユウヤとハンクに抑えられ止まると大きく息をつき座り込む……世  
界滅ぼした竜の末裔を討伐した者は復讐に人生を捧げた一人の女だ  
った。

勝利すると一気に体の痛みが何倍にもなり膝が折れユウヤとハンクは地面に座る。イリアは無言で竜の屍を見下ろし無表情で突き刺さった魔剣を抜くと返り血を顔に浴びてしまふ。

「む、ユウヤ体の具合はどうだ」

「お前と同じだよハンク。肋骨が折れ鎖骨にひび……まあ見ての通りボロボロだ」

「互いによく生き残ったものだ。本当にこの化け物を……イリア」

片足と魔剣を重たそうに引きずりながらベルーザが出ていった扉に向かう。後は王の首を取れば全てが終わると確信したイリアは痛む体に鞭を入れて世界の支配者ベル力を落としにかかる。

「やれやれ、ユウヤ行け。イリアを頼むぞ」

一息ついたと思うと続々と騎士達が現れ剣の切っ先を向けてきた。折れた膝を曲げハンクが立ち上がり戦斧を大きく構えると背中ごしにユウヤに喋っていく。

「俺は自分がこんな小さな男とは思わなかった。イリアがお前に惚れてると知り同様に嫉妬さえもした……だがイリアはお前を選んだ。頼む」

「こんな時に何言ってるんだハンク！！ この数は無理だ！！」

「ほう甘く見られたものだな。この馬鹿デカイ武器はこんな時のためだったんじゃないのか」

数人の騎士が向かってくると戦斧は猛威を振るい鎧ごと騎士達を碎きバラバラにしていく。ウィル特性の漆黒の鎧は竜の一撃で半分以上砕け、兜はどこかに吹き飛び、太い眉毛に大きな顔と素顔を晒し仁王立ちでユウヤの前に立つ。

「笑える話だ。ある女に敗北から始まった淡い恋心は叶わず、しかし未練ばかり残り……その未練のせいでこうして命を張っているとはな」

「おいハンク ……俺がフラれる可能性を入れてないぞ。俺がイリアにフラれたらどうすんだお前」

「……フ、フハハハ！！ そいつは傑作だ！！ もしそうなら力の限り笑ってやる。しかし安心したぞ、そう言うからにはイリア

に惚れているんだな」

「ああ惚れちまった。美人もそうだが、あんなイカれた女そうはいない、俺みたいなの糞野郎には丁度いいかもな。ハンク頼んだぞ」

背中ごしに軽く手を振られるとユウヤは全力でイリアを追う。残ったハンクの雄雄しい叫び声が背中を押すように加速していき破壊された扉を潜り階段を更に上へと登っていく。

壁にはビツシリと血痕がつけられ、その血がイリアでないと願うばかりだ。進むたびに騎士の死体を増えていきイリアが生存しているとわかる唯一の証拠だった。

「ハアハア、イリア!!」

息を切らせながら階段の先の光へと身を投げ出すと顔が濡れる。上を見ると曇空から雨粒が落ちてきていた。ベルカ城最上階は円形に作られた石段の屋上……そこでイリアと黄金の騎士は相対していた。

「愚か物共め!! 竜を殺すという事はどーゆ事かわかるのか!!  
世界のバランスは崩れ、各国が我先にと侵略してくるぞ」

「ベルーザ。今こそ我が父上母上……今まで数え切れないほどの命を散らしていった奴隷達の無念晴らさせてもらうぞ」

ベルーザの周辺の騎士は既に人の形を失い残るは王のみ。しかしイリアの怪我、疲労も酷く今にも倒れそうだった。ユウヤもボロボロの体を引きずりながらイリアに追いつき肩を掴むと驚きの表情で振り返る。

「ぬー！ ユウヤなぜ追ってきた。お前はもう十分働いた、もう休んで」

「イリア結婚しよう」

「ッ」

血に濡れた復讐のみの人生の最終到達地点。今まさにベルーザの首を落とす瞬間に予想もしえない言葉を聞いてイリアは思考を停止してしまう。

「ユウヤ何を言っているんだ、ふざける時では」

「お前の銀色の髪、顔立ち、性格、頭のとっぺんから爪先まで全てに惚れた。どうだ？ 俺みたいにな奴じゃ駄目か」

「……答えを知りたくばベルーザを倒すぞ」

昔傭兵の仲間の女が言っていた「幸せ」好きな男と過ごす時間がたまらなく幸せだと。なんとなくわかった気がした。ただイリアは好きな男と世界最強の国家ベルカ王を殺すという自分らしい状況に笑みを作る。

「竜を殺し、よもや王たる我が前で茶番とはな。ふざげるな!!」

もう二人は言葉を交わす事なく走り出す。ユウヤが前に出るとイリアは最後の力を振り絞る。体ごと投げつけるように魔剣を振り被り、鉄の塊を勢いよく矢のように投げ出した。

回転しながら正確に目標を捕え、ベルーザに直撃を確認すると倒れユウヤの背中を見て意識を失ってしまう。

王の意地か魔剣の直撃を剣で受け止めたベルーザの手首の骨は粉々に碎けるが、ふんばり視界を遮っていた魔剣を落とすと目の前は雨が降っているだけの光景。

「……どう……だ」

いない。上下左右見渡してもユウヤの姿はなく雨で濡れた目蓋を何回も擦るがどこにもいない。思考をフル回転させると一つの答えに辿りつく、一か所だけ確認していない場所があると気づくと自身の

腕がない事に気づく。

「漆黒の男よ。貴様は世界のバランスを崩した責任をとる事が出来るか！！ これから今まで以上の血の歴史を戦いで作る事になるだろう」

唯一確認してない場所は背後だった。振り返ると野太刀を鞘にしま  
うユウヤの後ろ姿が見えベルーザは敗北を確信し斬られた片腕を見  
て次に胸……おそらく突き。心臓部分が赤く染まり痛みを感じない。  
やがて視界が揺れ始め前のめりに倒れてしまう。倒れると自分の血  
だらけの海に沈みベルーザは長年の人生を敗北という形で幕を下ろ  
した。

「ヒヒッ、ヒヤハハハハ！！ 旦那あ！！ こいつは痛快愉快！！  
荒くれ者の傭兵達がベルカを落としましたぜ」

「へへ……ハハハハハッ！！ そうさ！！ 最高の気分だろう化け  
物刀！！ 今まさに俺は世界の頂点に立っただぞ」

ベルカ王ベルーザを殺したユウヤは雨の中子供のように駆け回り、  
狂ったように踊る。こんなにも一度の勝利に酔いしれる事は今まで  
なく泣くように叫んでいく。

世界の頂点にたった男は正義の味方ではなく、悪の塊のような男で

あつた。殺戮を楽しみ快樂に変えていく殺人者は勝利をむさぼるよ  
うに食らい続けていく。

その日ベルカは陥落した事件は全世界に轟き、アベンジとそれ  
を指揮したイリアヤルドルフの名も轟き響き、長きに渡るベルカが  
築いてきた平和は終わりを告げた



ベルカ陥落から数年後。

ベルーザの予言通りに各国は動きだし戦い続けていた。人間の欲望だけが世界を動かし、権力、金、力の三つが交差する永遠に続くかと思う戦いは終わらない。

アベンジはベルカ陥落させ傭兵界ではもはや伝説となり数多くの傭兵達の語り草となっていた。中には「俺はアベンジと共にベルカを落とした」という輩も出てくるが、アベンジのメンバーは自ら名乗らないという行動は噂に拍車をかけていく。

イリア、ハンク、ユウヤの名だけは知れ渡り英雄扱いする者も少なくない。何百年も支配し続けたベルカ王を少数で潜入し首をとったという事実は現実離れしすぎて嘘ではないかという意見も飛び交う。

「……………クソッ!!」

指を組み貧乏ゆすりをしながら苛立つ英雄　ユウヤはある部屋で恐怖していた。竜と相対した時以上の恐怖で脂汗が出て震えが止まらない。自分が何も出来ず待つだけという状況に感じた事のない恐怖を覚える。

「ユウヤー!!」

ユウヤと同じく顔を真っ青にしながらハンクが巨体で扉を蹴り飛ばしてくると、勢いよく立ち上がり詰め寄る。異世界にきて数年で何百という命を奪った男は心底震えている。ハンクにすぎるように掴みかかると、その手は弾かれ肩を掴まれ「落ち着け」と言われる。

「とにかくこい!!　イリアが待っているぞ」

廊下を走る……風のように走り抜け扉を何枚も開け、途中何人かと肩をぶつけるが謝りもしないでただ走った。普段以上に体力消耗が激しいのは恐怖のせいだろうか気がしてる暇はない、とうとう最後の扉の前に立つと心臓の音が全身を叩きつけるように鳴ってきた。

「ふう……イリアー!!」

覚悟を決め扉を開けるとベッドに横たわるイリアが見え近付くと汗まみれの顔で笑いユウヤはその場で腰を抜かし尻餅をついてしまう。後からハンクもくるとイリアの無事な姿を確認し同じく尻餅、そんな間抜けな二人を見てイリアが笑い一人の女性が近付いてきた。

「手術は困難でしたがなんとか乗り切りました。おめでとうございます」

「む、腰が抜けて立てん」

「俺もだ」

「ぬ、アベンジの幹部で今や世界に名を知らしめた二人がこんな姿になるとは生命とは凄いものだな」

白衣の女性が手の中にある小さな布で包まれたある物をイリアに渡すと、ユウヤやハンクが見た事のない笑顔になり戦士の顔を忘れてしまう。似布をとると一つの生命が手の中で産声を上げる。

「フハハハうるさい奴め、父親に似て下品だな」

「いや母親似だな。俺はもつとスタイリッシュだ」

「む、お前ら二人似だ。やれやれこれでまた世話の仕事が増えるな」

太い腕を組みながら何回も頷くハンクはこれからの苦勞を思うと不思議と笑みになる。今までの人生で戦い以外の事は無能だったがこれほど先が楽しい世話役もないと思い「俺にも抱かせる」と言う。

「名前どうする？ 俺が決めていいか」

「私イリア・クライシスの娘だ。もう決めてあるぞ」

「クライシス？ 初耳だが」

「滅多に名乗らない主義でな。一応父上の名だ」

手術後だというのにイリアはベッドの上に立ち上がり拳を上げて高らかに宣言する。愛するユウヤとの子供のために何カ月前から考え抜いた名前を。

「我がアベンジの子孫ともなるうっ」の子は

「二ノ・クライシスと名付けよう!」

二ノ・クライシスと名付けられた女の子が自分で立ち上がり、父のユウヤから剣術を学ぶまで成長するまで月日が重なったある日……ある城に中庭で可愛らしい声で二ノは父から授かった一本の刀を振っていた。

中央の噴水に腰をかけている大男ハンクは最近二ノの世話ばかり、両親であるユウヤとイリアは戦場に渡り歩き今では傭兵界ではなく全世界に名を響かせる豪傑になっている。

そんな親だからこそ我が子に刀を渡し「これで遊んでろ」という言い放ってしまうのは。ハンクは戦いだけの人生だったが二ノの子守りをするにつれ表情が和らいでいく事に気づかないでいた。

「おいハンク！！ そんなところで座ってないで私の相手をしろ」

「む、生意気だな。お前なぞ数秒で倒すぞ」

「やってみなければわからんぞ馬鹿者め！！」

背はハンクの膝ぐらいまでしかない二ノが刀を振り回し近付いてくる。世話をするついでに二ノの稽古を試してみれば親譲りの才覚があり将来とんでもない怪物になる片鱗を見せていた。

「その口調はイリアの真似か？」

「母上が私を殺すまで強くなれと言っていた！！ たのしみだ。母上と戦える事が」

「話を聞かないのもイリア譲りか……そんなに強くなってどうする」

二ノはハンクの言葉に一度出しかけの言葉を口の中に戻すと石のタイルの上に座り空を見上げる。顔はイリアの似たのが整っているが、瞳や髪色はユウヤ譲りの黒になり、この世界では珍しい。

「ハンク。私は強くなるのは賛成だが……なぜ父上と母上はあんなに人を殺せるんだ。わからん、なぜあんなに楽しそうなんだ」

「それが戦うって事だ二ノ。強くなりたければ敵を殺し、勝利の優越感に酔い経験を積み上げた結果に強さがあるんだぞ」

「私は止めたい。父上や母上は十分に強いではないか、もう強くなる必要なんてない。それを教えるために私は強くなりたいんだ」

ハンクは目を丸くした。まだ十歳そこそこの子供の台詞ではない。何度も両親に戦場に連れていかれ人が苦しみながら死ぬ姿を見て出

した答えのだろうか、瞳は決意の炎に燃え覚悟は既に決まっていた。

「む、しかし大層な目標だな。お前の父や母はとんでもなく強いぞ」

「ならば更に強くなればいいぞ！！ 父上も母上も私の強さで抑えつけてやるわ！！ フハハハ！！」

「考え方はイリアだな。そうだなお前が強くなり私の生命すら脅かすまで成長するのを心待ちにしてるぞ」

高笑いをする二ノの背中を微笑むながら見つめ一言残す。それはこれから二ノが歩む試練の道のりを表すような言葉だった。

「しかし苦勞するぞ二ノ。なにせお前の父は今や世界を動かした人々から嫌われ……」

魔王とまで呼ばれているんだぞ」



それから数年後。ニノはウィルの協力の元に世界を移動しテツをこの地獄のような世界に引きずり込んだ。



には敗北という現実があり自分がいかにちっぽけで情けない存在か知る。

結局は元の世界にいた時と何も変わらない。何をするにしても空回りで頑張った分だけ失敗の時のショックが大きい……俺は何のために生まれてきたんだ。こんな生き恥を三十年以上も晒すために生まれてきたのかよ

痛みから逃れるようにテツは意識を立ち敗北という大海の中をさまよう。ただ元の世界にいた時よりも何倍にも膨れ上がる感情がある。

「ちくしょう」

悔しさだけはテツの中に残る。元の世界の自分の部屋で毎晩人生を振り返るように呟いた一言と同じ言葉だが重さが違い涙が出るほど悔しかった。

憂鬱な気分で座ると嫌味なくらいに晴れてる空に大きな溜息を吐き、まだ痛む唇を触り胡座をかく。何日か治療を受けテツは無事に騎士学園に戻ってきたが授業に出る気分でもなくサボリ屋上にきていた。生きてる方が不思議だと言われ自分でもそう思う。顔を潰され歯を叩き折られと死ぬ理由なんていくらでもある。むしろあそこで死んでた方がまだ幸せだったと思いついつい視線を落としてしまう。

「いよテツ!! 久々の登校でサボりかよ」

片手を軽く上げいつものヘラヘラした笑顔で近づいてくるエリオを見るとなんだがホッとしてしまう。エリオも人殺しには変わりないが、イリアやハンクとは別。まだ人間として大切な部分が残ってる気がした。

「おいテツ!! ひでえ顔だなあ〜お前また学園長辺りと喧嘩でもしたのかあ」

「まあそんなもんだ。それよりもお前もサボりか」

「へへ登校するお前を見てな〜久しぶりに顔を合わせるんだ、屋上でゆっくり話したくてな」

隣にエリオが座ると意味はないと思うがテツはたそがれてしまう。一体何度目だろう、何かに失敗すると人生を振り返る悪い癖は直ってくれない。

「エリオ俺はなあ。とんでもなく駄目人間なんだよ」

「ハツ今更なんだよ〜」

「勉強も出来ず仕事もすぐクビになり落ちこぼれ、人生という膨大な時間のほとんどを放置していて気づけばこの歳……唯一俺に出来たのはここにきて殺人術を学んでの人殺し。真つ当な人間ですらない」

楽しかった 手に入れた人外の力で敵を殺し叩き潰す行為がたまらなく楽しかった。力を誇示し「俺は強いんだ」と喚き散らす子供のようにテツは暴れた。最初は恐怖していたが慣れてくればこんなにも楽しい事はない。

そして調子に乗っていた時にイリアやハンクに出会い敗北という谷に突き落とされ体も心もボロボロにされてしまう。いい加減疲れてしまう……敗北だらけの人生にテツは我慢の限界が近づいてきてい

た。

「俺みたいな子供が言う事じゃねえが、テツよ。お前は最初から諦めてるんだ、どうせ失敗するとか今度も駄目かとか考えてんだろ」

「だから」

「上手く言えないが、……足掻こうぜテツ。もう歳がどーのこーのより言うのは無しだ!! 俺たちは同じ学園の生徒だ、成り上がるぜ!! どうせ今の現状変えられないなら精一杯悪あがきしてやるうぜ」

立ち上がり日光を背にするエリオの笑顔は眩しかった。若さとはこんなにも眩しく財産だと思いつつも笑う。考えてみれば何をしてもやる前から言い訳を考えていた、テツの人生は言い訳という鎖で繋がれている。

「お前みたいな子供に説教くらうとは俺も本当に駄目だな……よっしやああああ!! どうせ失う物なんてとうの昔に失ってたんだ!!」

「やる気出してみたいじゃねえかテツ、んでよ、後ろのあいっらいつまで待たせるんだ」

エリオの指の先には開きかけの屋上の扉があり、黒と銀の頭がヒョ  
コッと出ていた

「こら押すな!!」

「貴女の体無駄に大きいんです!!」

黒と銀の頭が数回ぶつかり揺れていると背中を押されたように二人の体は出てしまい、テツとエリオの前で派手に転んでしまう。たった数日会えなかっただけにテツは二人を見ると嬉しくなり声を下さそうとすると、それより先に二人が口を開く。

「なんだ元気そうじゃないかテツ。フェルなど小動物のように震えて心配して オブツ!!」

「ホホホこの脳ミソが足りてない女が誤解を招く アプア!!」

照れ隠しか二人はテツの動きを見習い互いの顔を殴ると空気が変わり、ニノは首をコキコキ鳴らしフェルは指をバキバキ鳴らせて正面に立つ。いつの間にか仲良くなった二人を見てテツ笑顔になりようやく言葉を出した。

「久しぶりつてのも変だが、少し見ない間にお前ら仲良しだな。おじさん嬉しいぞ」



「ほれどうした没落貴族。自慢の剣がないのに強気とは珍しいな」  
「いつか貴女のその自信満々の顔を絶望に染めてみたいと思ってました」

「……ハハ。おい可愛い女の子二人が久々の再開だが、照れるのが恥ずかしいんで隠した結果どうして殴り合いになるんだ。おいわかつたから振り上げてる拳を下ろせ」

二人の拳を掴みあげ無理矢理座らせるとフェルがどうにも気まづい顔をしている事に気づく、記憶の中を探るとある事を思い出し手を叩く。エリオは欠伸をしながら胡座をかいているがフェルの前で無理に緊張を隠しているのが見てわかる。

「ああフェル、お前とは少し喧嘩してたんだよな。悪かったな」

「えー！！ そうですねっけ？ ああ私は海より深い心なんで忘れました。まあ許してあげますテツさん」

「そそそつかフェル、お前結構気にしてたろ。授業中とか爪噛んでたまに髪をかきむしり」

「黙ってくださいエリオ」

感情はなくブリザードのような冷たい一言でエリオを凍りつかせ乱れた髪を整えテツにニコリと笑いかける。どうにもテツにはエリオ

が不憫に見えてしまう。初恋の男子が頑張る姿は応援したくなるのは歳のせいだろうか？ と考えていると屋上の扉が再び開かれた。

「ここにいました学園長」

「おゝ揃ってるな丁度いい。お前らは無事このベルカ騎士学園を卒業だ」

現れたのはマリアと学園長だが、いきなりの言葉に四人は呆然とする。まだ学園に通って一年も立っていないというのに卒業……この世界の教育システムを疑ってるテツを尻目に学園長の言葉が続いていく。

「お前達はもう騎士学園などの収まる強さじゃない。今のベルカ軍は有能な人間を遊ばせる余裕などない。おめでとう諸君！！ 今この瞬間君達は正式にベルカ騎士団への入隊が許可された」

「この書類にサインしてください」

マリアから渡された書類を見ると何箇所かサインをする項目があり、四人が座りながら混乱しているとエリオが一人手を上げて喋り出す。

「あゝこいつらが強いのはわかるんですが、俺なんかまだまだの



夢見た学園生活は終わり、これから生きている限り何百と命を奪つて  
であろう戦いに身を投げ込む事になった。

テツ三十三歳。最終学歴中卒。ろくに勉強もしなく人生の半分  
以上を放置し絶望していた……しかし変わる。強制的に変えられて  
しまう。

もし履歴書を書くならば今までとは違い特技の欄に一つだけ書く事  
が出来た。【殺人】と。

生き残る道は……殺すしかない

「ふうようやく到着か、しかしここが世界で名高いベルカ騎士の部屋とはね」

「ぼやかなエリオ。俺達は学園のエリート共が喉から手がでるほど欲しい騎士の資格を手に入れたんだ。これくらい我慢だ」

薄暗い部屋は豆電球一つの光しかなく埃臭い。広さも二人にしては狭く石の壁には血の後が何箇所もあり不気味……木製の二段ベッドは腰を下ろすと年季の入った音を出し二人の体重を支えられるか不安になってくる。

四人は荷物を纏め馬車に飛び乗りそのままベルカ騎士団本部まで連れていかれた。丘の上に古城があり周辺には草木もない平地だけと殺風景な場所が騎士団の総本山だった。

平地でも何十という騎士達が訓練していて活気のある声が響いている中四人はまず自室に案内されてる。城内は作りは古いものの広く何人かとすれ違つと物珍しそうな目で四人を見た。

「ベルカ軍遊撃部隊！！ 新生マリア隊！！ 聞こえはいいが本来騎士になる歳じゃない子供三人と謎のおっさん……嫌でも注目されるだろうなこれから」

「確かにな、やったじゃねえかエリオ！！ 俺達人気者だぜ」

「どうでもいいけど掃除してよね人間。最強たる私がこんなカビ臭い部屋に耐えられるわけないわ」

パンドラの言葉に二人は無言で頷くと持ってきた荷物から雑巾を出し溜息をつく。魔王軍との戦いを馬車の中でマリアに詳しく聞くとはつきりいつて絶望的な状況だった。

数もそうだが一人一人の戦闘力も負けていては勝負にすらならない。魔王軍は全世界の傭兵達を集め軍に取り入れ訓練を施した後に驚異的な強さを手に入れ騎士達を圧倒していた。よほど戦闘に精通している師がいるのか、敵ながら感心するとマリアは言う。

壁を雑巾で磨きながらテツはこれからの身の振り方を考える。このまま騎士として戦うか、もしくは全てを捨てて気楽にこの世界で生きるか……邪念を捨てると答えは決まっている。戦うしかない。

「エリオ君テツ君、到着早々悪いけど出てくれる」

部屋の扉を開けたマリアが言うと二人の手が止まりテツは荒縄でエリオは自前の訓練用の槍を持ちマリアに続く。騎士への支給の白を中心としたシャツと動きやすさを重視した青色の太めのズボンのマリアはテツにはどうにも魅力的に見えてしまい目を反らしながら外に出た。

「今日はここで改めて二人の実力を確かめます」

中庭に出ると外と同じく茶色の地面が乾ききつていてヒビが入っている。他の部隊の騎士もいたが三人が到着すると動きを止めて視線を送るとマリアどうにも気まずいのか首を傾けてしまう。

「ででは！！　まずはエリオ君構えなさい」

「はぁマリア先生……じゃなくて隊長」

テツは少し離れた場所で腰を下ろし二人を観戦する。マリアは訓練用の木刀を持ち真っ直ぐ構え学園で教わった通りの構えに対しエリオは槍を少し下げ独自の構えになる。我流が入っているのか槍の矛先はユラユラと常に揺れていた。

「どうしましたか、待っているのは敵は倒せませんよ」

マリアの挑発にエリオは降り下から突き上がるように矛先を刺す。マリアの胴体まで跳ね上がると木刀に叩き落とされてしまいエリオの舌打ちと共に二発三発と次々に猛攻が続く。

しかしマリアはうるさい蚊でも払うように器用に木刀を使い全てを捌く。教科書通りの動きだがそれを高レベルで実践しているマリア

に対しエリオの我流混じりの槍術など通るわけがない。

「エリオ君まず技術よりも基礎体力をつけなさい」

焦りもあり体力消費が激しく肩で大きく息をした瞬間に間合いは殺され、気づけば目の前に木刀が迫り、痛みと共に膝をつきうずくまってしまう。息一つ乱さず涼しい顔のままテツの振り返り笑う。

「さあ我が騎士団ヘクター様と渡りあったテツ君の番ですよ。あの無様に転がった時よりも多少は強くなっただんでしょうねえ」

邪悪な笑みを浮かべ肩を震わせ笑うマリアは本性を出した。およそ人の上に立つ者の顔ではないと思いつつテツは腰を上げて拳に荒縄を巻く。



ハンクやイリアと戦い少しは強くなっていたと勘違いしていた部分もあった。相手はハンクとイリアに比べれば可愛いものだと考え自信満々に拳を合わせ挑む……はずだった。

いくら何度かボクシングの動きを見せていたとしても異常　マリアは木刀を武器としてではなく防具のように扱いテツの拳を何度でも防いでいた。ダメージは与えられないがテツの精神的な焦りは加速していく。

ジャブですら見切られ始め攻めあぐねていると大量の汗に気づく。それに対しマリア涼しい顔で汗一つかいていない。

「テツ君貴方の戦い片は確かに有効です。でもこうして一度見破られて何も出来ないのはなぜだと思います」

「ハア……ハアッ！！　あんたが守りに徹して攻める気がないからだろ」

「正解。貴方は向かってくる敵には強いですが、鉄壁の守りには弱い。それといつまでも私が守っていると思ってるんですか」

マリアの体が景色と溶け込むように見えるほどに自然と体が滑りだし、散歩のように歩いてくるがテツは動けない。正確にはマリアの

行動が読めない。構えもなければ殺気すらない。

テツにとっては初めての体験で相手がどう出るか見守ってしまふ。見惚れるように見ていると気づけば痛みだけが残っていた。あんなにも長い木刀がどこからきたかわからず顔だけが叩かれてしまふ。

「テツ君。酷な事を言いますが、貴方には剣術どころか戦う才能すらもないです」

「いでえええ〜……わかってんだよ！！ 元々俺は戦うような人間じゃないしなハハッ」

「それでも私の部下になつたからには鍛えて上げます さて、まさかその程度じゃないですよね」

【才能がない】それはテツの人生で何度も聞いた言葉だった。人は自信を人生経験で得る物だとテツは考える。勉強だろぅが遊びだろぅが上手くいけば全て自信に繋がる……勉強も遊びも全てテツは駄目だった故に自信などつくわけがない。

そんなテツが才能なんて口にするだけでも勿体ない。ならば足掻くしかない、この世界では才能がないから諦めるなんて生易しい所ではない。テツは今まさに足掻き続けている。

「ハアハア、くつつつそがあああ！！」

マリアという人物を下に見ていた自分を恨む。学園の教官でベルカ騎士団員、これだけでも十分。なぜ自分より下に見ていたと自分に言い聞かせながらワンツーカーら懐に潜り込む。

ワンツーカーという餌を巻いて後退か木刀を使わせる作戦。狙い通りマリアが後退していき一気に詰める。狙うは細いウエストへのボディ。

「その動きも見ましたよテツ君。これは忠告です、同じ技を二度見せない方がいいですよ」

顎を下げて腕を畳んで的を絞らせないように加速したはずだったが、針の穴に糸を通すようにマリアは後退しながら木刀を両手から片手に持ち替え地面から振り上げた。

威力は必要ない、テツの突進を止めるには両手で左右をガードした隙間……つまり顎を跳ね上げれば事は済む。頭を振りながら突進してくる人間の顎を正確に打ち抜く作業を後退しながらという不利な体勢でマリアは余裕の表情でやってのてしまう。

「ガッ」

風邪を引いた時のように視界が左右に揺れて吐き気が喉から込み上げてきたと思うと足から崩れる。見上げるといつの間にか木刀を逆手に持ち替えて大きく振り抜いたマリアが腕を組みながら口に指を

添えていた。

「テツ君は剣術よりも今のスタイルの方がいいですね。今更剣術を学んでも仕方ないですし、今回はこれがわかっただけでも収穫ありました」

立ち上がるうとする逆と逆に地面に転がり、足が酔っ払いのようにフラフラと定まらない。リングの上で何度か経験した覚えのある感覚に嫌な予感がする。後数秒で意識は切れる……そう思った瞬間に自分の鼻を全力で殴りつけた。

痛みで無理矢理意識を継続する事に成功したが、更にダメージが重なりテツは立ち上がる事すら出来なくなる。見ていたマリアも驚いたが肩をすくめ一言。

「戦う闘志はいいですが少しは後先考えてください。さて次は貴方達です、今回は実力を見るので全力でお願いします」

テツの首根っこを掴み少し離れた場所に置いたのは制服姿の二ノで、テツがまだ視界が揺れてるのを見たエリオが体を支えてくれる。二ノは大きく溜息をつき「先を越されたか」と呟き不機嫌そうにむくれる。

「怪我だけでは済まなくなりそうですが構いませんか」

「大層な口を聞きますが教えてあげましょう。貴女がまだまだ若輩  
という事をフェルさん」

#### 四

剣術を始めもう七年になるう少女フェルは小さく呼吸し構えるとマリアを澄んだ瞳で睨む。回りからは天才と言われ実際フェルを驚かす敵はテツと二ノぐらいだった。

目の前のマリアはどうにも頼りないイメージだったが先程のテツとの戦闘で認識を変え、木刀の切っ先を地面につけゆっくりと間合いを詰めていき……爪先に力を込めて地面を蹴る。

「甘いです」

地面から跳ね上がった木刀はマリアの顔を通過。空を切る、見事な空振り。剣術を始めてからここまで空振りした事のないフェルは止まってしまい現実から目を背けたくなった。

「グツ　　ギャー!!」

初めて出す悲鳴が耳に届くと脇腹を打ち抜かれフェルの小さな体は横に流されていく。なんとか片足を踏ん張り倒れる事を回避できた瞬間には二発目でフェルの顔から血が吹き出る。

容赦のない横殴りのマリアの一撃はフェルの頬に叩きつけられ倒れてしまう。

口の中に砂を入れて咳き込むように出すとフェルは考える。一撃目は完全に見切られた……足りない。速さが圧倒的に足りない。

「復讐するらしいですねフェルさん」

「マリア隊長。それが何か」

「貴女は最初私みたいな学園でドジな先生には負けない。そう思っていたんでしょ？ そんな私に負けてて復讐出来るんですか」

頭の中で何かが切れる音がするとフェルは飛び出す。それがマリアがわざと仕掛けた挑発と知っても許すわけにはいかない。

復讐のために剣を握り。

復讐のために血を汗を流し積み重ねてきて。

復讐のために殺してきた。

その復讐を軽々口にし薄笑いと言うマリアの顔面めがけ木刀を振り抜く……しかし聞こえるのは空しい空振り音。その数秒後にはフェルの悲鳴が響く。

「フェルさん、貴女剣術を何年してますか？ 私は二十年以上。この意味わかりますか？ 貴女が生まれる前から私は戦ってるんですよ」

「だから……なんだああああああああ!!」

テツもエリオも二ノも驚いてしまう。今まで表情や感情に貧しかったフェルが醜いほどの顔を歪めマリアに襲いかかるが、闘牛士のように避けて冷酷に打ち抜く。

全体重を乗せた突きは軽々マリアに避けられ、大きく振り被った振り下ろしの一撃がフェルの無褒美の背中へ切って落とされ悲鳴すら出なくなり呼吸が止まってしまう。

「やれやれフェルさん、感情が表に出すぎですよ。まあ普通にしても私には勝てないですけどね」

嫌味たらしく片手をヒラヒラと振りながら言った後にフェルの小さな体めがけ木刀を振ると……フェルは宙に投げ出されてしまう。地面につくと転がり全身砂まみれで二ノの足元につく。

「隊長殿。いささかやりすぎではないのか」

「これが戦場なら死んでますよ。私が隊長になったからには誰も死なせはしません。そのためにはこうした厳しさも必要です」

「ならば仮にここで隊長殿が死んでも恨みっこ無しでお願いしますぞ」



呼吸が苦しい中フェルは二ノの脚を掴み一言だけ言い残す。表情には悔しさがまだ出てて痛みのせいか目尻に涙まで浮かべ涎だらけの口を動かす。

「カツ……あの糞隊長の……顔……を叩きわっ……さい」

「任せろ」

## 五

マリアが知る中でも見るのは二回目の構え、腰の位置に柄をもつていき刀身を体を割るように中心に真っ直ぐ立てる。一見この構えはなんの変哲もなく見えるが過去一度だけ戦った男に惨敗をしていた。

その男は単純に速かった。剣速もそうだが体の使い方も見事なような動きで奇妙な形の剣を操り化け物のような男だった、それを思いだしたのかマリアは笑って先手を奪う。

「不用意だぞ隊長殿！！」

間合いに入った瞬間に切っ先だけ叩きつけるように最小限の動きでの一撃を放つ。それは剣道の面そのままの動きでマリアには対応できないと思っていたが現実はずう。

二ノの最速に近い攻撃を木刀で待ってましたと言わんばかりに弾き腰の回転をつけた一撃を腹に叩きつける。言葉と呼吸が止まり後退していくとマリアの猛攻は波のように押し寄せてきた。

「やはりまだまだ技術が足りませんね二ノさん」

「グツ　　ツ！！　私が技術で劣っているだと」

今までの学園生活では敵なしで通ってきた二ノには屈辱的な言葉だった。ハンクには敗北したが、マリア相手ならと心のどこかで思っていた部分があり怒りが込み上げてくるが……その怒りすら覚ますような実力差だった。

マリアの一撃は重く受けると手が痺れ、もらい続けると感覚が遠のいていく。頭を一度冷やして距離を開けようとするが許してはくれない。上下左右から連続で叩きつけられ防御しか出来ない。

「ぬうううがああああああ!!」

そんな状況を打開したのが蹴り。脚を蹴り上げて爪先に乗せていた砂をマリアの顔面に浴びせると動きが止まり隙が生まれ返しの一撃が見事に通り立ち場が逆転する。

ここで勢いに乗りいきたいが先程の猛攻のダメージがまだ手首から抜けず体が本能的に止まってしまう。

「驚きました。こんな技があったなんて」

「ぬははは!! 見たか!! 私もテツにやられ苦戦した技よ」

「……なるほど、あの汚い雄豚の入れ知恵ですか。二ノさん少々本気出しますよ」

木刀を逆手に持ち変えて横からの一撃を二ノは冷静に受け止め反撃に転じた瞬間……受け止めたマリアの木刀は消え肩に叩きつけられていた。防具も着けずまともにくらい膝をついてしまいが即座に間合いを開ける。

感触でわかってしまう。腕一本が使い物にならなくなった。

腕が糸が切れたようにフラフラと垂れ体のバランスがおかしくなっていく。立っているのも難しい状態で二ノは一度止まり追撃をしてくれないマリアを睨む。

「やってくれたなあ隊長殿、なんだ今のは驚いたぞ」

「二ノさん、貴女は父親に遠く及びません。剣を交えて確認できました。化け物の子もまだまだ成長途中ですか」

「どつりでこちらの剣術が通用しないと思ったら……今の言葉吐いた事を後悔させてやる!!」

二人の木刀は混じり合い木製の乾いた音が中庭に響く。

ようやく立ち上がれるまで回復したフェルを座らせ背中をさするエリオとテツがマリアの動きを見ていると周辺には騎士達が集まってくる。腕を組みニヤニヤしながら三人を見下ろしてきた。

「よう新人、お前ら噂になってんだぜ。若手の隊長に新人とおっさんってのがな」

「いやあそりゃ光栄だな。俺はテツってんだよろしく」

手を差し出し握手をすると騎士は拍子抜けしテツの人なつっこさに驚く。

「聞きたいんですがマリア隊長って騎士団の中じゃ強い方なんすか」

「ん〜まあ強いんじゃないか、歳は隊長にしては若いが昔からいろいろやってたらしいからな」

「あ、俺エリオって言います先輩。これからよろしくつす」

エリオも明るく挨拶すると騎士は木の水筒を渡し水分補給をさせる。最初に口にしたエリオは大きく息をつき脚を一度叩き「美味い！」次のテツも大きく息をつき「はあ〜」となんともおっさん臭い仕草だがフェルだけは手をつけない。

「そっちの小さいのはよほど悔しいんだなハハ」

「……………うるさいです」

何人かの先輩騎士達に囲まれテツとエリオは楽しげに会話する中フェルだけはマリアの動きを一つも見逃さないように観察していると言われた事がよくわかる。単純に実力差がありすぎる……………おそらくマリアの強さは才能ではなく詰み重ねてきた努力によるものだろう。

「あ」

危ないと声に出しかけた時には二ノの顔は自分と同じように跳ね上げられ地面に倒れていく。少し息を切らせマリアが歩いてくるとフ

エルはむくれた顔で下を向き悔しさを隠す。

「今日は解散です、各自体を休めてください」

学園騎士から強いから騎士団に入れと言われた四人は初日で敗北。テツは異世界の現実を知りエリオは鍛え直すと誓い……フェルと二人は屈辱的な敗北を噛み締める日となった。

## 六

疲れが溜まってあ二人は部屋に着くと無言でベッドにいき泥のように眠りについた。体が休みめと叫んでるように睡魔はすぐきて意識は眠りに沈んでいく。

その数時間後にテツとエリオは叩き起こされマリアに尻を蹴飛ばされ着替え、支給された服を着る。下は少し大きめの青いズボンと白のタンクトップ。着替えには一分もかからず欠伸しながら二人は中庭でに出る。

「今日は基礎訓練をします。貴方達は技術の前に体力が少なすぎです、学園の教育方針も見直さなければなりませんね」

そうして始まったのはランニング、古城の周辺をひたすらに走る。何周かしているとようやく起きてきた騎士達が訓練を始め活気づいた声が聞こえてきた。

「ハアハア！！ テツお前息切れてないのかよ、もう何周したかわかんないぞ」

「自主トレしてたからな。にしてもまだ若いお前が俺に体力負けって確かに隊長の言う通りだな」



丘の上に立つ古城から見える海はまだ暗いが少しづつ明るさが増してくるとテツは走りながらじつと眺める。異世界にきても太陽が上がってくる風景は変わらず、黄金色に染まる空と海に瞳を奪われていく。

「にしても出世のチャンスがきたぜ！！ この歳で騎士団入団って事はゆくゆくは」

「エリオ少しは現実を見る。出世以前に俺達が生き残れなきゃ意味ないだろ」

「少しぐらい夢持ってもいいだろ〜今までもろくな事なかったんだし」呼吸が少し乱れ肩で息をしながらテツは考える。確かにエリオくらの歳で夢を見るのは普通だ、しかし自分はどうか……目指してるのは夢でも何でもなし。ただ状況に流され仕方なく殺人に覚悟を決めるだけ。

「エリオお前の夢はなんだ」

「んあ〜世界一の騎士だ！！ テツは」

「そうだな〜この世界を全て動かせる権力と誰にも負けない力かな」

「ダツハハハハ！ お前俺よりも子供っぽい夢だな」

走りながら笑い脇腹を痛めながら走るエリオに指摘され不覚にもテツは照れてしまう。具体的な目標もない、まだ若い頃に思い描いた無邪気で馬鹿らしい夢が口から滑り落ちてしまった。

「エリオ君テツ君もついいですから中庭にきてください」

丁度門の前に差し掛かった時にマリアに呼び止められ言われるままに中庭に行くと、昨日とは比べ物にならないくらいの人数が訓練をしていた。白銀の鎧を身につけ規則正しく並び教官の呼び声で剣を振り下ろしている。

素振り音が鼓膜に響いてくる大きさを初めて見る二人は瞳を見開き「おお」と漏らした。そんな二人をマリアは隅っここの一角に連れていき残り二人の新人と合流させた。

「え」とエリオ君と二ノさんは基礎訓練をしますが……フェルさんとテツ君は戦闘スタイルが特殊なんでこっちにきてください」

エリオと二ノに指示すると残りの二人を離れた場所に連れていき武器を渡す。それは互いの実戦で使う武器で蛇腹剣とパンドラで驚く。

「君たちは普通の訓練しても仕方ないので私が直々に鍛えてあげます。いいですか」

「いやいや隊長さんよ、パンドラで叩いたらやばいって」

「私も耐久力重視の鎧を着けますから簡単には碎かれません」

フェルは久々の握る蛇腹剣を何度か振り感触を確かめテツは仕方なくパンドラを起動しナイトメアを装着する。マリアはいかにも重そうな鎧を全身に取り付け両手に木刀を握る。

「昨日は一人では私に勝てませんでした。だから今日は二人で戦ってください」

「隊長確認ですが本気でいいんですね」

「構いません。昨日のリベンジぐらいの気合いできてください、テツ君も」

重装備のおかげで機動力は落ちて更にこちらの得意の武器に対し木刀。さすがのテツもここまで舐められて黙ってはいなかった。訓練している騎士達とはかなり距離があり全力を出せると確認すると拳

を合わせて金属音を鳴らす。

「どーなっても文句言つなよ隊長」

## 七

「テツさん」

フェルに手招きされ近付くと真剣な表情で顔を寄せてくる。

「悔しいですが隊長の言う通りです。一人では勝てません……テツさんはとにかく接近してください援護は私します」

「あいよ、お前もあんま無茶すんなよ。昨日みたいな顔あんま見たくねえ」

「きき昨日は少しだけ頭にきただけです！！ ほらもういってください」

深呼吸し全身の力を抜き数回飛び準備運動を終えるとマリアを見る。茶色く錆びた鎧だが装甲はかなり物と見てわかり相棒に話しかけていく。

「最強のパンドラさんよ、どうだい？」

「あんな紙切れ同然の玩具楽勝よ」

「聞いたいてよかったわ。加減してほしい、いくらなんでも殺すわけにはいかないしな」

「あの女に舐めてかからない方がいいわよ。一応加減はするつもりだけど殺すつもりでいきなさい」

最短距離を最速で駆け抜ける……それはボクシングを習った時のテツの目指してた事だった。拳を構え実行に移し正面から走り出す距離など五歩も歩けば届く、マリアは待ち構えるように二本の木刀を上げた瞬間に蛇が宙を駆ける。

「隊長私達に武器を持たせたのは間違いです」

テツより速く蛇腹剣はマリアに喰らいつき装甲を切り裂いた。貫通はさすがに出来ないがフェルの狙いは遠間から鞭のように浴びせマリアを防御しか出来なくする事、思惑通りにマリアが防御の体勢に入った時には懐に禍々しく紫色に光る悪魔の腕が振るわれていた。

「おっしや!!」

鈍い金属音が鳴り響くと重装甲の鎧を着込んだマリアはテツの一撃で後退した。腹部の装甲は大きく凹み中身のマリアから苦痛の声も

漏れてくる。テツは勢いに乗り前進し再び拳を振り被り、フェルは隙など与えるかと言わんばかりに蛇腹剣を浴びせ続けた。

「い つう……さすがにキツイですね」

マリアの弱音が吐いた瞬間にはもう遅くテツが殴りかかってきたが、援護であるフェルの攻撃が止まっている事に気づきテツは迷ったが構わず拳を突きだす、選んだの単純な右ストレート。

狙いは一番的が大きい胸を選び体ごとぶつける勢いで放ったが……拳は下からの切り上げで大きく弾き飛ばされた。重装甲を装備しているにも関わらず素早く動き見事な一撃。テツは異世界にきて何度目かの台詞を言う。

「ありえない」

常人のパンチならともかくパンドラで強化され速度も何倍にも加速している拳を木刀という細い木で弾くなどありえない。つい弾かれた拳を見るとマリアの片手には握られている。蛇腹剣がしっかりと握られフェルの攻撃を無力化していた。

「驚きました？ 結構自慢なんですよ。遣伝らしいのですが私は反射神経と動体視力に優れてるらしいです」

「だあああああ！！」

まだ残っている左を放つ。地面を蹴り腰を回し全ての力を左に伝えたフック、コンパクトに振り抜き距離もタイミングも十分だったが腕に何か絡み付いている。それはマリアが握っていた蛇腹剣だった、何度も巻かれガチガチに固められテツが止まってしまうと間髪入れずに一撃が顔面に叩き込まれる。

「さあフェルさんどうしますか？ テツ君の片腕には貴女の自慢の刃が絡みつき、戻そうとすれば腕が千切れますよ」

「悪魔じみた女ですね。学園の顔は仮面だったんですね」

「いいえ、あの顔も私です。ただ戦うと少しだけ変わるだけですよ」

フェルは動けない。唯一の武器である蛇腹剣はテツに巻きつき戻せなく攻撃にも使えない。舌打ちを一つ鳴らすとテツに再び木刀が振り下ろされた。

「さあどうします！！ 戦場では何回死んだかわかりませんよ！！」

「おい年増のいき遅れババア」



「ああ！！ てめえ今なんつったあ！！」

巻き付いた蛇腹剣に指を絡ませ引き抜いていく、ガリガリとナイトメアが削れる音がかかるがかわかない。テツは大きく振り被りラリアツトのように振り回すと後方にいたフェルの体が飛ぶ。

「調子乗んなよババアアアアア！！」

蛇腹剣を振り回し握っていたフェルも空に飛びマリアに一直線に飛んでいく。

「テツさ……のわああああ！！」

「ブン殴れ！！ いいか拳を大きく後ろに振り被り前に出せ！！  
それだけだ」

落下してくるフェルに対しマリアは対処のしようがなかった。真上からの攻撃なぞ剣術では想定していないからだ。フェルのパンチは見事にマリアを捕え重装甲に亀裂が入った瞬間に追撃をテツがする。

再び腹部を殴りつけると装甲は完全に碎かれマリアは膝を着く。必ず勝てるという確信がテツに芽生える。

もう木刀を振るには距離が近すぎる、ならば何をどう足掻いても拳が先に届くはず。今までの恨みと言わんばかりとフルスイングしていくと。

「そこまで」

矢のように鋭い叫びがテツとフェルの行動を止める。振り返ると短髪と無精髭を汗で濡らしたむさ苦しい中年が上半身裸で向かってくる、近付くにつれテツは深く片目に刻まれた傷を見て「あ」と言い指を刺す。

「マリア、さすがに契約者と天才を同時に相手は無理があるだろ」

「ヘクター様！！ 私のような者の訓練など起こし頂いて」

「よおおっさん元気してたか……アブホオ」

ヘクターに対しフレンドリーに近づいた瞬間にテツの頬は木刀に叩かれてしまう。

「すすすいません！！ このクソ虫が余計な事を」

「ああゝ気にすんな、お前が固すぎるだけだマリア。ようテツ久しぶりだな」

「あがぁ！！ ひひ久しぶり、この年増ババアに言ってやってくれ

よ」

ヘクターはベルカ騎士団の最高責任者。ベルカは異世界で唯一とも言える魔王に対抗している国家であり、その騎士団団長ともなれば一介の騎士が口を聞ける事なぞ数少ない。テツの行動はあまりにも危険だったがヘクターには新鮮に感じる。

「んでこいつが噂の天才少女フェルか。見た感じそこらの町娘だな」

「……」

目を細め挑発するように顔を近づけるとヘクターも顔を近づけ、額同士を数秒くつつけると笑いだし何回かフェルの肩を叩きマリアに近づく。

「いい新人じゃねえか、あーゆ闘争心向きだしの奴は大歓迎だ。さて、おおおおおい!!」

大声で訓練中の二ノとエリオを呼び寄せると腕を組みここにきた理由を言う。

「諸君!! わざわざ団長がこんな新人共の下っ端部隊になぜきたと思う」

「団長ともなると書類整理ばかりで体がなまって我慢できずに暇つぶし」

「興味ないです」

「やややっぱり期待の新人を見に来たんですか!」

「女の子二人は冷たいね、若い男は夢がありいい。諸君の中から二人に買いたしに入ってもらいたい」

マリアはその言葉に納得したらしく敬礼するとテツは「なんだ、んな事か」と欠伸をした瞬間に再び叩かれてしまう。二ノとフェルは興味が完全になくなったらしく離れていく。エリオだけが目を輝かせていた。

「契約者やら天才がいると言っても新人部隊だからな。下っ端の仕事をしてもらう」

「かあ〜つまりそれを言うためにわざわざ団長殿はきたわけかい。暇つぶしじゃねえか」

「それを言ったら終わりだろうがテツ。リストはこの紙に書いてある、マリア後は頼んだ」

リストを受け取ったマリアが確認すると食糧とわかり誰でも適任だと安心する。マリアは二十代後半だが隊長になるには若すぎる。いろいろなプレッシャーを抱えなんとか頑張らなきゃと心決めてる時に騒ぎ出すおっさんが一人。

「おおし買い物係決めんぞ。ここにクジがある、先が赤いヒモ引いた奴二人な」

いつの間に紙のクジを作り出したテツが差し出すと残りの三人が引きそれぞれ先を見た。最後のクジをテツが引くと係は二人に決まる。

「んじゃフェルとエリオよろしくな」

「どこにも納得いきませんが了解しました」  
「任せる！！ きつちり買ってきてやるぜ」

買い物係二人をマリアが連れていくとテツは腕を組み何回か頷く。後ろで大きく溜息をついた二ノがテツの脚を軽く蹴り肩を力強く掴む。

「くだらん仕掛けをしてなんのつもりだ」

「初恋はな嬉しいが怖いもんなんだよ」

「テツとうとう頭をどうにかしたのか」

無表情に戻ったフェルにそわそわしながら歩いていくエリオを見送っている、説明が終わったのかマリアが小走りで戻ってくる。二人に木刀を投げ渡すとマリアも構え再び訓練が始まる。

「エリオ。こんなおっさんからのささやかな贈り物だ、楽しんでこい」

「テツは女性と手も繋いだ事もないからな。羨ましい事だな」

「うっうっうるせえ!! 手くらいあるわ!!」

「はあ、このクソ虫はどうしてすぐバレる嘘をつくんですかね」

本当にささやかな贈り物だった。こんな地獄のような世界で一人頑張る少年の初恋くらいは応援したい、そんな事を思いテツは柄にもなく余計な事をしたと薄笑いした瞬間に木刀でブツ叩かれ訓練に熱を入れていく。





## 九

潮と魚の匂いが街を包み漁師達が活気のある声を出している、海に囲まれ海産物で生計を立てている港街に二人はきていた。

青いズボンと白シャツの二人は日航が照りつける中では浮いた服装、通りすぎる屈強な漁師達が鼻で笑ってくるがフェルは変わらずの無表情で買い物を済ませていく。

買い物といっても食材を選んで騎士団本部の位置を書き、そこに送ってもらっただけと荷物にはならない。フェルの手際はよくエリオは実質見てるだけで買い物は終わってしまう。

「しかし魚臭いですね。少しこの匂いは苦手です」

買い物を済ませ海からの風に銀髪を泳がせる姿はエリオの鼓動を早くした。わざわざテツが気を回したのだから何かしないと意気込むエリオだったがどうにも空回りが続いていた。

情けないと自分でも思うが仕方ない。入学式で見た瞬間から恋に落ちたエリオはフェルの前で馬鹿をやったり格好をつけてみたりするが全て不発……今回買い物と一緒にきてもエリオだけが喋っている。

「そそうか！！ まあフェルの髪綺麗だしな、潮風は悪いかもな」

「……エリオ。聞きたい事があります」

「なんだ。おおおい顔近い近い!!」

砂浜でエリオが腰を下ろすとフェルも横にきて顔を近付ける。目の前で見ると人形のように整った顔で綺麗すぎて不気味だとさえ思えた。生唾を飲み込み喉を鳴らしながらフェルの言葉を待つ。

「なんで私なんかにつきまとうんですか？」

「ふえ」

「教室でもやたらと私に話かけ目の前で馬鹿みたいな話をして、たまに髪型を誉めたり、しまいには騎士団までついてくるなんて理解不能です」

眼鏡が日光で反射して表情豊かなエリオが顔を固めてしまう。わかっていた事だった。自分ではアピールしていたつもりだったが、その全てがフェルには届いていなく溜息すら出なくなる。

「ああ〜そりゃフェルが一人寂しそうだったからよ!!」

「はあ、それはエリオ貴方じゃないですか。クラスで結構浮いてましたよ」

「うっ、うるせえ！！ 俺はエリート気質な奴らとは合わないんだよ！！」

エリオが顔を真っ赤にして怒るとフェルは少しだけだが口元を緩め笑みを作った。その微かな笑みだけでエリオは飛び跳ねそうになり自分を抑えつける。我ながら自分が恥ずかしいと思うが初恋という薬で止まってはくれない。

「エリオは不思議ですね。何度も無視してるのに懲りない。今日も喋り続けてますね」

「があああ別にいいだろ！！ 俺は退屈が嫌いなんだ」

「私もエリオみたいに楽天的だったら少しは楽しかったかもしれないですね」

尻をはたき砂を落とし立ち上がると大きく背伸びして「帰りましょう」とエリオに手を伸ばし二人は砂浜を出た。露店が両側に並ぶ大通りを歩くと魚の匂いがよほど苦手なのかフェルが鼻をつまむ。

エリオは自然とフェルの手を掴み小走り露店の中を抜けていく。

耳まで真っ赤にし顔など見せられたものじゃないが、その時間がた  
まらなく嬉しい。不器用で口下手の少年の精一杯の行動。

「エリオなんで手を掴むんですか」

「いや、そこ聞く所かよ〜べべ別にいいだろ」

人ごみの中をフェルの手を握り走る時間は一生の思い出になるだろ  
うなと思いエリオは真っ赤の顔で笑う。しかし浮かれているエリオ  
の脚が突然止まってしまふ。フェルが地面に根を生やしたように動  
かなくなりある場所を見つめていた。

「おお！！ 見るユウヤ、こんな魚見た事ないぞ！！」

「確かにな。おっちゃんこれくれ！！」

十

港街の風景の中では目立っていた二人だった。真っ白なワンピースに身を包み褐色の肌と銀髪の女が自分の背丈の半分はあろう巨大な魚を持ち上げ笑い、膝まである黒いコートを着込んだ黒髪の男が女を見て笑っている。

外見こそ目立つが仲のよい夫婦にも見え金を受け取った漁師は笑顔になる。歳は三十代中盤、女の方だけやたらと若く見えるが男の方は歳相応にシワを重ね老けていた。

「ぬ、帰ったらハンクに捌いてもらうぞ。あいつあんな外見に似合わず手先は器用だからな」

「イリアお前も一応は母親なんだから料理ぐらいは……ッ！」

後方から風を切り裂く音に気付き振り返ると刃の切っ先が視界を埋める。鼻先まで刺さり鼻を串刺しにする寸前で止めたのは隣にいたイリアの手だった。

「聞きたい事があります」

「聞きたい事がある態度ではないぞ小娘」

小柄の娘　フェルは蛇腹剣を正確無比にユウヤの顔面めがけ飛ばしイリアと剣ごしに繋がる。

「ユウヤ、確かそう言いましたね。それは魔王ユウヤの事ですか」

「ぬ、久々だなユウヤ。お前を魔王と言い挑んでくる馬鹿は」

掴んでいた蛇腹剣を怪力に物を言わせ引っ張りフェルを引き寄せようとすることが動かない。契約者として手に入れた力が小柄な女一人を動かせない。

「おおい！！フェル魔王って……嘘だろ」

「エリオ下がっててください。ああ……ようやく見つけましたよ魔王」

互いに引っ張りあいイリアの手が鮮血に染まってきた瞬間にフェルは蛇腹剣を離す。反動で後ろに下がってしまうイリアに迫っていくと苦し紛れの前蹴りが飛んでくるが軽々避け腹に全力の拳を叩きこむ。

露店を何個も巻き込みイリアは吹き飛び姿を消していく。拳を振り切ったフェルはゆっくり振り向きユウヤに顔を晒す、憎しみでもな

く憎悪でもなく、その顔は笑みだった。

「お譲ちゃん一応聞くが俺に恨みでもあるのかい」

「ええ私の人生は貴方を殺すためにありました。こんな所で出会う奇跡に感謝します」

コートから鞘を覗かせ大きく抜く、フェルが知る刀よりも遙かに刀身が長い。周辺の住民や漁師達は悲鳴を上げて逃げまどうかその場で頭を抑え座り込む。

「殺します。一瞬の迷いも捨て貴方を殺します」

「ハハッ本当に殺す気ある奴はそんな事言わず無言でやるぞ」

蛇腹剣を拾い上げ手首のスナップを効かせ鞭のように操る。装備はコートと刀だけ、十分に切り裂けると判断し刃を飛ばすが、その刃は空中で分解され粉々に散っていく。

その光景はフェルを固めた。刀に蛇腹剣が触れた瞬間には切断され気づけば切り分けられていく、黒いコートを靡かせ肩まで伸びている黒髪を邪魔そうに払うと鋭い眼光が前髪の隙間から見える。



「さて武器もなくなった事だし勝負ありだお譲ちゃん」

刀を鞘に収め背中を向けた瞬間に声が響く。

「馬鹿者が!! ユウヤまだだ!!」

吹き飛ばされたイリアが瓦礫の中から頭を出し叫びユウヤが反応するように振り返ると天地が逆になる。景色がジェットコースターに乗った時のように加速し数回回転した後地面に顔をつけた。

「……ッ!! くう」

痛みで目蓋を大きく閉じ歯を食いしばり何とか顔を上げるとフェルが拳を上げている。

「ボクシングか」

世界を支配する魔王はたった一人の小柄な女の子の前で無様に這いつくばった。

殴られたのは肩だというのに体は地面を離れ空中を駆け抜けた。起き上がる頃には肩腕が痺れてると思ひ触ってみるとダラダラと糸が切れた人形のように垂れている。

肩が外れている……あんなにも小柄な少女の拳がここまでの威力を生み出しなおかつ目前に迫ってきている。痛む体を起こし後方に飛ぶ、魔王とまでうたわれたユウヤはフェルという子供に脅えてしま

「お譲ちゃんボクシングをどこで習った？」

「黙りなさい!!」

足捌きやパンチの打ち方がどう見てもボクシングだがユウヤが知る限りこの世界にボクシングなどない。肩腕を失いバランスを崩しながらもなんとか逃げていると助けがきた。

「ぬううううおおおりゃあああああ!!」

露店を支えてた巨大な丸太を持ち上げフルスイングでフェルにぶつける事が出来るのはイリアだった。直撃をくらったフェルは大きく飛び地面をボールのように転がっていく。

「ユウヤ平気か」

「いや肩外された。凄く痛い」

「ユウヤ一応聞くがまさか隠し子で恨みとか」  
「お前の発想がおかしいわ!!」

フェルがぐったりと倒れ動かなくなると一人の少年 エリオが槍を構え魔王の前に立つ。眼鏡の奥の瞳は恐怖に染まり足は震えているが心だけで向かっていく。

「あんたが魔王か、イメージと違い普通のおっさんなんだな」

「ぬ、ユウヤまさか二人も隠し子が」

「違っつて!! あいつらの歳考えろ!!」

「……丁度いいではないか」

さすがに存在を無視されたエリオは額に血管を浮かべ大きく前に出る。槍の最大の武器であるリーチを生かしての一突きを放つ……が、槍は止まってしまふ。

「ああ〜小僧。お前らなんなんだ？ ただの馬鹿にしては強いしな」  
ユウヤに届く前に横から出てきたイリアの手に掴まれてしまう。押しでも引いても動かさず掴んでる者の握力を感じエリオは魔法を発動する、槍の矛先から強力な電撃を流し相手を無力化するという魔法は。

「電撃系か、この系統と武器の形はベルカか」

発動場所である矛先は斬られ金属音を鳴らし地面に落ちてしまう。武器を失い顔を上げると魔王と目が合う、怒りは感じられないが見ただけで内臓を掴まれる感覚になり唇が震える。

「エリオ、肩を借りますよ」

小柄なのが幸いしたのか、エリオの肩に飛び乗り突然現れたのは頭から血を垂らし片目をつぶるフェルだった。白い歯を剥き出しにし獣のような唸り声で一気に飛ぶ。

真正面から拳を大きく振り被りユウヤに飛びかかるが、その拳は空振りですべて終わってしまう。拳よりユウヤの強力な前蹴りで腹を蹴り抜かれ胃液や唾液を撒き散らしフェルは悶え苦しむ。

「……ッ」

エリオは生まれて初めて圧倒的恐怖で動けなくなる。目の前で好きな女の子が苦しんでいるのに手足を動いてくれず、魔王と言われているユウヤに目すら合わせられなくなる。

「このお譲ちゃん何者だ。イリアと互角の怪力なら契約者……にしては武器がおかしかったな」

苦しむフェルの髪の毛を掴み顔を上げると鼻水と涎の酷い顔で睨むつけてくる。

「効いたろう？ 人間には鍛えられない場所ってのがあるんだぞ、今のは水月。まあ腹だ」

「ガッハア！！ カッ……ッ！！」

「ああ〜無理すんな、今は喋るなんて無理だから。さて」

勢いよく持ち上げた頭を石段の地面に叩きつけてユウヤは耳元で喋る。

「お譲ちゃんが何者かはもういいわ。問題は俺に挑んできた事だ」

「やめろー!」

ようやくエリオが言葉を出した瞬間にフェルと同じく腹を蹴り抜かれ沈む。容赦など微塵もないユウヤはフェルの元に戻り頭を全力で踏みつける。何回も何回も……やがて手足が震えるだけで動かなくなってしまう。

「ぬ、ユウヤどうすんるんだ」

「この餓鬼共は俺が魔王だって知って挑んできやがったからな。魔王らしい態度になるかな」

## 第八章

翌日テツはヘクターに連れられ馬車に乗っていた。ルーファスから直々に呼び出されと聞かされ朝から叩き起こされ有無を言わず馬車の中に放り込まれ欠伸をしながら外の風景を見ていた。

騎士団本部を飛び出した馬車はしばらく走り出すとベルカ城下町に入り門の前で止まる。ヘクターが下りると門番二人は敬礼し巨大な門は鉄が擦れる音を鳴らし開く。

城内に入り何枚もの扉を開け長い廊下を歩き続け、テツがいい加減豪華な内装を見飽きた頃に最後の扉につく。黄金の装飾が散りばめられ輝いていた。

「ここからがルーファス様の個人部屋だ。入室許可はお前だけだ入れ」

ぶつきらぼうにドアノブを勢いよく開けると視覚より先に嗅覚が刺激され鼻を摘む。

「なんだこりゃ」

部屋の広さがわからないほどに薔薇で埋め尽くされていた。そこだけ別世界のように真っ赤な薔薇で構成され一本だけ中央に続く道を歩く。

「綺麗……つってもここまで多いと逆に不気味だな〜ん？」

薔薇庭園中央には円形のテーブルの上でバスターソードの柄の部分を開き中身の機械いじりをしているルーファスがいた。鼻の頭と手先を黒く汚す金髪の優男はどうしてもベルカ王には見えない。

「ほ〜中身そうなのかい、魔法つーより機械だなこりゃ」

「魔法って言葉を借りた旧人類の技術の一部ですよ。よくきてくれましたね」

銀色の王族の衣装着ているルーファスは外見とは大きく異なる作業を進め、柄の中身を閉じ何箇所かネジを回し持ち上げると起動音と共に刀身が水流に包まれていく。

「おお！！ これ俺が前つかつてた魔法だ！！」

「私は戦うより開発の方が肌に合ってますね。さてと」

慣らし運転が終わったのかバスターソードをテーブルの下に置くとルーファスは椅子に座り指を組む。いつもならふざけた笑みで出迎



えるのだが今回はやけに重苦しい雰囲気になる。

「一週間後に魔王軍と戦います。おそらくベルカや協力してくれる国の全ての力を使う事になるでしょう」

「おいおいそれって」

「ええ今回の戦いで敗れるような事があれば世界は魔王の手に落ちるでしょう」

椅子から立ち上がり大きく背伸びをしたルーファスはテーブルの回りをゆつくりと歩きながら口を開く。思い出を語りだすよな軽い口調だったが内容は重い。

「私の父ベルーザは独裁者でした。奴隷制度もその一つで随分酷い事をしてましたね。竜という力を利用し世界を思いのまま……今の魔王のようでした」

腕を組みながら語るルーファスに黙ってテツは耳を貸す。

「そんな父について反旗を翻した軍団がいました。ベルカを落とす英雄扱いされた彼らからなぜ魔王が生まれたのは謎ですが……随分と苦労しました一度滅んだ国をここまで立て直すのに」

「じゃ息子のあんたがベルカを復活させたのか。いい話じゃねえか」

「いい話にするには魔王を倒し平和を取り戻してからです。少し話しは戻りますがベルカにいた竜は魔王に殺されてしまいました。が竜には一匹だけ子供がいました」

先程まで明るいい口調だったルーファスの言葉の端に冷酷なほどに冷たさを感じテツは押し黙ってしまふ。

「私は考えました、魔王を倒すには竜の子供を使うしかない。幼き頃から訓練を重ね何人も人間を殺させ感情すらも消す勢いで徹底しました」

話がまるで見えてこないがテツは嫌な予感がする。楽しげに語るルーファスだが声色は酷く暗く冷たい、内容も聞きたくない領域まで踏み込んでくる。

「断言してもいい、後五年もあれば竜の子供は成熟して魔王など一捻りしたでしょう……しかし悪魔に魅入られたのか私の大切な宝物竜の子供は先程買物いつたらしく」

「……ッ！！」

「買い物先でなんと魔王と出会い交戦したらしいです。しかも敗れた後に連れ去られたとの報告を受け頭を抱えましたよ」テツ君言っている意味わかりますよね」

つい数時間前の映像が頭に叩き込まれテツは停止してしまふ。顔中に大量の汗が吹き出し手足だけが震え出す。

「魔王が気づく前に……フェル・ランカスターが竜の子供と気づく前に奪還しなければ唯一の勝機は失われるでしょう」

座っていた椅子を蹴り飛ばすように立ち上がりルーファスの襟元を掴み上げ体ごと持ち上げる。テツを動かしたエネルギーは単純な怒りだった。感情を表に出す事を避け、友達を一人も作れずにいたフェルの事を思うと体が勝手に動き出していく。

「てめえらベルカは竜の子供だからってフェルの人生を目茶苦茶にしやがったのか！！」

「たかが獣一匹と世界など天秤にかける事が間違えなのです。ウイ  
ルから聞きましたよテツ君。貴方は別世界の人間でそこでは大層落  
ちこぼれ ガッ」

言葉を最後まで聞く前にルーファスを殴り飛ばしていた。パンドラを装着せずともテツの拳は強力でベルカ王の頬に大きな痣を刻み地面に転がしてしまふ。

「……ハッ！！ どうりで奇妙な技を使うと思ったたら別世界の技術とは予想もしてませんでしたよ」

「殴り飛ばされてもそれだけ口を聞けるのはさすがだな王様よ」

「ついでに教えましょう二ノは魔王の一人娘ですよ。暴走した父親を止めるためなんて泣ける話です　グアー！！」

倒れているルーファスに容赦なく蹴りを入れて黙らせるとしゃがみ込み顔を覗く。痛めつけられたルーファスは仰向けになりふざけた笑みで大きく瞳を見開く。

「さあどうしますテツ君。フェルや二ノを見捨てて逃げ出しますか？　貴方にはそれは出来ません、断言してもいい」

「とことん腐ってやがる。そうまでして手に入れる平和に意味なんかあるのかよ」

「ここまで腐って手に入れる平和だから意味があるのですよ。私は魔王に勝つためなら何だって利用しますよ、父が殺されたあの日に誓いましたからね」

大きく……本当に大きく息を吐いたテツは腰下ろし胡座をかき頭を一度掴む。フェルが竜の子で二ノは魔王の娘。ただでさえ異世界で現実離れしてるのに更にわけがわからなくなる。

ただ一つだけわかってた事はフェルを失いたくない事だった。

それはちっばけな正義感だった。フェルを見捨てるには共に過ごした時間が長すぎ、なによりも今のテツには契約者としての力もある。

「おいルーファス、お前の話に乗ってやる。ただし魔王を殺したらフェルを解放しろ」

「契約成立ですね、魔王を討伐したなら勇者となり英雄になるですよ」

三十三年という時間を無駄に過ごしてきた男が自分から奮い立ち拳を武器に戦場に立つ理由はちっばけだった。

怖かった。フェルを失うと思うと怖くて仕方なかった



久々に顔を見せにきた二ノの顔を見るのが楽しくなっているのは歳のせいだろうか。ポッドから暖かい紅茶をコップに運びニヤけた顔をシワを寄せるようにこわばらせ咳払い一つ鳴らし出迎える。

壁も床も木製で作られ暖炉の灯りですぐ二ノを見つける。壁際に腕を組み立っているが機嫌がいいようには見えない。むしろどこか困っているか焦っている……そんな雰囲気だ。

「よおウィル久しぶり〜ってわけでもないか」

中央に椅子に座りながら指を組み声をかけてきたのはテツ。魔王を倒すために別世界から強制的に連れだした男を見てウィルは目を疑う。

「お前がテツなのかつ!!」

最初に出会った時は坊主だったが今はのびて前髪が眉に届くほど、しかし髪型なんて問題ではなかった。二重で大きい目は鋭く一重かと思うほどに狭まり、瞳からは光が消えている。

風貌そのものが変わり果てたテツを目の前にウィルは一つの答えを出す。

人を殺した。それも一人や二人ではない、元々平和な世界にいたテツが人殺しを実行し薄汚れた異世界に染まったんだと理解してしま  
う。

「あんたの言う通り契約者になつたぜ」

足元にある銀色の箱を自慢げに持ち上げるとウィルは鼻先まで近づ  
けみるが、少し変わった鞆にしか見えない。大きく溜息を吐きテツ  
の前に椅子を持ってきて背中を預ける。

「ルーファスから聞いてるぞそんな事。とんでもない化け物武器だ  
が使い手が駄目だとよヒヒッ」

「間違つてないから腹立つぜ……さてウィル。聞いてると思うが魔  
王とやりあつらしい、その前に聞きたいんだ」

組んでた指を解き膝に重ねズイツと体を前に出しテツは聞く。疑問  
に思っていた、魔王を倒すなんて大役をなぜ自分かと。そんな役な  
らば自分なぞまず論外であろうと考えていた。

「なぜ俺を選んだウィル。二ノに聞いたらお前が答えてくれるつて  
よ」



「お前がいた世界の西暦は何年だ？」

「へ？ ああ〜二千年くらいだけど、それがなんだ」

「んじゃ今は少なくともお前のいた時間から千年以上は立ってる計算かあ」

「瞬目の前が真っ暗になりかけ平衡感覚を失いかけたテツはウィルの言う事がまるで理解できない。千年以上？ 桁違いすぎて想像するのすら馬鹿らしい。」

「簡単に言うとは過去からお前を連れてきたんだよ。お前のいた世界の未来が今の世界だ」

「ハハッおい二ノ〜こんな話するためにそんな深刻な顔してんのかあ〜」

おどけて両手を広げてみるが二ノは厳しい表情のままだ。時間が立つにつれウィルの言ってる事が真実味が色を濃くしてくる。根拠も何もないはずなのに不思議と信じてしまいそうになっていく。

「昔お前みたいな奴が何を理由か知らないが時間を通り越しここにきてな、そいつがたまたま武器と契約してわかったんだ。過去の人

間なら契約できるってな」

「だから俺を連れてきて契約させたのか……おい糞ジジイぶざけんなよ」

勢いよく立ち上がりウィルを見下ろしながら声に迫力を乗せて口から吐きだす。まるで元の世界にいた頃にしたゲームみたいな話だった。

「魔王が現れ契約者は魔王につくか殺され味方になったのは少数。はつきり言って魔王に勝つには強力な契約者が必要……ヒヒツそこで俺は生涯最高の発明と言っているいい時間を逆行する装置を開発したわけだ」

「んで二ノを使い俺を誘拐ってか。俺が戻る手段は」

「ない。時間に逆らうなど神に等しい行為だ。一往復が限界、まあそれでお前という契約者を作り出せたんだ、中々のもんだろ」

二人の間にある机はテツの拳で叩き割られ紅茶は床に飛び散りコップの破片が上半身裸のウィルに刺さる。痛みをまったく感じないのかウィルは刺さった破片を抜き放り投げた。

「過去の人間を未来に連れてくるんだ。歴史が大きく変わる可能性だってあるよな？ 例えば今いる奴の先祖を連れてきたら大問題だ……テツよ言ってる意味わかるか」

「俺は馬鹿だからな、簡単に説明しないとその顔見れないようにするぞジジイ……ッ！！ てめえ！！」

気づく　なぜ自分が勇者なんて大役に選ばれたのかを。それはテツが予想してたよりも簡単に残酷だった。

「俺が二ノに言った条件は二つ……子を残しそうになく、歴史に残りそうにない人物」

「フツ……ハハハハッ！！」

額に手を乗せ狂ったように笑う。ウィルの条件は全て満たしていた自分の情けなさに、確かにあのまま生きていたら結婚どころか恋人なんて出来なかったであろう。歴史に残る？　ポロアパートで死ぬまで働き安月給だった男が歴史に残るわけがないと。

「ハハハッそれで交通誘導の会社に潜り込んだのか二ノ、確かにあそこにはそんな連中がゴロゴロいたもんな、お前の判断は正しかったぞ二ノオ」

テツはしばらく笑い続け疲れたのか椅子に座り直すと頭を抱えて言葉を失う。選ばれた者とか勇者とか自分の中で少しでも舞い上がった部分はまだあったが情けなくて涙が出そうになる。

「でだテツ、てめえはもうこの世界で生きるしかない。しかも人を殺しまくってるんだぜ。わかるよな」

「~~~~ツ！！ 汚いジジイだぜウィル」

今まで腕を組んで黙っていた二ノが壁から離れ二人に近づきようやく口を開く。

「父を、魔王を倒すぞ。元の世界で何も生きた証を残せなかったお前は思わないか？ 自分が何かを成し遂げた証が欲しいと」

「てめえら揃いも揃って人の人生をなんだと思ってるんだよ！！ ようはお前の親子喧嘩で勝てないから俺を使っつて事だろうが！！」

二ノが言葉ではなく沈黙で答えるとテツは何度目かの大きな息を吐きのびた前髪を掴む。この世界には犯罪を裁く法律や警察もいなく二人を訴える事など出来ない。そもそもそんな次元の話ではない。

「お前ら二人には腹が立つが……乗ってやる。魔王を殺せばいいんだろ」

パンドラを持ちウィルに背中を向けて立ち去っていく。テツが真実を知っても戦う理由は一つだけだった……エリオとフェル。この世界にきて得た友人は見逃すには一緒にいた時間が長すぎた。

「はあくともん終わってるぜ人生が」

始まる、魔王との戦いが。

大きく背伸びをして起き上がると一週間過ごしたテントの中でテツは首をポキポキと鳴らす。外は風が強いのかテント全体が激しく揺れているがいい加減なれた、壁にかけてある胸当てやら軽装な装備をつけてパンドラを手に持つ。

「人間、装備はなるべく軽装。お前は機動力勝負だからな。多少の傷なら治癒出来る」

「ふあゝなあパンドラ。俺本当に魔王倒せるかな」

「フツ聞くまでもない最強たる私がたかが人間如くに」

「あゝはいはい」

胸甲板にグリーグゝすね当てゝだけと装備にしては少ないが、腕はナイトメアで強化するので丁度いい。この一週間テツがなぜ異世界に連れてこられたかを知り悩みに悩み抜いた。

しかし悩んだか所でルーファスやウィルの言う通り答えは決まっていた。さんざん殺してきたテツはもう普通の人間の思考はなくなり呼吸をするように殺せるだろう……辿りついた答えは魔王討伐。

「ふう〜寒」

テントを出ると何人もの騎士が焚き火を囲み息まいてた。「俺が魔王を倒して英雄だ」「ここで魔王を倒せば一生遊んで暮らせる」など下っ端連中の考えが耳に入りテツは苦笑いを漏らす。

ベルカの騎士などど偉そうにいても所詮は人間。当たり前前事を思い空を見上げると無限に雪が落ちてくる。

「エリオ。惚れた女の前だからって無茶しすぎだ」

## ヴァルセルク雪原。

時間、季節など関係なく常に吹雪いてる極寒の地にベルカ他魔王に敵対する各国が集う。各国の国旗が何個も掲げられ集まった数は数万、数十万単位にさえ見えた。

各国の首領達は指揮を分散させて連携攻撃と作戦にでた。ベルカもその意見に賛成し一週間の時間を待ち始まる。

「私はベルカ代表ルーファス」

各国の戦士達数万人の前にルーファスは王族の衣装で登場すると静寂に包まれる。耳鳴りがするほどの無音の世界に雪が地面に積もる音だけが、やがて王は拳と共に言葉を投げつけていく。

「この世界を支配出来るのは圧倒的な力。他者を寄せ付けないほどの力。魔王はまさにそれを欲しいままにしている」

規則正しく並び兜の隙間から視線を感じるとルーファスはより一層声高らかにし拳を上げる。

「ならばその力を凌駕し魔王を踏みにじろうじゃないか!! ここに集いし同士は誰もが世界平和を望むと私は信じている。しかし理想では意味が無い。諸君、平和のために殺してください」

ルーファスの言葉は理想など甘くはなく現実を語っていた。平和が欲しければ目の前の敵に剣を突き刺し返り血で体を染めた先の平和。

ルーファルの隣にいる老兵……片目を失い敗北の傷を顔に刻み込んでるヘクターが勢いよく剣を抜くと正面の騎士かた勢いよく剣は抜



かれていく。

「すげえ」

数万の戦士達が前列から剣を抜く光景は波のように広がり音で鼓膜が刺激される。見ていたテツは耳を塞ぎながら震えていた。こんなにも大規模な戦いなんて歴史の教科書か映画でしか見たことがない。

「テツ」

決戦の準備をする騎士達の中から一人の少女が気まずそうに歩いてくる。装備はテツと同じ軽装だが腰には刀がある白銀の二ノが現れるとテツもどこか気まづい。

「そのテツ……あぁーいや」

「二ノ確認したい事がある。お前は親を止めたいと言ったが、結果的に殺す事になるかもしれないんだぞ」

「……私も出来れば殺しはしたくないのだが、不可能に近いだろうな」

「ああ、後この前は悪かったな。頭に血が上り言いすぎた、この通りだ悪かった!!」

テツが頭を下げると二ノは両手をブンブン顔の前で振りながら焦る。顔を上げてテツが笑うと二ノもつられて笑ってしまいこれから戦いに行くような雰囲気ではない。

「ようやく見つけましたよテツ君二ノさん!!」

腰に手を当てて溜息をわざとらしく大きく吐きだすマリアが二人に厚手のコートを渡す。

「体温管理も一応してくださいね、地の理は魔王にありますから。私達に与えられた命令は単独で魔王城に潜入し魔王の首を持ちかえる事です」

獣の皮で作られた茶色のコートは着てみると温かく体温を逃さない。騎士達は鎧だがテツと二ノは軽装で着る事ができた。

「二ノさん。貴女が魔王の娘である事は聞きました。今更ですけど……いいんですね？」

「構わない。もう何年も前に決めた事だ」

それを聞くとマリアは歩き出し二人はついていく。吹雪の中親を止めるために魔王の血族と戦う大義名分もないが友達を助けたいと思うおっさんは一歩一歩進んでいく。

魔王という目標に向かい。

踏む雪が足首まで埋まり吐く息が凍りつくような雪原を永遠に歩き続ける数万、十数万の兵士。最初は息まいていたがあまりの極寒の地に言葉まで凍りつき雪を踏む音と鎧のすれる音だけになる。

吹雪は視界を完全に真っ白に染めて、隣のいる仲間の手を掴みはぐれないようにと指示が出される。そんな中で身を丸め口を開けるのすら苦痛になっていたテツは言う。

「この前はおんな事言ったが感謝してる部分もある二ノ」

「ううゝ寒い。なんだ無駄な体力使うな」

「もしお前が現れなかったら俺は腐ってたよ。いつか一人でボロアパートでの孤独死……今はやってる事は最低だが生きてるって実感はあるしな」

人生を目茶苦茶にされ親子喧嘩という殺し合いに巻き込まれて感謝する時点でもう元の世界に帰れないと笑うテツに二ノは静かに背中を向けて歩き続けた。

「許してくれとは言わない。恨んでくれても」

「だああああ今更そう言う事いうかよ〜ここまで巻き込んで、んなお決まりの台詞は聞いたかねえ〜」お前の力を最大限に利用してやる」て言われた方がまだいいわ!!!」

「コホン……契約者となったお前を馬車馬の如く働かせて目的のためにボロ雑巾のようにしてやる」

吹雪の中で放たれた言葉にテツは目を丸くし固まる。寒さではなく二ノの予想以上の酷い言葉に固まり、やがて諦めたように笑い二ノの手を掴む。

「ななな何をするテツ!!! お前自分の年齢を考えろ!!! 私みたいな魔王の娘なぞ」

「魔王を倒して英雄になり金と権力を手に入れるのも悪かねえな〜それこそ前いたボロアパートより遥かにマシだな」

「たまにテツの前向きな部分が羨ましくなるぞ……ん」

前の列が立ち止まり皆が空を見上げている。つられて二ノも見上げると吹雪は去ったのか灰色の空の下で雪原が銀色に輝いていた。



え!!!」

先陣を切ったのはベルカ騎士団。騎士達は矢で出鼻を挫かれた隙を見逃すわけもなく正面から突撃し傭兵達を次々に殺していく……白銀の世界は死への恐怖の声と鮮血染まっっていく地面で形を変えていった。

魔王軍も連合軍も数が多すぎるために永遠と殺し合いは続き地獄絵図がそのまま絵から出てきた光景の中でマリア隊は駆け抜けていく。

「ハアアアア!!! 邪魔よ!!!」

両手に持ったバスターソードを遠心力で振り回し目の前の敵をなぎ倒す。地面に転がり命乞いをした瞬間には胸に突き刺されマリアは大きく息をつく。

後ろで見ていたテツはマリアの姿が鬼に見えた。装備は腕から爪先まで白銀の鎧で固められ美しいが敵を倒すにつれ返り血で真っ赤に染まっていく姿は 鬼。

「さあ人間!!! いくわよ!!!」

パンドラの声と共に起動しナイトメアを装着すると着ていたコートの腕部分は吹き飛び禍々しい悪魔の腕を晒す。両腕には常に紫炎が宿り起動のたびに形を変えていく。

「うらあ ああ あああー!!」

正面の重装甲の敵を殴り飛ばすと遙か後方まで吹き飛び何人も巻き込んで一本の道ができる。何度も使ってるはずなのにテツには恐怖の感触が手に残る……まさに化け物の名にふさわしい小手を一度見て走り出す。

「隊長これじゃ数多すぎるぞー!!」

「あら弱音なんて珍しいですね二ノさん。魔王を止めるんじゃないですか」

「むう、隊長作戦はあるんだろうな」

二刀流を振りまわし敵を2人同時に倒すと返り血が顔につき下唇から舌を出し一舐めし更にもう一振り。女性とは思えない剛力で殺し進むと傭兵達はその勢いに恐れ脚が止まってしまふ。

「目の前の敵を倒し続ければ城には辿りつきます!! いい作戦でしょっ」



「うおおおいアホ隊長！！ どーゆ事だ！！ ついでにババア」

「テツ君、私は今非常に気が立ってます。発言には注意してくださいね」

何人も殴り殺し一息つくと遠くでは炎の柱や氷の竜が暴れている。数少ない契約者が出てきたのであるう、テツは死体の脚を持ち上げ紫炎で焼くと全力で敵のど真ん中に投げ付けていく。

「どうだこの野郎が！！ こんな殺し合いばかりしてるお前たちの親玉を必ず潰してやるからな！！」

傭兵達はテツの死体を投げる姿、殴る姿に恐怖した。両腕に悪魔を宿した化け物が襲いかかってくる光景は恐怖を生み、その恐怖は集団全体に広がっていく。一人が逃げ出すと隣も……と気づけば目の前からは大勢が逃げ惑う事になる。

「おおテツ凄いな」

「雄豚でも役に立ちましたね。急ぎますよ」

「おいババア何冷静に指揮してんだ。いつとくが隊長ならもう少しまともな作戦」

「ババアではありません。お姉さんです」

血だらけの切っ先をテツの喉元に突きつけ黙らせると再び走り出す。正面にテツと MARIA がいき敵の大半を吹き飛ばし余った敵を二ノが片づける連携は思った以上に上手くいった。

「……へッ」

何人もの敵を殺す中でテツは小さく笑う。大規模な戦闘で自分の力を存分に発揮し一方的に暴力できる事に優越感を覚え楽しかった。敵を殴り踏みつぶす事がたまらなく楽しかった。

殺しの快楽に酔いながらテツは進む。

#### 四

極寒の地だというのに体は灼熱を帯びたように熱く喉が焼けつく。最初から倒した敵の数など数えてはいないがドロドロと両拳から滴り落ちる血液が教えてくれる……大量殺人の証を。

何十人も体を破壊しても敵は津波のように押し寄せてきて気づけば囲まれていた。殺気を投げつけてくるように武器を突き出し、今にも食らいついてきそうな狼の群の中にいる気分になる。テツは肩で息をしながら愚痴を吐く。

「おいババア、何が単独で城まで行くだ。よく言えるな」

「ババアではありません、年上のお姉さんです」

「隊長、テツ。一点に突進を仕掛け道を開くぞ」

二ノの提案はこの状況では最善だが自殺行為にも等しい。しかしそれぐらいしか手は残されてない。いくらテツが契約者と言っても消耗してる中で百を越える敵に囲まれている絶望　三人は言葉を出さずに沈黙で答えると飛び出す。

「まだこんな所にいたのか馬鹿者共。ささっと先へ進め」

困んでいた敵が一齐に倒れていき何事かと三人の足が止まると、白銀の軍団が援軍にきた。頭の方から爪先まで銀の重装甲とバスターソードで統一した騎士達が次々と傭兵を倒していく。その光景の中で一人の騎士が兜をとり素顔を晒すと隊長であるマリアが安堵の声を漏らす。

「ヘクター様!!」

「ここは任せろ。お前らはなんとしても魔王の首をとれ!!」

顔に刻まれた傷を歪ませ笑いながら送り出す頃にはベルカ騎士団本部隊が周辺の敵を蹴散らしていた。部隊を集め損傷を確認してる中で聞こえてくる……無限に続く絶脳の叫びと一時の勝利への歓喜の聲が。

被害もなく本部隊の力を知らしめたヘクターは兜を被り大きく深呼吸の後に命令を出す。ベルカ騎士団の中からよりすぐりの猛者を集めた本部隊は戦場を縦横無尽に駆け回り戦い続ける。それがルーフアスからの指令だった。

「ぎゃああああ!!」

一人の騎士が叫びながら転がってくると体の半分がそぎ落とされていた。砕けた鎧の隙間から肉と飛び出た骨がはみ出し無残な屍に変

わっている。

「む、久しいな。確かヘクターだったかな」

現れたの漆黒の軍団。甲冑も武器もバラバラで統一性がないが色は黒。その中でも巨大な甲冑と戦斧を肩に担ぎながら歩いてくる男にヘクターは見覚えがある。

「アベンジか。イリアはどうした」

「我らが王妃がこんな戦場に出向くわけがないだろう」

「そうか？ あいつなら喜んできそうだがな」

「む、確かに。しかしそろい踏みだな」

片方は魔王が生まれ前から最強の名を欲しいままにしてきたアベンジ。片方はベルカ騎士団の中でも最強の本部隊。

「古傷が痛むわけだ。まずはアベンジ……お前から潰してやる！

「面白い。どちらが強いハッキリさせるいい機会だ」

ヘクターは個人用にカスタムしたバスターソードを担ぐように走り出し、ハンクも答えるように戦斧を振り上げて正面から待ち構える。

二つの勢力は世界の頂点を決める戦場で激突していく。

## 五

アベンジとベルカ騎士団本部隊が戦ってる時。

テツ達在必死に城門を潜り抜け戦いに身を捧げてる時。

世界の命運を決める戦いを握る魔王は薄暗い地下牢で胡座をかき一人の少女の前に座っていた。

「お前がああの子ねえ、驚きだな」

何重にも巻かれた鎖に繋がれた少女　フェルは低く獣の如く唸り声を喉から魔王に向かい突き出すように吠える。竜の怪力をもってしても鎖は千切れなく手首に痣ができていく。

486

「竜の子なのに人間みたいな外見だな」

「竜はある一定まで成長すると姿を変えるんです。殺すなら今ですよ」

「だってよお、どうする我が愛しい妻よ」

褐色の肌に真っ白なドレスが輝く。肩を露出させスカート装備にす

らなっていないドレス一枚を着たイリアが腕を組み見下ろす。

「……おい小娘。お前は親の仇でどーあってもユウヤを殺すつもりなんだな」

「はい。更に言うと貴女もですよ魔女イリア」

フェルが怒りの表情から悪魔のような笑みに変えた瞬間に顔は蹴り上げられる。綺麗に整った顔は血の化粧で染められるが心は折れない。口の中の血を吐き捨てる蹴りを入れたイリアを睨む。

「たいした度胸だな小娘。剣を貸せ」

「イリア待て!!」

「ぬ」

無理矢理イリアを捕まえ下がらせると肩を掴む。

「ルーファス坊やの狙いはフェルだ。万が一に備えてこいつはとっておいた方がいい」



「万が一フェルを逃がせば竜を敵に回す事になるぞ」

「おいおい十五年前に竜を倒したのは俺だぞ？ 今は外で何万単位の戦いやってんだ切り札は多い方がいい」

ユウヤの言葉に納得はいかないが惚れた弱みか、子供がぐずるような声を出し離れていく。溜息を吐きフェルに向き直ると大きな痣を残し美人がだいなしの顔に近づく。

「フェルとかいったな娘。この戦いが終わったら遊んでやるから大人しくしてろ」

「魔王、貴方がこの戦いで敗れ私とやる前に殺されては困ります」

「……確かに言われてみれば。まあ心配すんな、ベルカなんぞに負けやしねえよ」

魔王は自信の塊のような男だった。頭の上から爪先まで黒で武装し三十代そこそこの老けた顔をしているが時折子供のようない無邪気な顔を見せる不思議な男。とても魔王という大層な名を持つようには見えない。

「魔王様！！」

一人の傭兵が息を切らし走ってくる。膝に手を当て呼吸を整えながら口を開く。

「ついに城内に侵入者あり！！ 今は何人かで抑えてますがどれだけ持つか」

「ルーファスの野郎どんな隠し玉持ってきたかワクワクするな」

「その侵入者の中に……二ノ様が確認されました」

むくれてたイリアが肩をビクツと反応させ手で口を抑える。笑いが大きすぎて口で抑えなくなりイリアは声を殺し肩を上下させ笑う。

「そうか！！ 俺の娘が部隊を率いてやってきたか！！」

「ククツあのバカ娘やってきたな！！ ヌウヤ私が出るぞ！！」

「ちよい待てここは父親だろうが！！」

火がついたように燃えあがるイリアは前に出て邪魔するユウヤを跳ねのけ牢屋から出ていく。

「私が腹を痛め生んだ子だ。ここは譲らんぞ」

二人の会話を黙って聞いてたがフェルは思わず口を開けてしまう。会話の中に聞き流せない事実があった。

「二ノさんが……貴方達の……子供ですって」

「なんだお前二ノの友達か。あいつ元気にしてたか」

「ぬ、確かに可愛い我が子だが、ここ数年会ってないからな」

今までで一番の力を振り絞りフェルは鎖を引き千切ろうとしもがく。今ままで見てきた二ノの顔が全て脳裏によぎり力に変えていく。

「答える魔王！！ どうして娘である二ノさんがベルカにいた！！なぜここに攻めてくる！！」

「ああ〜いきなりうるさくなりやがったなこの野郎が」

地下牢のほこりに汚れた銀髪を掴み動きを止めると息がかかるほどに顔を近づけていく。

「邪魔すんなよ小娘が。今はな親子同士の感動の再会すんだよ〜寝てろ」

大きく振り被った拳を勢いに任せフェルの腹に叩きこむと先程まで騒がしかったフェルは言葉を失う。首はガクツと角度を落とし何度か咳き込むのを確認すると魔王も去っていく。

「おい待てイリア！！ わかったジャンケンで決めよう」

「じゃんけん？ なんだそれは。母と娘の感動の再会に邪魔をするな」

ユウヤとイリアはまるで娘と一緒にピクニックに行くような気分です。どちらが最初に会うか言い争っていた。娘が殺しにくるとわかっていても親として嬉しくてたまらない……歪んだ愛の形で娘を迎える。

## 六

昔まだテツが若い頃に読んだ漫画にこんな話があった。勇者は正義に目覚め幾多の敵を倒し時には挫折し強くなっていく。

「ハアハア……生きてるか!!　おいババア返事しろってんだよ!!」

敵を倒し続けライバルをも倒す姿は若い頃のテツは格好いいと憧れた。

「ババアではありません!!」

「二ノ!!　返事しろ二ノ!!」

そんな漫画のような世界にテツは飛ばされ漫画のような事をし英雄になるうとしていた。勇者と同じ事をしてるはずなのに自分をまったく格好いいと思えない。

「あらかた片付いたな。テツ、隊長、怪我はないか」

テツが読んだ漫画の勇者はこんなにも血にまみれてなく、大量の屍

の上に立っていなかった。テツの両腕で何人殺したなど数える暇などなく気づけば屍の山が築かれていた。体半分ない者、首だけない体と見るだけ吐き気が込み上げてくる。

マリアも二ノも装備は碎かれボロボロになったシャツと敵の血で染まり青から赤に変わったズボンで息を整えていく。テツとマリアが暴れまくり、石の地面や壁は碎かれ城内の玄関ホールは瓦礫の山と化していた。

「よし進むぞ。魔王って野郎の顔面に一発食らわせなきゃ気がすまねえ」

「あらあら入学当初から考えると随分と悪い顔になりましたねテツ君」

「こんだけ人間を殺してんだ、性格も歪まない方が異常だろ」

もうテツから殺人への罪悪感はなくなり、たまに楽しいとすら思えてしまう。顔についた返り血を拭くと両腕のナイトメアを輝かせ上階に続く階段を登り始めた瞬間に脚が止まってしまう。

「フフツじゃんけんやらは楽しいな。あんなにも一瞬の緊張感が戦い以外で楽しめるとは」

褐色の肌に銀の髪とドレス……美しい。それがテツの声だった。色が気がある細長の目を見るとトラウマのように思い出す。マウントをとられ泣いても許しをこいても殴り続けられたあの日を。

脚が止まったのはテツだけではなくマリアと二ノもだった。階段から下りてくるだけの姿だけで美しいが、それ以上に恐怖で止まってしまう。

「会いたかったぞ我が愛しい娘二ノ」

現れたのが魔王軍アベンジ首領イリア。片手には巨大な魔剣を持ち肩に担いでる姿は衣装と不釣り合い。

「へへッ俺も会いたかったぞイリア。覚えてるか」

「ぬ、テツか!! お前の友人と名乗る小僧なら地下牢に閉じ込めてあるいけ」

「初めてですね魔女イリア。私はベルカ軍」

「失せる」

マリアの言葉を途中で切ると他の者のは視界にすら入れずに娘  
二ノを真っ直ぐ見据えて笑みがこぼれてしまう。

「隊長、テツ。先に行つてエリオやフェルを助けてくれ」

「二ノさん隊長として貴女を一人には出来ません。目の前にいるの  
が誰だが」

「行けといつてるのだ！！ ここからは親子の問題だ！！」

瓦礫だらけとなった玄関ホールに二ノの感情剥き出しの叫び声が響  
いた後は耳鳴りするほどの静寂が訪れる。最初に音を鳴らしたのは  
二ノ……鞘から刀を抜く音を鳴らし構える。

「……おい二ノ。確かに親子の問題だ、俺らが口を出す事はねえが  
、本当にいいんだな？」

「テツ。お前をこんな世界に連れ込んだ責任はこの戦いが終わった  
らとる。焼くなり煮るなり好きにしろ、ただこの我がままだけは聞  
いてはくれないだろうか」

腰に手を当て大げさに溜息を吐くとテツは黙って背中を向ける。マ



リアの肩を掴み強引に引きずりながら別れの言葉だけを残す。

「小娘の我がままぐらい聞けないようじゃおっさん失格だからな。その馬鹿親に数年分の恨みを叩きこんでやれ」

「テツ君！！ いや雄豚！！ お前はイリアがどれだけ強いかわかってない！！」

「ババア黙ってる、命令を忘れたのか？ 俺達は魔王を倒しにきたんだぞ。まずは仲間を助ける」

契約者としての力を存分に発揮しマリアを引きずり回しテツが消えていくと親子だけが残り再びの静寂で時が止まったように二人は動かなくなる。

「母上。どうしても引いてくれませんか。こんな無益な戦いをやめてはくれませんか」

「失望したぞ二ノ。ここまでやっておいて第一声がそれか、教えたはずだ」

幼き頃に何度も母親に地面に叩きつけられ、その度に言われた言葉を思い出し諦めたように二ノは笑う。数年ぶりであった母親を見て

もう何を言っても無駄とわかり大きく前に出た。

「相手を従えたくば力でねじ伏せる……いくぞ母上!!」

「おう!! 感動の再会だな」

百万の再会の言葉を重ね合うより親子は抱き合うように互いの武器をぶつけていく。

## 七

瓦礫の山で親子は再会を楽しむ。母イリアはわざと娘二ノの攻撃を受けてその成長を体に刻んでいく……一撃を魔剣を受けるたびに鍛錬した日や人を殺した数が手に取るようにわかる。

全ては自分を倒すためと思ってここまで来たと思うと我が子が愛おしくてしかたない。父ユウヤから授かった刀を使い、速さタイムンは申し分なく連携も悪くはない。

太刀筋は親子なのかユウヤに似ている。呼吸法から足運びまでイリアはじっくりと観察していく。まだ十五そこそこの子供にしては異常なまでの強さだが。

「ぬうん!!」

受けから一転し魔剣を大きく一振りすると、懐で好き勝手刀を振りまわしてた二ノに避ける距離はなく直撃をもらってしまふ。刀で受けたとはいえ圧倒的力の前に吹き飛び瓦礫の中に飛び込む。

「少し期待しすぎたかな二ノ。それが全力じゃないのだろう」

瓦礫の中から体を出し額から落ちる血を拭くと下唇を噛む。

「化け物め」

自分の母親ながらそんな言葉が出てしまう。化け物じみた強さ……それは物心ついた頃から一切変わってなく今も目の前にいる。

「ではゆくぞニノ」

鉄塊の魔剣を一振りするとニノは後方に飛ぶ。魔剣が地面に叩きつけられると瓦礫が弾け飛び、石の矢がニノを襲う。気づいた頃には体が石の矢に射抜かれ地面に頃がる。

「休んでる暇はないぞ!!」

息を整える前に魔剣が迫り飛び起き避ける。イリアから見たら一瞬消えたように見え姿を見失うと微かに魔剣の重さが増してる事に感じ切っ先に目をやるとニノが立っていた。

「母上、いざ」

「断る前にさっさと」

振り抜いた姿勢で停止してるイリアは絶対的に不利な状況だった。

弱点を何箇所も晒し姿勢が悪い。いくら契約者でもまずい……なに  
より二ノは知っている。契約者をどのように殺すか。

所詮は人より少し頑丈程度。一気に叩きまかけられたら致命傷は免  
れない。そう考えてる内に二ノは魔剣の上を走り出す。

「ぬ」

姿勢を直す間に斬られ、回避するにしても距離が近すぎ間に合わない。  
元々使わない頭をフル回転させたイリアはある一つの考えを導  
き出し賭けに出た。作戦にも届かない無謀な賭けに。

「なっ!!」

二ノの驚いた声と共に魔剣が揺らいで落下していく。数秒間なにが  
起こったか理解出来ずにいたが視線を戻すとイリアが……自らの武  
器である魔剣を手放していた。

バランスを崩し状況確認までの数秒の間にイリアは拳を固め大きく  
振り被る。体ごとぶつけるようにパンチはまだ片足しか地面につい  
てない二ノに喰らいつく。

「それがパンチか母上。遅すぎるぞ」

横からのフルスイングを二ノ最小限の動きで華麗に避けて空振りしたイリアに刀を振り上げた。

「テツに感謝だな。あいつの拳に比べれば……ん」

片腕にまとわりつく違和感を感じると手首が握られイリアが笑っていた。構わず刀を振り下ろした瞬間には二ノ地面に口づけをしていた。何をされたかわからずに顔を上げると景色がグニャグニャに曲がり平行感覚を失う。

「テツに組み技を習わなかったのか娘よ。まあ終わりだな」

「なっ」

膝をつき刀を杖変わりにようやく立ち上がるとイリアの姿は歪んで見え吐き気がくる。ヨロヨロになりながらなんとか構えた瞬間に悲鳴にも似た声を上げてしまう。

「ひぎゃああああ……っ！ー！」

イリアの横からの蹴りで二ノの片腕の肘から下は逆方向に曲がり不

気味な形になる。

「赤子以来だなお前の叫び声を聞くのは。安心しろ可愛い娘は殺さない、動けなくするだけだ」

平行感覚と片腕を失った二ノにたいしイリアは容赦なく顔面に拳を放り込み愛しい娘を吹き飛ばす。何度も転がり跳ね、瓦礫の激突し、ようやく止まった二ノは血だらけの顔を上げて立ち上がる。

「さすが獅子の子だけあって心は折れないな。お前が立ち続けるたびに殴り飛ばしてやるう」

勝負はついた……二ノどうあがいても勝機はない。腕一本を奪われた時点で終わっていた。それでもテツを巻き込んだ責任、親を止めたいと願う気持ちで前に一歩進む。

「だが心意気だけで勝てるほど私は甘くない。二ノ……沈めええええええ！！」

イリアの剛腕を振るう音が鈍く響くと二ノの言葉が奪われていく。

## 八

「エリオー!!」

地下牢の鉄格子を殴り壊し中に入るとエリオがうずくまっていた。体はほこりを被りボロ雑巾のような服になり微かに首を上げる。

「よお……テツかぁ〜なんだとうとう地獄にでもきたかなあ」

「馬鹿な事いつてるな!! 助けにきたんだ、歩けるか」

肩を貸してエリオを支えながら地下牢を出るとテツにより破壊された人間が見える。バケツ一杯の赤い絵の具をぶちまけたように通路は赤く染まり酷い匂いが漂っていた。

「つう……テツ、フェルは魔王に連れていかれた。頼む助けてやってくれ」

「当たり前だ。お前こそ好きな女の子の前だからって無茶しすぎだ」

「へへ、好きな子の前だからつい格好をつけちゃったよ」



外見は酷いが目立った傷はなく、せいぜい擦り傷程度だと確認するとテツは安堵の息を漏らし階段を登っていく。階を上がることに死体は数を増やし、切断された手足が階段に転がる光景はエリオの表情を固めていく。

「待ちくたびれましたよ。先に掃除は済ませました」

最上階に辿りつくくと堂々と股を開き二本のバスターソードを床に刺してマリアは座っていた。回りには階段に転がっていた死体以上に悲惨な死を遂げた傭兵達がいた。まるで肉食動物に食い千切られたかのように元の形を残していない。

最上階は一本道があり赤い絨毯が真っ直ぐだけ伸びていた。他には何もなくシンプルな作りだが先にある巨大な扉に三人は息を飲む。

「エリオ君。これを、ないよりはマシでしょう」

死体の中から槍を拾い上げ渡すとマリアは大きく息を吸う。隊長なぞ本来マリアの若さではありえない役職につかされ、魔王討伐まで言い渡された重圧が心臓に重りのように乗る。

吸った息を吐きながらバスターソードを床から勢いよく抜き扉に向かい走り出す。鉄製で出来た銀色の扉に二振りの斬撃を叩き付けると勢いよく吹き飛ばす。

「久しぶりですね魔王」

玉座の間……名の通り玉座があるが、それ以外は何もない。ただ石段の地面が広がり金色の玉座があるだけ。そこに世界を戦いに巻き込んでいる魔王が一人静かに立っていた。

「あいつが魔王か」

テツが意見を言うと魔王の素顔はまだ見えない。魔王は全身黒に染め膝まであるコートを揺らして両腕を上げていく。

握られているのは異常に長い刀……野太刀。ゆっくりと抜き刀身を全て出し鞘を捨てると背中越しに声を出す。鞘から抜く姿だけでテツには一つの感情が出る、怖い。

「マリアか。随分勇ましく成長したもんだな」

声色は少し高いが中年男性の渋みがかかった声。背丈は自分と大差ないとテツは見える限りの情報を頭に叩き込み戦力を練っていく。相手は魔王……どんなに警戒しても足りないくらいだ。

「気をつけてください。魔王の武器は形ある物全て切断します、決して受けてはなりません」

「さすがよく知ってるなマリア。どれ今回の正義の味方はどんな顔をしているかな」

ようやく振り向き顔を晒すと驚きの表情になったのは意外にも魔王だった。これまで勇者を目指し挑んできた幾多の戦士葬ってきた魔王だったが一人だけ気になる男がいた。

「お前 日本人か!!」

「魔王っ……いやお前」

テツも同じく驚く。魔王というからどんな奴かと想像してみれば、自分と変わらない中年男。格好こそ異世界に染まっているが元は同じ世界の住民なのか独特の雰囲気であってしまふ。

互いに驚きを隠せない中固まっているとマリアが前に出て切っ先を魔王に向けて勇ましく言葉を並べていく。

「魔王貴様の横暴もここまでだ。今日お前はここで自らの罪を償い死ぬのだ」

「こいつは驚いた、まさか同じ日本人がいるとはな。お前どーやっ

「ここまでできた」

マリアの言葉なんて眼中になくテツに語りかけると、どう答えいいかわからずに困惑するテツに怒涛の声が響く。

「テツ君、私達は何をしにここまでできました。答えないさい」

「……ッ魔王を殺すためだ。二ノには悪いがここで終わらせる」

相手が誰であってもやる事は一つ。テツはナイトメアで武装した拳を握りしめて上げていく。

「フェル!!」

魔王の後方の玉座に座らせているフェルを発見したエリオが声を上げると魔王も大きく野太刀を構えていく。

「なるほど契約者か面白い、久々に戦いの空気に体が喜んでるぞ」

数回床を踏み感触を確かめてステップを刻んでテツは呼吸を整えながら過去の自分を思い出し笑ってしまう。人生の大半を腐ったような時間を過ごし、ひよんな事から異世界に飛ばされ、殺人を繰り返

し今では勇者を目指し魔王と対峙している。

まるでどこかの脚本が悪いドラマみたいだと思いき笑えてくる。そんな嘘みtainな状況で現れたのは同じ日本人の魔王……ここまでくるとなんでもありだと眩き大きく踏み出す。

「いくわよ人間!! あんな腐れ刀叩きおるわよ!!」  
「おう!!」

## 九

野太刀を肩に担ぎながら腰を落とす。重心を落とし腰を捻る構えから予想される攻撃は一つ……横からの薙ぎ払い。あまりの単純な戦法に驚いたが構わず突っ込むとテツの脚が止まってしまふ。

本能が止まれと呼びかけるように体は固まり冷たい汗が背中を流れる。どこかの剣豪小説でもあるまいと首を振るがどうしても前に出れない。

それはまるで結界のようだった。間合いに入った瞬間に斬られてるイメージが頭の中に叩き込まれ、迷いは生まれ呼吸は乱れていき筋肉が固まる。

「魔王！！ 対策もなしにきたと思いますか！！」

マリアが剣を地面に引きずりながら走り出し、摩擦で地面を削るとやがては切っ先が埋まり掘削機のように石段を削っていく。魔王の間合いギリギリ入らない所で体を限界まで捻り削っていた剣を勢いよく跳ね上げると無数の石段の破片が魔王に突き刺さっていく。

「テツ君いきますよ！！」

マリアの狙いは魔王に一振りさせる事だった。野太刀は長物ゆえに一度振ってしまえば隙が出てしまふ、その隙を狙う……単純だが効

果的と編み出し、今まさに勝負の時がこよつとしていた。

「小細工か、鬱陶しい!!」

狙いは的中し魔王は勢いよく野太刀を振り抜き投石を防ぐと第二撃のために体の溜めを作る。その瞬間に二本のバスターソードが上下から噛み砕くように襲いかかってくる。

「まるで子供の作戦だな。マリア俺が剣術だけだと思ったか」

マリアの攻撃は上下からのコンビネーション。魔王はそれを理解し体をコマのように回し回避し、勢いを殺さずそのまま回し蹴りでマリアの首を刈り取ってしまう。

ここまでの体術は予想していなかったが、倒れながら笑い一言だけ残す

「テツ君!!」

肘から拳の先まで魔小手で武装したテツが選んだのは横から振り抜く形のフック。何もない空間だがナイトメアが走ると紫の炎が走り起動を描く。魔王は既に野太刀を両手に持ち大きく振り下ろしてきた。

「人間恐れずに叩き込みなさい!!」

パンドラの声で触れた物は全て断ち切るという野太刀への恐怖を殺意に塗り替えて叩き込む……鋼の刃と悪魔の拳を重なり合い衝撃波が二人を中心に発生すると地面は円形に削られ二人は止まってしま

う。  
「拳は……あるよな。ぬううん!!」

力で押し拳を振り抜くと魔王は数歩後ずさり信じられない表情でテツを見る。

「ハハハ驚いたか魔王とやら!! お前の持つ武器は確かに斬れる物はないと言われた名刀」

勝ち誇ったように声を上げてパンドラが叫ぶ。

「だが所詮はこの世界での話、こっちは違う世界から引っ張ってきた武具。この世界でのルールなど通用しない」

魔王は一度野太刀を見て頭をガリガリかくと、肩まで伸びた挑発の髪を一度大きくかきあげてナイトメアを見る。深紫の炎に常に包ま



れ、まるで人間をとり込むかのように皮膚についている小手はまさに悪魔の武器。

「ヒヒツ旦那。こいつは驚きましたね。まさか違う世界の武器とききましたか」

「ふう〜面白い！！ テツとかいったな、今まで勇者気取りで挑んだきた奴の中で一番歯ごたえがありそうだ」

「それはどうも。しかし重要な事を見落としてるぞ魔王さんよ」

マリアとテツの狙いは最初から魔王を倒すのではなく誘導する事だった。二人の攻撃に意識を外に出す事で一つだけ大きな隙が出た。

「隊長、テツ！！ フェルは確保したぞ！！」

意識を失っているフェルを肩に担ぎ上げ走り去るエリオがいつの間にか魔王の横を通過し出口に向かっていくと、魔王は素直に「やられた」と口に出してしまう。

「エリオ君そのままフェルさんを連れて逃げてください。魔王は私とテツ君で十分です」

「そーゆ事だエリオ。ちゃんとエスコートするんだぞ」

「わかった。じゃあな間抜け魔王さん!!」

エリオが何の迷いもなく走り去っていくと残ったのは屈辱を受けた魔王。正面から堂々と勝負してきたと思えば狙いはあくまでフェルでまんまんと引つかかった自分……奥歯を噛み締め地面を一度大きく蹴った後に深呼吸する。

「ここまでコケにされたのは久しぶりだ。残ったお前達は遊んでくれるんだろうな」

上段に構え大きく振り上げ魔王は一気に加速する。重心を後ろ脚にかけ力強く蹴り抜くと滑るように空中で走り出し、気づけばマリヤの目の前で野太刀を振り下ろしていた。

「させるか!!」

野太刀がマリヤの頭の届く前に脇腹にテツの拳が叩き込まれ一瞬痛みで意識が飛びかけてる。拳の威力は絶大で契約者の体が砕けはしないものの壁まで飛ばされ激突してしまう。

「テツ君冷静に、こちらが二人である以上有利は変わりありません。深追いせずに確実に一撃を与えていきます」

「カツ……ッ！ マリアアゝわかってるじゃねえかゝ」

脇腹を抑えるように立ち上がるとズキズキと激痛で表情が崩れる。予想以上にテツは厄介でもう一撃貰えば間違いなく戦闘不能まで追い込まれてしまう。二対一がこれほど厄介とは思わずマリアを見る。嫌味なくらい冷静に構えている。狙いはわかっていた、二対一と有利な状況なのに攻めてはこないだろう。より勝機を上げるために最善の策で挑んでくる、あの若さでよくやると呟き脇腹をかばいながら構えていく。

「魔王は二人同時に攻撃はできません。片方が狙われたら片方がすかさず叩く、それだけです」

「ああわかってる。油断もねえし、確実に叩く。案外楽にいけそうだな」

テツの余裕は慢心でも油断でもない。状況を考えればこちら側が大きなミスしない限り魔王に負けないという事実からくる余裕。後一步で魔王を倒せると思うと思わず唇が震えてしまう。

「おい腐れ刀。頭にくるな」

「ヒヒッ確かに旦那の同意見ですわ、あの余裕ぶった顔が勘に障りますね」

とはいえ状況は変わらず、痛む脇腹だけが傷を広げるように軋む。だが前にいくしかない状況に一つの光が差す。それは一撃で状況をひっくり返すようなまさに逆転の一手だった。

「ぬ、珍しいなユウヤ。お前が苦戦など」

担いでた愛する娘を地面に放り投げると形を変えた顔がテツに見えた。大きな腫れで片目は塞がり鼻も曲がっていて美人な顔が血まみれになっている……確認するまでもなく二ノだった。

満足気な表情でテツとマリアを素通りしユウヤの元に行くと、鼻息を荒くし今まで戦っていた二ノの感想を語っていく。

「中々だったぞ!! まだまだ荒削りな部分があるが、強くなるぞ」

「そうか。しかしやりすぎだイリア、一応お前は母親なんだぞ」

「お前がよく言うな、まあいい。んでその痛そうな脇腹はどうした」

試しに軽く脇腹を蹴って見るとユウヤは叫びそうになる声を押し殺しグツと耐え奥歯を噛み締めた。その表情を見たイリアはテツに向き直り魔剣を構える。

「おい二ノ!!」

声をかけるが返事どころか呼吸をしてるのかすら怪しい。鼻から出ている血を拭い少しでも呼吸を楽にするしか出来ない、ナイトメア

で武装した拳を握り肩を震わせて立ち上がると表情は鬼となつていく。

「これが母親のやる事がイリアー!!」

「ほう、今までその拳で数え切れない命を奪ってきた男が今更親がどーのこーの語るか」

「まったくだな。おい日本人、お前もこの世界にきて少なくとも殺しを楽しんだろ？」

ユウヤの指摘がまるで胸に突き刺さるかのように言葉を失う。全て凶星……殺しを楽しみ、これまでの人生で好き勝手暴れるなどなかったテツには至福の時とも言える時間を殺しに使っていた。

「テツ君!! 敵の言葉に耳を貸さないで!! 貴女はイリアを頼みます」

「ババアお前が魔王かよ!!」

「本来ならババアという言葉を吐いた瞬間に叩き伏せますが、今は我慢してあげます。悔しかったらささっといリアを倒してみせなさい」

先程までの絶対的有利な状態から一転し対等どころか絶望的に変わっていく。世界最強クラスを二人に増やしてしまう。魔剣を肩に担ぎ片手でクイクイツと指で挑発するイリアを見て覚悟を決める。

「人間。あの剣は力のみ、負けないでよ」

「ふう〜魔王の次はその妻か。いくぞお おおおお」

近づかなければ拳は届かず相手に一方的に攻撃にされるにされてしまう。いつも通りの作戦なし、ただ接近し殴るのみ……そんな作戦をイリアは許すわけがない。魔剣を両手に持ち替えて腰を回転させていく。

腰から生まれた回転エネルギーを腕に伝え手首までもっていくと一気に捻り、魔剣を振り抜く頃には加速と重量で激突時の瞬間に最大の威力を発揮する。

「あれだけ叩きのめされて再び私の前に立つ事を感謝するぞテツ！」

ボクサーで養った動体視力でハッキリと鉄塊のような魔剣が迫ってくるのが見える。前回受けたときは両腕でガードし吹き飛ばされた結果になった。ならばと考えたテツの策は前回と何も変わらないレ

ベルだった。

「おおおおおらあああああー!!」

鼻先まで迫ってきている魔剣の刀身を両手でしっかりと掴み腰を落とす。足で踏ん張った地面は一気の碎けテツ自身も後方に引きずられていくが掴んだ刀身を離さずに全力で押し返していく。

「人間!! この馬鹿!! 少しは頭使いなさい、真正面から行くなんて前と」

ナイトメアの深紫の光は増していき悪魔が吠えるような摩擦音をだしテツに力を与えていく。歯を噛み砕くように力を入れていきフルスイングしたイリアの腕の力が弱まった瞬間を確かに感じる。

そしてイリアの腕は振り抜けず止まってしまふ。何度押そうが前には進んでくれない、今まで幾多の猛者を葬ってきた魔剣と怪力を止めたテツを見ると殺気のような湯気が上がり瞳は不気味に光っていた。

「人を化け物呼ばわりした貴様も十分化け物じみてるぞテツ!!」

奥歯を噛み砕き、腕の骨何本かを犠牲にし魔剣を止めたテツはイリアのいう化け物にふさわしい殺気と眼光を纏い一気に踏み込んでい





手首の骨が砕け拳を握るだけで痛い。手首から先の骨はどうなってるかわからないが、まともな状態ではないのはわかる……しかしその犠牲を払ってテツは死の領域を生還し自分の間合いにイリアを引きずり込んだ。

ボクシングの世界から何年も離れているが何百回とサウンドバックに叩き付けた感触は体が覚え考える前に動く。イリアは状況のまささに気付き即座に後退しようとしたが、深紫の炎が突き刺さってしまふ。

「グッ　プッ!!」

口の中に体の中から上がってきた胃液や血でいっぱいになり頬を膨らます。テツは脇腹、レバーブローに拳を突き刺しイリアの体を地面から離す。今まで味わった事のない痛みと苦しみにイリアは胃液を吐き白眼を向く。

「人間!!　一気にいきなさい!!」

右をレバーブローに突き刺し、返しの左フックで一番体重が乗る打ち下ろしで顔面を射抜く。一瞬意識を失い目の前が暗くなりかけた瞬間に目蓋の隙間から微かに見えた光景は悪魔が腕を振っているようだった。

「…………ツ!!!」

歯を食いしばり棒立ちとなったイリアへの渾身の右ストレートで顔を消し飛ばす。顔から血の火花が出るように赤い衝撃が現れ、魔剣を操る魔王の伴侶は空中を泳ぎ無残に崩れ落ちていく。

「ハアハアツ!!!」

振り抜いた拳を戻すと尻もちをついてしまい乱れた息は整ってこない。両腕から激痛が走り、わずか数分の戦いでテツは戦力の大半を失ってしまう。

「人間待つてなさい。腕の骨くらいすぐ再生するから」

再生という言葉に寒気を感じると腕の中で奇妙な感覚を覚える。まるで肉や骨が生きてるように動きまわり互にくっついていく感触は体の中を蛇が這い回っているようだった。

「ハア　　ハア、ババア」

傷は多少回復したが体力や精神力を使い足元もおぼつかない状態で

マリアの援護に向かおうと瞬間に……化け物が地獄の底から這い上がるように刃をテツに叩きつけてきた。

「な、グウアアアアア！」

気づけば体は地面を何回も跳ねて転がっていく。ようやく止まっかと思えばナイトメアに亀裂が入り再び両腕が痛み視線を上げる。

「デツウウウウー！！ 強くなつたなあ〜」

おかしな方向に曲がった鼻を掴み力任せに曲げると鈍い音が響きイリアの苦痛の声と共に元に戻る。半分は腫れ上がり二ノに似た美貌は失われ酷い顔になっていた。ドレスの脇腹部分からは血が滲み立っているだけで精一杯の状態で魔剣を担ぎ上げ走ってくる。

「ぬうううらあ ああああ」

「おおおおらあ ああああ」

魔剣レイヴンとパンドラは衝突しテツとイリアの力比べになっていく。互いの得物をぶつけあい火花の竜巻にも似た光景が包み、その中心で相手の隙をつくように殺し合う。

魔剣を殴るたびにテツは拳が碎ける感触が覚えるが、骨が強引に動き聞いているだけで痛々しい音を鳴らし再生していく。右を打ちこみ

壊れる、左で再び魔剣を打ち抜く。しかし左も壊れ、再生しきつてない右でと無限のように続くイリアの乱舞に立ち向かう。

「これで終わりだテツ!!」

ナイトメアが悲鳴を上げるように亀裂部分から装甲を落としていくとイリアの突きがくる。巨大な魔剣の突きは壁が迫ってくるように見え、触れた瞬間に絶命するのはテツにはわかった。

「ぐうううう……ちくしょうが!!」

体を丸め頭を振り前へ進む、それは昔テツが憧れたスタイルだった。どんなに大きな敵にも恐れずに勇敢に攻めていき体を振りながら拳に体重を乗せて相手に叩き込む。

突きたいし的を絞らせないように頭を振り一気に近づく。互いの全てを乗せた一撃は重なり合っていく。

「驚いたぞテツ。ここまでとはな」

魔剣の切っ先が鼻先に触れた瞬間にテツは頭を振り、滑らすように切っ先の横を通過していく。頬の皮膚一枚を持っていかれたが代償は勝利の二文字だった。

突きを避けられたイリアは前のめりになりテツの的になる。弱点の塊になり無限の連打を浴びてしまう。頭から腹まで隙間なく地獄のような連打を浴びて倒れる事すら許されない。

「……カッ…ハッ!!」

外だけではなく体の内部も破壊しつくされたイリアはテツの拳が止まると膝から崩れ前に倒れていく。持っていたいかれた皮膚の後から血を流しながら倒れているイリアに止めを刺そうとした瞬間に見てしまふ。

「マリアアアアアア!!」

恐怖と怒りの叫び声を上げてテツは走り出す。

子供の頃から負けた事が無かった。ただの一度も、父から習った二刀流で傭兵仲間の中では群を抜いて強く、女というハンデを感じさせない技量で圧倒していたが……二十歳を迎えた誕生日に父から挑戦状がきた。

それまで一度も剣を交えた事がない父と戦う時には正直負ける自分が想像できない。一度だって苦戦すらなく勝ち続けていたのだから。

「嘘」

そんな言葉が出てしまい膝が地面につく。次元が違うとはこーゆ事だと言わんばかりに父に子供扱いされてしまう。今まで大切に組んで立ててきた積み木が一気に崩されるように思え、悔しさの涙すら枯れてしまう。

「マリア。お前は確かに強い、だが世の中は広いんだよガハハハ」

圧倒的な技量の差、経験の差、器の差。その日からマリアは生まれて初めて目標が出来た……傭兵王ルドルフを越えるという目標が。

しかしルドルフが一度だけ負けたと耳にし遠征から戻ってくる頃には世界に魔王という言葉が轟いていた。本当に世の中は広い、広すぎると感じマリアは休まず鍛錬を重ね続けた果てに辿りつく。

「何年ぶりですかね魔王。お久しぶりです」

「ルドルフの子供がここまでくるとはな。親父に似て野獣のような目してるな」

後ろから激しく打ち合う音が聞こえまだテツが生存していると確認し深呼吸で再開に踊る心臓を冷やす。構えは防御を捨てて全て攻撃に費やすように、体を横に向け二本のバスターソードを上下に構え突き刺すように突きつける。

「教師顔して普段はいい先生だってなあ〜笑える。そんな悪魔みたいな顔するのにな」

魔王の持つ野太刀の情報を手に入れ考えた策は防御は意味なし、ならば二刀流の特性をいかし手数で勝負と決めマリアは突進していく。一本を突き刺し、一本を横から払うように溜める構えで勝負に出る。

「成長したな!!!」

一撃目の突きを避け二撃目の払いを回避し隙をつく戦術を組みたて、一撃目の突きを避けた瞬間にほぼ同時に横から払われていく。咄嗟に野太刀を盾代わりに地面に突き刺し受け直撃を防ぐが手首の骨が



悲鳴を上げていく。

二撃目が予想より遙かに速く考える前に体が防御を選択した。女と思えない怪力で重量重視に作り上げたバスターソードを魔王に好き勝手振り回し、攻撃の隙すら与えない。

「魔王！！ 確かに貴方の持つ武器は強い。だがそれに頼りすぎだ！！」

左右上下から一呼吸の間もおかず二本の剣が襲いかかり魔王は全神経を防御に使う。一撃受けるたびに動きが鈍くなり、貰い続けると危険とわかっているがマリアの猛攻は止められない。

「チイイイ！！ 本当に強いじゃねえか！！」

二刀流は本来片手で振る型から一撃の威力は落ちるはずだが、マリアに限ってそれは無かった。まるで巨大なハンマーに殴られ続けるように重い。更に剣速まで速い……舌打ちを一つ鳴らし魔王は下唇を噛む。

「ふう………ブウ！！」

「なっ　　ッ！！」

口内の肉を噛みちぎり血を溜めて一気に噴射。マリアから見たら目の前の魔王の口から血が吹き出し驚いた瞬間に視界を奪われた。血は片目に入り後退してしまう、距離間を失ったの攻めは無謀と判断し距離をとる。

「~~~~ツ!! やってくれましたねえ」

「実戦経験がまだまだ足りないな。お前の實力はわかった、もう微塵も油断しない」

奇襲から連続攻撃で一気に仕留めたかったマリアにとっては状況は悪化していく。柄を腰の位置まで戻し刀身で体を真つ二つにするように中心で構える魔王にはルドルフと同じ威圧感がある。

心臓を素手で掴まれるように威圧されマリアに焦りが生まれる。正面に立ってようやく気付いてしまう、一日だって鍛錬を休まなかった事はないからわかる……魔王との実力差に。

「中々の使い手だな。異世界ならではの二刀流の使い方も面白い、だが届かない俺には」

遅くだが確実に詰め寄ってくる魔王に対しマリアは構え直す、頭の中でどう描いても勝つ姿が想像できない。まだ剣を交えたばかりなのに脅えてしまう。目にかかる前髪の間隙から見える瞳は冷たく

黒々と輝く、ただ視線が重なっただけで心が折れそうになってしま  
う。

「うおおおりゃあああああ！！」

女性とは思えない野太い声を出し二本の剣を横から薙ぎ払う。遠心  
力とバスターソードの重量を加え魔王の前で一回転し必殺の一撃を  
出す。間合いに入るのを待ち、先に手を出したい衝動を抑え込み、  
我慢を重ねに重ねた渾身の一撃の先に魔王はいたが。

「 父さん」

二本のバスターソードは真ん中から真つ二つに叩き斬られやけに軽  
くなる。軽くなった理由はバスターソードだけではなく手元を見る  
と手首から先が地面に落ちていた。

「エリオ君、 テツ君、 フェルさん……二ノさん。ごめんなさい」

手を失い自分の体から勢いよく出る血を見て膝をついてしまう。目  
の前には野太刀を首筋に当てる魔王が握る手に力を入れていき  
…マリアの首は胴体に別れを告げた。

「マリアアアアアアアアアアア！」

テツの声は響く。

付き合いがそれほど長いわけでもない。

特別な感情があるわけもない。

ただのおせっかいな年増だと思っていたが。

テツの顔は涙と鼻水でグシャグシャになっていた。まるで何十年も共に歩いてきた友人を失う気分と残酷な殺人現場を見せられた気分が混ざり、怒りと恐怖がまだ再生しきつてない拳を加速させていく。

「あああああああ！！！」

喉が潰れるように叫び武装した拳を振り抜くとユウヤが野太刀で受け止める。互いに押し合いになりテツは拳を削りユウヤは支えている腕の血管から血液が吹き出る。

「お前に悲しんだり怒る資格なんてないんだぞ」

「黙れええええええええええええ！！！」

左右の連打を繰り返すがユウヤは見えてるようになら防ぎ野太刀を手足のよりに扱う。

「動きが単調だな……なるほど武器は優れているが使い手が駄目か。ある意味バランスは取れてはいるな」

地面を踏み砕くように踏み込み懐に潜り込むボディへと狙いを定める。脚を使う相手への上等手段と普通っていたボクシングジムで教えてもらった術を体が選択した。

「グッ!!」

しかし当たらない。どんなに速く動いても野太刀で牽制され、懐に潜り込んだとしてもあんなにも長い野太刀を器用に使い盾にされてしまう。それは互いの技量を越えた何かを感じテツの脚が止まった。

「仲間を殺された怒りは自分の不甲斐なさに気付き薄れたか。お前ボクサーだったんだな」

「殺してやる」

ひよった自分の心を叩き直すように踏み出した瞬間にテツの前に閃光のような光が通る。斬撃の軌道が空中の描かれ痛みすら遅れて感じたユウヤの一太刀はテツを斬る。

自分の胸から熱い物を感じ手を触れてみるとドロドロと血が垂れ自分が斬られた事に気づき思考が止まってしまう。脂汗が顔から吹き

出した瞬間に二撃目が振り下ろされた。

「人間！！」

声に反応するように腕をクロスさせて受けとめると肉はえぐれ刃は骨まで届く。ナイトメアは野太刀を攻撃し防御をし続ける中で破壊されていた。それでも一撃を防いだ事に感謝するとうにテツは笑い刀身を掴む。

「お前が殺してきた奴にも今のお前のように怒り狂ったり泣き叫ぶ家族がいただろうな。もう一度言う、お前は泣いたり怒ったりする資格すらない」

「ガアッ！！」

刀身を掴むと引きよせ一撃を放り込む、ニヤけた勘に触る顔へ消し飛ばすような拳で。もうそれはボクシングの打ち方ではなく。ただ威力のみを追求し大きく振り被った素人のパンチに変わっていく。

しかし武器は封じていると確信し拳を振り抜いた先には何も無い。ただの空振りに終わり手元を見ると野太刀がまだしっかりと握られていた。

「ボクシングなど所詮はスポーツ、こいよスポーツマン。教えてや

る武術とスポーツの差を」

何も持たず両手を開き待ちかまえるように構えたユウヤを見ると野太刀を放り投げ笑ってしまふ。いくら強がっても武器を失い戦力の大半を失ったユウヤは小さく見える。

「どうした？ 恐怖と怒りで気でも触れたか」

「笑わせるな、何が武術だ。ただの時代遅れで錆びれた老人達の遺産だろうが」

「人間を大勢殺し一端の口を聞くまでになったか一般人。所詮はボクサー、それを教えてやる」

テツの圧倒的な力が。  
ユウヤの武術の技か。

決着は二人の間合いと共に近づく。



## 十四

口を開き息を吸うだけで骨に響き関節が痛む……拳の武装も剥がれ落ちほとんど残ってなく中身は傷だらけの手。契約者の回復力もたいた事ないなと思いつながら一歩進む。

やる事はいつも通り単純。ただ拳を相手に向かい振り抜くだけが、その相手は両手を顔の前で開きズッシリと構え待ちかまえている。武器を奪い戦力の大半を失ったはずなのにやけに余裕がある顔でテツを待つ。

「人間、お前の体を治すくらいはしてやった。あのイリアって女と魔王に随分と削られたからね」

「最強とか言う割にはしょぼいなあ〜まあいい。素手ならこちらに分がある」

血と埃と欠けた鋼が散らばる玉座の間でテツは走り出す。ナイトメアは大半を破壊され後何発打てるかわからないがテツの有利は変わらない。拳を当てればさえすればユウヤの体など粉々になるまで連打を浴びせるつもりだ。

一発さえ当たれば必ず体制は崩れそこから連打が繋がる。それで終わり……魔王を倒し勇者になれる。

「シッ!」

ユウヤは踏み込んでくるテツに対しまったく動かず待つ。ただ勝負の瞬間に集中させ呼吸を整えていくと紫色に禍々しく光る拳が残像だけ残しくる。

「くる攻撃がどんなに速かろうと拳とわかっていればこうなる」

槍のように鋭い蹴りを出した先はテツが踏み込んできた脚。全ての動きの中心になる膝の皿を割るかのように踵で蹴り抜くと動きがまるで時間を止められたかのように止まってしまふ。

「いつ……っ!」

拳より脚は長く同時に出せばリーチでまさる脚の勝ち。当然だが実戦でそれを証明できるユウヤの間合いの測り方、タイミングの前でテツは激痛に言葉を失い膝を落としてしていく。

「片足貰ったぞ!」

ユウヤの言う通り膝は砕かれまとも立ってすらいらなくなる。バランスを失いかけたが痛みには耐え強引に立ち上がった瞬間に喉に突き刺さる……ユウヤの放ったの親指は喉仏に深く刺さりテツの呼吸

を止めてしまっ。

口は開いたまま閉じれなくなり膝が悲鳴を上げる中でテツは意地を見せていく。ユウヤに手を伸ばし襟を掴み動きを封じ残った力を全て拳に集めていき振り被る。

「実戦が想定されていないなボクシングは　　ふん！！」

テツが拳を出す前にユウヤの頭突きで鼻を潰され涙で視界が奪われていく。脚、目を奪われてしまっがそれでもテツは拳を振り抜く、しかし当然のように空振りの感触しかなく自分の拳に振り回されてしまっ始末。

ヨロヨロと倒れそうになりながらもふんばり涙を拭い視界を開けた瞬間には天地が逆になっていた。景色が高速で回りジェットコースターに乗っているように回され痛みで加速は止まった。

「アアアアアアア！！」

「どうだ今お前は投げられたんだぞ。景色がグニャグニャだろっな」

頭から地面に叩き落とされ這いつくばるようにもがき立ち上がるとユウヤに言う通り景色は万華鏡を覗いたように回転し見てるだけで吐き気が込み上げてくる。

「な…… ンで…戦いを広げた魔王!!」

口は半開きになり目は白目になりかけ酷い表情でテツはユウヤに聞く。まがいなりにもこれまで戦いを経験し人間同士の殺し合いを見してきたテツは思う。こんな戦いになんの意味があると。

「ここまで来てよく言う。お前は正義の勇者ごっこでもして俺と同じ人殺しを繰り返してきたんだろ？ ならわかるよな、戦いは楽しかっただろう？ 他者に一方的に暴力をふるうのは最高だったろ」

「ふざける…… なっ!! 俺がどんな思いで……ここまでできた」

「お前は自己満足でここまでできた。世界を救うとかいうルーファスの言葉に踊らされて。意味のある戦いなんてそれこそ意味がないだろ？ 生物なんて争うもんだろが、特に人間はな」

テツの頭によぎるのはマリアの笑顔、ババアと言われ怒る顔。もう世界だのどうでもよくなっていた。過ぎた時間は短いが大切な者を奪われた復讐心で両腕に悪魔を宿し、どんなに苦しく痛かろうとユウヤに向かう。

「ま、今更戦いがどーのこーのなんて議論しても仕方ないしな。お前は負けたんだ俺に、それが全てだ」

砕かれた膝を再び蹴られるとついに倒れてしまい脚を引きずりながら進んでいくとユウヤの姿は消え首に生暖かい感触が巻き付く。

「お前が馬鹿にした老人達の遺産はどうだ？ 残念だったなスポーツマン、武術の勝ちだ」

腕がまるで蛇のように絡まり頸動脈を締め上げられテツは苦しきよりも快楽を感じる。眠気が込み上げもがくがキツチリ脚でホールドされ完全に決まった状態……裸絞め。一度決まれば解除不可能な地獄にテツは落ちていく。

「グッ……ガア！！」

「さあ眠れ」

「グウ……グ……ッ……」

勇者になれると言われ舞い上がり契約者の力を手に入れて人殺しもした。それでも前に進むしかなく戦う理由も見つけられなかったが生きていく実感できた。

テツは人生で一番濃厚な時間を過ごし命を天秤にかけて戦い抜き魔

王へと送らしか……。。

敗北という名の闇へ意識は落とされていった。

## 第九章

地の底の底のような薄暗い石と鉄の匂いの牢獄でテツは目を覚ます。最後に見た光景は目の前が少しづつ暗くなり視界が一気に逆転した……少し思い出ただけでわかってしまう。負けたのだと。

牢獄は薄暗く外の微かな蝋燭の灯りだけが頼り、見渡すと薄汚れた二段ベッドに横たわっている自分に気づき体を起こし灯りに向かい歩くと太い鋼鉄の棒が何本も立てられ先に進めない。

「つまり、囚人かよ」

ベッドに戻り腰を下ろすと自分の体を確認していく。胸に大きな切り傷と腕と拳には後は残るが小さな傷が何箇所もある……契約者としての治癒能力に感謝し一息つくると相棒がいない事に気づく。

「当然か。むしろなんで殺さなかったんだ魔王の野郎」

牢獄の灯りは常に一定で長時間いたら時間の感覚どころか精神がおかしくなりそうになる。少し時間が経過すると魔王への怒りが込み上げてきて石の壁を殴ってしまう。

「痛てええええ!! くそっ生身だったんだよな」

拳をさすつてると影が牢獄の外から入ってきて見ると全身甲冑で武装した野太い声の男がくる。

「新入り、お前の先輩だ。せいぜい仲良くしろ」

牢獄は開けられ一人の中年が入ってくる。どうやら二人部屋だったらしく薄暗い部屋にようやく目が慣れてくるとテツの顔が驚きに変わっていく。それは絶対に会えないであろう人物だった。

「マルさん!!」

「ん、お前 …… テツか!!」

灰色の囚人服を着て髭は揉み上げから顎にまで伸びホームレスと変わらない外見だが確かにマルさんだった。元の世界にいた頃の交通誘導の頼れる先輩のマルさん。

「なんでここにいるんだマルさん!!」

「そりゃ俺が聞きたいわテツ!!」



互いに再開は嬉しいが状況が状況なために素直に喜べず、牢獄の中で胡座をかきテツがなぜこの世界にきたのかを説明するとマルさんは腕を組み大きく溜息を吐く。

「あの二ノちゃんが。こりゃ驚いた」

「いや俺は連れてこられたんですが、マルさんどーやってこの世界にきたんですか」

「あの夜お前忘れ物したろ？ 笛だよ笛。一応現場によっては使うから夜中に届けにいつてやったんだぞ。そしたらお前の部屋の前で急に目眩がして気づけばこの世界だったわけよ」

話を聞いている内にテツの顔は真っ青になっていき自分が犯した失敗の大きさに気づき頭を下げた。頭どころか土下座までして冷たい地面に額を擦りつけながら涙声で叫ぶ。

「す………すいません！！ 俺が忘れ物さえしなければこんな世界に！！ すいません、すいません！！」

「じゃ俺はお前がこの世界に連れてこられた時の巻き添えって奴か」

一度テツの背中を向けて小さく深呼吸すると短いが重たい沈黙を破るために口を開く。

「頭上げるやあテツ」

「でもマルさん、俺……俺ッ!!」

「確かにここまで落ちた全ての元凶はお前かもしれないが、今それを責めても意味ねえだろうが。いいから頭上げるテツ」

一人の人生を台無しにし不甲斐なさに涙が出そうになりながらテツは頭を上げた瞬間に殴られた。立ち上がり途中で殴られ体制を崩し尻餅をつく和无表情マルさんが見下ろしている。

「すまん。こんな親父でもな人生を他人に曲げられれば怒るんだ。今はこの一発で勘弁してやる」

「うっ……はい。すいません」

「さて、お前がここにきたって事は魔王に負けたんだな」

鼻血を吹きながら頷くと頭を数回撫でられいつものマルさんの憎め

ない笑顔に戻っていく。

「ここは刑務所みたいなものだ。魔王に負けた奴が強制労働を強いられる牢獄。つまり囚人は皆勇者を目指し負けた奴らだよ」

「え、じゃマルさんも魔王に」

「いいや俺は魔王に辿りつけずその部下にやられたんだわ。んでここに放り込まれかれこれ半年くらいだ」

テツに一つの疑問が浮かぶ。マルさんは確かに戦ったであろうがその術はどうやったかと気になると答えを教えてください。

「学生の頃は柔道しててな。その流れで趣味で柔術も噛んでいたんだわ。その技術がこの世界では役に立ってなあく正直楽しかったよ、こんなに人に頼られる事なんてなかったしな」

「わかります。俺もボクシングの技術で這い上がって騎士団にまで入ったんですよ」

「でもな俺は組み付かなきゃ勝負ならんわけよ。この世界の奴らの武器の扱いに対して無力だった……途中まで上手くいってんだがな。やっぱり強い奴には勝てない三流柔道だったわけよ俺は」

二人は異世界にきてこれまでなにをしてきたのかを語り合い、互いに驚き、時には笑いあった。こんな状況だがマルさんとの再会に素直に喜んでしまう。

「マルさん傭兵に拾われたんですか!!」

「おうよ!! これでも少しは名が売れたんだぜ」武器も持たず相手に組みつく戦法なんて嫌でも有名になったんだがな」

「俺とは正反対ですね。俺は運よく騎士団だったし……マルさん。聞きにくい事なんですが、やっぱり殺したんですか」

両手を広げ笑顔で語ってたマルさんは表情が固まり次第に視線を落とし重い口調で語り出す。

「初めての時は殺したのに死ぬ思いだったわ。殺した奴が夢に何回も出て、この歳で寝ながら漏らすとは思わなかった」

「……マルさん。相談があるんですが」

テツが口を開いた瞬間に影が重なり見上げると先程の甲冑の男が野

太い声で一言だけ残り鍵を開ける。

「出る。新入りの歓迎会だ」

鎧の男に連れられ薄くらい通路を歩いていく。天井にはランプが吊るされ壁には血の跡が引きずったようについていた。マルさんは後ろからついてきてテツに言葉をかけていく。

「この連中は一度は勇者目指したらしいが、どいつもまともな奴なんかいない。会えばわかると思うがこの世界で勇者目指す奴なんざ皆悪党さ、どいつもこいつも利益しか考えてなくてな」

テツには信じられなかった。今まで魔王を倒そうとしていた連中は利益よりこの戦争を終わらせたいと願っていた。確かに自分のためにつてのもあつたが……悪党には見えない。

「お前もついてねえな。今日で何人目の歓迎会だったかな？ まあ死なないようにな」

鎧の男が嫌味な笑い声で進んでいくと薄くらい通路に一筋の光はが差す。扉のわずかな隙間から光は伸びてきている。鎧の男が錆びれた扉を音をたてて開けると熱風がテツの顔に当たる。

「なんだこりゃ」

鋼鉄の柵が四方形に囲み、柵の外には囚人らしい男達が罵声を飛ばしてくる。地面は砂地で灯りは天井にあるランプが柵の中を照らしてるだけ……柵の外はうつすらとしか見えないが飢えた狼のような目でテツを見ているのがわかる。

「次の新人か。今日はこいつで最後かへへ」

テツより頭二つ大きく筋肉で武装したスキンヘッドの男が手に鉄パイプで待ちかまえている。足元には三人の男がうめき声を上げて震えていた。

まるで吐き溜め。本当に一度は勇者を目指したのかと疑いたくなるような連中が、テツの登場に歓喜の口笛を鳴らしたり物を投げて罵声する始末。

「俺も最初は絶望したよ。俺もさ正義を語るつもりはないが、まがいなりにもこの世界をいい風にしたいたいと思ってたんだわ。だってよ俺みたいな奴でも役に立てた世界なんだぜ」

「マルさん。確かにこりゃ酷いですね」

「でも勘違いしちゃいけない、俺達もこいつらと同類なんだぜ。それをわかった上でこれからの事を考えてみる」

鎧の男に勢いよく背中を押され柵の中に入ると出口は閉められ二人つきりにされる。スキンヘッドの男から勢いよく鉄パイプが投げられると反射的に受け取り首を傾げてしまう。

「悪いな新入り〜このルールみたいなもんだ。先輩からの歓迎だ」

「……なああんだ。あんた何のために勇者を目指したんだ？」

「ああ！！　んなもん勇者になつて名誉と金で一生遊んで暮らすために決まってるじゃねえか」

鉄パイプを持ち軽く肩に乗せて笑ってしまう。ゲームや漫画に出てくるような正義に目覚めた勇者なんて現実では生まれない。皆欲があり自分のために戦う、弱き者を助けなんてお伽話の世界だ。

テツにはようやくこの世界にきて戦う理由が一つだけ出来た。それを邪魔しようとしているスキンヘッドを睨み挑発めいた口調で鉄パイプを向けていく。

「歓迎か。要はこんな吐き溜めに落ちた連中がストレス解消のために新人いびってる情けないお遊戯だろ」

「言っじゃねえか新人。てめえも俺らと同じだろうが」



「確かにな。ただし違うな……俺はお前みたいに弱くない」

テツの言葉にギャラリィは盛り上がり罵声と口笛が混ざる中でスキンヘッドが走り出す。正面から大きく振り被る力任せの戦いにテツは驚く。仮にも魔王に挑もうとした男がまるで剣術の基本も知らない。

当たれば大きいだろうが予備動作が大きく、今まで戦ってきた相手と比べると赤子のように見える。左右に避けているとスキンヘッドは距離を詰めてきて鉄パイプを振りまわしていくが掠りもしない。

「どうした新入り!! 逃げてはっかか!!」

「お前魔王まで辿りついてないだろ。せいぜい魔王の城までいって部下にやられた程度だよな」

「じゃてめえは魔王とやりあったってのか!!」

持っていた鉄パイプを投げるとスキンヘッドは咄嗟に防ぐ。その少しの間をつくようにテツは渾身のボディブローを叩きこむ。スキンヘッドから声にならない声が漏れて腹を抱えて後ずさっていく。

「~~~~ツ!! ガ……なにしゃがった!!」

「殴ったんだよ。どうだ初めての痛みだろ、拳に殴られる感触は骨まで響くだろ」

ボディのダメージはすぐには抜けずヨロヨロと立っているだけで精一杯のスキンヘッドに対してテツは一方的に暴力で叩きふせていく。何度も顔を殴り自分の手から痛み感覚が麻痺する頃にはスキンヘッドの形を変わりギャラリーも静かになっていた。

「テツお前……」

息を少し切らしながらテツは笑っていた。悪魔が宿ったかのように凍りつくような邪悪な笑みで振り被った拳をスキンヘッドが意識がないと気づくと下ろす。

後ろから見ていたマルさんでも恐怖を覚え震えた。もはや昔の面影どころか別人のように鬼の如く戦うテツは囚人達を黙らせた後に静かに去っていた。

「おい待ってってテツ!!」

テツがこの世界で初めて出来た戦う理由……復讐。仲間を殺された復讐。人の感情を一番揺らすのは絶望や怒り、特に復讐心はテツを大きく動かし迷いもなくなった。

正義なんて初めっからないようなもんだった。ただ流されるように戦い、そして敗れ地の底まで落とされテツは更に変わっていく。

元の昼休みにジューズをおごる気のいいおっさんではなく 復讐者に。

翌日からテツの強制労働が始まる。地の底の炭鉱にいかされ釘とハンマーを渡されひたすら岩を削る作業、天井のランプに照らされ終わりが見えない強制労働の時間は進んでいく。

一日中ハンマーで釘を打ちつける作業で手の感覚がなくなっていきタコが出来てるが潰れ、再びタコが出来ていく。そんな無現地獄とも言える生活が一週間を過ぎ仕事終わりの食事の時間。

「マルさん。話がある」

「テツ俺はなあ傭兵の中ではギンジって呼ばれてんだ」

「プッ！！ ププ！！ ギンジっすかマルさん」

木製で傷だらけの縦長のテーブルに受刑者は座り、口にする前から臭い飯を食べ愚痴や嫌味の一つでも言っている光景の中でテツはマルさん改めギンジと向かい合いながら話す。

「おうよ俺は丸山銀二って立派な名前があるんだぜ！！ マルさんじゃ締まらねえからな」

「マルさ……ギンジさんこっちの世界にきてすっかり変わりましたね」

「お互い様だろうが、お前なんか人相そのもの変わってるじゃねえか」

傾げるだけで崩れそうな椅子に背中を預け回りを見渡すと、ギラギラと犯罪者のような目つきか死んだ魚のような光を失った目の二種類の間がある。ギンジは後者の光のない目をしていて淡々と食事をしている。

「お前の考えてる事はわかる。脱走だろ？ そりゃ確かにこんな所で死ぬまで飼い鳴らされるくらいなら脱走するわな」

「わかっているならこの半年ギンジさんはなんで何もしなかったんですか」

両手を後頭部に回し大きく体を傾けて天井を仰ぐと溜息をと共に語りだす。

「俺だつて最初は考えたさ。しかし警備はキッチリ武装し素手の俺らじゃ対抗できないしな。たとえここを抜けだしてもまた傭兵生活だ……どの道まともな末路は待ってないさ」

「もう四十も越えてこんな吐き溜めに落ちてさすがに心も折れたか？ 負け犬根性が染みついているな」

ギンジは無言で手を伸ばしテツの襟を掴みあげると顔を近づけ声にドスを効かせ言葉を出していく。一応は傭兵として名を売ったギンジにもプライドはあるのだ。

「もう一回言って見るテツ、締め殺すぞ」

「そんな凄んでも無駄だぜギンジさん。俺達は交通誘導してて人生大半を諦めてた……しかしどうだい。こっちの世界にきて確かにチャンスはあったろう！！ 成り上がるチャンスがさ！！」

「テツ、お前何考えてる。どうする気だ」

ギンジの手を弾くと表情はなくなり、あたかも普通の会話のようにテツは言う。

「魔王を殺す。魔王さえ殺せば俺達は英雄だ、今までの負け犬人生に終止符を打てる」

「ハッ！！ 何言うかと思えば、いいか？ それが出来なくて今こ

「ここにいるんだろ」

「生きてる限り負けじゃねえ。それとも本気でこのままここで死ぬつもりかい」

言葉ではなく無表情のテツの顔から何かを感じとったギンジは一瞬考えた後に大きく肩を落とし溜息をつく。やれやれと顔を上げると苦笑いでテツを見る。

「あの無気力で仕事にやる気なかったテツが随分前向きになったじやねえか」目的は最悪だけどな」

「へへ」お互い随分この世界で汚れましたからね。んでギンジさん本題は部屋に戻ってからで」

二人は食事を終わらせると鎧を装備した警備に誘導され部屋に戻っていく。薄暗い部屋の中でギンジはベッドに腰を下ろしテツは上半身を脱ぎ半裸になると大きく首を傾けコキツと骨を鳴らす。

「この受刑者に俺が戦いの術を教え込む」

「戦う術って……ボクシングをか!!」

「俺は今まで対武器戦をずっとしてきました。強力な武器のおかげもありましたが、戦い方の基本くらいは教えれます」

シャドーを始め体を温めるように牢獄を動き回っていくとギンジは何をしているのかわからない。説明はわかったがテツの行動は謎でただ見ているとテツは動きを止める。

「そしてもう一つ。ギンジさん貴方の柔道や柔術の技を教えてください」

「ますますわけがわからん。柔道や柔術は覚えるに時間がかかり受刑者には無理だ。覚えたとしても素人に毛が生えたくらいじゃ武器に対抗できないぞ」

「俺は魔王に負けました、首を絞められ意識を落とされました。魔王は俺達と同じ世界の奴です」

数回飛び軽くジャブを突き出しギンジをこいこいと手招きをする。ようやく理解したかギンジは立ち上がる。

「まずはお互い本気でやりあいましょう」



「魔王が俺達と……マジかよ。詳しい話はお前を倒してから聞かせてもらおうぞ」

狭い牢獄で二人は会話を止めて息を殺しながら近づいていく。ギンジを重心を落とし大きく両腕を開き、テツは半身になりステップを刻んでいく。互いに飛び出すように地面を蹴ると肌と肌がぶつかる乾いた音が響く。

どちらかのうめき声が牢獄に響くが、その声もやがては消え勝者だけが残っていく。

早朝に起こされ整列と点呼。牢獄の前に立たされ看守の鎧の男達に怒鳴られ、時には手に持つ棒で叩かれと人間以下の扱いから受刑者の朝は始まる。

炭鉱では砕いた岩を運ぶ作業と永遠に岩を砕く作業の二種類がある。テツはハンマーから掘削機の小型ドリルに変わりひたすら機械音を鳴らし掘っていく。

隣では目の下に大きなコブを作ったギンジが不機嫌そうにハンマーを振り下ろし時折舌打ちをしテツを挑発していく。テツも機嫌が悪いのが無視しているがやがて我慢の限界がくる。

「んああああ！！　なんだよ！！　恨みっこなしって言ったろうが！！」

「確かにな。しかし真剣に殴り合った結果俺が勝ったはずなのに俺は俺の方が大きい！！　納得いかん」

「そりゃそうだろうな！！　俺が締め落とされる前にその間抜けな顔に一発入れてやったからなハッハー」

再び喧嘩しそうな空気になるが二人は同時に息をついて作業に戻る。もう体力を無駄にしている余裕はなく計画に移らなければいけない。

ギンジは半年いるだけあつて人間関係や施設の隅々まで知っているため頼りになる。

「運動時間だテツ。一日十分の運動時間があるだろ、そこでまずは教える奴を見つけないきゃいかん」

「一人や二人じゃ駄目だな。纏めて何十という奴を仲間にするれば数の武器が出来る……しかし本当に落ちたんだな俺」

呼吸するだけで肺に埃が入り粉塵で視界が薄くなっていく。作業している中では強制労働に耐えきれず倒れてしまうケースも少なくない。着ている服は変わりではなく衛生面でも最悪……テツは落ち続けていた。

人生という階段から転げ落ちていき底が見えない地獄を落ちていく。一度だって這い上がった事がないテツは底の底の牢獄でも落ち続けていく……そんな事を考えてる内に作業終了の鐘は鳴らされ食堂に向かう。

「おいお前」

黙って食事をしていると食器に大きな影が重なり見上げるとスキンヘッドの男が腕を組んで見下ろしていた。顔は凸凹に変形し見るも無残な姿でテツの隣に座る。

「なんだ、復讐か。まだ傷が癒えてないのにくるとは根性あるじゃねえか」

「今すぐてめえを殺してやりてえが看守の目がある。運動時間を楽しみにしてる」

それだけ言つと席を立ち去っていく。正面のギンジはニヤニヤと笑っている。そして薄くらい砂地にいき運動時間が始まる、そこは新人歓迎会を開いた場所で何十もの受刑者が運動をしている。

「さてギンジさん。あんたの技術を俺に仕込んでくれ、ボクシングだけじゃ魔王に勝てない」

「お前が負けた時の状況を詳しく教える」

思い出す限りの状況を伝えようとギンジは険しい表情になりヒゲだらけの顎を撫で息を吐く。

「最悪だ。仮定だが、魔王はなんらかの武術を学んでたな。それも超実践派のガチガチのやばいやつだ」

「俺がギンジさんの技を盗んでも勝てそうか」

「正直勝算は薄いがやるしかねえな」

テツが技の仕組みや動きを教わろうとした瞬間に再び大きな影が重なり見上げなくてもわかったのように溜息をつく。鉄パイプを二本握り締め、テツに一本を投げると獣のように構える。

「お前もしつこいな。そんなに悔しかったか」

「俺はなこれしか能がねえんだ。学もねえしまとにも働いても大抵人間関係でこじれてクビだ。わかるか？ これで負けるって事は死んだも同然なんだよ!!」

必死だった。スキンヘッドの男はまるで親の仇でも見るような眼力で睨んでくる。テツにはその気持ちがよくわかり鉄パイプを地面に投げ捨て構えていく。

「じゃ何でこんな吐き溜めで諦めたように毎日労働してんだよ」

「黙れ。お前も一緒だろうがああああああ」

猪の突進しながら大きく振り被り突撃してきた瞬間にテツは鉄パイ

ブよりも速く懐に潜り込み悶絶のボディブローを突き刺す。呼吸が苦しくなったスキンヘッドは後退するが意地でふんばる。

「どうだ？ 俺のこの技術学ぶ気ねえか？」

「グツ！！ どーゆことだ」

「今のお前みたいに振り回してるだけじゃ絶対に勝てないぞ。だったら俺から技を盗んでいった方がよくねえか」

その言葉が勘に触ったのか再び鉄パイプで殴りかかるがまるで当たらない。テツは蚊のようにスルスルと避け確実にパンチを当てていく。一撃さえ当たれば……体格的に絶対の有利がある以上一撃さえ当たれば状況は変わるはずだと力任せに振り回していく。

「やれえええマックス！！」

いつの間にか他の受刑者から応援を受けスキンヘッドの男 マックスは何度も何度もテツに突進していくが、その度に殴られ振り回す鉄パイプは空しく空を切る。

「糞がああああああ」

幼き頃から悪さばかりして村では嫌われ者だった。傭兵になり一旗上げよう意気込んだが世の広さの前に敗北しこんな所まで落ちてしまっ……せめてこんな所でも威張りたいという子供のような発想にイラついていたが、プライドが邪魔し今まで好き勝手やってきた。テツがくるまでは。

「……ウツ!!」

空振りが続き体力も消費した上に何発も殴られ拳句にマックスの膝は崩れた。砂の地面に自分の汗と血が落ちる光景は屈辱的な敗北を意味し歯を食いしばり立ち上がるうとしても言う事を聞いてはくれない。

「おい聞けクズ野郎共!!」

マックスを倒したテツは集まってきた受刑者に叫んでいく。

「今こいつを完膚なきまでに叩き潰した技を欲しいとは思わないか  
!!」

遠巻きで監視してた看守は肩を震わせ馬鹿を見るように笑うが、それを見てもテツは言葉を止めない。

「こんな所で一生終わらせる気が悪党共！！ 悪党なりのプライドはないのか！！ 俺が導いてやる、魔王を倒しその先にある栄光へまで連れてってやる！！」

テツの演説に運動場は静けさに包まれ誰一人言葉を出さないと思ったら大笑いが起こる。それは受刑者ではなく何人かの看守が腹を抱えて笑っている声だった。

結局誰一人テツの所には集まらずその日の運動時間は終わる。



#### 四

翌日ギンジは暑苦しさに目を覚ます。冷たい床に石の壁の牢獄に熱は溜まりにくいはずと目を擦りながらベッドから体を起こすと熱の元になっているテツが動いてた。

上を脱ぎ半裸で腕立てふせを熱気を上げながら繰り返していた。床に汗を落とし水溜りのようにし、ひたすら自分の体を痛めつける光景はギンジには異常にも見えてくる。

「よようテツ。朝から随分熱心じゃねえか」

「ハア　　ッ！！　　おはようございませぬギンさん。サボってられませんからね」

昔のように仕事をだらけ生きる気力さえも感じられなかったテツの姿はギンジの目の前から消えていた。目標に向かいひたすら積み上げていく姿勢は素直に関心するが……その姿からどこか狂気じみた気配に震えを覚える。

「整列ッ！！」

看守の野太い声と共に牢は空けられ受刑者は出て番号を順番に言うていく。看守はニヤニヤとしながら持っている鋼鉄の棒で気が向い

た時に受刑者を容赦なく叩く。もちろん素手でマックスを倒したテツは的にされ腹を一突きされてしまう。

「なんだその目は、言いたい事あったら言ってみろ」

「こんな最下層な人間を痛めつけるお前らは糞の周りを飛ぶ蠅かな。なんつって」

言っではならない事を口にし看守の棒は勢いよく振り下ろされてしまふ。受刑者が見てる前でテツは何度も殴られ最後は虫のように床に這い蹲り看守の笑い者にされてしまふ。

歩くだけで骨に響く痛みを抱えながら強制労働の時間はひたすらに耐えた。岩を砕く振動が傷に響き表情を崩しながらテツは耐え忍ぶ。労働時間が終わると待ちに待った自由時間になりギンジの前で軽くストレッチをし体を伸ばす。ギンジも同じく体を伸ばしテツの前に立つが迷いが出る。

「テツさすがに今日はやめとこうぜ。その傷じゃなあ」

「俺達には時間が残されてないんですよ。未来ある若者ってわけでもないし、おっさんは気合で頑張らないといけないんですよ」

「気合つていつてもなあ〜その傷じゃ……まあいいか」

ギンジは組み技よりも技を仕掛けられた時の防ぎ方を重点的にテツに教えた。魔王の情報からして使った技は合気道や柔術方面と読み、長き時間で積み上げた知識をテツに叩き込んでいく。

「いいか打撃ならともかく、間接や寝技は時間をかけなきゃ物に出来ないんだ。最低限の防御方法ぐらいでも時間がかかるくらいだ」

「タアハ　　ッ！！　いい汗かくわ〜…十分ですギンジさん。こっちの世界では貴方ぐらいしか知識ないんで助かります」

ギンジから指導を受け熱が入ってきた頃にテツに痛みが走る。それは骨に響く痛みではなく背中に衝撃が伝わり振り向くと看守が棒を振り上げていた。

「ガッ！！」

地面に転げるように倒れると追い討ちの一撃が放たれたが寸前で止まる。棒の前にギンジが立ち塞がり額から血を流し膝から崩れ二人は仰向けになってしまう。

「怪しい事してる奴は見逃せないんでね。これも仕事だ」

心の底から暴力を楽しむような顔で棒を全力で振り下ろす。二人は抵抗もできないまま恐怖で目を閉じる事しかできず、もうすぐくる痛みを備えていく。

## 五

どんなに覚悟を決めても。

どんなに体を鍛えても。

どんなに努力しても  
…

異世界にきてテツは人生で最大の努力をした。持てる技を全て費やし敵を殺し、殺人への恐怖も振り払い戦い、戦い続けて得た物は仲間を殺され復讐という結果。

それでも走り続けた。気づけば人相も人格すらも変わっていく事に気づきながらもテツは目標のために貫いてきた心が…揺らぐ。

こんな家畜農場のような場所に放り込まれ魔王を倒すなど夢ですら遠い目標を追い続けるほどテツは強くない。今までただ強がりて自分を誤魔化してたに過ぎない。

「テツ！！」

ギンジの叫び声が聞こえると涙が出そうになる。こんなどうしようもない自分のせいで他人を巻き込んだ事に、情けない……テツの努力はいつも現実という壁に押し潰されてしまう。そして口から漏れてしまう、いつもの言葉が。

「ちくしょう」

天井を仰ぎ看守が鋼鉄の棒を振り下ろす影が見えると少しだけ涙がこぼれてしまう自分が情けなく笑ってしまう。心は揺らぎから折れる寸前まで追いやられ

覚悟していた痛みはいつまでもこなく閉じてた目蓋を開くともう一つの影が重なる。やけに大きくまん丸の頭が特徴的な影。体を起こし目を凝らすと考えるより先に言葉が出た。

「お前、マックス」

看守の棒を力強く握るマックスが鼻息を荒く見下ろしていた。

「おいここから先はどうすんだ」

「ハハお前握った後の事もわからずにそんな事してんのか」

「うるせえ！！ 俺を倒した奴が痛めつけられるのは腹が立ったんだよ！！」

笑ってしまう。自分が積み上げた努力の結果得たささいな救いはむさ苦しい大男。あまりにも滑稽に思えてテツは腹を抱えて大笑いしてまうとつられてギンジも笑っていた。

当然そんなふざけた態度を看守は許すわけもなく三人は完膚なきまでに叩きのめされ、最後は看守達に引きづられながら牢獄に放り込まれた。

そこは人の血が壁にこびりつき肉の腐った臭いがする場所。おそろくは態度が悪い受刑者の牢獄だろう。痛む体を起こし壁によりかかり溜息と同時に言葉を出す。

「ここまで落ちちまうと清清しくて笑っちまうなあ」

「おいテツとうとう気でも狂ったか」

「てめえなんざ助けるんじゃないやなかつたぜケツ」

悪態をつけるマックスがなんだか可愛く見え、ギンジは何度か咳き

込み寝つころがり無言。元の世界でも落ちぶれ異世界でも元の世界以上に落ちたテツはある種の覚悟……そこまで格好のよいものではない。

「よし諦めたわ!!」

胡坐をかき太ももを一度大きく平手で叩くとボコボコに変形した顔を笑みに変える。

「もう俺の人生終わりだ。さすがにここまでくると希望とか未来なんざどうでもよくなるわ」

「だからなんだよケツ!!」

「終わった人生だ。後は好き勝手やって好き勝手死んでやる。俺には元々覚悟なんて格好いいもんは似合わない、諦めて開きなあった方が俺らしいわ」

一人肩を震わせ笑うテツを見るとマックスはギンジの言うように本当に気が狂ったのかと思う。ギンジは小さく溜息を吐き背中で沈黙の返答。

「ギンジさんマックス。俺はな自分の人生は諦めたが復讐はやめね



え、死ぬんなら魔王を倒してからだ。それにはまずここを出なきゃいけない」

動くだけで痛む体を引きづりマックスに近づくと床に手を置く。片手を置きマックスとギンジに顔を向けると視線を落とし口を開く。

「俺みたいなクズが死ぬのはまだわかる。でもな殺されたのは俺みたいな奴に必死に戦い方やいろいろ教えてくれた人なんだ」

「おいテツ」

「これは……頼みだマックス。お前との出会いは最悪だったが今日お前に救われて心底嬉しかったよ。協力して脱獄して魔王を倒さねえか？ 情けない事に俺とギンジさんじゃキツイんだわ」

マックスは腕を組み顔を横にし唾を吐き数秒経過すると眉が釣りあがる。どうにも自分が悪役のように感じ我慢の限界かテツの手に自分の手を重ねる。

「かか勘違いすんなよ！！ 俺はお前を利用するだけなんだぞ！！ 俺はてめえが気にいらねえからな」

「やれやれおっさん同士が照れ隠しで手を重ねる光景はジジイの俺

には目に毒だな」

咳き込みながらギンジも手を重ね三人が目を合わせると誰からもなく吹き出してしまふ。ギンジの言つとおり冷静に見たら気持ちの悪い光景で、体の痛みを忘れてしまふほどにおかしかった。

テツは小さな一歩を牢獄の中で踏み出した。人生の最下層にも救いはあつた。それが暑苦しい大男でもテツにとっては救いに変わりない。

## 六

翌日の自由時間から訓練が始まる。マックスは体格もよく強制労働で鍛え上げられた筋肉もあり体は問題はない。しかし生まれて今まで素手で戦うという概念がなく最初は戸惑っていたが次第に形になっ  
ていく。

地面を蹴り、腰を回し回転を加えて体重を拳に乗せる。この一連の動作を繰り返していく内にマックスの中で不思議と楽しさが芽生えてくる。それはボクシング習いたてのように新しい技術を学ぶ幸福感のように体に染み渡り訓練に熱を入れていく。

「そうだ!! 打った後は止まらず動くんだけ、よし!! その動きを忘れるなよ!!」

訓練開始から数週間もすればマックスの動きは冴えてきて一端の訓練生のようになっていく。教える側のテツも初めて教えるとは思えないほど上手く、戦うよりも教える才能がある事は本人ではなく見ているギンジしか気づかない。

「おお!! すごい俺強くなってるの実感できるぜハッハー!!」

「調子に乗るな。武器に対抗するレベルまでは遠い」

「ケツッ！！　じゃ試してみようぜテツ」

新しい技術を手に入れつついつい調子に乗ったマックスがテツを挑発すると、わざとらしく腰に手を当て溜息をつき肩を落とす。確かにマックスは上達も早くもしかしたら才能もあるかと思いついてきた矢先の挑戦にテツは拳を上げていく。

「いいだろう。お前の　のわッ！！」

構えた瞬間に拳は飛んできてテツは鍛えた反射神経で避けると返しのフックが巻き込むように襲ってくる。奇襲の二連打はテツの髪の毛一本しか持っていないはず、大降りしたマックスに容赦なく拳の連打を浴びせていく。

「グッガ！！」

顔に一発、腹と脇腹に一発づつ叩き込むとマックスは体をくの字に曲がり膝が震えていく。体格差を埋めるようにテツは的確に人体の弱点を攻めると意地になったマックスが手を伸ばしてくる。

「ダメージが大きい時は一旦離れて回復を待ってって教えたらうが」

ダメージのせいで遅くなった拳を避け腕を掴むと足を崩し大男のマ

ツクスを背負い上げ地面に叩きつける。あまりにも綺麗に決まり投げた本人が驚いてると離れた場所で見えていたギンジも口を開けていた。

「ギンジさん見たかよ！！ 一本背負いだぜ！！」

「こりゃ驚いたわ！！ このジジイが骨を折って教えた苦労があったもんだな」

二人が喜んでると地面で泡を吹いてるマックスに気付き、慌てながら抱き起こすと何とか意識を取り戻し三人で胡坐をかきながらこれからの事について話す。

「しかしマックスお前囚人達の頭なんだろう？ 部下はなんで寄り付かないんだよ」

「俺はお前に負けたからな。頭つてのは一番強い奴のことなんだよ」

「じゃ俺が頭つてわけか！！」

「いやお前は連中から気に入られてないからなククッ」

「んだよそれ!!」

手を振り回しながら怒っていると最近多くなってきている咳をしながらギンジが口を開く。

「ふむ。つまりは新しいボスが今の囚人達の中で生まれたわけか」

「そーゆ事だ。ライアンとかいう汚い奴だ」

「んじゃそいつを倒せば今度こそ囚人達は俺の下につくわけだな」

単純だが一番効果的な手段を思いついたテツに二人は意表を突かれたように目を丸くし拍手する。ここは傭兵の世界を同じで力で意見を押し通す場所だからこそとテツは立ち上がると、離れてこちらを覗くように見ている数人の囚人に指を指して大声を張り上げて挑発めいた暴言を吐いた。

「おい下っ端あ!! てめえら文句があるなら隠れてないで目の前で堂々と言えっつてんだ!!」

「しかし交通誘導時代のテツが変われば変わるもんだなあ」

「こいつすげえ馬鹿な所あるよな？ それ見るとこいつに負けた事を本気で悔やむわ」

魔王へ辿りつくためにテツの牢獄の薄汚い連中を力で黙らせる戦いが始まる。

## 七

この牢獄じみた地の底のルールは至ってシンプル……力。強い奴が続べる。マックスはまさにルールに従い囚人達を力で抑え込み従わせた。テツがくるまでは、テツに敗れたマックスについてくる者などいなく当然次の頭が出てくるがそいつが問題。

ライアンという男はマックスの子分であり常に側にいた家臣のような存在。そんな男がマックスの失脚に漬け込み巧みな口車と得意のナイフ捌きで囚人たちを魅了した。

今ではマックスの陰口を言う者も少くない。負けた相手に媚びて生き恥を晒す姿は見るに耐えない、そんなマックスが今宵ある個室に現れる。

「準備は出来てるか」

「ああ」

暗闇の中で一本の蝋燭が立ち、その灯りで浮かび上がるのは茶色の汚れただらけのズボンと上半身裸のテツ。汗をかいていてウォーミングアップを完了したボクサーのような空気で静かに座っていた。

「たく苦労したぜこの三日間。まずは看守達に手を回し上手く事を運び、次はライアン一派を挑発し……いいのか随分煽ってきたぜ。」



「負けたら最悪死ぬぞ」

「どうせここにいっても死んでるのと変わらないだろう。それとも信用できねえか」

「ケツお前の強さは身に染みてわかってるぜ。でもなライアンは看守達を丸め込んで武器を持ってんだぞ。それもあいつ得意の短剣だ」

確かにテツの素手で戦う技術は認めざるおえないがマックスの疑念は消えない。素手と相手の得意な得物同士の戦いはどう考えても素手側不利。圧倒的！！ 考えるまでもなく不利。素手は弱い、その考えがマックスの不安を煽っていく。

「さてそろそろ行くか」

個室を出ると左右は木で作られた壁になっていて汚れが目立つ。まだ乾ききつてない血痕が引きずられたようにテツのいく先に伸びている光景は地獄への道先案内人のようだった。

「相手の情報は短剣使い。それだけだが不思議と不安はない、マックス勝たなきゃ死ぬのは俺が昔いた場所もそうだった」

生きるという事はテツにとって苦痛だった。勉強も出来ず恋愛など

上手くいった記憶もなく……テツは勝負に負け続けていた。途方もない連敗につぐ連敗の先には自らの命を天秤に賭けた大勝負。

「ふう」

一度目蓋を閉じて拳を数回握り直して入り口の光の下に体を晒すとそこは運動場だった。慣れ親しんだ場所は異様な熱気に包まれ野次が次々にテツに突き刺さる。

円形の砂地の運動場には何十という囚人が集まり拳を振り上げ興奮している。マックスの姿を確認すると指を指して笑う者すらいる中テツの視線は一点に集中していた。

「きたか」

囚人達の中を歩き口元には嫌味な笑みと油ぎったするどい瞳。髪は肩までありその整った顔は一瞬女性かと思うくらいに美しい。金色の髪を靡かせテツの前に降り立つ。

「あんたがマックス一押しのこと……で、ただの汚いおっさんじゃん。おいマックスお前もボケが始まったか？」

ライアンの冗談に周囲はドツと笑い隣ではマックスが拳を握り締めている。着ている物は他と違い汚れも少なく清潔感がある。よほど

看守と仲がいいのかと思うとついつい笑ってしまうテツをライアンは見逃さなかった。

「おっさん何がおかしい」

「こんな所まできて看守達に媚を売ってマックスの失脚を狙い、いろんな手を使い頭になったのが、こんな優男と思うと笑ってしまつてな」

背丈はテツより頭一つ低く体の線も細い。魔王に挑んだとは思えない小柄だが手には光に反射し輝く短剣が握られている。

「確認だ色男。この勝負に勝つた方がこの頭、いいな」

「いいぜ。しかし本当に素手とは思わなかつたな」

囲んでいた囚人達の野次と歓声が戦いの始まりのゴングとなった。

熱気と野次が飛び交う中でテツは焦るわけでもなく興奮するわけもなく歩き出す。まるで自宅の玄関を開けて散歩に向かうようにリラックスしてライアンに近づいていく。

「テツお前……」

囚人達の中で見守っていたギンジはテツの纏う空気に違和感を感じる。殺気どころかいつもギンジと訓練している時のような姿になぜか背筋が冷たくなる。まるで剣豪小説を実体化したような気分になりギンジは口を抑え見守るしかできない。

「おっさん本当に頭どうかしてるんじゃないかねえか」

無謀にも構えもなにもない状態のテツに短剣を一振りし威嚇するが効果なくどんどん近づいてくるテツに恐怖を覚える。一瞬熱くなつた頭を冷やし心臓の鼓動も弱め冷静になると後半歩の所までテツは踏み込んできている。

「シヤア!!」

短剣を突き刺すようにテツの腹に狙いを定める。互いの手が届く距

離では短剣を回避するのは不可能。加えてライアンは何年も鍛錬を重ねた使い手……肉を突き破り骨に当たる短剣の感触を予測し笑みを浮かべたライアンの顔が凍りつく。

「ああー!!」

突き刺すはずの短剣はそれ以上前には進まず止まっている。止められたのは短剣ではなく、それを握っている手。手首をガッチリ握られ短剣は切っ先だけ震わせ無力化されていた。

「この　ッ!!」

引いても押ししてもびくともしなく、視線を短剣からテツに上げた瞬間に天井が見えた。殴られた事を理解するまで数秒かかり再び顔を戻すと二度目の衝撃で見えている景色が歪み始めていく。

「随分手馴れたナイフ捌きだな。しかしまだまだ」

余裕の台詞を言い握っていた手を離すとライアンの表情は真っ青になり鼻血をドロドロ垂らしながら見てくる。テツにはライアンが敵になるほどの戦力がないように感じた。これまで戦ってきた相手と比べると恐怖すら覚えない。

二ノ、フェル、イリア、ハンク……魔王。戦いの経験がテツを強く

しボクシングとは自然に戦い方が変わっていった。いかに敵を倒すかではなく殺すか。

「やってくれたなおっさん!!」

再度短剣を突き刺すが届く前に自分の顔が跳ね上がり気付けば後退している現実にライアンが震える。テツにとっては単純作業だった、短剣を延ばしてくるライアンに左を刺す。ハンドスピードの差は圧倒的にあり少し遅れた程度では絶対に先手を奪える。

「ガッ……グウウウ!!」

体力を大幅に奪われダメージを蓄積され後が無くなったライアンは勝負に出る。一撃を貰う覚悟で一気に飛び出すと予想通りに強烈な一撃で鼻の形が変わるが攻撃終わりの隙を突くように短剣を出すと。

「へへマジかよおっさん」

再び手首を掴まれた光景に引き笑いをし肩を落とした瞬間に巻き込まれるように体が引き付けられていく。景色が加速していき空中で振り回せるように感じ数秒立つと背中を衝撃が走り呼吸が止まり痙攣してしまう。

「さてこれで文句はないな」

ピクピクと痙攣するライアンを指を指して囚人達を見渡すと誰もが視線を反らす。圧倒的な勝利の前に言葉を失い反論すら許されない状況でテツは胡坐をかき地面に座る。

「お前ら一度は勇者なんて夢に向かい走ったんだよな。んでどこかで敗北しここまで落ちてきたと……もう一回だけ頑張ってみねえか？」

予想もしない言葉に囚人達はざわつき互いの顔を見ながら混乱している中ギンジとマックスだけが今までとんえもない化け物と暮らしていた事に気付く。二人からしたらテツの力は大きすぎて鳥肌がたった。

「こんな所で弱い奴をいじめてるようなお前らがクズなのはよおくわかった。俺も同じだ！！ 少しかだけお前らより強いだけでやってきた事はクズ同然だ！！ なあもう開き直ろうや」

胡坐をかきながら両手を広げ天井から降り注ぐ光の中でテツは言う。

「俺達はな、もうまともな人生送れないんだよ。このままここで死ぬか外に出たとしても戦いだらけの人生……違うか？」

囚人達は返す言葉もない。それが現実、今まで好き勝手やってきた事への代償とわかり皆息を飲みただテツの言葉を待つしかできない。

「なら開き直って戦おうじゃないか。どうせやるなら魔王倒して本物の勇者つてのも悪くないだろ？ クズが世界を救うなんて痛快じゃねえか？」

「お……俺達……みたいな奴が勇者……になれるのかよ」

まだ身動きできないライアンが言葉を出すとテツは振り向かず答える。

「まあ不可能に近いだろうな。魔王を倒すなんて今じゃ馬鹿しか考えないだろうな、でも俺はあいにく大馬鹿野郎でね。こんな馬鹿についてく奴は明日ここにきてくれ」

そう言うとテツは立ち上がり進んできた通路を戻っていく。暗闇と血の匂いがする通路でテツは大きく息をつき背中を壁に預けながら考える。

やれる事は全てやった。大勢の前で演説じみた事を言い囚人達を煽ってみせた……そもそも自分に他人を引っ張るカリスマなんてないのはよくわかる。何度考えても消えない不安を抱きながらテツはその日を終えた。



## 九

翌日の強制労働の時間は皆無言で淡々と作業を続けていた。食事の時も一言も出さず独自の重い空気がテツにのしかかってくる、あれだけの虚勢を張り囚人達の頭を完膚なきまでに叩き潰したテツは内心焦っていた。

いくら強がってもギンジ、マックスの仲間二人だけでは牢獄からの脱獄は不可能。素手で戦う事に秀でていてもたった三人では無謀を通り越し喜劇のように空しい。

「お、元気ねえなテツ。さてはびびってるな！ そうだろ！！」

「うるせえマックス！！」

臭いパンをかじりながら不安なんて何もないような笑顔で馬鹿にしてくるマックスが羨ましい。時間が経過するにつれ不安は膨れ上がり心臓を締め付けていく。いつもなら臭い飯などささっと食べるはずだがゆっくり噛み締めるように食べ溜め息を溢す。

「化け物みたいに強くなっても小心者な部分は相変わらずだなテツ」

「誰もこなかったら終わりなんですよ！！ そりゃビビりるでしょギンジさん」

「まさか人生最後の光景がこんな所とはなあゝああ惨めだあ」

わざとらしく両手を振りかざしオペラのように演技するとマックスは笑いテツは肩を落とす。人を従えるには強いだけでは駄目。それを痛感し自分のカリスマ性のなさに腹が立ってしまふ。

「ふう」

飯の後にテツは一人だけになり暗がりの通路に立つ。相変わらず泥と血痕で汚れた壁に片手を重ね進んでいく。考え抜いた拳句テツにある感情は一つだった……このまま死ぬまで奴隷のような生活が怖い。復讐心も忘れてしまいそうな未来永劫奴隷にされるのが怖かった。

「神頼みってわけでもねえが、頼む！！」

大きく目蓋を閉じて運動上の砂を踏み額に溜まった汗を拭いてゆっくり目を開けていく。まだ明るさに慣れないせいか影しか見えないが人影。それも一人や二人ではない。目が明るさに慣れる頃にはテツは安堵の笑みになっていく。

「ライアン、お前ら」

皆腕を組み、どういふ顔していいかわからないような気まづい表情だ  
が来てくれた。目頭が熱くなり涙が溜まっていくのがわかり拭う。

「チツこのルールだからな、強い奴がボスだ」

「腹黒いお前が珍しく素直じゃねえかライアン」

「あー！ てめえマックスー！ ずっとくがなお前に負けたわけじ  
やねえからな」

後からきたマックスがライアンに軽口を言うと取っ組み合いになり  
見ていた囚人達は誰からともなく笑う。釣られて笑うテツの肩をギ  
ンジが叩き、ようやくクスで糞つたれな連中は一つになっていく。

「よおし集まったな」

円状に囚人達を座らせ総勢三十名で作った円の中でテツは語る。わ  
ざとらしく咳払い一つ鳴らし第一声に気を使いながら口を開いた。

「俺でもなくていいんだぞ頭は、みみ皆立候補とかあればあで  
！」

その瞬間砂や持っていた石を囚人達はテツに投げつけ野次を飛ばす。

「今更かよー!!」

「うだうだ言うんじゃねえ!!」

「黙ってやれよ」

野次が無くなるまで待ち改めて咳払いを鳴らすと囚人達に睨まれる。仕方ないとギンジが立ち上がり円の中心にいき年長者の威厳を感じさせ言葉を出す。

「まあこんな頼りないリーダーだが腹の立つ事に腕つぶしはこの中じゃ一番だ。それでだ!! テツの技術をお前達に教える。素手で戦う術だ、いいな」

囚人達は「おお」と気合の声を上げて立ち上がる。なんだかんだ言っても強さへの欲求は強い、新しい技術の前に興奮を抑えきれずにテツに駆け寄る。

「おい一斉にくるな!! 並べ!! たく……やっぱりギンジさんがリーダーの方がいいだろ」

「俺は嫌だね、人の上に立つ器でもないしな」

「俺もです！！　たく、まあとりあえずこいつらを鍛えるか。必要な筋力はあるから技術か」

そこでテツは気付く。人生で初めて本格的に人に物を教える事に、いつも教えられ出来なくて怒られてた自分が教える……なんだが笑え、一人一人丁寧に教える事から始まっていく。

翌日から囚人達の空気が変わる。今までは誰が頭になるかや、死ぬまで働く生き地獄のせいで絶望などの空気が一変していく。目標が出来るという事で彼らは希望を見出す。

労働の時間は淡々と作業を続け、運動時間にテツから指導を受け少しづつだが脱獄に近づけるといふ事実が身に染みて嬉しい……成功の確率なんて低いのにわずかな希望で囚人達は生まれ変わっていく。

「いいか、先に手を出すな。武器を持つ相手には絶対後手で勝負だ、一対一の時はこれだけを考える」

「うす」

足運びや体重移動と丁寧に教えてくれるテツに囚人達は最初は半信半疑だったが、人懐っこいテツの性格もあり次第に結束の輪が広がっていく。教えられる事は基礎しかないがそれでも十分戦力になる。

「看守の奴らはこっちが武器なしだと油断している。しかし人数は多い、どうだいけるか？」

「厳しいですね。でも賭けみたいなもんだしやるしかないですよギンジさん」

「牢獄の構造は大体わかってる、ここは地下だ。もたもたしてると援軍がくる、俺が先導して出口に」

胡坐をかきテツとギンジが作戦を練っていると声が上がり二人の男を囲んで囚人達が騒いでいる。何事かと駆けつけるとマックスとライアンが素手同士で殴り合っていた。それは練習ではなく真剣だと表情が伝えてきた。

「だあああああ！！ 何してんだお前ら！！」

「うるせえほつとけ！！」

「今このハゲを沈めてやるから見てな！！」

温厚なテツだが二人の言葉が勘に触り割って入っていく。そこからは閃光のような拳を突き出し瞬く間に二人は嗚咽をはきながら地面に膝をつく。

「覚えたての技術を練習だけではなく実戦で使いたかった、そんな所か」

「おお……」

「うええ」

回りで騒いでた囚人達もテツが二人を倒すと黙る。倒れた二人の前に座り大きな溜息を吐き語りかけていく。

「まあ気持ちはわかないでもない。でも今は勘弁してくれ、黙って練習に付き合ってくれ、お前らだって重大さがわかるだろ」

倒された二人は数秒何かを考えた後に黙って頷くとテツは囚人全てを呼び集め、再び円を囲むように座らせていく。

「まあずっと同じ事の繰り返しでも飽きるしな、どうだ!! 今日はお前達が勇者を目指したきっかけを告白しようじゃないか!!」

両手を広げ声高らかに宣言すると皆の表情は曇る。「何を言い出さなんだこいつは」と顔に書いてあるように言いだしたテツがだんだん気恥ずかしくなってしまう。

「いいいいだろっ別に!! なんだよ!! マックスお前からだ!!  
! ほら言え」

「ああ!! なんて言わなきゃ駄目なんだよ!!」



「こーゆのは先に言っといた方が楽だぞ〜それとも言えないのかあ  
〜ああそうか言えないのか!〜!」

テツの煽りについつい熱くなりマックスは膝を大きくはたき、深呼吸して吐き出すように言ってしまう。

「俺は見た目もこんなだから村ではただの悪ガキでな。その……  
惚れた女がいたんだ、でもよぉ……俺には金も地位もねえし……その勇者になつて村の連中を見返して女も……とか思ってたんだ」

静寂。皆マックスの言葉の後には何も言わず黙ってしまう、マックスのごつい見た目から想像を絶するメルヘンのような告白が静寂を作り出す。

「ぶ」

一人が吹き出すと連鎖のように広がり皆腹を抱え笑い転げていた。張本人のマックスは身を丸くしスキンヘッドの頭まで赤くし、その仕草が笑いを加速させていく。

「ぶっ殺すぞてめえら!! テツてめえまで笑ってんじゃねえ!!」

「あははは！！ だってよくそのナリで惚れたのだ……ぶははは！  
！ ひいゝ笑ったわ、はい次ライアンね」

笑い転げていたライアンを指名すると自慢げな顔で立ち上がり演技をするように片手を胸の前で振る。

「俺は世界中の女を抱くためにだ！！」

次の瞬間には場はしらけ「ああはいはい」「ケツ」と野次まで飛ばされたライアンは不機嫌なまま座り、次々と皆の告白を聞いていく。

ほとんどが金。名誉など答える者はいなく自分の利益しか考えてないような答えにテツは啞然としてしまう。仮にも正義の勇者を目指す者が想像とは真逆のクズだらけ。

「諸君。ここまでクズだと清清しいなゝいいだろう！！ その夢こそを生き残って出られたならば全て叶えてみせようぜ！！」

最初は馬鹿にしていた囚人達だが自分の夢を素直に語る内に、忘れていた野望という心に火がつきテツに賛同し叫ぶ。もう真つ当な人生を歩めないと諦めていたが、逆にそれを生きる力にしようと思われたテツに皆は惹かれていく。

「まったくめえも極悪人だなテツ」

「なんすかギンジさん」

「ようはここを出て殺しまくって悪の大魔王じみた事をしたいんだろ」

ギンジの言葉が胸を貫きテツはこれから実行していく事に結末を思い描いて笑う。手で目を隠し肩を揺らし笑い続け、ギンジの肩を掴み悪意の塊のような笑みを作る。

「だからなんすかギンジさん。俺達がいた世界も皆自分勝手にしてたじゃないですか、政治家は金を求め、ヤクザは弱い者を食い物に……いい加減気付きましようよ。弱い方が悪いんですよ」

それはこれから勇者を目指す男の台詞でも顔でもなかった。突然異世界につれてこられ殺人を繰り返し人格まで変わり、仲間を失い地獄に落とされたテツは極悪人という言葉が似合う男になっていた。

薄暗く腐臭が充満する牢獄だが一部屋だけ温度が上がっていた。空気を鋭く切り裂くような音を鳴らし温度を上げていたのはテツ、上半身の服を脱ぎ捨てひたすらシャドーを繰り返していた。

汗を浮かべ室内の温度を上げているテツを見ながらギンジはその体の変化に驚く。三十代の体とは遠く離れ全盛期のボクサーのように筋肉は切れ汗で輝いている。

暗闇で動くテツのスピードは速く、息使いと残像を残す拳を見ながらギンジは思う……おそらくテツは依存していると。

「よくもまあそこまで鍛え上げたな」

「強くなる事は楽しかったです。実際数え切れない人間を殺し力を示すのは快感にも近かったですよギンジさん」

人は依存に弱い。酒、煙草、ネット、恋人。依存している存在と接触している間は極楽の気分になり味を覚える。しかし依存している物から離れると息苦しくなり落ち着かない。中毒性は一級品。

今のテツはまさに戦いに依存していた。ゲームの中の勇者がレベルを上げるが如く戦い続け楽しさを見出している。現実になんかやると大量殺人だがそれも慣れ依存の快楽に酔う。

「準備は出来たぞ。まあ準備って言っても作戦なんかありやしねえんだが」

「明日飯の時間に動きます。ギンジさん誘導お願いします、出口まで導いてください」

「任せな！！ ほどほどにして休めよ」

ベッドに咳き込みながら寝転がるギンジを見てテツは更に鍛錬を重ねる。その日寝付いたのは深夜遅く……目が覚めると大きく背伸びし気合を入れて労働に励む。皆黙っているが決意は表情に出て殺伐とした空気の中飯の時間を迎える。

「さて皆聞いてくれ」

飯を食べる部屋は広く細長いテーブルに対面しあう形になっていた。テツは真ん中に座り飯を食べ終わると同時に声を上げていく。

「おそらくこの中の半分も生き残れないだろう。今更こんな事言うのは卑怯だが許してくれ」

隣にいるライアン、マックスは黙り、三十の囚人達もテツの言葉だ

けに集中する。出口の近くに武装した看守が一人立っているが気にせず喋る。

「まずはこんな無謀な計画に協力してくれた事を感謝する。そして皆隣や近くの奴の顔を見てくれ」

囚人達は言われた通りに周辺の仲間を見ると笑えてきてしまう。今までいがみあったり仲違いをしていた者の顔をまじまじと見る事に笑えてくる。

「今見てる奴のためにお前達は死ぬんだ、そいつのために戦って死んでいくんだ。ここを出るそいつの犠牲になるんだ」

テツの言葉には皆を奮い立たせる力はなく逆に絶望が漂う。

「約束しよう、お前達を犠牲にしてここを出た暁には俺も死ぬまで戦い魔王に食らいついていくと」

「おいテツ、ここは笑う所か？」

マックスが我慢できず突っ込むとライアンが吹き出しギンジも笑ってしまふ。

「まったくだぜ〜言っとくが俺は生き残り世界中の女を抱くからな」

「皆の士気を高めるだろうつて聞いてたが酷い演説だなテツ」

「ギンジさんまで！！ これでも一応考え抜いた台詞なんですよ！  
」！」

これから生存率半分以下の脱獄をしいられた囚人達は笑い合う。それが空元気や恐怖を隠す笑いでも腹の底から笑い飛ばす。笑い声を聞いた看守が近づいてくるとテツが立ち上がったいく。

「静かにしろクズ共。殺されたいのか」

わざわざ兜をとり顔を近づけてくる看守にテツは一指し指を立てる。

「ああすいません。なんか指切ったらしくそれが面白くて、見てくださいよ傷口が凄いです」

「指？」

看守が指先を見た瞬間にテツは 指を眼球に突き刺しえぐり出し

た。悲鳴を上げ転がる看守の顔面に踵を入れ武器である長物の棒を奪うとマックスに渡す。

「そらマックス！！ 村一番の悪だったんだろ？」

「相変わらず汚い事する野郎だな。ではお前ら……いくぞおおおお  
おお」

雄叫びは空気を揺らし囚人達を燃え上がらせ走り出す。部屋の扉を蹴り破り一目散にギンジが駆けると皆が続き、脱獄は始まる。正常な精神では実行は出来ない。勢いで精神を壊し異常者になり囚人達はテツが示した希望へと駆け出していく。





テツとマックスが愚痴を溢すとギンジも舌打ちを鳴らし振り向かず  
叫び散らす。

「うるせえ!! 後少し……少しなんだよ!!」

何枚もの扉を破り落ちている武器を拾い戦い、何人もの犠牲を出し  
出口まで後少し。頭の中に描かれた地図を頼りに最後の扉を開くと  
一本道の先に光が見えてきた。

「あそこだ!! 見ろ、あそこだ!!」

「ライオン!! マックス!! 皆いるか!!」

希望にようやく手が届きそうになり笑顔に振り返ると絶望があった。  
生存者はマックスとライオンだけ。他の囚人達は全て殺されたか取  
り残された現実がそこにある。

考えが甘かった。半分なんてもんじゃない、生存確率はそんな高く  
ないと人数が教えてきた。奥歯を噛み締め拳を握りテツは叫び散ら  
したい気持ちで胸がいっぱいになった。

「いくぞアホ!!」

マックスが勢いよく背中を叩き無理矢理手を引く。

「今更へタレるなよ大将!!」

尻に蹴りをいれて気合を入れなおすライアン。

「ああ … ああ!!」

走る。石段の壁に挟まれるような一本道を四人は走り出す。出口の光は太陽とわかる距離まで近づくと通路に異変が起こる。天井から石の欠片が落ち、次第に一つの鉄格子がゆっくり落ちてきてしまう。

「閉じ込める気だ!! おい早く走りやがれ」

ギンジはそう言うが一番遅れ到底間に合いそうにない。テツが一番気になりギンジの手を引くが勢いよく振りほどく。

「いいから行け!! 自分の事だけ考えろ!!」

「でもギンジさん!!」

鉄格子が閉まる瞬間を想像すると今まで人生が全て終わる。そんな事を考え喉が焼け付こうと走り抜く。しかし全力以上の力を出しても出口は遠のき「やめてくれ」そんな言葉が出てしまう。

「うおおおらあああああ」

絶望という現実をまさに力技で捻じ伏せた男がいた。鉄格子と地面の隙間に体を潜らせ肩で支えていたマックス……巨体のおかげで支えているがみるみる内に鉄格子が下がってくる。

「はやあああくしろおおおお!!」

膝をつき肩の骨が悲鳴を上げてる最中にようやくテツとギンジが目の前にくる。二人が潜り抜けるまで耐えねばと気合を入れると負担が少し和らぐ。

「だああああ見た目以上に重いなこれ!!」

「ライアンてめええええ!! 腹黒男が無理してんじゃねえええ」

息を切らしテツとギンジが潜り抜けると同時に鉄格子が勢いよく地面に突き刺さり、一瞬二人が潰されたと思いと見ると 無事だった

がテツは鉄格子を蹴った。

「糞がああ！！ マックス、ライアン！！ 今こんな開けてやるから待ってる！！」

マックスとライアンがいたのは鉄格子の内側だった。

「ヘツさまあみる。格好つけるからこんな事になるんだぜ腹黒男が」

「そつちこそ我先にと格好つけといてよく言っぜ」

殴っても引つ張っても鉄格子はビクともしない。テツはそれでも諦めない。また失う、出会った頃は最悪の印象だったが今では大切な仲間を……失ってしまう。

「あゝもういいわテツ。ささっといけや」

「最悪だぜ。なんでこんな筋肉馬鹿と一緒になんだよ」

背中越しに手を振るマックス。

愚痴を吐きながらテツが教わった構えをとるライアン。

「ふざげるなあああ！！ 惚れた女のために頑張るだろ！！ 世界中の女抱くんだろ！！」

「ギンジ頼むわ」

「その大将をよろしくな」

後ろで見ていたギンジがテツを無理矢理引きずりだすと我慢していた涙が溢れ出してしまふ。片手を極められ身動き取れないが空いてる片手をバタつかせて叫び散らす。

「ギンジさん！！ やめるおおおお！！ 見捨てんのかよ！！ 今まで頑張ってきたあの二人を！！」

ギンジは何も言わずテツを出口まで引きずり出す。二人は日光の下にきて脱獄は成功したがテツは地面を何回も叩き、泣いているのか叫んでるのかわからない声を出していく。

牢獄の奥からはマックスとライアンの叫び声が聞こえ鎧の擦り合う音と共に悲鳴が響く。うなだれるテツを引き起こしギンジは走り出す。

「行くぞ」

膝が笑うように震え、汗で視界が塞がり、体を振り回すようにテツは走った。もう叫ぶ気力も泣く力も泣くしただただ走り続けていく。生き残ったのはたった二人。テツの復讐への一歩は希望ではなく絶望で踏まれていった。

## 第十章

王国ベルカは負けた。全勢力を投入し魔王に挑んだ結果は敗北。ベルカの街は傭兵達に蹂躪され、燃やされ。シンボルであった宮殿、城、全て破壊の限りをつくされ数日で廃墟にされてしまう。

人々は悲鳴を上げながら逃げるが大半を殺され、今では街中に死体が大量に転がっている。テツ達が通っていた学園も瓦礫の山に変えられベルカ全体の面影は消え、敗戦国の末路を辿っていった。

王ルーフアスも行方が知れず生きてるかどうか怪しい中で一人の男が立ち上がる。生き残った騎士を集め再び反撃の機会を信じる男はヘクター。二度もベルカを滅ぼした魔王への怒りは敗北如きでは収まらずベルカ兵の希望となる。

「……………」

「ここにいたかフェル。もう行ってくてよ」

瓦礫に腰を下ろし学園の跡地を見つめ物思いにふけてるフェルはエリオに声に反応する。

「死体の撤去ももうすぐ終わるそうだ」



「そうですか、エリオ貴方には感謝してます。あのままでは私は何も出来ず殺されていたでしょう」

「そうか！　　ままあ俺もやる時はやるんだぜ！！」

銀髪を靡かせながら廃墟になった風景が重なり寂しそうな背中に見えてしまう。エリオはフェルが声を出さずに泣いているように見えて少しづつ後ろから近づいていく。

「俺でよかつたらいつでも力なるぜ」

肩を抱き寄せて少し強引に抱きついたエリオは心臓が破裂しそうなくらいに膨れ上がるが、恋心と好奇心で感情があまり表に出ないフェルに勝負をかける。

「エリオ。貴方は確かに優秀ですが時折意味不明なスキンシップがありますね」

「え……あぁ」

抱きついて甘い台詞を囁いてもフェルは変わらず無表情のまま遠くを見ている。抱きついてるのに悲しくなり離れてると男が鎧をガチャガチャ鳴らし近づいてきた。

「おい速く支度しろ、ささっといくぞ」

「あ、ヘクターのおっさん」

「エリオ、お前は凄い奴だな。ベルカで超偉い俺をおっさんと呼ぶとはわな〜」

片目の古傷を歪ませエリオを引きずりながらキャンプに戻っていく。敗戦の騎士達の士気は下がり見ているだけで気が落ちてくるエリオは馬車の二台に荷物を載せていく。

「おいフェルもここに乘れよ」

「なんでですか」

「いやお前小さいから荷物と変わらないし、少し狭いけど馬の上ほど揺れないし」

ジト〜とフェルには珍しい表情で睨まれたエリオは悪い気がしない。いつも無表情だがけなされたり馬鹿にされると可愛い顔を見せるのでエリオは生き抜き程度にやる。

「そんな怒るなよ。あー！もしかして小さい事気にしてるとか可愛い所あるの」

「うるさいです。そんな外見的特徴を気にするほど私の器は小さくありません」

「ふん」

二人は二台に乗り足をブラブラさせながら灰色の空を見つめ溜息が止まらない。いくら騎士達を寄せ集めたとしても今の魔王に対しては無力もい所。せつかく騎士団に入りエリートコース入りしたエリオにしたらやってられない。

「皆どーしてるかなあ」

「テツさんはともかく二ノはくたばってるんじゃないでしょうか」

「丁寧言葉で酷い事言つなよ。ああ〜これからどうすっかなあ〜」

いつそ落ち目の騎士団を抜けて傭兵への転職で稼ぐ……そんな考えを頭で巡らせながらフェルの美しい横顔を見ると変わらない気持ち

だけある。

「一緒にいてえな」

最強の種族の末裔フェルと新人騎士のエリオの未来は暗闇。敗戦国が無駄あがきしている姿は傭兵の笑い話され屈辱を被りながらヘクターは戦い続けていく。

少数の騎士団が逆転の手は少ない。正面からいけば数の暴力の押しつぶされてしまう、ならば奇襲しかない。騎士を志してた者がやる事ではないがそんな事を言っている場合ではない。

ヘクターが提案した作戦は単純だった。魔王の支配された街や国を一つ一つ取り戻していこう。何十年かかるのが少しづつ領土を取り戻せば必ず勝機は出る、途方もない作戦だがそれしか打つ手はなし。

「にはははは！！　タダで食べる飯ほど美味しいもんはねえ！！」

「この服臭いです」

フェルとエリオはある酒場でヘクターから渡された金で好き放題飲み食い……豪遊していた。回りは騎士を倒し敵なしになった傭兵達が騒いでいる。アルコールの入ったジョッキを勢いよくぶつけ飲み比べしている傭兵達の顔は勝利の優越感が出ていた。

二人は傭兵達に合わせ緑色に変色したシャツと薄汚れ裾の部分が干切れてるズボンと変装していた。フェルは頭にバンダナまで巻き額どころか目も隠れつつある。

「お、そうだ武器は届いたのか？」

「はいいいえ」

腰の備えてる剣を見せると刀身の何箇所かに接続部分があり、かつて魔王に破壊された蛇腹剣は復活していた。エリオはフェルと共に注文した自慢の槍を眺め作り手に感謝する。

「あの爺さん最初は怪しかったが腕は確かだな。テツの名前出した急に態度変えやがって」

「このバンダナサイズが大きすぎます」

まだ慣れないバンダナをいじり何度も付け直すフェルが可愛らしく見えエリオが肘をつき眺めると一人の傭兵が近づいてくる。フェルを背後から抱きしめると酒臭い息を吐きながら顔を頬に擦っている。

「よぉ～お前ら若いなぁ～駆け出しの傭兵か？　しかし可愛い娘だな。どうだい俺と遊ばないかヒヤハハハ！！」

「おいてめえ」

即座にエリオが反応し槍を突き出すと男はいなかった。フェルの背

後から消え大きく天井に頭から突き刺さっている。下から拳を大きく上げた状態のままの決めポーズするがバンダナがズレて視界が塞がりあたふたする様子。

「ああもう!!」

「相変わらずの怪力……しかしこんな事したら」

他の傭兵が黙っていないだろうと振り向くと一瞬静止したように止まった後に傭兵達は笑い出した。天井に突き刺さった男を指さして笑い再び飲み続けていく。

「やるな嬢ちゃん!!」

今度は勢いよく肩を叩きながらフェルと同じくバンダナを巻いた女性がかかる。胸部分は布を巻いただけとヘソ丸出しと露出が激しい姿にエリオが視線を反らす。

「貴方は」

「あたいはこのマスターさ!! 今の技なんだ? 二つ下から巻きこむような」

「アップパーカットです」

フェルの怪力が気に入ったのかサービスといい大ジヨッキをテーブルに置き座る。腰には二本の手斧があり傭兵ばかりくる店の店主らしい武装だった。

「マスター質問があります！！」

「あら可愛い眼鏡の坊やだね、娼婦が好みそうなタイプだね」

「マジツすか！！　じゃなくて、今この街を支配してる奴誰っすか？」

一度考えたふりをしたがすぐに酒を飲みだし笑い出す。

「ナハハハ！！　知らないねえ、なんせ支配したばかりだから我先にと傭兵達が争ってるからね」

「なんかベルカに勝っても纏まりがない連中ですね」

「そりゃそつだよ、それにベルカだって昔は奴隷制度とかいろいろ



してたしねえ。結局世界を支配するのは正義だの平和だの綺麗事じゃなく力って事が魔王様が証明したのさ」

それだけ聞くとフェルは席を立ち酒場を出て行く。エリオもポケットから勘定を出すとマスターは笑顔で手を振っていた。

外に出ると浮浪者が道の端に寝ころがり、傭兵達が武器片手に自慢や喧嘩すると治安は最悪。フェルは何度巻いても合わないバンドナにイライラしながら大きく深呼吸する。

「やっぱりあそこいくしかないですね」

「ああ絶対強い奴いるよなあ。行きたくねえ」

街より少し離れた場所に城壁を崩され国旗を燃やされた城がかろうじて建っていた。近づくとたびに強面の傭兵達の数は増え睨みつけてくる。腕を組みながら顔だけ近づけてくる者。武器をちらつかけて二ヤけてくる者と異常者の巣窟に二人は足を進めていく。

瓦礫になり城門の役目を果たしてない門を潜り抜けると傭兵達の数は増え、街中にいた奴らよりも明らかに雰囲気違う。元は城へと続く庭だった場所は傭兵達に荒され廃墟に変えられていた。

街で見た傭兵達とはまず匂いが違う。悪臭やアルコールではなく血の匂いが体に纏わりついている。表情もどこかを見てるようでも何にも関心を持ってない……そんな顔をしていた。

「おかしいですね。こいつら私達が来ても見向きもしないなんて」

「皆どこかに逝ってるぜ！！　まだ威嚇された方がいい、怖すぎるだろ」

ビクビクと怯えながらフェルの後に続くエリオに対しフェルは堂々と目の前の扉を開けると何本もの柱が倒れ埃臭い空間に出る。元は城の顔とも言えるホールだったのか広い。

「なんだこりゃ」

エリオが驚いたのは破壊つくされたホールではなく、そこに寝っ転がっている傭兵達。小さな瓦礫を大事そうに抱え喜ぶ者。何も無い空間に向かいブツブツ喋る者。

「エリオいきますよ。簡単に進入でき敵は無警戒、これを逃すわけにはいきません」

まだ辛うじて上階に続く階段があり、一步上がるたびに崩壊への音を鳴らす。二人はなんとか辿りつく。二階三階は崩壊が酷くほぼ全ての部屋は潰れ最上階へと行く。

「気になってたんですが、城に入った時から何か匂いませんか」

「へ？ 確かに〜なんて言えばいいか〜独特な匂いだな」

シャツに汗が染み込み、それが時間かけて乾いたような匂いを連想させたフェルは進む。最上階は王室へと繋がる一本道だが瓦礫が邪魔で慎重に進んでいき最後の扉を開ける。

「グッ！！ なんだこりゃ！！」

王室に入った瞬間に強烈な匂いが鼻を刺激し顔を歪めてしまう。王室には十人の傭兵が雑談を楽しんでいたが、どこかおかしい。笑っているが目には殺意や苛立ちが目立ち、時折手に持つ葉っぱをかじっていた。

「ゲマル葉……ですか？」

匂いを我慢しながら目を凝らしフェルは昔読んだ教本の記憶を引き出す。ゲマル葉 独特の味と匂いで食している人間に幻想を見せたり、急に苛立ち怒りだす副作用が発見されている。中毒性は一級品で一度ハマれば抜け出す事は不可能とまで言われた悪魔のような葉。

「おい!?!」

エリオが声を張り上げると座っていた傭兵の一人が顔を上げヘラヘラと笑い出す。手に持っているゲマル葉を差し出し挑発するように。

627

「なんだ新入りかあ〜お前も葉っぱ欲しいのか？ なら金をだな」

「この街を支配したがってる奴は誰だ？」

「へへ……ハハツハハ!! 坊主面白い事言うな〜なんだてめえもこのボスでも狙ってるのかあ」

どこかチャカされてるような口調に勘に触りエリオが一步前に入る。

「いいから答えるよおっさん」

「面白いガキだな。まあ俺が一番の有力候補じゃねえかなあ」

王室にいる傭兵達に首を傾げると皆おなじくへらへら笑いながら答える。腰に下げた袋からゲマル葉を取り出しかじりながらエリオに指を指す。

「わかったかい坊主」

「ああわかった。とりあえず後ろ見てみな」

王室の崩れた壁の隙間から街が見下ろす事が出て傭兵は言われた通りに見ると笑いが急に止まる。街の中央から煙が上がり微かに声が聞こえてくる。雄雄しい戦う傭兵達の声だ。

「俺達ベルカは死んじやいねえ」

たった一言で傭兵は目の前の成人してない子供の正体がわかり剣を抜く。それを合図に回りも殺気立ち二人を囲むようにジワジワ広がっていく。

「驚いたな。まさかベルカの騎士がまだ残っていたとは……坊主。  
あの煙はなんだ」

「決まってるだろ。お前ら傭兵達を皆殺しにしてんだよ。手始めに  
まずこの街を頂く」

「今更魔王に逆らう気が、傭兵にでもなればいいものを」

少し黙っていたフェルが溜息をつきエリオの前に出る。

「まったくです。昨日まで騎士はこれから未来がないだの、将来が  
不安だのと弱音を吐いてた輩が急に偉そうな事を言うなんて」

「いいいいじゃねえか！！俺だって言う時は言うんだよ！！」

「なら言葉だけではなく腕も見せてくださいエリオ」

二人は武器を抜き十人はいるであろう傭兵達と戦う。数では不利は  
圧倒的だが、ベルカが陥落して数々の実戦を積んできた二人には迷  
いがなくなりただ目の前の敵を殺すだけ、そんな考えしかなかった。

エリオは大きく肩を上げ深呼吸するが息は整わず、目前に迫る傭兵達を見ると焦りで体の動きが鈍くなる。手に持つ槍は確かに強い……その攻撃範囲から剣相手に有利に戦えるが、それは相手が一人の状況。

複数相手には小回りが効かない長物は囲まれやすく不利。父親からの教えを思い出す。しかしこれまでの戦いは切り抜けられた……それは仲間がいたから、相手より多い人数だったから。

「 どうしよ」

こちらは二人。相手は十人。もう武器がどーのこーの考えるのをそこでエリオはやめた。数の不利はそのまま勝敗へと大きく影響してしまう、構えを突き出すよう形から変え、振り回すように大きく横に構えフェルの横顔を覗く。

「 地べたに這いつくばってください」

「 へ、なにを」

腕を引つ張られると勢いよく地面に転がり背中を踏まれてしまう。見上げればフェルが蛇腹剣を振り回していた。好きな女の子に踏ま

れていると特殊な状況で混乱していくが傭兵達の悲鳴で目が覚める。

「ギャー！！ え……………あああああ」

一人の傭兵の喉から血が吹き出しヨロヨロと仲間助けを求めようと歩き出したのが始まりで、次々にフェルを中心に困っていた傭兵達が切り刻まれていく。

「しかし、えぐい攻撃だな」

見ているエリオが表情をしかめるほどに残酷に切り裂く。刀身の何箇所にも分かれた間接箇所が外れ、細かく分かれた刃は宙を走り回り容赦なく傭兵に喰らいついていく。

室内の隅々まで暴れまわる刃は風となり、突風となり、嵐となり傭兵達を巻き込みフェルに近づく前に体の一部を切り落とされていく。最後の一人になるまでフェルは調教師のように蛇腹剣を鞭のように振り回し一方的に攻撃し続けた。最後の一人は体中を傷だらけにし、血を垂らしながら近づいてきた。

「おい！！ もういいだろ！！ 足どけろよ」

「あ、すいません」



「たくつ俺の華麗な槍捌きを見せられなかったじゃねえか」

強がりながらも内心ホツとしていると最後の一人の傭兵が口を開く。

「お前ら頭おかしいんじゃないかねえのか。魔王に本気で勝てるんでも思  
つてんのかよ」

「ゲマル葉で頭おかしくしてる貴方に言われたくありませんね」

「へへ……馬鹿が。今更どうあがこうが……滅んだ……ベル力なぞ  
に……」

言葉を繋げるように言いながら最後の一人は自分の血で出来た水たまりで倒れ動かなくなる。結局何もしてないエリオは不満げに腕を組むが、血で汚れた剣を持っていても美しさが増して見えるフェルに視線を奪われた。

「エリオ。貴方はどうします」

「え、なんの事」

「正直ベルカに勝ち目は薄いです。このままいけば死にますよ」

大きく溜息をつきながら肩を落としエリオは出口に向かう。

「今更それ聞くかねえ、俺はお前に付き合っつて決めたんだよフェル」

そんな台詞を言った後に少し臭いと気付き赤面しつつも隠すように足を速めると隣にフェルも並ぶ。

「……………ッ本当救いようのない馬鹿ですね」

銀髪から除かせる横顔が耳まで赤くなっていた事に気づく頃にはフェルはエリオを追い抜き先に進んでいた。その日エリオは悶々としながら中々寝付けず、勝利の余韻よりもフェルの横顔しか頭になかった。

#### 四

薄暗く辺りに白い霧がカーテンのように張っている朝。傭兵達を言葉通りに皆殺しにした後騎士達は立ち去り、残ったのは大量の死体、それが魔王への反逆の証とするように。

「今日こそ勝つ」

「ふん。お前フェルに惚れてるそうじゃねえか」

「ただだ誰に聞いた！！ そんなんじゃねえからな！！」

霧の中で二つの影が対峙し霜がついてる植物や草を踏み付ける音を鳴らしながら接近していく。一つの影はベルカ騎士団を復活させたヘクター。もう片方は最強の種族に恋をしてみたエリオ。

青のタンクトップと動きやすい大きめのズボンと互いの装備の違いは槍と剣。朝は冷え唇を震わしながらヘクターが煽っていく。

「しかし竜と知ってまでも追いかける根性は尊敬するぞ」

「うつつづるせえー！！」

これで何回目だろうか。こうして最強に挑むのは……ヘクターはまさに最強と言っても過言ではない人物、本来ならばエリオのような人物は近づけるはずもない。しかしベル力崩壊という事件をきっかけに目の前にいる。

自作で作った訓練用の槍を握り締めて震える。これほどの練習相手に巡り合えた幸運に。白い息が凍ってしまうような寒さを感じながら進む。

「これで何回目だ？ よく何度もぶつ倒されながら挑んでくるなエリオ」

「七回目だ！！ 今日こそ余裕ぶつた顔に叩き込む！！」

間接をゴムのように延ばし大きく一步を踏むと同時に 突く。体重を半分以上乗せた一突きはヘクターの体中心に向かう。槍のリーチを最大限に生かしたが空しくも叩き落とされる。

ヘクターの持つ物も同様の訓練用の木刀。乾いた木製の音が響くと同時にエリオは弾かれた槍を振り回す。突きではなく横からの薙ぎ払いで強烈な一撃を繰り出す。それも軽々と防御されてしまう。

「まだまだ！！」

剣の間合いの外からの一方的な攻撃。突きを主体に振り回したりと、的を絞らせないようにバリエーションを増やしエリオの猛攻は続く。しかしヘクターの剣の防御を鉄壁……うるさい蠅を落とすかのように一撃一撃を弾き、ただの一度さえも攻撃を通さない。

「そんなにあの小娘がいいか。いいのか？ 人間じゃないんだぞ」

「俺は馬鹿だからな！！ そんな細かい事気にするかよ！！」

霧を振り払うかのように槍を振り回しヘクターの確信をついた言葉に苛立つ。

「たかが惚れた女のためにベルカにつき戦うか」

「おっさんには理解できねえんだよ。初恋ってのはこう………すげえ事なんだよ！！」

「ならその凄い力見せてみる」

防御に回っていたヘクターの動きが一変する。突きを勢いよく上に弾き上げると懐に飛び込む。一瞬の隙をつかれたエリオは槍と共に両腕は上がりきっていた。腹を打ち砕くようにヘクターは横からの

一撃を払う。

「ようやく攻めてきたなおっさん!!」

足首を回し、膝を回し、腰を回し、最後に体全体を回しエリオはコマのように回転しヘクターの背後をとる。だがまだ回転を止めない。遠心力の力を逃がさないように槍をそのまま振り回し、人生初となるヘクターへの一撃を脇腹に叩き込む。

「ぬぐ!!」

体そのものを払われたヘクターは転がり無残にもエリオの前で背中を地面につけてしまう。

「やった　へへ、やったぞ!!」

「やって……くれたなあ」

脇腹を抑えながら立ち上がるヘクターの目に入ったのはまさに子供が素直に喜ぶ姿だった。拳を振り上げ叫ぶ散らす姿を見ていると怒りはどこかに消え呆れてしまう。

「今の返しの動きはなんだエリオ教える」

目の前にあった腹が光速で回転し横へと残像を残し消えていく光景は初めての経験でヘクターは完全に棒立ちになっていた。次にきたのは背後からの痛みとわけがわからずエリオに掴みかかる。

「へ？ ああ〜テツって奴から教えてもらったんだ。なんかわけのわからない動きする奴でさあ」

「…もういい。今日はお前の初勝利に免じてこのまま勝ち逃げを許す」

テツという名を聞いて不思議と納得してしまう。たった一度しか戦った事がないが、確かに不可思議な動きで惑わしてきた。懐かしい名だと口元を緩めると少し離れた場所から声が聞こえてくる。

「いえ〜い！！ 勝った勝った！！ ベルカ最強に勝った〜たいした事ないぜ〜フツハハハハ」

「いや、やっぱり待てエリオ続きだ」

古傷の片目にある大きな傷を歪ませ、どこかにいつていた怒りと悔しさが込み上げてきてベルカ最強の威厳を取り戻す戦いは始まる。

朝早くに叩き起こされ何度も挑んできたエリオの成長が嬉しい反面、調子づく若造に鉄槌を叩き込むべく戦う。そんなエリオとの戦いの中ふと思いつく。

「あのテツとかいう男。今はどこで何をしてるのやら」



## 五

エリオは飢えていた。二日水を飲まず我慢してるように心の底から欲しい物がある。今の自分を変えるために、それを手に入れるために幾多の戦場を渡り歩き、数え切れないほどの命をその槍で貫いてきた。

相手の喉、腹、顔を貫き自身の手を鮮血の染め上げ欲しい物に近づく。形ある物ではないが確かに存在はする絶対的な物……強さだ。何者が前に立とうと叩き伏せるような強さが欲しい。

「今夜も来ませ」

フェルにはもちろん、ヘクターにまで秘密にしている場所へ降り立つ。天井からは眩しいライトに円形に囲まれたコロシラムの中は賭け事に興奮している観客の声で揺れているようだった。

ベルカ崩壊後に待っていたのは人の強欲が溢れ出す様な戦争。その戦いで名を上げたいと思う野蛮な連中は人の数ほどいるのではないかと思うくらい多い。血の気の多い連中が腕試しの場所を求めて集まる場所に今夜もエリオは立つ。

「待つてたぞ糞餓鬼!!」

「今夜はお前に賭けたんだ!!」

「そんな子供やっちまえ!!」

エリオの名はコロシムでは有名になっていた。新人として表れ連戦連勝。観客たちは驚き、そして歓喜した。普段はベテラン連中が無難に勝つ展開が多いため新鮮で興奮する。

なぜ勝てるか？ そう考えると自然に答えは出る。エリオは毎日ヘクターとの勝負を繰り返しながら戦場で実戦を詰んできている。強くないわけではない。

「ふう〜」

深呼吸し槍の矛先を反対側の出口に向けるとうつすら影が見える。体格はエリオと同じくらいだがシルエットは大きい。やがて姿を現すと中年男性が笑っていた。肩に担ぐのは巨大な丸太。

装備は古臭い。ベルカ騎士団装備の白銀の鎧のエリオと並ぶと薄汚れた鎧が際立ってしまう。重量感溢れる音を立てて丸太を落とすと中年男性はマジマジとエリオを見る。

「確かに若いな。小僧お前ここ何回目だ」

「数えてないが〜十回目ぐらいかな」

「そりゃ期待の新人だわな。ここのルーラーなら尚更だ」

男は両手で丸太を持ち上げ大きく横に構えるとそれが開始の合図となる。審判はいなく、勝敗を決めるのは対戦者しかない。第三者介入を許さない完全決着という単純な規則。

「殺されても文句は言わない。だろおっさん」

「おうよ！！ まあ命乞いするなら助けてやるぞ」

エリオは思考をフル回転して戦術を組み立てていく。リーチは若干丸太の方が長いが、あんな重い物を振り回す分小回りが槍にある。一番やってはいけない事は攻撃を受ける事……一撃でも食らえば鎧ごと粉碎されそうなくらいに太く大きい。

「なんだい様子見かい？ 若いんだから勢い見せてくれよ」

短く切りそろえた短髪を撫でながら男は笑う。観客も動かない二人にブーイングを上げるがエリオの耳には届かない。やれやれと男は呟くと丸太を抱え走り出す。

「おおおおりゃあああ」

豪快に丸太を振り回すがエリオは避けていく。隙をついて反撃に出

たいが予想より遙かに速い回転率に下がるしかない。まるで暴風。近づく物全て叩き壊すような力任せな戦法にエリオは舌打ちを鳴らす。

「力任せな戦い方だと笑いたいか!!」

「よく喋るおっさんだな!!」

矛先に仕掛けられた電流がある限り一撃相手に入れれば勝てる。人を殺すには十分な電流があるはずだが、間合いに入れない。力任せと言いながら連携は組み立てられ、隙を突くのは容易ではない。

「くっ」

逃げて逃げ回るエリオを捕らえるように壁に背を預けてしまふ。追いつめられた事を知った観客は雄叫びを上げエリオの死を後押しするよう響き渡る。

横からくる風が破裂するような音を聞きながら予想する。このままでは自分の体は粉々にされ血と骨が散乱する未来が……

## 六

受ければ砕け、避けようにも左右逃げ場なし。一瞬で体に流れる血が氷のように冷たくなり、先ほどまで体中に浮かべてた汗は引いていく……逃げ場などない。ならば作るしかない。

そのヒントをくれたのが天井のライトだった。考えるよりも生存本能で動き地面に槍を突き刺し飛び上がる。体を持ち上げるように空へ駆け上がりエリオは重力に逆らい続けた。

「だらあああああ!!」

男が丸太を振りぬくと突き刺さったままの槍を勢いより弾き飛ばすがエリオの姿は消えていた。地面に光速で回転する影が映り顔を上げてると槍と共に回転するエリオが落下してくる。

「グッ!!」

迎撃は不可能。頭上より落ちてくる物に対し防御しか出来ない事はわかっている男は巨大な丸太を盾に変えていく。

「その首貰ったあ!!」

回転しながら空中から落下し吼えるエリオの一撃は見事に丸太に突き刺さる。切っ先が深く刺さると木製の丸太に亀裂が入りやがて砕けていく。雷に落とされた樹木の如く粉碎していく光景はエリオに勝負の時を告げる。

「グハハ！　やるじゃねえか小僧！！」

粉々に粉碎する木片の中から二つの光が一瞬差し込むが、仕留めの一撃を止める理由はなくエリオの矛先は加速していく……金属が響くと男は豪快に笑いながら丸太の中から取り出した双剣を握っていた。

「驚いたか小僧！！　隠し武器だあ」

まるで子供。してやったりと笑う男は子供のように笑い観客に向けて双剣を振り回し盛り上げていく。

「丸太の中に剣。おっさんなんだそりゃ」

「面白いだろう。元々力任せで戦うが、剣にも少々自信があったな。双剣のゾディアン、昔の通り名だ」

名乗り上げたゾディアンが持つ双剣は炎と水を纏い勢いよく音を鳴

らしている。水の方は刃を囲み切れ味が何倍にも膨れ上がっている。炎の方は刀身が見えないほどに燃え上がり、その派手さに観客は魅了された。

「俺達みたいな糞つたれは戦いこそ人生。戦わなきゃ死んだも同じだ」

「いきなり何格好つけんだおっさん？」

「すまんなあ、お前みたいな若いのを見ると刺激されて胸が高鳴っちゃうんだ！」

ゾディアンは槍に対しなんの迷いもなく走りだし真つ向から小細工なし。当然エリオは迎撃のために構え間合いに入った瞬間に突き殺す準備を整えるがゾディアンの動きに眉を上げる。

遙か遠い間合いで剣を振り上げている。剣どころか槍すら届かない間合いでゾディアンは雄叫びを上げて勢いよく剣を振り下ろしていくと 大気が焦げていく。

「ッ！！」

エリオは声を失う。目の前が突然赤と白に染まり炎の壁が迫ってきた。気付けば地面は黒く焦げ上がりエリオの横を通過していた。何

かが通った痕跡だけを残すが正体はすぐわかる。ゾディアンの炎の剣がまるで爆発したかのように膨れ上がっていた。

「驚いたか？ 射程範囲は十メートルくらいだな。槍の間合いよりも広いぞ」

爆破するように炎が襲い掛かってくる魔法。エリオが初めてみる魔法だった。地面はまだ熱が冷めず地面から煙を上げ、煙の中で双剣を握るゾディアンは笑う。



## 七

「ハアハア　ふう〜」

乱れた息を整え炎で焼かれる寸前になった体の感覚がようやく戻る。まるで炎の津波に押しつぶされるように見え、痛みや汗を忘れ固まっていた。忘れていた手足の感覚を取り戻し槍を握りなおし息を吐く。

「落ちて着け。あんな大技何回も使えるわけがねえ！！　それに隙も大きいはずだ〜」

ゾディアンが煙を邪魔そうに剣を振りぬくと煙は消え、変わりに刀身を隠すように燃え盛る炎が現れる。その大きさは剣ではなく巨大なハンマーのように見えエリオは生唾を飲み込む。

「槍使いが間合いの広さで負けてるとは珍しいな」

わざと肩をすくめ観客を煽り、場の雰囲気さえも味方につけエリオにプレッシャーを押し付けていく。

「動け！〜」

走り出す。ゾディアンを中心に回るように走り出す。その行動に観客が笑い出す。エリオは気にもせず走り続けていく。

「考えたな小僧。俺に無駄撃ちさせる魂胆か？ 確かにそう動かれちゃ簡単には当てられないだろうな」

ゾディアンの視界の外に逃げるようにエリオは走り続け、体力を大幅に犠牲にし、ついに背後をとる。狙うは一点特化の突き……ゾディアンが振り返って剣を振りぬく前に必ず矛先は届く。そう信じていた矢先にもう一つの存在に気付く。

「策はよかったが、もう少し回りをよく見るんだな」

炎と対照的に静かに刀身から水滴を滴らせてる剣があった。いつの間にか逆手に持ち替えゾディアンは振り返ると同時に軽く振る。まだエリオの矛が届く前だがそれで十分。剣は届かなくていい。

「カツ!!」

足が止まる。エリオは何かを前から叩きつけられたように勢いあった足が止まってしまふ。痛みがようやく体に伝え、痛みの先を見ると自分の腹が大きく凹んでいた。呼吸が止まり酸素を失い、曇った

眼鏡で見た光景はゾイアンが水の剣を振りぬく姿。

「ひゃ……ぎゃー！」

剣の先から飛ばされた水滴は弾丸のように飛び出し硬い。エリオの体を貫通まではしないものの骨が軋む音を聞かせていく。即座に動くが無数の弾丸は逃がしてはくれない。横に走り出すエリオの脇腹、太ももに食らいつき動きを封じる。

「こんな 魔法」

エリオの大きな間違い。水の剣だからとって行って、かつてテツが使っていた切れ味を重視する魔法だと思い込んでいた。現実には水を弾丸に変える中距離魔法。そんな間違いに気付いた頃にはエリオの顔は水滴の直撃を受け形を変えていく。

「ガッ！！ カハ」

頬は大きく晴れ上がり片目を下から持ち上がる形になり醜い顔が出来る。倒れ地面を砂を巻くように転がり壁まで行ってしまふ。槍を杖変わりに立ち上がるうとするが足どころか腕にすら力が入らなく動けない。

「ハアハア……よく出来た戦術だ。炎の大技の弱点を水の小技で補うとはな〜二刀流の利点を生かしてる　はあ」

目の前で巨大な炎を振りかざすゾディアンに諦めたように笑いかけ背中を壁に預ける。戦っていればいつかくるであろう瞬間がきた。むせ返るような熱気の中で歴戦の傭兵との戦い……それが自分の最後の戦い。そして殺される。

「フェル」

最後に少し強がりです時折見せる照れたような顔をするフェルの名前を言い残しエリオの意識は消えていく。

痛みで意識が覚醒すると視界より先に嗅覚が刺激される。錆びた鉄と血の匂いが鼻につき目蓋を開けると染みだらけの天井が見えた。木製だが所々錆びた鉄でつぎはぎされ、ろくな所じゃないとエリオは言葉を出す前に溜息を漏らす。

「おー！ 起きたか悪餓鬼」

薄汚いベッドから体を起こすと体中に痛みが伝わる。周辺には同じようなベッドが数個並べられ壁も天井と同じ。つぎはぎの鉄には血痕で作られた手形や黒い染みだらけ、天井から吊るされた小さな蠟燭の明かりで正面の人物がわかる。

「……ッ！ このルールじゃ負けたら死じゃなかったのかよゾ  
ディアン」

「感謝しろよな！！ 俺が助けるって言わなきゃ死んでたんだぞ」

体を引きずるようにベッドから下り床に胡坐をかき頭を垂れてしまふ。完璧な敗北だった……ただの一撃も与えられず一方的な敗北。加えて情けで生かされてしまった現実。

「お前ベルカ騎士団だろ」

その言葉に飛び上がりそうな体を押さえつけるように平然を装い顔を上げる。こんな所でバレたら何をどうしようが殺されてしまう。魔王につく者が多い場所では死を意味する。

「そんな怯えるなよ。お前の装備を見れば大体わかってな、寝てる間にいろいろ調べさせてもらった」

「それを知ってどうするつもりだ」

部屋を見渡すと隅に装備一式が置かれ今いる場所から何歩で届くか想定する。しかし目の前のゾディアンを素手でどうにかしなければと考えた時にテツを思い出し笑ってしまう。テツが教えてくれた技術が命を救うかとも思うと笑えてきてしまう。

「そう警戒するなよ。殺すつもりならもうやってるさ、んな事より小僧」

坊主の頭をシャリシャリとかきながら顔を近づけ息を吐きかけてくる。

「お前強いな、しかも才能がある。どうだ!! このコロシアムで

世界一目指してみないか」

「はあ？」

「コロシウムは今や全世界に広がって毎日荒くれ物共が誰が一番強いか決めてる。しかしな強い奴が勝てばその分そこそこ強い奴は問答無用で殺されるわけよ」

拳を振り上げ雄弁に語るゾディアンにエリオは首を傾げてしまう。

「コロシウム側から育成養成が出たわけよ。今のままじゃこのコロシウムを代表する強い奴が少なすぎると！！　んで強い奴を育成して」

「興味ねえ」

「最後まで聞けっつてんだ！！　こんな屑共の世界だけど頂点になれば各国からお呼びがかかったり特別待遇だぞ」

脅されると思えば傭兵崩れや腕自慢の輩で構成されてる裏の世界への誘い。重い腰を上げ装備の場所まで歩き手に取るとゾディアンの声色が変わる。重く冷たい声に向けてた背中がゾクツと震えてしま

「金、名誉。これ以外に戦う理由があるのか？ 答えてみるよ小僧」

「あんだこそ何のために俺なんかを生かして声をかけた」

「正直な。毎回命張って戦うのはキツイ！！ なら適当に声をかけ育成しコロシム側から安定した金を手に入れた方がいい！！ 以上だ！！」

あまりの正直さに装備をつけていく手がとまり背中ごしに笑ってしまふ。考え方がどこかテツに似てると思ひ振り返る。

「要するに俺を使い金稼ぎをしたいわけだな」

「おうよ！！ 取り分は相談するぜ。どうだ！！」

「悪いな。俺にも戦う理由ってのがあるんだ」

肩を掴まれ振り返ると、どこから出したのかビンを煽りながら飲みアルコール臭いゾディアンの息がかかる。



「聞かせる。未来有望な少年の大層な理由ってやつを」

「うつるせえな!! どーだっていいだろ」

「だあああれが助けてやった? ううん?」

それを言われると弱くなりエリオは小声でボソツと言ってしまつ。

「……惚れた女がいるんだ……その、守れるように強くなりたい……んだ」

「だああああはははははははははは!! なんだそりゃあ〜」

酒のせいもあるのかゾディアンは笑い転げ指まで指してきた。心の底から笑い上げられたエリオは顔を真っ赤にし肩を震わす。

「ひい〜ひひひ!! 腹いてえ!! お前面白いな、気に入った!! どうだ俺と組まないか」

「だあああああ!! わかったらうが!! その子のために魔王を倒すんだよ!!」

「ぶははははは！　今度は魔王ときたか！！　こいつは傑作だ、酒のつまみにはもってこいの話だ。詳しく聞かせる未来の世界一な少年」

命を救われた恩義と勢いで飲まされた酒でエリオはフェルに対する思いを吐き出し、ゾディアンを存分に楽しませ朝まで飲み明かす事になっていく。しかし人を殺すようになってから久々に本気で恥ずかしがり、笑う自分に気付き嫌ではない時間だった。

## 九

次の日は最悪だった。頭痛に頭を抱えながら騎士団に帰ると無言で威圧してくるヘクターが出迎え、素直に事の次第を話すと説教の始まり。無断で荒事した挙句敗者になり情けで生かされたと聞いたヘクターは怒りを通り越し呆れ果ててしまう。

長い説教が終わりキャンプに戻ると先輩から質問され続け休む間もなく出発。揺れる馬車の中で水を飲みながら大きく溜息をつき正面のイリヤをなんとなく見る。

「……」

相変わらずの無表情だが、恵まれた容姿のおかげで絵になりエリオはつついニヤニヤと口元を緩めるとイリヤの顔が不思議そうな表情になっていく。

「なんですか？　なんかこう、凄く気持ち悪い顔してますよエリオ」

好きな女の子に気持ち悪いと言われ気にしないようにするにはエリオは若すぎた。心臓に鋼鉄のナイフを刺されたように衝撃が貫き、かけていた眼鏡がずり落ちてしまう。揺れる馬車の中で動揺を悟られないようエリオは作り笑顔で誤魔化す自分が悲しかった。

「おい着いたぞ」

ヘクターの野太くよく響く声が聞こえ馬車から顔を出すと、そこは城下町だった。大通りを堂々と騎士団の一行が通ると人々は興味を示し中々活気に溢れてる街。商売も盛んであり、見た事のないような食材や骨董品と見てるだけで飽きない風景にエリオは目を輝かせた。

「すげえ！！　ヘクターの旦那なんだこじ」

「だから旦那はよせ。この国は珍しく騎士団を迎え入れるといつてきた、魔王に支配された世界ではあるがまだまだ捨てたもんじゃないなフハハハハ」

珍しく大口を開けて笑うヘクター、嬉しかった。今まで拠点なしの根無し草のような旅ではあったがようやく味方が現れた事にヘクターは喜びを隠せない。騎士達もようやく休めると安堵の息を漏らし招かれた城の門を潜る。

「こちらへどうぞ」

一人の老執事が馬車を降りた一行を城内に案内し食堂へ通す。縦長のテーブルが何個もあり騎士団全てが座っても席は余る。食欲をそそる匂いが部屋に入ってくると同時に肉が多めの食事がテーブルに

並べられ生唾を飲む音が響く。

「皆さん長旅ご苦労様です。私がこの国を治めるバルボツサです」

揉み上げ部分から顎のラインに立派な白髭を生やす老人は両手を広げ食堂に現れると、ヘクターは席を立ち一例で感謝を伝える。

「この度は我らが宿敵魔王への復讐を知りながら受け入れ感謝します」

「そう硬くならないでください。いやいや！！　まずは腹を満たしてください」

バルボツサは意外にもフランクな雰囲気で騎士団に並べられた料理を進めると我慢しきれなくなった一人がかぶりつくと連鎖的に皆が勢いよく食らいついていく。お世辞にも上品とは言えない食べっぷりにヘクターは眉を吊り上げていく。

「しかしこの時代に魔王に挑むとはなんとも豪気ですな」

王であるバルボツサ自身の豪快に肉にかぶりつくとヘクターも口に運ぶ。

「どの国も魔王と名前を出しただけで怯えるばかりです。相談があるのですが、我らの拠点をここで構えてもよろしいでしょうか」

いつものヘクターは威圧的だが、さすがに今回は礼儀正しく交渉を進めていく。拠点をもらう変わりに差し出す物を考えているとバルボッサは肉汁を飛ばしながら笑い飛ばす。

「結構結構！！ 城の外に空いた平地があるので好きに使って構いませんぞ。私も昔は戦場を駆けいく事に夢見ましたが王族という立場が邪魔しましてね。老い先短い今になって燃えてまいりましたぞ」

「感謝いたします王よ。しかし私が言うのもなんですが国民は納得するのでしょうか」

「こう見えて私は国民に人気ありましてね。まあなんとかしますので安心してください」

その言葉を聞くと本当に意味でヘクターは安心した。拠点さえあれば補給や兵を増強しても問題ない。今まで抱えてた問題が一気に解決し大きく息を吐くと隣がうるさい。

「うおー！！ うめえー！！ おいフェルこの肉やべえぞ」

「これは美味ですね。エリオその肉ください」

「お前間接キスいいのか！！ いや俺は別に照れてるわけじゃねえからな！！」

かりにも王の近くで食事する物が肉を取り合い、しまいには騒ぎだす始末にヘクターは怒りの鉄拳を二人に叩きこみ黙らせる。皆が食事を済ませ腹をさすり満足の顔をしているとバルボツサが立ち上がる。

「勇敢な戦士諸君！！ 私は一度滅ぼされたベルカ騎士団がよもやここまでの進撃してくるとは思わなかった！！」

両手を広げ声高らかに食堂に響かせバルボツサは吼えていく。

「自国の復讐を遂げるまで突き進む君達は美しい！！ 年甲斐もなく胸躍った！！ そんな諸君に感謝の意味を込めて一言だけ言おう」

騎士達も褒め称えられ誇らしい気分浸っていく。ベルカ崩壊後に待っていたのは非難の声。認められる事がない毎日を送ってきた騎士にはバルボツサの言葉を骨まで染みるようだった。

「お前ら馬鹿だろ」

口調は変わり笑顔が消えてなくなったバルボッサから出た言葉は氷の刃のように冷たい。



称えるような笑みは顔から落ちるようになくなり、冷徹で死んだ魚のような目でバルボツサは騎士達を見下ろす。大袈裟に広げてた手も腰に手を当て溜息をわざとらしく漏らし場の空気を変えていく。

「お前らが誇っている正義なんて民にはいい迷惑だよ。わからんかな」

バルボツサの言葉に騎士達から動揺の声が漏れるが正面に座るヘクターだけは表情動かさず聞く。

「ベルカが栄えた時代、各地で反乱を起こそうと盗賊共が村を襲い、女子供をさらい売るなど悪行が目立ったが今は違う。魔王という絶対の存在が悪党共を抑えつけ少なくともベルカの時代よりも平和だ」

言葉の温度は下がりバルボツサは淡々と語り続けていく。

「そんな時に滅んだベルカの生き残りが反乱を起こしてみる。再び戦いの渦が民を飲み込み今度こそ取り返しをつかない犠牲者が出るぞ」

腕を組み黙って聞いていたヘクターはようやく口を開くと声を上げ

て食堂中に笑い声を響かせた。

「ハハハハ！！ 笑わせるな王よ！！」

「なにがおかしい」

席から立つとヘクターはバルボツサに指を突きつけ滴り顔で言う。  
無礼を承知で暴言を次々に吐いていく。

「御託を並べているが、あんたは結局魔王が怖いから黙って言う事聞いておきましょう。そう言いたいんだろ」

「この狂人共め！！ 世界の平和を」

「世界の平和を言うなら魔王を倒し自らが世界を収めるくらいの気概を見せてみる！！」

ヘクターの暴言の後には決裂の沈黙が流れ、騎士達は大きな溜息と共に席を立っていく。

「この亡霊共め！！ わからぬかヘクターその歳になっても……今の魔王にどう勝てる！！」

「我らベルカは確かに滅んでいる。故に亡霊だな、だからこそ怖くない。もう死んでるんだよ俺たちは」

食堂を出ていきかけた時にヘクターの背中ごしにバルボツサは口元を歪めて騎士団を招いた本当の目的を遂行していく。

「まあ最初から話合いでわかってくれると思ってなかったが……残念だよ」

城を出て城門までもう少しの所で騎士団の足が止まる。目の前には血の匂いを全身に浴びた連中、傭兵達が大量に待ち構えていた。ヘクターが畏にかかったと気付く頃には城の中から顔を出したバルボツサの声が響く。

「さあ騎士団諸君！！　そこまで言うならば君達の力を私に見せてくれたまえ」

城門を潜り次々に傭兵は現れ騎士団を囲んでいく。これから殺しを出来ると喜びの声を上げる傭兵の中で二つの声が重なる。

「ああようやくめんどくさい話終わりかよ　たく無駄足だったな旦那」

「とりあえずこの薄汚い連中殺していいいんですね」

エリオは我先にと傭兵を貫き、フェルは蛇腹剣を伸ばし切り裂く。それが合図となり一斉に戦いは始まる。騎士団は希望を与えられ裏切られた……それでも戦う。戦うしかない。

白銀の鎧を敵の血で染め上げヘクターの復讐は振り上げた剣と共に加速していく。

## 第十一章

「はあ」

退屈を嫌味ばかりに知らせる溜息が玉座から漏れるのは何回目だろうか。研ぎ澄まされた大理石の床が輝き、幾多の戦場を渡り歩いた強者の部下を並べ、内装など見るだけで金がかかっている家具や食事がテーブルに並べられている。

まさに世界の頂点に君臨する者に相応しい光景に魔王は溜息を漏らす。片手に持っていた林檎を一口かじりすると甘く美味い何かがある。足りない。

「ああ適当に食ってていいぞ」

部下が食事をしてる姿を見下ろすと部下の変わりように気付く。以前はギラギラと眼光を輝かせていたが今では鋭さは抜け丸くなっていくのがわかる。部下を変えたのは日常……世界最強の軍団に挑む者はもういない。

毎日ただ生きてるだけで好き勝手出来てしまう日常。他の国は魔王を恐れ従うのみで反逆など起こりうるはずがない。そんな現実に魔王は退屈していた。

「最強つてのは暇なもんだな」

今も思えばベル力を二度も滅ぼした戦いの日々こそが一番楽しかった。いつ死んでもおかしくない戦場で数え切れないほどの戦いは血潮を熱くさせ心臓を躍らせてくれた。

魔王ユウヤは根っからの戦い好き。食事の時も寝る時も戦いの事ばかり考えていたが、敵がいなくなった今、自身の戦いへの欲求が薄れ始めてきた事に気付く。

戦いとは敵がいなくては始まらない……いない。単身殴りこみをかけるぐらいのぶっ飛んだ敵がいらないかと溜息をつくと一人の部下が血まみれで飛び込んでくる。

「魔王様……！」

傷は酷く腹を抑えながらよろよろと近づいてくると倒れるようにたづなずくまる。

「魔王様……二ノ様が」

「二ノがどうした」

「頑丈に閉じ込めていた牢獄から隙を見て抜けだしました……すみません」

その言葉を最後に息を失うと同時に玉座の間の扉が蹴破られ、茶色く穴だらけの布一枚だけの二ノが現れる。

「ようやく貴方の前に立つたぞ父上!!」

頬はこけ明らかにやせ細っているが鬪志は消えず、片手には倉庫に閉まっていたかつてウィルが作りだした刀が握られていた。

「確か最後に食事を与えたのは四日前だったかな娘よ。食の恨みか？」

「ベル力を滅ぼし何万ではすまぬ命を踏み潰した罪をここで償ってもらうぞ!!」

「まったくさすが我が娘だな。何度でも齒向かうその姿勢を見るだけで子を残してよかったと思うぞ」

二ノは飛び出す　食事を楽しんでいたテーブルに乗ると一気に駆け出し豪華な食事は左右に弾けるように散乱し部下達は対応が一瞬遅れる。

「貴方の今までの行いが私の迷いを消してくれる！！ なんの迷いもなく貴方を斬れるぞ！！」

テーブルの端までいくと飛び上がり玉座に座る魔王に向かい刀を叩き落とす。斬った感触に人の肉はなく鉄だけ……玉座は左右に真っ二つに割れ、その後ろから黒のロングコートを靡かせ魔王は笑う。

「やはり血だな。理由はどうあれ戦いにそこまで貪欲になれるのは俺の血が流れてるからだな」

魔王の中で血潮が熱く込み上げてくる、久々の敵が娘であれば更に燃え上がっていく。野太刀を抜くと構える前に二ノは斬り込んでくる。速さタイミング申し分ないがただ一つだけ欠けていた。一太刀を受け止めた魔王は二ノの顔に迫り言う。

「さすがに四日も飯を食わないと力不足だな二ノお」

二ノが離れようとした瞬間に手首を掴むと同時に野太刀の柄を腹に突き刺すと、二ノは疲労と空腹もあつてか意識を失い倒れてしまう。

「魔王様！！」

遅れてきた部下達が二ノに向かい剣を突き刺そうとした瞬間に魔王



は止める。

「そうだな。こいつをどこか適当な場所に放り投げてこい」

魔王は思いつく。敵がいないのなら作ってしまえばいい。素材は一級の自分の娘……いつか自分を殺しにくると思うと胸が高鳴り笑みが隠せない。部下に担がれていく二ノの顔を見ながら一言だけ親の言葉を残す。

「頑張れよ二ノ。お父さん応援してるからなあ」

「…ん」

目覚めると空から無数に落ちてくる水滴が頬に当たる。頬を撫でると泥だらけの手に気付き勢いよく起き上がるとそこは泥沼、辺り一面豪雨で緩みきった地面は泥の海のようになっていた。

「……負けたのか」

布切れ一枚で立ち上がると半分以上は破れ、裸同然の二ノは豪雨をシャワー代わりに体中の泥を洗い流していく。耳に響くのは雨が皮膚を叩きつける音だけ。濡れて垂れてくる前髪の隙間から果てしなく続く泥の海を見ながら振り返っていく……今までを。

物心ついた頃には武器を握らされ戦い方を徹底的に叩き込まれた。どう効率よく刃を敵に突き刺すか、いかに速く相手より先手をとるか、歳が十になる頃には父や母と刃剥き出しの剣で戦っていた。

「父上、母上。私は貴方達にとっては暇つぶしの玩具というわけですか」

今では親の思惑通り立派な戦士となり、魔王の遊び相手に仕立てられてた事に気付く。敗北しても殺されず、再び戦いにこいと言われ

るように捨てられてしまう。唯一残されたのは父から譲り受けた刀。

「まったくふざけた親だ……本当に腹が立つな。父上、貴方の思惑に乗ってやる！！ 望み通り再び貴方の前に立ち首元に噛みついてやる」

片手に持つ刀を握り閉めると雨の音以外の音が近づいてくる。泥を踏みつける音で振り返ると二人組の男が不思議そうに見てくる。

「ようねえちゃん、なんて格好してんだ。ズブ濡れじゃねえか」

腰には立派な剣がぶら下がり軽装だが装備も整っている。見栄えはどこかの国家に所属している戦士に見えるが空気でわかる。傭兵特有の目つき、裸の女を前にし欲望丸出しの口元。二ノはあえて近づいていく。

「見ての通り金も服もなくてな。すまないが何かをわけてくれると助かる」

「そりゃ大変だな。寒いだろこっちきな」

顎を撫でながらニヤニヤと手を伸ばし二ノに触れた瞬間に男は悲鳴を上げる暇もなく絶命した。刀を抜くと切っ先を男の喉下に突き刺

し、勢いよく引き抜くと顔から地面に倒れ泥の海が赤く染まっ  
ていく。

「てめえ何しやがる！！」

もう一人の男が腰から剣を抜いた瞬間には大きく肩から脇腹まで斜めに斬られていた。男からは二ノが消えたように見え気付けば泥の海に沈んでいた。

「ふむ、少し大きいが我慢するか」

死体から装備や服を剥ぎ取り盗賊と大差ない事をするが二ノに迷いはない。まずは最低限の金と服を手に入れる事。これさえ出来れば後はどうにでもなる。

「さて……本当に腹が空いた」

腹の虫を鳴らしながら歩き出す。泥のせいで足は倍以上に重く感じながらひたすらに歩く。何時間か歩いたわからなくなるほどに歩くと足腰は悲鳴を上げる。牢獄生活が体をなませ体力まで奪ってしまっていた。

「ハア　　ッ！！　　腹が空いたあああああああ」

空腹と疲労のイライラが爆発し雨だけを降らす憎い空に叫び散らして意味もなく全力で走る。過去を思い出しながら走り抜く。

なぜここまで強くなった。

なぜここまで殺してきた。

なぜここまで……父に勝てない。

「うわぁ」

泥の中に転がっていた石につま先をひっかけ前から再び泥の中に倒れると、薄汚い水の中で父や母、ハンクの顔が頭の中に浮かび上がる。

「やってやる……ここまで私を育てた事を後悔させてやる!!」

叫びとは逆に体中から力が抜け大の字になり空を眺めると微かな匂いがする。嗅いでるだけで食欲がそそられる匂いに二ノが体を起こすと遙か先に小さく街を発見し飛び起きる。

「飯だ。飯、飯、飯いいいいいいいい」

二ノと魔王の壮大な親子喧嘩は続く。どちらかが死ぬまで続く戦い

はまず二ノの腹が膨れる事から第二幕が上がっていく。

二ノは泣いていた。こんなにも素直に涙を落とすのは何年ぶりだろうか、込み上げてくる感情を抑えきれず嗚咽を吐きながらただ赤ん坊のように泣いてしまふ。鼻をすすり喉を鳴らし醜い泣き方だが止まってはくれない。

「ううああああああ」

ついに顔を上げ喚き散らすまでに発展してしまふ。親の前ですらこんなにも泣いた事がない。

「マスターああああ!!　ここの飯は最高だああああ!!」

四日ぶりに食べる夕食は、どこの街にでもある肉の蒸し焼きと野菜の盛り合わせ。しかし空腹が最高の調味料となり一度口に入れた瞬間涙が溢れ出た。二ノの回りは普通に食事をしている住民だったが二ノの異変に気付き席を離れていく。

「あのお嬢ちゃん、その、泣くほど食べてくれるのは嬉しいんだが……金はあるのか」

二ノのテーブルに皿が何枚も重なりっていく光景を見て店のマスター

ーが渋い声で言いくそうに聞くと二ノは懐から袋を出し笑う。

「心配するな!! ー」

袋を逆さにし出てきたのは数枚の金貨。今まで食べた量と到底見合う所か一人分ですら怪しい。

「いや待て!! なんとか金を稼いでくるから待っていてくれ!!」

「……どーやってだ。こんだけ食って金がありませんで帰れると思うのか」

店に入った時は気前よく飯を出してくれたマスターの顔は変わり二ノが固まる。稼ぐといっても出来る事は一つしかない。

「適当な賞金首捕まえるか殺すかしてくればすぐ集まる金額だ。なーに任せておけ」

自信満々に胸を叩く二ノを見るとマスターの顔が怒りから不思議な物を見るような顔に変わる。

「あ……お嬢ちゃん。親連れてこい。な? 恥ずかしいだろうが



金は金だ」

「それは無理だ。私の親は魔王だ。今は家庭の事情で会えないぞ」

マスターの額に血管が浮かび上がる。店を始めて以来ここまでふざけた客はいなく我慢の限界がきた瞬間、テーブルの上に金貨が食べた分だけ勢いよく置かれた。

「悪いなマスターこいつ俺の連れなんだ。追加で同じの頼むわ」

金を置いた中年が正面に座ると二ノは眉を上げる。どの記憶を出しても目の前の男には見覚えがない。

「あんたさつき賞金首を殺すとか言ってたな？ 腕に自信あるのか」

「ふはははは！！ 自慢だが、負ける姿が想像できないな」

「すげえ自信だな、どうだ俺と組んで一儲けしないか」

坊主頭をシャリシャリと撫でながら嫌味な笑い方だ顔を近づけてくる男はようやくやく名乗る。

「ゾディアンだ。いつもはこころ辺じゃなくも少し離れた街で活動してんだが、今日はついてるかもな」

「それで私は何をすればいいんだ」

「簡単さ、舞台に立って相手を殺す、それだけだ……んじゃ出るか」

二ノ手を強引に引つ張り店を出ると街の端まで歩き、ある豪邸の前に辿りつく。門の前には鎧を着込んだ門番が睨みを利かせているがゾディアンが少し話すと簡単に通してくれた。

「いやぁどうもどうも」

腹の出た老人が杖をつきながら出てくるとゾディアンは腰を低くし下品に笑う。

「またお前か。この前連れてきた奴は酷かったが今回は大丈夫だろうな」

高圧的な態度の老人の前で何度も頭を下げるゾディアンが会話すると金を渡され、二ノを連れ出す。豪華な内装とは変わり連れていかれたのは階段。地下に続く薄暗くカビ臭い階段を下り扉を開けると

何人もの人がテーブルに座ってる。

「本当はコロシウムに連れていきたいが、まあ今回は腕試しだ。武器はあるか？」

「ああ武器ならここにあるぞ。それにしてもなんだここ」

「金持ちの悪趣味だよ。自分達で雇った傭兵を殺し合わせ、それを見て楽しむだけさ」

テーブルに座っているのは皆歳を重ねた老人に若い女が腕を絡ませている。二ノの格好を見るとクスクスと笑い声が響きゾディアンが小声で言う。

「嫌な連中だろ？ どうだ奴らが自慢したがる傭兵殺してあの顔を真っ青にしたくないか？」

「お前個人の意見だがまあいい。こっちは何より資金が必要だからな」

中央に照らされてる石段のステージがあり二ノは向かう。着ている服は茶色く裾はボロボロに破れ貧相だが持って生まれた美貌のおかげで何人かの金持ちの目が光る。

「それでは皆さん今宵のカードはこちら」

やたらと派手な男がステージ中央で手元のカードを見ながら喋りだすと盛り上がる。人が殺される現場を見たくてウズウズしている連中が拳を振り上げ叫ぶ。

「まずこちら……剣の英才教育を受け今ままで負けなし!! まあ負けたら死ぬから当然ですが、エリートなのになぜここにきた!!」  
エド・ハリソン!!」

白いシャツから少し胸を見せ華麗に登場したのは前髪が鼻まである金髪を指で払うエド。顔の作りは美しく立っただけで絵になるような男。

「そして挑戦者は……なんと今日店でスカウトしてきた女!! 実力は未知数。何より気になるのが自分は魔王の娘だと言うその図太さ!!」

ギャラリーはドツと笑いに包まれエドも口元に指を重ね笑っている。

「よろしくねお嬢さん。名前なんて言うの」

エドが気楽に話しかけると二ノは笑う。

「二ノだ、これから殺し合うのに話かけるなんて珍しいな」

「趣味でね。今から死ぬかもしれない人間と語るのは楽しい」

先程言っていた通りエドがエリートならなぜここまで落ちてきたのかわかる。性格は歪み自分が圧倒的優位に立って勝つ事に快楽を覚えている……二ノはそんな印象を持ちステージ中央で刀を抜く。

盛り上がっていたギャラリーは静かになり、やはては誰一人声を出さない無音空間になる。エドは手に持つ細身の剣を握ると脇を閉め手首を返すように構えた。

「初めて見る構えでしょ？ 突きのみに特化した剣術でね」

「自分から手の内をバラすなんてアホだなお前」

初めて見る構えだった。片足を出し後ろ足に重心を置き、細き剣を突き出しジリジリと近づいてくる。片手剣は間合いが離れていても突き刺さってくるような威圧があり、二ノは大きく息を吐き構えた。

>正眼の構えく腰の位置に柄を持っていき刀身は体を真つ二つに割るように立てる。魔王からいろいろ教わったが、この構えが一番扱いやすく慣れしたしんだ物だった。どんな状況にも対応が間に合い攻め防御とバランスがいい。

「初めて見る武器だねそれ」

エドが近づきながら話しかけてくるが二ノの耳には届かない。全てはエドの剣の切っ先に集中し、顔の筋肉一つ動かさない。先に自分の間合いに入ったのはエドだった。突きの軌道、構えの差でリーチでは勝り先手をとる。

「シッ！！」

軽く呼吸し突き出された突きは二ノの目に写る。しかし見たただけ対応は間に合わなかった。小さな点が光速で近づき離れていったかと思うと足から出血していた。

「槍ほどリーチはないが、小回りがきき、何より速いし防御がしにくい……よく出来てるだろ？」

エドの言うとおり防御が極端にしづらい。槍ならば向かってくるのは大きい、細身の剣の切っ先となれば防ぐのは難しい。軌道は簡単に読めるが速さと細さがそれを邪魔する……厄介な剣術だと二ノは笑う。

「珍しい剣術だな。だが欠点もあるな」

「ま、所詮は剣術だからね欠点ぐらいはあるさ」

エドの口ぶりからして欠点も理解している。ならばと二ノは前に出る、一步前に出る所か一直線にエドに向かい走り出す。正眼の構えでの走りでは速度は出ないが二人の距離では十分。

「気でも狂ったかお嬢さん!!」

無防備に突っ込んでくる二ノに向かい再び突きを放つが微かに二ノの体が揺れる。胸を狙った突きだったかわずかに避けられ肩を貫く。エドは舌打ちを鳴らす。先手は奪ったと勝ち誇ったのは一瞬。

二ノは肩を貫かれようと刀を突き出す。エドは完全に二ノが止まるものだと思っていた思い上がりから反応が遅れ、腕どころか肩を骨

「ごと突き砕かれてしまう。」

「まず攻撃力の乏しさ、そのような細い剣では一撃で仕留められな  
いぞ。故に一撃で終わらせる箇所を狙う、さすがにバレバレだった  
ぞ」

「……っ！！ やってくれますね」

互いに肩に損傷を負うが大きさが違う。二ノは小さな穴を空けられ  
ただけだがエドは片手が垂れてしまい使い物にならなくなってしまう。  
う。

「次に防御面だな。そんな剣では一度でも受ければ折れてしまうな」  
エドは血を時間と共に失い勝負を急ぐ必要も出てくる。たった一回  
の攻防で差は出て余裕の笑みから苦笑いに変わってしまう。

「本当に貴女が魔王の娘に見えてきましたよ。強いですね」

「勝負はもうついたぞ。その腕ではバランスもとれず満足に突けな  
いだろ？ まだ続けるか」



エドは返答の代わりに飛び出す。今まで戦い勝ってきたプライドが負けを許してはくれなかった。二ノに指摘された通り片手が垂れ重心がおかしくなり突きには勢いも鋭さもなかった……しかし勝ちへの執念だけがエドを動かす。

「ふむ、感謝する。いい勉強になったぞ」

二ノは弱弱しく向かってくる突きにたいし容赦なく正面から打ち抜く。エドの胸部が真つ二つに切り分けられ骨まで見えると呼吸がおかしくなったエドがよろよろと手を伸ばし石段に倒れた。

「勝者二ノ!!」

声が響くとギャラリィからブーイングがおきエドの雇い主らしき老人から罵声が浴びせられる。

「ハハハハ!! 悔しいかジジイ、傭兵なぞ雇わずにお前自身がきってみろ」

腰に手を当て高笑いしながら指を指すと老人の顔が真つ赤になり、ゾディアンが飛び込んでくる。

「ほらおれと帰るぞ!!」

二ノを手を引つ張り無理矢理歩かせると先程の老人から報酬を貰い地下を出る。

「いいか、あいつらはプライドの塊のような奴らだ。あんな挑発してみる、袋叩きに合うぞ」

「ふん、あんな薄暗い地下でしか我が物顔できない連中なぞ皆殺しにしてまえばいい」

「お前可愛い顔して凄い事言うな……まあ腕は確かなようだな、その剣術どこで習ったんだ？」

屋敷の門を潜る頃には先程まで燃え上がるように高まっていた闘志は消え、白い息を吐きながら二ノは答えた。

「魔王にだ。そしてこの剣術で魔王を殺す」

「わけがわからん。魔王が親で剣術を習い、更に殺す。お前ゲマル葉とかやばい薬とかやってんのか」

「うるさいわい!! いいから取り分よこせ!! 言っておくが私

の方が多くもらっつからな、命を賭けてる分当たり前の報酬だぞ」

ゾディアンとニーノは取り分で揉めながら街を出ていく事になった。

#### 四

「こりや驚いた」

ゾディアンはテーブルの上に大量の金貨を袋から出し口元が緩む。回りは戦いの熱に当てられた観客達が一人の少女に魅了され声を上げていた。

ゾディアンが驚いたのは金貨の枚数ではなく、見下ろす形になっている観客席から見る二ノだった。今までの薄暗く汚い戦いの場でなくコロシアムの舞台に立って戦う二ノの強さに驚く。

「最初はすぐ殺されるだろと思っていたが……あいつ何者だ」

二ノの装備は革のシャツとズボンと刀だけ。相手は鎧で固めた重装甲で大剣を振り回しているが二ノは踊るかのように避け刀を振るう。装甲が薄い間接部分を斬り払い、相手の反撃は一切受けない。

相手が魔法を使い状況を覆そうとしても二ノの前では消えてしまう。その鮮やかな戦い方に観客は声を上げて喜ぶ。人の殺し合い好きな観客には二ノの戦い方は新鮮で美しく見えた。

「小娘がああああ」

相手が捨て身になり突撃してくるが二ノは冷静に合わせ、鎧と兜の間に切っ先を滑り込ませると勝負はつく。

「ふむ、これくらい勝てば稼いだらう」

溢れんばかりの歓声と口笛を背に舞台から下り出口に向かうとゾディアアンが息を切らせ走ってくる。

「ハアハア　　ッ！！　　凄いいじゃないか！！　　今夜は大儲けだぞ」

「おおそうか！！　　どうだ私と組んで正解だったろ」

「まったくだ。なんか美味いもんでも食べにいこうぜ」

大金をぶら下げ店にいくと、腰に武器をぶらさげた男達が一斉に睨みをきかせてくるが二ノは気にもせず席につく。ゾディアアンもいい加減慣れ注文をした。

「お前は強さもそうだが、容姿もいいから人気でるぞ。荒稼ぎの夢が広がるな」

「それは魅力的だが、その、もっと強い奴がいる場所ないのか？」

注文の料理が運ばれてくると肉ばかりの偏った料理に二ノはかぶりつき肉汁を飛ばす。

「ここなら格下相手に十分稼げるぞ？ わざわざ危険をおかす事ないだろ、おい汁を飛ばすな」

「ファガ……言ったら、私は魔王を倒すんだと。そのためには強い奴とやるのが一番だ」

「あのなあ、夢を追うのはいいが少しは現実見るよ。確実に稼げようや」

肉の塊を丸々食べ終わるとゲップをしながらゾディアンに指を指しながら言う。

「ふん商売人め。しかし強い奴の所へいけば今の何倍も賭けのレートが上がるはずだぞ」

「そのかわり負けを意味するのは死だぞ。今までのぬるい場所とは違っぞ」

「今までと同じだ。今日だって命乞いする奴以外は容赦なく殺してきたぞ」

追加で同じ肉料理が運ばれてくると二ノは再びかぶりつきゾディアンは頭を悩ませる。せつかく優秀な稼げる駒を手に入れても性格に問題があり、言いくるめられない。

「どつるするゾディアン？ 意見が合わないようなら私一人で稼ぐぞ。お前の言う通り容姿がいらしいからな、目立てば一人でもやっつけていけるぞ」

「うっ……だああああ！！ わかったよ！！ 所詮俺はお前の腕に乗っかっておこぼれを貰ってるケチなチンピラってのがよくわかったよ」

「ふははは！！ 交渉成立だな。まあいいじゃないか、仮に私が負けてもお前には痛手はほぼないんだから」

「はあく長年こんなケチな商売してるが、お前みたいな豪快で無謀な奴は初めて見たよ」

「気にするな初めては誰にでもある」

勝手に追加注文をする二ノに呆れた笑いを浮かべながらゾディアンは二ノを見る。短く整った黒髪と愛らしい瞳と高い鼻……呼吸をするように人を殺すとは思えない美しさ。

「なあお前さ、そんだけ綺麗なんだから金持ってる男とくつついて人並みに幸せになるうとは思えないのか」

勢いよく口に料理を運ぶ手がピタリと止まり目を見開き二ノは真っ直ぐゾディアンを見た。

「そのどこが楽しい。人並みの幸せ？ これだけ殺しておいて今更夫を作り子供を授かれと？ そんな物は人並みの人生を歩んできた女がすればいい」

「俺が言うのもなんだが、女で傭兵家業つてのはきついで。女つてだけで死ぬより辛い事される可能性もあるし、何より戦いとなると男の方が圧倒的有利だしな」

「その圧倒的有利をお前の前で破ってきたじゃないか。ゾディアンお前はぐだぐだと理論が多い奴だな。実戦に勝る理論はないぞ」

大きな溜息をつき拳を頬に乗せて再び料理にかぶりつく二ノを眺めながら「もうどうにでもなれ」と商売人らしからぬ発言をしゾディアンは笑う。長年ケチな小銭を拾ってきたが、たまに大勝負も悪く



ないと思っていた。

「……食いすぎだ!! 勘定の事を少しは考えろ」

食費に悩まされながら二人は次の街へいく。

## 五

コロシアムを渡り歩くにつれ舞台はどんどん大きくなり、薄汚い傭兵崩れや腕自慢が殺し合う場とは思えないほど舞台は輝き各国の王族達が観戦するまでに上り詰めていく。

円状に作られたコロシアムの天井は抜き抜けて石段の舞台は太陽の光に照らされ神聖な空気すら感じる。ゾディアンですら一目見た時から緊張し震えた。

「二ノお〜お前みたいなお馬鹿で強い奴初めてだぜ」

観客席からまるで神にでも祈るかのように手を合わせゾディアンは呟く。各地のコロシアムで荒稼ぎする内に二ノの名前は有名になり観客も注目をしていた。

二ノは茶色の古ぼけた軽装の鎧で機動性重視と刀一本だけと珍しい装備で舞台に立つ。装備は貧相だが美貌で観客達の目を奪い、立っているだけで絵になっている。

「相手は誰だ!! え〜と」

ゾディアンが必死に相手の情報を整理していると歓声と共に大男が出てくる。

「あいつは……」

神に祈るように合わせていた両手が解かれ垂れてしまうほどの相手だった。名はバルクホルム。装備は巨大な戦斧一本だけと攻撃と機動性重視。防御面は弱いが圧倒的なリーチで相手に何もさせないスタイル。

ゾディアンが絶望したのは戦績。負ければ死だから無敗は当たり前だが、問題は勝ち星……七十という勝ち星。その数だけでバルホルムの強さがわかる。声が枯れんばかりに二ノに叫んでしまう。

「二ノおおおおお！！ 間合いに入るなよ！！」

ゾディアンの声が届くと背中ごしに軽く手を上げ答える。軽く深呼吸吸し息を整え体の力を抜き二ノは対戦者のバルクホルムの前に立つ。

「あんたが二ノか。噂ほど大きくないんだな」

「どんな噂だ」

「二メートルを越える巨体で大剣を操り残虐な……てイメージと全然違うな」

上半身裸で下は革のズボン。ただ肩には身の丈以上の戦斧が担がれ、二ノを見下ろす。

「まあ噂はなんてそんなもんだ。お前強そうだな」

「自分が強いとか考えた事はないが、回りがそう言うならそうなのかねえ」

虚勢を張るわけでもなく、威圧するわけでもなく淡々と語るバルクホルムに強者の匂いを感じ取り二ノは笑う。

「お前みたいな奴たまにいるな。戦うのが好きだが、どこか違う……殺しが好きな奴って言うのかね、人としてどうしもうまく狂っている」

「ハハハ！！ さすがベテランだな。私から見たらお前もそう見えるが　ッ！！」

二ノが笑った瞬間に戦斧が振り下ろされ石段で作られた舞台に巨大な穴が空く。舌打ちを鳴らすバルクホルムを残し二ノは大きく下がり鞘から抜く。

「今の不意打ちには自信があつたんだが、意外に素早いんだな」

「ベテランだからどんな戦い方するかと思えばセコイ奴だな」

目を細めジッと二ノを見るとバルクホルムは腰に手を当て笑いながら話す。

「戦いに汚いも綺麗もないだろ？ こいつは競技じゃねえ、純粹な殺し合いだ」

「先程まで大らかな男だったが、いきなり野獣みたいになつたな」

腰を落とし捻り、上半身も捻ると二ノに背中を向けると異様な構えをとる。二ノが眉を吊り上げ不思議な顔を見るとジワリと近づいてくる。少しづつだが確実に。

「間合いに入った瞬間に今溜めてる力を解き放ち自慢のこいつを振り回すぞ。わかりやすいだろ」

背中を向けたまま語りかけながら迫ってくるバルクホルムに二ノも構える。戦い方からして魔法を使う風には思えない。単純な腕力と経験で叩き伏せてくると思いい人の男を思い出す……ハンクという男。

「ああ実にわかやすいな。では勝負は一瞬だな」

顔は見えないが勝負の緊張を楽しむように笑うバルクホルムの笑みが背中が透けて見える気がした。互いに狂ってるからわかる気持ち、父を倒し平和を取り戻すと大義名分を掲げているが本質は戦いたいだけ。

自分が積み重ねた技術を全て使い戦い勝つ。その快楽を一度でも味わうと二ノは虜にされてしまった。バルクホルムが近づいてくると両腕が震え始めてしまう。

恐怖ではなく嬉しく鳥肌が立つ。久々に自分の全てをぶつけられる相手と出会い細胞が喜んでるようだった。

「  
」

二人は無言のまま距離を詰めていく。空気が心臓を潰すように重く息が苦しくなり、一度大きく息を吐いた瞬間にバルクホルムの上半身が回転した。溜めに溜めた力を解放すると腰から上が消えたように回転し一撃を放つ。

「らああああああああああい」

石段は削りとられ石の破片が飛び散り大きな傷跡を残す。一撃では止まらず次々に戦斧が振り回されていく。暴風のように近づく物全てを叩き、切り裂き、破壊していく。怒涛の声を上げながら腕を振るバルクホルムの猛攻が続くと観客が声を上げていくと。

「ハンクに感謝だな。あいつ以上の戦斧使いはまだ出てこないか」

振るう腕がいつもより重く感じ息が切れるのが速過ぎる。戦斧の竜巻を起こしながらバルクホルムは異変に気付き、やがては竜巻を止めてしまう……意思とは反し体が止めてしまう。

振り向くと鞘に刀を納める二ノが見え再び戦斧を振り上げようとすると力が入らない。重さに腕が耐え切れず落としてしまうとバルクホルムはようやく異変の元に気付く。

「へへ……まさか最後の相手がお前みたいな女の子とはな」

いつ攻撃されたのさえ気付かなかった。ただ戦斧を振り回してただけだが近づかれた事もわからずにいた。バルクホルムの胸から血が吹き出し背中まで貫かれていた。

膝をつき前のめりに倒れ沈んでいく。視界はぼやけ少しづつ暗くなる中で人生最後に見た光景は無表情の美少女、汗一つかいてない二ノに手を伸ばしながらバルクホルムは命の炎を消されていく。

「お、少しかすったな」

腕にかすった痕跡の傷がある。深くはなく傷口を舐めているとコロシアムの空気がおかしな事に気付く。観客達は目の前で起こった事についていけず呆然としてる。誰もがベテランのバルクホルムが勝つと思っていたが結果は逆……挑戦者の二ノが一瞬で勝つ。

二ノは拳だけ上げ去っていくと数秒遅れて観客達が騒ぎ出す。入場口を戻っていくとゾディアンが息を切らせて走ってくる。何度か見た光景だと二ノが笑うと、勢いまかせに抱きついてきた。

「二ノおおおおお！！ お前って奴はあああああ！！」

「うわあ！！ こら離れる」

「今の試合でとんでもなく稼げたぞ！！ 誰もお前に賭けてなかったから倍率が凄いぞハハハハハ」

興奮を抑えきれないゾディアンを引き剥がすと観客席に向かいようやく落ち着ける。命を賭けた戦いの緊張と震えは少しづつ和らぐが隣のゾディアンは未だ鼻息が荒い。

「お、次の試合だぞ二ノ見ていくか」



「そつだな他に強い奴もいるんだろ？」

「次は……通り名が【化け物】だってよく大層な名前だがどんな奴だろうな」

【化け物】が登場するとロープで全身を隠し顔も見えない。黒いロープをユラユラと揺らし武器も持たずに中央まで歩く。

その男には希望も奇跡もなく。

関わった人間は死んでいき。

背中には絶望が張り付いているようだった。

ただ執念だけで動いて戦う　まるで亡霊のように【化け物】は現れる。

「おい二ノどうした？　そんな乗り出すと危ないぞ」

【化け物】の背中を見た瞬間に二ノは身を乗り出し叫ぶ。顔なんて見なくてもわかってしまう。

「テツ!!」

## 第十二章

時間は深夜。暗闇の森をテツは矢のように駆けていた。何度も肩を木にぶつけ肌を枝にひっかけと暗闇が逃走を邪魔する……ギンジと二人で牢獄を抜けた先に待っていたのは高額な賞金を首にかけられ金の匂いに敏感な薄汚い連中からの逃亡生活だった。

背後では炎の光が上下に揺れ追っ手が迫ってくる。なるべく息を乱さないように止まり暗闇に潜み好機を待つ。相手は数人だがこちらはギンジとはぐれ一人。武器は刃が欠けている短剣一本では勝負にならない。

「どこに行きやがった！！ 逃がすなよ」

数人の男達が通り過ぎると音を立てずに草むらから身を出し欠陥品の剣を突き立てる。走るわけでもなくゆっくりと歩き背後に近づくと手が届く距離まで接近すると剣より先に手を延ばす。

「~~~~ッ！！」

口で手を塞ぎ背中に剣を突き刺し絶命させる。倒れこむ男の腰に手を伸ばし武器を奪い、二人目が気付いた時にはテツの迷い無き一撃で首を跳ねられる。残り二人　暗闇で炎に照らされたテツは血に植えた野獣のように息を吐き二人の心臓を震わせていく。

「ギャー！！」

一人の男が悲鳴を上げると首がおかしな方向に曲がり泡を吹きながら倒れていく。最後の一人が腰を抜き尻餅をつくともう一人……首を捻り壊したギンジが暗闇から現れ顔を近づけてきた。

「俺達の首に賞金かけてるのどいつだ」

「ヒイイイイ！！　　まま魔王様だ！！　　勘弁してくれ、嫌だ死にたくねえ！！」

戦意喪失した男を見てギンジは溜息をつき未だ息を荒くするテツに問いかける。

「どうするよテツ。さすがに魔王相手じゃ賞金取り下げろってわけにはいかないな」

「まあ、魔王殺すしかないだろうなあ、おいお前」

まだ血が付着した刀身を男の首筋に当ててテツは怯えきつた男に伝えていく。

「魔王に伝えとけ。賞金を今の倍にでもしろってな。あ、あともちろん金目の物全部置いてけ」

怯えきつた男は衣服を全て脱ぎ下着一枚になり装備も投げ捨て暗闇の中に逃げていった。テツは慣れた手つきで男の荷物を纏め背負う。

「テツ、お前も立派な盗賊だな。そろそろ格好いい通り名とかもらったら娼婦にモテモテになるんじゃないか」

「うるさいですよギンジさん。泥を吸っても石をかじっても生きてもう一度あの魔王の前に立って殺すまでは何でもします……ギンジさん……」

急に咳き込むギンジに駆け寄り背中をさすり落ち着かせるが一向に収まらず。しばらく苦しむギンジの顔を眺めるテツの顔は険しくなる。

「ゲエ……カハツ!! すまねえなテツ」

牢獄にいた頃から気になっていた事だがギンジは病に犯されてる。普通の咳ではなく異常と思えるぐらいに激しくそれが長く続く。どう見ても健康状態ではない、知識もないテツだったが一人だけ詳しくそうな男に心当たりがあり向かっている道中で襲われてしまった。

「煙草吸いすぎたかなあ〜今更だが止めときゃよかつたわ」

「ほら肩貸しますから頑張ってください。もうすぐ着きますから」

森を進んでいくと街の光が見え懐かしい匂いが鼻をくすぐる。テツは一度だけ来た事のある始まりの場所とも言える街に足を踏み入れ進む。住人達は変わらず体格のいい男だらけで体臭がきつい。

一件の家とも言いがたい鋼で覆われ屋根にはクレーンがぶら下がっている館に着くと錆びついた扉を蹴り破り中に進入していく。室内は薄暗く初めてきた頃から何一つ変わってない。

「誰だこんな夜中に、おお〜お扉まで壊しやがって……てお前」

奥から老人が欠伸をかきながら現れると手に持っていたピンを床に落とし中身のアルコールがこぼれ、オイルの匂いと混ざり合う。

「久しぶりだなウィル。あんたの言うとおり魔王に挑んできてやったぜ」

「テツなのか……生きてたのか。ベルカが負けて俺はてつきり」

「まあいろいろ話したい事はあるが、まずはこの人診てくれないか。あんなら多少は人体の知識はあるだろ」

テツに肩を借りフラフラと顔色が悪いギンジを見るとウィルの顔色も変わる。「こっちによこせ」とギンジを奥に連れていくとテツは懐かしい室内を見る。金属の手足、壁にはオイルとつきはぎの木材。

「皆、俺頑張るからな」

誰に聞かせるわけでもなく呟く。わずかな期間だが牢獄で共に地獄を体験してきた戦友達の顔を思い浮かべ拳を握る。異世界に来た頃は泣き虫なテツを変えてくれたのは数々の出会いだった。決している連中とは言えないが、かげがえのない出会いがテツを強くしてくれた。

「おいテツ」

意外にすぐ戻ってきたウィルに驚き顔を上げるとギンジの容態が告げられてしまう。

「おそろく体のどこかやられてる、肺だろっな」

「そうか〜ギンジさん煙草吸いすぎだったしな〜まあ仕方ない。んでどれくらいで治りそうだ?」

ウィルの顔は暗い。テツの問いに無言で返すと嫌な予感がテツに走る。それを必死に否定するように口を動かす。

「おいおいウィル治るんだよな? あんな化け物みたいな武器や防具作ってるんだ、人間の体なんてわけないよな」

「……あいつはもう治らない。今の技術じゃ無理なんだ」

椅子に座っていたテツがよろよろとゾンビのようにウィルに近寄り肩を掴む。何度目だろうか、顔に絶望を貼り付けてしまうのは。

「ここは俺達のいた時代の未来なんだろ!! 治らないわけねえだろ!」

「テツ。酷い事を言うようだが、すまん俺の手には負えない。おそらくこの医者行っても同じだろう」

ウィルの前で膝まつき顔を両手で覆ってしまう。まただ……また大切な人が遠くに行ってしまうと肩を震わせていると奥からギンジの声が聞こえた。

「ちょっとこいテツ」

「ギンジさん」

奥の部屋は汚く蝋燭の光が照らされてカビ臭いベッドの上にギンジは寝かされていた。

「これからお前は数え切れないほどの仲間を失うだろうな」

「いきなり何言ってるんですかギンジさん」

「その度にそうやって苦しむお前が俺は好きだ。お前には感謝してるんだぜ」

身を起こすと情けない顔のテツの頭に乗せギンジは笑う。

「あのまま交通誘導してたら俺は朽ち果てて何も残せなかっただろうな。でもなこの世界にきて必要とされて嬉しかったんだ。お前がいなきやこんな気持ちにならなかった」



「ギンジさん何言ってるんですか……そんな死ぬ間際の台詞はあんたには似合わない!!」

テツは急に立ち上がり拳を振り上げ雄雄しく上げ叫び散らす。

「魔王を倒し地位も名誉も手に入れ面白おかしく人生を変えるんでしょ!!」

「ハハハ!! そうだったな!! 今まで酷かった分逆転しなきゃな!!」

無理矢理笑顔を作り吼えるテツに合わせギンジも吼えた。滑稽な光景だった。体に触るからとギンジを寝かしつけるとテツはウィルの元へ戻り椅子に深く座る。

「しかしテツよ、よく生き残った。これからどうするよ? もうやめるか? もう戦いやめて農業でもするかハハ」

「まさか。ウィルあんたの願い通り魔王を殺してやる」

「まあ今更だよな。無責任の発言だったなすまん。まあ今日は休め、疲れただろ」

その日はアルコール臭い寢床でテツは眠った。身を丸め体を握り潰すように苦しみ、なんとかギンジを救う手段はないかと苦悩し続けていく。

「ふぁ」

寝る前まで沈んでいた気分はウィルが用意してくれた朝食で少しは晴れた。見た目は雑だが味は確かで食が進み、大きく背伸びし外の空気を吸いに出ると呆然としてしまう。

「よう!! テッおはよう!!」

「ギンジさん何してんすか!!」

砂地の地面の上で上半身裸のギンジが爽やか笑顔で挨拶してくると呆然としてしまう。異世界にきて鍛えられたのか四十代とは思えない筋肉の切れを見るとこれまで殺してきた数を表すようだった。

「何って訓練だ。お前このまま魔王と戦っても勝てないだろ」

「いや寝てください!!」

「じゃこうしよう。お前が俺に勝てたら寝てやる」

昨日死にそうになっていたギンジがやる気満々で腰を落とすとテツは目を疑う。ウォーミングアップは済ましていたのか汗が浮かび上がっているギンジが飛び出してくる。

両手を開き捕まえると言わんばかりのタックルにテツは反射的に避ける。何度もギンジと戦っているおかげで多少の癖は見抜け構えながら言う。

「馬鹿言っていないで寝てください！！　今の自分の状況わかってます？」

「お前こそわかってるのか？　俺の技術や知識を盗まなきゃ魔王に負けるんだ……ぞー！！」

組むと見せかけタックルにいき開いた手を瞬時に握り大降りのフックを繰り出す。テツはその行動に驚き対処が遅れ顔面に叩き込まれてしまう。背中を地面の擦りながら倒れ鼻血を出しながら悶えていく。

「こんな病人に負けてるようじゃ復讐だっけ？　殺された奴が可哀想だぞテツ」

わざと挑発するような言葉を並べるとテツは砂だらけになりながら起き上がり、革のシャツを叩き砂を落とす。言葉は無く完全に戦闘

モードに切り替えるとギンジは笑う。

「怒ってるんだろ？ ほらこいよ。お前に戦い方を教えてやる」

テツが飛び出し一気に間合いを詰めるとギンジに拳を放り込む。しかし鼻先に届くか届かないかの距離で拳は止まりテツの表情が崩れていく。

「ボクシングだけで勝てるほど甘くないぞテツ」

ギンジの踵がテツに膝に刻まれ動きが止まった瞬間にタツクルが綺麗に入る。倒されグラウンドの勝負になった瞬間テツは動き回る。教えられた事は攻撃ではなく投げ技、間接の防御方法だけ。まだ実戦するほどに上達もしてない。

「この……もらった!!」

体を捻りギンジを下にし大きく上に上半身を持っていき拳を振り上げた瞬間に体が鎖で繋がれたように固まる。片腕を下から握られ首に足が絡みつく。頸動脈が閉められ目の前がだんだんと暗くなってしまう。

「三角締めだテツ、まずお前は倒されない事を考えないとな」

ギリギリと首を絞める音が耳に響きテツはもがく。動けば動くほど首に深く足が入り意識が薄れていく。

「ふ……ふざけるな！！ 俺は必ず魔王を殺す……こんな技一つすぐに返して」

「無駄だ。一度決まってしまうえば外す事なんてできない。お前が寝技の達人だったら話は別だがよ」と

ギンジが更に力を入れるとテツの目がだんだんと上を向き白目までいった瞬間に体の力が一気に抜ける。腕がダラリと力なく垂れるとギンジは技を解いて息を整える。余裕の表情を見せていたが勝つと呼吸は乱れ地面に座ってしまう。

「まったくよくやるな」

アルコールのビンを煽りながらウィルが壁際で眩くとギンジはようやく息が整い顔を上げる。

「仕方ないだろ教えるの俺しかないんだからよ」

「しかし魔王に勝てるかのかねえ〜何回か会った事あるが……ありや化け物みたいな奴だぞ」

ギンジの心配はそこだった。いくらテツに教えたとしても魔王に通用するのか　話だけ聞くと魔王の扱っ技は古武術の一種で近代の格闘技は使っていないように思える。ならば最新の技術をぶつけければ勝機はあると思うが不安は消えてはくれない。

「そして何より教えるあんたがその様じゃな。相当辛いだろ？」

「まさかこの歳で老人に心配されるとは思わなかったな……そうさなあ〜」

ギンジは胡坐をかき曇り空を見上げながら漏らすように言葉を出していく。

「俺もこんな世界にきているいろいろ悪さもしたよ。人も殺したし物盗んだりして生き残ってきた、我ながらろくなもんじゃないと思う。どうやらしっぺ返しがきちまったんだらうな」

「言いくいんだが〜お前の病気だが」

「俺のいた時代で言うとおそらく肺ガンって病気だ。煙草ってやつ

を吸う奴がなりやすい病気でな。治すのは無理と言われててな、それが今の時代だったら尚更無理だろうな」

ウィルは酒を片手にギンジの隣の同じく胡坐をかくとグイって酒のビンを差し出す。

「あんなあゝ病人にする事かあ？」

「どうせ治らないなら好きな事しようぜ。酒は飲めるんだろ？」

「ブハハハハハ！ あんた医者かと思ってたが違うらしいな、確かに。好きな事しなきゃな」

酒を受け取り一気に流し込むように飲むと顔は赤くなりゲップをする。久々の酒だった。闘争の日々で酒の味など忘れてしまっていた事に気付く。いい感じに酔いが回り気分がよくなってくると振り返り気絶するテツを見る。

「好きな事するさ。あの情けないテツを鍛え上げてる事が今は楽しくてしかたねえ！！」

「あんたも人を見る目ねえな、よりによってあいつかよ」



「確かに八八八八！　こんな老人と飲む酒なのにやたら美味いな！！」

ウィルも顔のシワを寄せ笑いながらいつの間にか二人は仲良くなり話も合っていた。ギンジは今までの人生を振り返るように喋りウィルは相槌だけだが、不思議と舌は回ってしまう。

「俺嫁と子供がいたんだが、こんなだから逃げられてたなあ〜今どうしてっかなあ」

酔いが更に回り大の字に寝っ転がると雲に喋りかけるように一言一言搾り出していく。

「正直会いてよ！！　まあ会っても親父顔できないけど……一目見てえな」

「おいおいギンジよおこんな老人の前で泣きそうな顔で子供の話は勘弁してくれねえかあ」

「あ、すまんすまん。駄目だなついついどこかの居酒屋で飲んでる気分だったわ〜久々にいい酒飲めたわ」

ヨロヨロ立ち上がり何度か転びそうになりながらウィルの家に戻っていくと一言だけギンジは言う。

「テツを頼むな。こんな馬鹿だけどさ、可哀想な奴なんだよ」

ウィルは背中を微かに揺らし白髪頭の痛んだ髪を叩いて答える。

「あいよ。巻き込んだ張本人だしな、まあ任せな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6791/>

---

おっさん異世界ファンタジー

2012年1月14日00時07分発行